法華経の現代語訳

序品

このように、私は聞いた。

ある時、釈迦牟尼仏は、王舎城の(東北の)「耆闍崛山」、「霊(鷲)山」の中に住んでいた。

(釈迦牟尼仏は、)大いなる出家者達、一万二千人と共にいた。
(一万二千人の出家者達は、)皆、「阿羅漢」であった。
(「阿羅漢」達は、)諸々の「漏」、「煩悩」は既に尽き、また煩悩(を起こす事)が無く、己にとって(真の)利益と成る事をとらえて会得して、諸々の存在する「結」、「輪廻転生に結びつけ束縛する煩悩」を(無くし)尽くし、心が自在である事を得ていた。
それらの「阿羅漢」達の名を(何人か)言っていくと、
阿若 憍陳如、
摩訶 迦葉、
優楼頻螺 迦葉、
伽耶 迦葉、
那提 迦葉、
舎利弗、
大 目犍連、
摩訶迦旃延、
阿㝹楼駄、
劫賓那、
憍梵婆提、
離婆多、
畢陵伽婆蹉、
薄拘羅、
摩訶拘絺羅、
難陀、
孫陀羅難陀、
富楼那弥多羅尼子、
須菩提、
阿難、
羅睺羅。

これらの者達が知られている大いなる「阿羅漢」達である。

また、「(有)学」と「無学」の者達が二千人いた。

摩訶波闍波提 比丘尼が六千人の眷属と共にいた。

羅睺羅の母、耶輸陀羅 比丘尼もまた眷属と共にいた。

「菩薩摩訶薩」が八万人いた。
(八万人の「菩薩摩訶薩」達は、)皆、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」において不退転であった。
(八万人の「菩薩摩訶薩」達は、)皆、
「陀羅尼」、「真理の保持」を得ていた。
「楽説弁才」、「他者の願う所に従って自在に仏法を説く事ができる弁舌の才能」で不退転の「法輪を転じていた」、「法を説いていた」。
幾百、幾千の無数の諸仏を供養していた。
諸仏の所で諸々の功徳と成る種を植えていた。
常に、諸仏によって、ほめられている所の行為をしていた。
慈愛によって身を修めていた。
よく仏の智慧に入っていた。
大いなる智慧に通達していた。
「彼岸」、「悟り」に到達していた。
名称が、量り知る事ができないほどの無数の世界に、あまねく聞こえていた。
能く幾百、幾千の無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡していた。
それらの(八万人の「菩薩摩訶薩」達の)名前を(何人か)言っていくと、
文殊師利菩薩、
観世音菩薩、
大勢菩薩、
常精進菩薩、
不休息菩薩、
宝掌菩薩、
薬王菩薩、
勇施菩薩、
宝月菩薩、
月光菩薩、

満月菩薩、
大力菩薩、
無量力菩薩、
越三界菩薩、
跋陀婆羅菩薩、
弥勒菩薩、
宝積菩薩、
導師菩薩。

これらのような「菩薩摩訶薩」等、八万人の「菩薩摩訶薩」が共にいた。

その時、帝釈天が、その眷属の二万人の「天子」、「天人」と共にいた。

また、名月天子、普香天子、宝光天子、四大天王が、それらの眷属の一万人の「天子」、「天人」と共にいた。

自在天子、大自在天子が、それらの眷属の三万人の「天子」、「天人」と共にいた。

「娑婆世界」の主である、梵天王、尸棄大梵、光明大梵、等が、それらの眷属の一万二千人の「天子」、「天人」と共にいた。

八(大)龍王である難陀 龍王、跋難陀 龍王、娑伽羅 龍王、和修吉 龍王、徳叉迦 龍王、阿那婆達多 龍王、摩那斯 龍王、優鉢羅 龍王らがいた。
各龍王は幾百、幾千かの眷属と共にいた。

四 緊那羅 王である法 緊那羅 王、妙法 緊那羅 王、大法 緊那羅 王、持法 緊那羅 王がいた。
各緊那羅王は幾百、幾千かの眷属と共にいた。

四 乾闥婆 王である楽 乾闥婆 王、楽音 乾闥婆 王、美 乾闥婆 王、美音 乾闥婆 王がいた。
各乾闥婆王は幾百、幾千かの眷属と共にいた。

四 阿修羅 王である婆稚 阿修羅 王、佉羅騫駄 阿修羅 王、毘摩質多羅 阿修羅 王、羅睺 阿修羅 王がいた。
各阿修羅王は幾百、幾千かの眷属と共にいた。

四 迦楼羅 王である大威徳 迦楼羅 王、大身 迦楼羅 王、大満 迦楼羅 王、如意 迦楼羅 王がいた。
各迦楼羅王は幾百、幾千かの眷属と共にいた。

韋提希の子、阿闍世 王が幾百、幾千かの眷属と共にいた。

各々、(頭を)釈迦牟尼仏の足に(つけて)敬礼して、退き、一面に坐した。

その、世尊、釈迦牟尼仏は、
「四衆」によって、囲まれ、供養され、恭しく敬われ、尊重され、ほめたたえられた。
(釈迦牟尼仏は、)諸々の菩薩の為に「無量義」、「量り知れない意義」、「教菩薩法」、「菩薩に教える法」、「仏所護念」、「仏が念頭に置いて護る所のもの」という名の大乗経を説いた。
釈迦牟尼仏は、この経を説き終わると、結跏趺坐して「無量義処三昧」、「量り知れない意義に処する三昧」に入って、心身を不動にした。

この時、
天から雨のように曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華が降って、釈迦牟尼仏の上、および、諸々の大衆に降り注いだ。
あまねく、仏の世界は(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動した。

その時、集会の中には、
比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、
天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、
人、「非人」、「人ではないもの」、および、諸々の小王、転輪聖王がいた。
これらの諸々の大衆は、未曾有の事を得て歓喜し、合掌して一心に釈迦牟尼仏を観た。

その時、釈迦牟尼仏は眉間の白毫相から光を放って東方の一万八千の世界を照らして、あまねく行き渡り、下は阿鼻地獄にまで至り、上は阿迦尼吒天にまで至った。
この世界にいたまま、それらの他の世界の「六趣」、「六道」、「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天」の「衆生」、「生者」のことごとくが見えた。
また、それらの他の世界に現に存在する諸仏が見えた。

および、諸仏が説かれている経の仏法が聞こえた。
ならびに、諸々の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷と、諸々の修行して仏道を会得している者が見えた。
また、諸々の菩薩摩訶薩が種々の因縁、種々の「信解」、「信じて理解したもの」、種々の相貌で菩薩の道を行っているのが見えた。
また、諸仏のうち「般涅槃」者が見えた。
また、諸仏のうち「般涅槃」者の「般涅槃」後に、「仏舎利」、「仏の遺骨」を納めた「七宝塔」、「七種類の宝による塔」が建てられたのが見えた。

その時、弥勒菩薩は、こう思った。

今、世尊、釈迦牟尼仏は神変の相を現した。
どんな「因縁」、「理由」で、この瑞兆が有ったのか？
今、仏世尊、釈迦牟尼仏は三昧に入った。
稀有な事が現された、この不可思議を、まさに、誰に質問すればよいのか？
誰が、能く答える事ができる者であろうか？

また、(弥勒菩薩は、)こう思った。

この文殊師利(菩薩)は「法王」、「仏」の子である。
(文殊師利菩薩は、)既に、かつて、過去の量り知れないほど無数の諸仏に親しみ近づいて供養してきている。
きっと必ず、まさに、このような稀有な相を見た事が有るはずである。
私(、弥勒菩薩)は、今、まさに、(文殊師利菩薩に)質問しよう。

その時、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、および、諸々の天人、龍、鬼神なども皆、こう思った。

この釈迦牟尼仏の光明による神通の相を今、まさに、誰に質問するべきであろうか？

その時、弥勒菩薩は、自ら疑問を解決したいと欲して、また、「四衆」である「比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷」、および、諸々の天人、龍、鬼神などの会衆の心を観て、文殊師利(菩薩)に質問して、言った。

どんな「因縁」、「理由」で、この瑞兆、神通の相が有るのですか？

放たれた大いなる光明は東方の一万八千の世界を照らして、それらの仏の国である世界の荘厳が、ことごとく見えます。

ここにおいて、弥勒菩薩は、くり返し、同じ意味の質問を話したいと欲して、詩の形式で、質問して言った。

文殊師利(菩薩)よ、
導師(である釈迦牟尼仏)は、なぜ、眉間の白毫からの大いなる光で、あまねく照らしたのか？
曼陀羅、曼殊沙華が降って、栴檀香の香りがする風は会衆の心を喜ばせた。
これらの「因縁」、「理由」によって、地は皆、荘厳に清浄に成った。
そして、この世界は(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動した。
時に、「四(部)衆」は皆、歓喜して、身心が快く成って、未曾有の事を得た。
眉間からの光明は東方の一万八千の世界を照らして、皆、金色のように成った。
阿鼻地獄から、上は「有頂天」に至るまでの、諸々の世界の中の「六道」の「衆生」、「生者」の、趣いて生死している所、善業や悪業の縁、受けている好ましい報いや醜い報いが、この世界にいたままで、ことごとく見えた。
また、「聖主」である、獅子に例えられる、諸仏が、経典の微細で絶妙な第一の真理を演説しているのが見えた。
(諸仏の、)その声は清浄で、柔軟な音声を出していた。
(諸仏は、)幾万、幾億の無数の諸々の菩薩を教えていた。
「梵音」、「仏の声」は、深く、絶妙で、人に「聞きたい」と願わせていた。
(各仏は、)各世界で、種々の因縁によって、正しい法を講説していた。
(諸仏は、)量り知れないほど無数の比喩で仏法を照らして明らかにして「衆生」、「生者」に悟りを開かせていた。
もし人が苦しみに遭遇して「老病死」、「老化、病気、死」を厭い嫌えば、その人の為に、涅槃を説いて、諸々の苦しみの際を尽くさせていた。
もし人に幸福をもたらす功徳が有って、かつて仏を供養した事が有って、優れた法を志して求めれば、その人の為に、「縁覚」を説いていた。
もし「仏子」、「出家して戒を守っている者」がいて、種々の修行をして、無上の智慧を求めれば、その「仏子」の為に、「浄道」、「清浄な真理」を説いていた。
文殊師利(菩薩)よ、
私(、弥勒菩薩)は、ここにいて、これらのような事を見聞きする事、幾千、幾億に及んでいる。

このように、多いので、(私、弥勒菩薩は、)今、まさに、略説しよう。
私(、弥勒菩薩)は、それらの他の世界の「恒(河)沙」、「ガンジス川の砂のように無数」の菩薩が種々の因縁によって仏道を求めていたのを見た。
あるいは、金、銀、珊瑚、真珠、「摩尼」、「宝珠」、「硨磲」、「シャコ貝の貝殻」、碼碯、金剛、諸々の珍しい物、「奴婢」による奉仕、乗り物、宝飾された「輦輿」という乗り物を布施する事を行って、歓喜して布施して仏道に回向して、「『三界』で第一の物である、諸仏によって、ほめたたえられている、この『仏乗』を得たい」と願っていた菩薩がいた。
あるいは、四頭立ての宝で飾られた馬車、「欄楯」、「華蓋」、軒飾りを布施していた菩薩がいた。
また、身の肉、手足による奉仕、および、妻子による奉仕を布施して無上の仏道を求めていた菩薩が見えた。
また、頭、目、身体による奉仕を喜んで願って布施して与えて、仏の智慧を求めていた菩薩が見えた。
文殊師利(菩薩)よ、
私(、弥勒菩薩)は、諸王が仏の所へ行って、無上の仏道について質問して、楽しめる土地、宮殿、家臣、妾を捨てて、ひげと髪を剃り除いて、「法服」、「袈裟」をまとっていたのを見た。
あるいは、「比丘」、「出家者」と成って、閑静な場所に独りでいて、経典を読む事を楽しんでいた菩薩が見えた。
また、勇猛果敢に精進して、深い山に入って、仏道を思惟していた菩薩が見えた。
また、欲を離れて、常に「空閑」、「人里離れた静かな場所」にいて、「禅定」を深く修行して、「五神通」を得ていた菩薩が見えた。
また、安らかに座禅して、合掌して、幾千、幾万の詩で「諸法王」、「諸仏」をほめたたえていた菩薩が見えた。
また、智慧が深くて、志が堅固で、能く、諸仏に質問して聞いて、ことごとく受け取って保持していた菩薩が見えた。
また、「定」と「慧」を「具足して」、「十分に備えて」、量り知れないほど無数の比喩で「衆生」、「生者」の為に仏法を講説して、喜んで願って説法して諸々の菩薩を教化して、「魔兵衆」、「魔の軍団」を破って、「法鼓を撃って」、「説法して」いた「仏子」、「仏の弟子」が見えた。
また、静かに安らかに黙って、天人と龍が恭しく敬っても喜びと為さなかった菩薩が見えた。
また、林にいて、光を放って(生者を)地獄の苦しみから救済して仏道に入らせていた菩薩が見えた。

また、未だかつて睡眠をとらないで林の中を「経行して」、「坐禅の合間に歩いて」、仏道を求める事につとめていた「仏子」、「仏の弟子」が見えた。
また、戒を守って備えて、「威儀」、「身のこなし」が完全無欠で、宝珠のように清浄にしていて、仏道を求めていた菩薩が見えた。
また、辱めを忍耐する力を心がけて、「増上慢の」、「『悟った』と思い上がっている」人からの悪口、罵詈雑言、殴打を皆ことごとく能く忍耐して仏道を求めていた「仏子」、「仏の弟子」が見えた。
また、諸々の「戯笑」、「悪ふざけ」、および、愚かな眷属を離れて、知者に親しみ近づいて、一心に乱心を除いて、思念を正して、山林に幾千、幾万、幾億年でもいて、仏道を求めていた菩薩が見えた。
あるいは、
飲食物、何百種もの無数の薬を仏、および、僧に布施して、
幾千、幾万の価値の良い衣服、上等な服、あるいは、価格をつける事ができない貴重な衣服を仏、および、僧に布施して、
何千、何万、何億種類もの栴檀と宝で飾られた建物、諸々の妙なる寝具を仏、および、僧に布施して、
華や果実が盛んに茂る清浄な園林、清流、泉、水浴びできる池を仏、および、僧に布施して、
このように、種々の微細で絶妙なものを喜んで、厭い嫌わないで、布施して、無上の仏道を求めていた菩薩が見えた。
あるいは、寂滅の法を説いて、無数の「衆生」、「生者」を種々に教えていた菩薩が見えた。
あるいは、「『諸法』、『全てのもの』の性質は二相ではない。虚空のように」と観察していた菩薩が見えた。
また、この妙なる智慧によって、心が執着する所が無い事によって、無上の仏道を求めていた「仏子」、「仏の弟子」が見えた。
文殊師利(菩薩)よ、
また、仏の「滅度」、「肉体の死」の後、「舎利」、「仏の遺骨」を供養していた菩薩がいた。
また、「仏子」、「仏の弟子」が「恒(河)沙の」、「ガンジス川の砂のような」無数の諸々の、仏の遺骨を納める塔廟を造っていたのが見えた。(仏の弟子は、仏の)国である世界を荘厳に飾っていた。
宝で飾られた塔は、高く、絶妙で、五千由旬で、縦と横の広さが、正確に等しくて、二千由旬であった。

仏の遺骨を納める塔廟は各々、千の「幢旛」で飾られていて、宝珠を織り交ぜて披露している「幔」で飾られていて、宝で飾られた鈴は「和鳴していた」、「音色が合って鳴っていた」。
諸々の天人、龍神、人、および、「非人」、「人ではないもの」が香、華、「伎楽」、「音楽」によって仏の遺骨を納める塔廟を常に供養していた。
文殊師利(菩薩)よ、
諸々の「仏子」、「仏の弟子」は「舎利」、「仏の遺骨」を供養する為に仏の遺骨を納める塔廟を荘厳に飾っていた。
(仏の)国である世界は、「天樹王」の華が「開敷する」、「一面に咲く」ように、自然と、特殊に、絶妙に好く成っていた。
仏が一つの光を放って、私(、弥勒菩薩)、および、会衆は、この(仏の)国である世界が種々に優れて妙なるのを見た。
諸仏の神(通)力、智慧は稀有で、一つの清浄な光を放って、量り知れない無数の国を照らした。
私(、弥勒菩薩)らは、これを見て、未曾有の事を得た。
(文殊師利)「仏子」、「菩薩」よ、文殊(師利菩薩)よ、
願わくば、会衆の疑問を解決してください。
「四衆」は、喜んで、あなた(、文殊師利菩薩)、および、私(、弥勒菩薩)を拝見している。
世尊、釈迦牟尼仏は、なぜ、この光明を放ったのか？
(文殊師利)「仏子」、「菩薩」よ、
時に、答えて、疑問を解決して、喜ばせてください。
どんな利益をもたらす所が有って、この光明を放って見せているのか？
釈迦牟尼仏は、道場に坐して、得ている所の妙なる法を説きたいと欲している為に、この光明を放って見せているのか？
(釈迦牟尼仏は、)まさに、「授記をしたい」、「仏に成るという予言を授けたい」と欲している為に、この光明を放って見せているのか？
(釈迦牟尼仏は、)諸々の仏土が多数の宝で荘厳に清浄に飾られているのを示している。
および、(会衆は、)諸仏を見た。
これらは、小さな縁ではない。(大いなる縁である。)
文殊(師利菩薩)よ、
まさに、知ってください。
「四衆」、龍神は、「会衆の為に、何か説かないか？」と、あなた(、文殊師利菩薩)を見ている。

その時、文殊師利(菩薩)は、弥勒菩薩摩訶薩、および、諸々の大士に語った。

善い男子らよ、
私(、文殊師利菩薩)の「惟忖」、「推測」によると、
今、仏世尊、釈迦牟尼仏は、大いなる法を説きたい、大いなる法という雨を降らしたい、大いなる「法螺貝を吹きたい」、「説法したい」、大いなる法の意義を演説したいのである。
諸々の善い男子よ、
私(、文殊師利菩薩)は、過去の諸仏の所で、この瑞兆をかつて見た事が有る。
過去の諸仏は、この光を放ち終わると、大いなる法を説いた。
このため、まさに、知る事ができる。
今、釈迦牟尼仏は、光を現して、また、このように大いなる法を説くだろう。
(釈迦牟尼仏は、)「『衆生』、『生者』の皆に、一切の世間は信じるのが難しい法を聞き知る事を得させたい」と欲しているため、この瑞兆を現した。
諸々の善い男子よ、
過去の量り知れない無限「不可思議」の「阿僧祇劫」に、その時、「日月灯明仏」という称号の仏がいた。
(日月灯明仏は、)「如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏 世尊」と(いう「十号」で)、ほめたたえられた。
(日月灯明仏は、)「初善、中善、後善の」、「最初も善く中間も善く最後も善く全てが善い」正しい法を演説した。
その(正しい法の)意義は深遠であった。
その言葉は巧妙で「純一無雑であった」、「嘘が無かった」。
(日月灯明仏は、)清らかな白い「梵行」、「修行」の「相」、「ありよう」を「具足していた」、「十分に備えていた」。
「声聞」を求める者の為に、応えて、「四諦」の法を説いて、「生老病死」から悟りへ渡して、涅槃を「究竟させた」、「究めさせた」。
「辟支仏」(、「独覚」)を求める者の為に、応えて、「十二因縁」の法を説いた。
諸々の菩薩の為に、応えて、「六波羅蜜」を説いて、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得させて、「一切種智」を成就させた。
次に、また、仏がいて、名称もまた「日月灯明仏」であった。
次に、また、仏がいて、名称もまた「日月灯明仏」であった。
このように、二万人の仏は皆、「日月灯明仏」という同一の称号であった。
また、「頗羅堕」という同一の姓であった。
弥勒(菩薩)よ、

まさに、知るべきである。
最初の仏も後の仏も皆、「日月灯明仏」という同一の称号であった。
(二万人の日月灯明仏は、)「十号」(の徳)を「具足していた」、「十分に備えていた」。
(二万人の日月灯明仏が)説かれた仏法は、「初中後善であった」、「最初も善く中間も善く最後も善く全てが善かった」。
その(二万人の日月灯明仏のうち)最後の仏には、未だ出家していなかった時に、八人の王子がいた。
一人目の名は、有意である。
二人目の名は、善意である。
三人目の名は、無量意である。
四人目の名は、宝意である。
五人目の名は、増意である。
六人目の名は、除疑意である。
七人目の名は、響意である。
八人目の名は、法意である。
この八人の王子は威徳が自在であった。
(八人の王子は、)各々、「四天下」で統治した。
この諸々の王子は、父が出家して「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得たと聞いて、皆ことごとく、王位を捨てて、父に追随して出家して、「大乗」の心を「発して」、「起こして」、常に「梵行」、「修行」を修行して、皆、「法師」、「仏法の師」となり終わると、幾千、幾万の仏の所で諸々の「善本」、「善の種」を植えた。
この時、日月灯明仏は、「無量義」、「量り知れない意義」、「教菩薩法」、「菩薩に教える法」、「仏所護念」、「仏が念頭に置いて護る所のもの」という名の大乗経を説いた。
(日月灯明仏は、)この経を説き終わると、大衆の中で結跏趺坐して、「無量義処三昧」、「量り知れない意義に処する三昧」に入って、心身を不動にした。
この時、
天から雨のように曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華が降って、日月灯明仏の上、および、諸々の大衆に降り注いだ。
あまねく、仏の世界は(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動した。
その時、集会の中には、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、「非人」、「人ではないもの」、および、諸々の小王、転輪聖王、等がいた。

この諸々の大衆は、未曾有の事を得て、歓喜して、合掌して、一心に日月灯明仏を観た。
その時、日月灯明如来は、眉間の白毫相から光を放って、東方の一万八千の仏土を照らして、あまねく行き渡った。(私達、文殊師利菩薩達が、)今これらの諸々の仏土を見ている所のように。
弥勒(菩薩)よ、
まさに、知るべきである。
その時、集会の中に、二十億人の菩薩がいて、「法を聴きたい」と欲して願った。
これらの諸々の菩薩は、この光明が、あまねく仏土を照らしたのを見て、未曾有の事を得て、この光の「所為」、「因縁」、「理由」を知りたいと欲した。
時に、妙光と言う名の菩薩がいた。
(妙光菩薩には、)八百人の弟子がいた。
この時、日月灯明仏は「(無量義処)三昧」から起きて、妙光菩薩にちなんで、「妙法蓮華」、「教菩薩法」、「菩薩に教える法」、「仏所護念」、「仏が念頭に置いて護る所のもの」という名の大乗経を説いた。
六十小劫、座を起たなかった。
時に、集会の聴いていた者たちもまた同一の場所に坐して、六十小劫、心身を不動にして、仏の所説を聴いた。
六十小劫は、(超長時間であるが、)「食頃」、「食事にかかる時間」、「短時間」のようであったと言う。
この時、会衆の中には、身心に「懈倦」、「飽きて怠る事」を生じた者は一人もいなかった。
日月灯明仏は、六十小劫で、この経を説き終わると、梵(天)、「魔」、「沙門」、「出家者」、婆羅門、および、天人、阿修羅の会衆の中で、この言葉を宣言した。
「如来(である私、日月灯明仏)は今日の夜中に、まさに、『無余涅槃』に入る」
時に、徳蔵菩薩と言う名の菩薩がいた。
日月灯明仏は、徳蔵菩薩に「授記して」、「仏に成る予言を授けて」、諸々の比丘に告げた。
「この徳蔵菩薩は、次に、まさに、浄身仏という称号の仏、如来、阿羅漢、正等覚者に成る」
日月灯明仏は、(徳蔵菩薩に)「授記し終わると」、「仏に成る予言を授け終わると」、夜中に、「無余涅槃」に入った。

仏の「滅度」、「肉体の死」の後、妙光菩薩は、妙法蓮華経を保持して、満八十小劫、人の為に演説した。
日月灯明仏の八人の子は皆、妙光(菩薩)を師とした。
妙光菩薩は、(日月灯明仏の八人の子を)教化して、その心を「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」に堅固に(不退転に)させた。
これらの諸々の王子は、幾百、幾千、幾万、幾億の量り知れないほど無数の仏を供養し終わると、皆、仏道を成就し(て悟っ)た。
そのうち最後に仏に成った者の名称は「燃灯仏」と言う。
(妙光菩薩の)八百人の弟子の中に「求名」と言う称号の菩薩が一人いた。
(求名菩薩は、)利益に貪欲に執着した。
また、多数の経を読んでも、経の意味に通じて利益を得る事ができず、忘れる事が多かった。
そのため、「求名」と言う称号であった。
この人(、求名菩薩)は、(しかし、)また、諸々の善の種を植えた因縁が有ったため、幾百、幾千、幾万、幾億の量り知れないほど無数の諸仏に会う事ができ得て、(諸仏を)供養し、恭しく敬い、尊重し、ほめたたえた。
弥勒(菩薩)よ、
まさに、知るべきである。
その時の妙光菩薩が私(、文殊師利菩薩)の前身なのである！
求名菩薩が、あなた(、弥勒菩薩)の前身なのである。
今、この瑞兆を見ると、過去と同じである。
このため、「惟忖」、「推測」できる。
今日、如来(である釈迦牟尼仏)は、まさに、「妙法蓮華」、「教菩薩法」、「菩薩に教える法」、「仏所護念」、「仏が念頭に置いて護る所のもの」という名の大乗経を説くだろう。

その時、文殊師利(菩薩)は、大衆の中で、くり返し、この意義を宣言したいと欲して、詩で説いて言った。

私(、文殊師利菩薩)は無量の無数劫の過去の前世を思い返すと、
日月灯明仏と言う称号の仏、「人中尊」がいた。
世尊(である日月灯明仏)は、仏法を演説して、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡して、幾億の無数の菩薩を仏の智慧に入らせた。
(日月灯明)仏が未だ出家していなかった時に誕生させた所の者である、八人の王子は、「大聖」、「仏」(である日月灯明仏)の出家を見て、また、追随して、「梵行」、「修行」を修行した。

時に、(日月灯明)仏は、「無量義」、「量り知れない意義」という名の大乗経を説いた。
(日月灯明仏は、)諸々の大衆の中で、大衆の為に、広く分別して説いた。
(日月灯明)仏は、この経を説き終わると、法座の上で結跏趺坐して、「無量義処」、「量り知れない意義に処する」という名の三昧に入った。
天から雨のように曼陀華などが降り注いだ。
「天鼓」、「天の太鼓」が自然と鳴った。
諸々の天人、龍、鬼神は、人中尊(である日月灯明仏)を供養した。
一切の諸々の仏土は、時に、大いに震動した。
(日月灯明)仏は、眉間から光を放って、諸々の稀有な事を現した。
この光は東方の一万八千の仏土を照らして、一切の「衆生」、「生者」の生死での業の報いを受ける所を示した。
諸々の仏土が、多数の宝で荘厳に飾られて、(青い)瑠璃、「頗梨」、「水晶」の光の色のように見えた。
これは、(日月灯明)仏の光が照らしたからである。
および、諸々の天人、龍神、夜叉達、乾闥婆、緊那羅などが各々、その仏を供養していたのが見えた。
また、諸々の如来が自然と、仏道を成就して、身の色が黄金の山のように成って、端正で、荘厳で、とても微細で絶妙で、清浄な(青い)瑠璃の中、内に純金の像が現れたようであった。
世尊(である日月灯明仏)は、大衆の中にいて、奥深い仏法の意義を説明した。
諸々の仏土の各々には、声聞の大衆が無数にいた。
仏の光に照らされて、それらの大衆が、ことごとく見えた。
あるいは、精進して、光明に輝く宝珠を護るかのように、清浄に戒を守って保持している、諸々の比丘が、山林の中にいた。
また、布施、「忍辱」、「辱めを忍耐する事」、等を行っている、その(人)数が「恒(河)沙」、「ガンジス川の砂のように無数」である、諸々の菩薩が見えた。
これは、(日月灯明)仏の光が照らしたからである。
また、諸々の菩薩が、諸々の禅定に深く入って、心身を静かに不動にして、無上の仏道を求めているのが見えた。
また、諸々の菩薩が、「法」、「もの」の寂滅の相を知って、各々、その国土で説法して、仏道を求めているのが見えた。
その時、「四(部)衆」は、日月灯明仏が現した大いなる神通力を見て、その心を皆、喜ばせた。
(「四衆」などは、)各々、自ら、質問し合った。

「この事は、どんな『因縁』、『理由』による物なのか？」
天人、人が尊敬し奉っている所の者である日月灯明仏は、ちょうど(無量義処)三昧から起きて、妙光菩薩をほめた。
「
あなたは、『世間眼』なのである。
一切の者が帰依して信じる所の者である。
能く『法蔵』、『仏法』を保持している。
私(、日月灯明仏)の所説の仏法を、唯一あなただけが能く証して知っている。
」
世尊(である日月灯明仏)は、このように、ほめて、妙光菩薩を喜ばせて、この法華経を説いて、満六十小劫、この座を起たなかった。
(日月灯明仏の)所説の上の妙なる法を、この妙光法師(、妙光菩薩)は、ことごとく皆、能く受け取って保持した。
(日月灯明)仏は、この法華経を説いて、大衆を喜ばせ終わると、すぐに、この日に天人、人達に告げた。
「
諸法実相義を、既に、あなた達の為に説いた。
私(、日月灯明仏)は今日、夜中に、まさに、涅槃に入る。
あなた達は一心に精進して、まさに、放逸を離れなさい。
諸仏には、とても出会いにくい。
億劫の時に一度めぐり会えるかどうかなのである。
」
世尊(である日月灯明仏)の諸々の弟子らは、(日月灯明)仏が涅槃に入ると聞いて、各々、悲しみと悩みを懐いた。
「『仏滅』、『仏の肉体の死』は、何と速いのか？」
聖主、法王(である日月灯明仏)は、量り知れないほど無数の大衆を安心させて慰めた。
「
私(、日月灯明仏)が、もし『滅度した』、『肉体が死んだ』時は、あなた達は憂い怖れるなかれ。
この徳蔵菩薩は、無漏の実相を心に既に得て通達している。
(徳蔵菩薩は、)次に、まさに、仏に成る。
(徳蔵菩薩は、)『浄身仏』と言う称号になる。
また、(徳蔵菩薩は、)量り知れないほど無数の大衆を仏土へ渡す。
」

(日月灯明)仏は、この夜、薪が尽き火が消滅するように、「滅度した」、「肉体が死んだ」。
(日月灯明仏の)諸々の「舎利」、「遺骨」を分けて、量り知れないほど無数の塔を建てた。
その(人)数が「恒(河)沙のようである」、「ガンジス川の砂のように無数である」、比丘、比丘尼は、ますます精進して、無上の仏道を求めた。
この妙光法師(、妙光菩薩)は、「仏法蔵」、「仏法」を保持し奉って、八十小劫の間、広く法華経を説いた。
この諸々の八人の王子は、妙光菩薩によって開化されて、無上の仏道に堅固に(不退転に)成って、まさに、無数の仏を見て、諸仏を供養し終わると、随順して、大いなる仏道を修行して、相継いで仏に成る事ができ得て、次々と「授記した」、「仏に成る予言を授けた」。
最後に「天中天」、「仏」に成った王子は、燃灯仏と言う称号であった。
(燃灯仏は、)諸々の修行者の導師であった。
(燃灯仏は、)量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させた。
この妙光法師(、妙光菩薩)に時に一人の弟子がいたが、心に常に飽きて怠る思いを懐き、名声や利益に貪欲に執着して、名声や利益を求めて「族姓の家」、「高貴な人の家」へ多く行く事を厭い嫌わないで、読んで習った所の事を捨てて、忘れて、意味に通じて利益を得る事ができなかったので、この「因縁」、「理由」のため、「求名」という称号になってしまった。
(求名菩薩は、しかし、)また、諸々の善業を行って、無数の仏にまみえて、諸仏を供養して、随順して、大いなる仏道を修行して、六波羅蜜を備えた。
(求名菩薩は、弥勒菩薩と成って、)今、釈迦牟尼仏という獅子にたとえられる仏を見ている。
(求名菩薩であった、弥勒菩薩は、)後に、まさに、弥勒仏と言う名称、称号の仏に成る。
(求名菩薩であった、弥勒菩薩は、弥勒仏と成って、)広く、その(人)数が量りしれない無数の、諸々の「衆生」、「生者」を仏土へ渡す。
その(日月灯明)仏の「滅度」、「肉体の死」の後、(修行に)飽きて怠っていた者(である求名菩薩)が、あなた(、弥勒菩薩)の前身なのである。
妙光法師(、妙光菩薩)という者が、今の私(、文殊師利菩薩)の前身なのである。
私(、文殊師利菩薩)が(妙光菩薩であった時に)見た(過去の)日月灯明仏の光の瑞兆は、この釈迦牟尼仏の瑞兆と同様であった。
それで、知る事ができる。

今、(釈迦牟尼)仏は、法華経を説きたいと欲している、と。
今の(釈迦牟尼仏の瑞兆の)相は、過去の(日月灯明仏の)瑞兆と同様である。
この瑞兆は、諸仏の「方便」、「手段」なのである。
今、(釈迦牟尼)仏は、光明を放って、「実相義」を「助発している」、「助けおこしている」。
諸々の人よ、
今、まさに、知るべきである。
合掌して、一心に待ちなさい。
(釈迦牟尼)仏は、まさに、雨のように「法雨」、「仏法という雨」を降らして、求道者を充足させる。
諸々の「三乗」を求めている人の中に、もし疑いや後悔が有る者がいれば、(釈迦牟尼)仏は、まさに、その者のために、(疑いや後悔を、)除いて断って余す事無く無くし尽くす。

方便品

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、三昧から安らかに「詳(つまび)らかに」、「はっきりと」起きて、舎利弗に告げた。

諸仏の智慧は、とても奥深く量り知れない。
その智慧の門は、理解が難しいし、入るのが難しい。
一切の「声聞」と「辟支仏」、「独覚」は知る事が不能な所なのである。
どういう事か？　(と言うと、)
仏は、かつて、幾百、幾千、幾万、幾億の無数の諸仏に親しみ近づいている。
(仏は、)諸仏の量り知れない仏道、仏法をことごとく行(おこな)っている。
(仏は、)勇猛果敢に精進している。
(仏は、)名称が、あまねく聞こえる(ほど、正しい言動をしている)。
(仏は、)とても深い未曾有の仏法を成就していて、相手に応じて説かれているが、(仏ではない者には)仏法の意趣は理解が難しいのである。
舎利弗よ、
私(、釈迦牟尼仏)は、仏と成ってから今まで、種々の因縁、種々の譬喩で、言葉で仏の教えを広く演説してきた。
(釈迦牟尼仏は、)無数の「方便」、「便宜的な方法」で、「衆生」、「生者」を仏道へ引き入れるために導いて、諸々の執着を離れさせた。
どういう事か？　(と言うと、)
如来(、仏)は、方便、知見の「波羅蜜」、「到達」を皆すでに「具足している」、「十分に備えている」。
舎利弗よ、
如来の知見は広大で深遠である。
量り知れない「無礙の」、「妨(さまた)げの無い」力、畏(おそ)れる所が無い事、禅定、解脱、三昧(が如来には有る)。
(如来は、)「無際」、「無限」へ深く入って、一切の未曾有の仏法を成就している。
舎利弗よ、
如来は、能く種々に分別できて、巧みに「諸法」、「全てのもの」を説く。
(如来は、)「言辞」、「言葉遣い」が柔軟で、「衆生」、「生者」の心を喜ばせる事が可能である。
舎利弗よ、
「要を取って」、「要約して」、これらを言うと、

量り知れない「無辺」、「無限」の未曾有の仏法を、仏は、ことごとく成就している。
止めよう。舎利弗よ、これ以上、説くべきではない。
その理由は何か？　(と言うと、)
仏が成就している所の、第一の、稀有の、(仏ではない者には)理解が難しい仏法とは、仏と仏だけが能く究め尽くす事ができる、「諸法」、「全てのもの」の実の相なのである。
(「諸法」、「全てのもの」の実の相とは、)いわゆる、
「諸法」、「全てのもの」の、
ありのままの相、
ありのままの性質、
ありのままの実体、
ありのままの力、
ありのままの作用、
ありのままの原因、
ありのままの「縁」、「つながり」、
ありのままの結果、
ありのままの報い、
ありのままの「本末究竟等」、「最初から最後までの全てのものは究極的に唯一普遍である事」、
等である。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を説きたいと欲して、詩で説いて言った。

「世雄」、「仏」は、(厳密には)量り知る事が不可能である。
諸々の天人、および、世の人々、一切の「衆生類」、「生者」に、(厳密には)仏を知る事が可能な者はいない。
仏の、力、畏(おそ)れる所が無い事、解脱、諸々の三昧、および、仏の諸々の残りの「法」、「物」を、(厳密には)推測して量る事が可能な者はいない。
(仏は、)本(もと)より、無数の仏に従って、諸々の仏道修行を十分に備えている。
とても奥深い微細で絶妙な仏法は、見る事が難しいし、「了解」、「理解」する事が難しい。
無量億劫に、この諸々の仏道修行を修行し終わって(、ようやく)、道場で成果を得る事ができる。

私(、釈迦牟尼仏)は既に、ことごとく知見している。
ありのままの大いなる結果と報い、種々の性質と相の意義。私(、釈迦牟尼仏)、および、十方の仏は能く、この事を知っている。
(厳密には、)この仏法は示す事が不可能である。言葉という相が「寂滅している」、「絶えている」。(厳密には、仏法は言い表す事ができない。)
(仏ではない)諸々の他の「衆生類」、「生者」は(厳密には仏法を)理解できない。
(ただし、)諸々の菩薩達のうち、信じる力が堅固な者は除く。
諸仏の弟子達のうち、かつて諸仏を供養して、一切の「漏」、「汚れ」、「煩悩」を既に無くし尽くして、「最後身に住んでいる」、「輪廻転生しない」。このような諸々の人らの、その力でも、(厳密には仏法は理解)できない所の物なのである。
仮に、たとえ、世間に満ちている者が皆、(智慧第一の)舎利弗のようで、思いを尽くして、共に、推測しても、(厳密には)仏の智慧は推測が不可能なのである。
たとえ、十方に満ちている者が皆、(智慧第一の)舎利弗のようで、さらに、(舎利弗の)他の諸々の弟子もまた十方の国に満ちて、思いを尽くして、共に、推測しても、また、(厳密には仏の智慧は)知る事が不可能なのである。
「辟支仏」、「独覚」のうち、智慧が鋭利で、「漏」、「汚れ」、「煩悩」が無く、「最後身である」、「輪廻転生しない」(者が)、また、十方の世界に満ちて、その数が竹林のように成って、これらの者が、共に、一心に、幾億もの無量劫、仏の真実の智慧を知りたいと思っても、(厳密には)少しも知る事ができないのである。
新たに「発意した」、「発心した」、「悟りを求める事を思い立って心した」菩薩のうち、無数の仏を供養して、諸々の意義、意趣の「了解」、「理解」に到達して、また、善く説法できる者が、稲(いね)、麻(あさ)、竹、葦(あし)のように十方の国に充満して、一心に、妙なる智慧で、「恒河沙の」、「ガンジス川の砂のように無数の」劫、ことごとく皆、共に、思量しても、(厳密には)仏の智慧は知る事が不可能なのである。
不退転な諸々の菩薩が、その(人)数が「恒(河)沙のように」、「ガンジス川の砂のように無数に」成って、一心に、共に、思い求めても、また、(厳密には仏の智慧は)知る事が不可能なのである。
また、舎利弗に告げる。
「無漏の」、「汚れない」、不思議な、とても奥深い微細で絶妙な仏法を私(、釈迦牟尼仏)は今すでに「具し得ている」、「備え得ている」。

(厳密には)私(、釈迦牟尼仏)だけが、この(真実の)相を知っている。十方の仏もまた、そうなのである。
舎利弗よ、
まさに、知るべきである。
諸仏の言葉(同士)は、異なる事が無い。
仏が説いている所の法へ、まさに、大いなる信じる力を生じるべきである。
世尊、仏は、(「方便」、「便宜的な方法」の)法を久しく説いた後で、必ず、まさに、真実を説く。
諸々の声聞達、および、「縁覚乗」、「独覚乗」を求める者達に告げる。
私(、釈迦牟尼仏)は、苦しみへの束縛から解脱させて、涅槃をとらえさせたが、(釈迦牟尼)仏は「方便」、「便宜的な方法」の力で、そうさせたのである。
(釈迦牟尼仏は、)「三乗教」、「三乗に分けた教え」で(仏教を)「衆生」、「生者」に示して、「処々の」、「あれこれの」執着から、この生者を引き寄せて、生者を(執着から)出させた。

その時、大衆の中に、諸々の声聞、「漏」、「汚れ」、「煩悩」を無くし尽くした阿羅漢、阿若 憍陳如、等、千二百人、および、声聞や「辟支仏」、「独覚」を求める事を思い立って心した者、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷がいて、
各々このように思った。

今、世尊、釈迦牟尼仏は、なぜ、慇懃に「方便」、「便宜的な方法」をほめたたえて、このように言うのか？
「
仏が得ている所の仏法は、とても奥深く、(仏ではない者には)理解が難しい。
言葉で説いている所の仏法は、意趣が、(仏ではない者には)知る事が難しい。
(厳密には、仏法は、)一切の声聞、『辟支仏』、『独覚』が及ぶ事ができない所の物なのである。
」と。
(釈迦牟尼)仏は、「一解脱義」、「唯一の解脱させる教え」(である唯一の仏法)を説いた(はずである)。
私達(、釈迦牟尼仏の弟子達)もまた、この仏法を得て、涅槃に到達した(はずである)。
しかし、(私達、釈迦牟尼仏の弟子達には、)今、この「義」、「教え」、「仏法」が(本当に)意味する所「を知る事ができない」、「が分からない」。

その時、舎利弗は、「四衆」の心にある疑いを知って、また、(舎利弗)自身も未だ「了解」、「理解」できなくて、仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏は、どんな「因縁」、「理由」で、慇懃に、諸仏の第一の「方便」、「便宜的な方法」をほめたたえるのですか？
とても奥深い微細で絶妙な(仏ではない者には)理解が難しい仏法を、私(、舎利弗)は、昔から今まで未だかつて、釈迦牟尼仏から、このように説かれたのを聞いた事が有りません。
今、「四衆」は、ことごとく皆、疑いを持っています。
ただ願わくば、世尊、釈迦牟尼仏よ、この事を「敷演してください」、「詳しく説明してください」。
世尊、釈迦牟尼仏は、なぜ、慇懃に、とても奥深い微細で絶妙な(仏ではない者には)理解が難しい仏法をほめたたえるのですか？

その時、舎利弗は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で言った。

「慧日大聖尊」である釈迦牟尼仏は、久しくしてから、このように仏法を説いた。
(釈迦牟尼仏は、)自ら「ありのままの力、畏(おそ)れが無い事、三昧、禅定、解脱、等の不可思議の法を会得している」と説いた。
(釈迦牟尼仏が)道場で会得した法について、質問できる者はいません。
「私(、釈迦牟尼仏)の心は、(仏ではない者には)推測する事が難しい」
またも、質問できる者はいません。
(釈迦牟尼仏は、)質問されなくても、自ら、修行している所の仏道を説いて、ほめたたえている。
(釈迦牟尼仏は、)「諸仏が得ている所の智慧は、とても微細で絶妙である」(と言った。)
「漏」、「汚れ」、「煩悩」を無くした諸々の阿羅漢、および、涅槃を求めている者は、今、皆、疑いという網(あみ)に堕ちてしまっている。
釈迦牟尼仏は、なぜ、このように説いたのですか？
「縁覚」、「独覚」を求めている者、比丘、比丘尼、諸々の、天人、龍、鬼神、および、乾闥婆、等は、相互に見合って、ためらいを懐き、「両足尊」である釈迦牟尼仏を見上げています。
これらは、どういう事なのですか？

願わくば、釈迦牟尼仏よ、(私達、釈迦牟尼仏の弟子達の)為に、解説してください。
釈迦牟尼仏は「諸々の声聞達において舎利弗は(智慧が)第一である」と説いた。(しかし、)
私は今、自ら、智慧において、疑い、惑(まど)い、「了解」、「理解」できません。
「このような物が究極の仏法である」と為(な)すのですか？
「このような物が修行している仏道である」と為(な)すのですか？
釈迦牟尼仏の口(の言葉)から生まれた所の子(である釈迦牟尼仏の弟子)は合掌して、(釈迦牟尼仏を)見上げて、(釈迦牟尼仏の説明を)待っています。
願わくば、微細で絶妙な音声を出して、時に、(釈迦牟尼仏の弟子達の)為に、「如実に」、「真実のままに」、説いてください。
諸々の天人、龍神、等は、その数が「恒(河)沙のよう」、「ガンジス川の砂のように無数」です。
仏に成る事を求めている諸々の菩薩は、(人)数が多くて、八万人います。
また、幾万、幾億の諸国の転輪聖王が到来しています。
(これらの者達は、)合掌して、敬う心をもって、釈迦牟尼仏が「具足している」、「十分に備えている」仏道を聞きたいと欲しています。

その時、釈迦牟尼仏は、舎利弗に告げた。

止めよう。
止めよう。
これ以上、説くべきではない。
もし、この事について説明すれば、一切世間の諸々の天人、および、人々は皆、まさに、驚いて疑ってしまうだろう。

舎利弗は、くり返し、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
ただ願わくば、この事について説明してください。
ただ願わくば、この事について説明してください。
その理由は何か？　(と言いますと、)
この会の、幾百、幾千、幾万、幾億、幾阿僧祇の無数の「衆生」、「生者」は、かつて諸仏を見た事が有って、「諸根」、「諸々の能力」が盛んで鋭利で、智慧が「明了」、「聡明」です。

(この会の「生者」は、)釈迦牟尼仏の所説を聞けば、敬い信じる事ができます。

その時、舎利弗は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で言った。

法王、無上尊、釈迦牟尼仏よ、
ただ願わくば、説いて、遠慮する事なかれ。
この会の量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」には、敬い信じる事ができる者がいます。

釈迦牟尼仏は、また言った。

止めよう。
舎利弗よ、
もし、この事について説明すれば、一切世間の天人、人、阿修羅は皆、まさに、驚いて疑ってしまうだろう。
「増上慢の」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」比丘は、まさに、大きな穴に落ちてしまう。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、詩で説いた。

止めよう。
止めよう。
説明するべきではない。
私(、釈迦牟尼仏)の仏法は微細で絶妙で(仏ではない者には)思量が難しい。
諸々の「増上慢の」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」者は、聞けば、必ず、敬わなく成ってしまって信じなく成ってしまう。

その時、舎利弗は、くり返し、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
ただ願わくば、この事について説明してください。
ただ願わくば、この事について説明してください。
今、この会の中に、私(、舎利弗)のような類(たぐい)の者が、幾百、幾千、幾万、幾億いて、すでに、かつて、仏に従って、教化を受けています。

これらの人、等は、必ず、敬って信じて、「長夜に」、「迷いという、夜明けまでが長い夜に夜通しで」安らかに穏やかに成って、多くの利益が得られます。

その時、舎利弗は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で言った。

無上の「両足尊」、釈迦牟尼仏よ、
願わくば、第一の法を説いてください。
私は釈迦牟尼仏の(仏法の)「長子」、「長男」で(ある、と言えま)す。
分別して説く釈迦牟尼仏の慈悲を垂らしてくださるだけで良いのです。
この会の量り知れないほど無数の者達は、その法を敬って信じる事ができます。(なぜなら、)
釈迦牟尼仏は既に、かつて、生から生へ、このような者らを教化している(実績が有ります)。
皆、一心に、合掌して、釈迦牟尼仏の言葉を聴いて受け入れたいと欲しています。
私、等、千二百人もいます。また、仏に成る事を求めている他の者達もいます。
願わくば、これらの者達の為に、分別して説く釈迦牟尼仏の慈悲を垂らしてくださるだけで良いのです。
これらの者達は、その法を聞いて、大いなる喜びを(心に)生じます。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、舎利弗に告げた。

あなた(、舎利弗)は既に慇懃に三度も教えを請うてくれた。
どうして説かない事ができるだろうか？　いいえ！
あなた(、舎利弗)は今、明らかに聴きなさい。
善く、これについて「思念」、「思考」しなさい。
私(、釈迦牟尼仏)は、まさに、あなた(、舎利弗)の為に、分別して解説しよう。

釈迦牟尼仏が、これらの言葉を説いた時に、会の中に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、五千人、等がいて、座から起って、釈迦牟尼仏に礼してから、退出してしまった。
その理由は何か？　(と言うと、)

これらの輩は、罪が深く重くて、また、「増上慢で」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっていて」、(悟りを)未だ得ていないのに「(悟りを)得た」と言ってしまって、(悟りを)未だ証していないのに「(悟りを)証している」と言ってしまっていた。
(これらの輩には、)このような過失が有った。
このため、(釈迦牟尼仏の法華経を聞くために、)留まらなかった。

世尊、釈迦牟尼仏は、沈黙して、制止しなかった。

その時、釈迦牟尼仏は、舎利弗に告げた。

私(、釈迦牟尼仏)の、今の、この者達は、「枝葉が無い」、「外れていない」。
清純で、「貞実さ」、「誠実さ」が有る。
舎利弗よ、
あれらのような「増上慢な」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」人が、「退亦佳矣」、「退出するのは、また、佳(よ)い」。
あなた(、舎利弗)は、今、善く聴きなさい。
まさに、あなた(、舎利弗)の為に、説こう。

舎利弗は言った。

「はい」と言うだけです。
世尊、釈迦牟尼仏よ、
聞きたいと願います。

釈迦牟尼仏は、舎利弗に告げた。

諸仏、如来は時に、このような妙なる法を説くが、優曇鉢華が(三千年に一度だけ、)時に一度だけ現れるような物なのである。
舎利弗よ、
あなた達は、まさに、信じなさい。
仏は所説で「虚妄」、「空虚で妄(みだ)りな事」を言わない。
舎利弗よ、
諸仏が相手に応じて説く法の意趣は(仏ではない者には)理解が難しい。
どういう事か？　(と言うと、)

私(、釈迦牟尼仏)は、無数の「方便」、「便宜的な方法」、種々の因縁、譬喩、言葉で、「諸法」、「全てのもの」を説く(からである)。
この仏法は(厳密には)思量分別で理解できる所の物ではない。
諸仏だけが、これを知る事ができる。
どういう事か？　(と言うと、)
諸仏世尊は、唯一の一大事の「因縁」、「理由」のため、世に出現する。
舎利弗よ、
どういった事を「諸仏世尊は、唯一の一大事の『因縁』、『理由』のため、世に出現する」(の「唯一の一大事の理由」)と名づけているのか？　(と言うと、)
諸仏世尊は、「衆生」、「生者」に仏の知見を開かせて、清浄に成らせたいので、世に出現する。
(諸仏は、)「衆生」、「生者」に仏の知見を示したいので、世に出現する。
(諸仏は、)「衆生」、「生者」に仏の知見を悟らせたいので、世に出現する。
(諸仏は、)「衆生」、「生者」に仏の知見への道へ入らせたいので、世に出現する。
舎利弗よ、
このため、諸仏は、唯一の一大事の「因縁」、「理由」のため、世に出現する。

釈迦牟尼仏は、舎利弗に告げた。

諸仏、如来は、菩薩を教化するだけである。(諸仏は菩薩だけを教化する。声聞と独覚は実は既に菩薩の一員なのである。声聞と独覚は菩薩として仏に成る事を目指す必要が有る。)
(諸仏の)諸々の「所作」、「行(おこな)い」は常に「一事」、「一大事」の為なのである。
(諸仏は、)仏の知見を「衆生」、「生者」に示して、悟らせたいだけなのである。
舎利弗よ、
如来は、唯一の「仏乗」、「仏に成る道」によって、「衆生」、「生者」の為に、仏法を説く。
「仏乗」、「仏に成る道」の他の「乗」、「道」は「二乗」も「三乗」も(実は)無いのである。(声聞乗、独覚乗は実は仏乗の一部なのである。声聞と独覚は実は既に菩薩の一員なのである。声聞と独覚は菩薩として仏に成る事を目指す必要が有る。)

舎利弗よ、
一切の十方の諸仏の仏法もまた、同様なのである。
舎利弗よ、
過去の諸仏も、量り知れないほど無数の「方便」、「便宜的な方法」、種々の因縁、譬喩、言葉で、「衆生」、「生者」の為に、「諸法」、「全てのもの」を説く。
この(過去の諸仏の)仏法も皆、「(一)仏乗」の為なのである。
この(過去の諸仏の)諸々の「衆生」、「生者」も、諸仏に従って、仏法を聞いて、究めて、皆、「一切種智」を得た。
舎利弗よ、
未来の諸仏もまた、まさに、世に出現して、量り知れないほど無数の「方便」、「便宜的な方法」、種々の因縁、譬喩、言葉で、「衆生」、「生者」の為に、「諸法」、「全てのもの」を説く。
この(未来の諸仏の)仏法も皆、「(一)仏乗」の為なのである。
この(未来の諸仏の)諸々の「衆生」、「生者」も、仏に従って、仏法を聞いて、究めて、皆、「一切種智」を得る。
舎利弗よ、
現在の、十方の、幾百、幾千、幾万、幾億の無量の仏土の中の、諸仏世尊は、「衆生」、「生者」に多くの利益をもたらして安楽にさせている。
この(現在の)諸仏もまた、量り知れないほど無数の「方便」、「便宜的な方法」、種々の因縁、譬喩、言葉で、「衆生」、「生者」の為に、「諸法」、「全てのもの」を説く。
この(現在の諸仏の)仏法も皆、「(一)仏乗」の為なのである。
この(現在の諸仏の)諸々の「衆生」、「生者」も、仏に従って、仏法を聞いて、究めて、皆、「一切種智」を得る。
舎利弗よ、
この(過去、現在、未来の)諸仏は、菩薩を教化するだけである。(諸仏は菩薩だけを教化する。声聞と独覚は実は既に菩薩の一員なのである。声聞と独覚は菩薩として仏に成る事を目指す必要が有る。)
仏の知見を「衆生」、「生者」に示したいと欲するからである。
仏の知見を「衆生」、「生者」に悟らせたいと欲するからである。
「衆生」、「生者」を仏の知見への道へ入らせたいと欲するからである。
舎利弗よ、
私(、釈迦牟尼仏)もまた、今、同様なのである。

諸々の「衆生」、「生者」に種々の欲、心の奥深くの執着している所のものが有るのを知って、その本性に応じて、種々の因縁、譬喩、言葉、方便する力で、(生者の)為に、仏法を説いている。
舎利弗よ、
これは皆、「(一)仏乗」と、一切種智を得させる為なのである。
舎利弗よ、
十方の世界の中には「二乗」すら無い。
まして、「三乗」が有るだろうか？　いいえ！　「三乗」は無い！
舎利弗よ、
諸仏は、「五濁」の悪世に出現する。
(「五濁」とは、)いわゆる、「劫濁」、「煩悩濁」、「衆生濁」、「見濁」、「命濁」である。
このように、
舎利弗よ、
「劫濁」の乱れている時代では、「衆生」、「生者」は、「垢」、「汚れ」、「煩悩」が重く、物惜しみしてしまい貪欲で、嫉妬深く、諸々の「不善根」、「悪業」を成就してしまう。
このため、諸仏は、方便する力で、「(一)仏乗」を(三つに)分別して、「三乗」と説く。
舎利弗よ、
もし、私(、釈迦牟尼仏)の弟子のうち、「(私は)阿羅漢である」とか「(私は)『辟支仏』、『独覚』である」と自ら言っている者が、「諸仏、如来は菩薩を教化するだけである」事を聞かないか、知らないならば、この者は、仏の弟子ではないし、阿羅漢ではないし、「辟支仏」、「独覚」ではない。
また、
舎利弗よ、
この諸々の比丘、比丘尼が、「(私は)既に阿羅漢と成った。『最後身である』、『輪廻転生しない』。涅槃を究めた」と自ら言って、また、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を志して求めなければ、この輩は皆、「増上慢な」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」人である、と、まさに、知るべきである。(阿羅漢、声聞、独覚は菩薩として仏に成る事を目指す必要が有る。)
その理由は何か？　(と言うと、)
もし、比丘が実に阿羅漢に成っているならば、回避する場所が無いように、この法を信じないはずが無い。

(ただし、)仏の「滅度」、「肉体の死」の後、現前に、仏がいない場合を除く。
その理由は何か？　(と言うと、)
仏の「滅度」、「肉体の死」の後、このような(法華)経、等を受け入れて保持したり、読んだり、その意義を理解したりする者は得難いのである。
もし他の仏に会えば、この法の中で、決定的に「了解」、「理解」でき得る。
舎利弗よ、
あなた達は、まさに、一心に、信じて理解して、仏の言葉を受け入れて保持しなさい。
諸仏、如来は「虚妄」、「空虚で妄(みだ)りな事」は言わない。
他の乗など存在しない。
唯一、「仏乗」、「仏に成る道」しかない。(声聞も独覚も菩薩として仏に成るしかないのである。)

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を説きたいと欲して、詩で説いた。

比丘、比丘尼に、「増上慢」、「悟っていないのに『悟った』という思い上がり」を懐いている者がいる。
優婆塞に、「我慢」、「自分を特別視する思い上がり」を懐いている者がいる。
優婆夷に、不信心者がいる。
このような「四衆」等は、その人数が五千人いて、その過失を自ら見ないで、戒において「欠漏」、「手落ち」が有って、その瑕疵(かし)を護り惜しんでしまっている。
このような矮小な智慧の者達は既に退出した。
(この者達は、)会衆の中の「糟糠」、「滓(かす)」、「無価値な者」である。
(この者達は、)仏の威徳のおかげで、去っていった。
この人達は、幸福をもたらす「徳」、「善行」が少なくて、この法を受け入れる事に耐えられない。
(しかし、)あなた達は、「枝葉が無い」、「外れていない」し、諸々の「貞実さ」、「誠実さ」だけが有る。
舎利弗よ、
善く聴きなさい。
諸仏は、所得している仏法を、量り知れない方便する力で、「衆生」、「生者」の為に、説く。

「衆生」、「生者」の、心の「所念」、「思考」、種々の仏道修行している所の物、諸々の欲と性質、先の前世の善業と悪業を、仏は、ことごとく知り終わると、諸々の因縁、譬喩、言葉、方便する力で、一切の生者を喜ばせる。
あるいは、(仏は、)
修多羅または契経、
伽陀または諷頌、および
伊帝曰多伽または本事、
闍陀伽または本生、
阿浮陀達磨または「未曾有」、また、
尼陀那または「因縁」、
阿波陀那または「譬喩」、
祇夜または重頌、
優婆提舎または「論議」、
という九部経または九分教を説く。
「鈍根の」、「智慧などが鈍(にぶ)い」者は、「小法」、「矮小なもの」を願ってしまい、生死に貪欲に執着してしまい、量り知れないほど無数の諸仏の下で妙なる仏道を深く修行しないで、多くの苦しみに悩まされ乱されてしまう。(仏は、)この者の為に、涅槃を説く。
私(、釈迦牟尼仏)は、この(涅槃という)「方便」、「便宜的な方法」を設(もう)けて、(生者を)仏の智慧に入らせる。
「あなた達は、まさに、『仏道を成就する』、『仏に成る』」と(私、釈迦牟尼仏は)未だかつて説かなかった。
未だかつて説かなかった理由は、説くべき時が未だ至らなかったからなのである。
今が、まさに、(あなた達が仏に成る事を予言する、)その時なのである。
(あなた達が仏に成る事を予言する事を)決定して、大乗経を説いた。
私(、釈迦牟尼仏)は、この九部法を、「衆生」、「生者」に応じて、説いた。
(九部法は、)「大乗」へ入る為の本と成るからである。
このため、この(法華)経を説いている。
仏の弟子のうち、心が清浄で柔軟で、または、「利根」、「智慧などが利発」で、量り知れないほど無数の諸仏の所で妙なる仏道を深く修行している者、このような諸々の仏の弟子の為に、(仏は、)この大乗経を説く。
私(、釈迦牟尼仏)は、「このような人は来世に『仏道を成就する』、『仏に成る』」と「(授)記する」、「仏に成る事を予言する」。
「深心」、「信心深い心」で、「念仏し」、「仏について思考し」、修行を保持し、清浄に戒を守るからである。

このような者達は、「仏に成る事ができ得る」と聞くと、大いなる喜びが「遍身」、「体中」に充(み)ちる。
仏は、彼らの心と行いを知っているので、大乗経を説く。
(真の)声聞、もしくは、(真の)菩薩は、私(、釈迦牟尼仏)が説いている所の仏法を、一つの詩だけでも、聞けば、皆、仏に成る事は疑う余地が無い。
十方の仏土の中には、(「仏乗」という)一乗の仏法だけが有って、唯一無二、また、無三である。(ただし、)仏の「方便」、「便宜的な方法」の説を除く。
(「声聞乗」、「独覚乗」という「仏乗」の一部分につけた)仮の名前で、「衆生」、「生者」を仏道へ引き入れるために導いただけなのである。(なぜなら、)仏の智慧を説くためである。
諸仏は、世に出現するのは、この唯一の事実の為なのである。(「声聞乗」、「独覚乗」という)他の二つは真実ではない(と言える)。
最終的には、「小乗」では「衆生」、「生者」を救済して仏土へ渡さない。
仏も自ら「大乗」に住んでいる。
(仏は、)その会得している仏法のように、定、慧、力を荘厳にして、「衆生」、「生者」を仏土へ渡す。
(仏は、)自ら、無上の仏道、「大乗」の平等の仏法を証している。
もし、一人でも「小乗」だけで教化してしまえば、私(、釈迦牟尼仏)は物惜しみして貪欲である事に成ってしまうが、そのような事はしてはいけないのである。
もし、人が信じて仏に帰依すれば、如来は「欺誑しない」、「空虚には、だまさない」。
また、(仏は、)貪欲や嫉妬する心が無く、「諸法」、「全てのもの」の中の悪を断っている。このため、仏は、十方で、独りだけ唯一、畏(おそ)れる所が無い。
私(、釈迦牟尼仏)は、相で身を荘厳にして、光明で世間を照らして、量り知れないほど無数の者達に尊敬されて、(生者の)為に、(真)実の相の印を説く。
舎利弗よ、
まさに、知るべきである。
私(、釈迦牟尼仏)は本(もと)より「一切の『衆生』、『生者』を私(、釈迦牟尼仏)と同じような仏にしたい」という誓願を立てている
私(、釈迦牟尼仏)の昔の誓願は今すでに満ち足りている。
(私、釈迦牟尼仏は、)一切の「衆生」、「生者」を教化して、皆、「仏道」、「仏への道」へ入らせた。

もし、私(、釈迦牟尼仏)が「衆生」、「生者」に会って、仏道を(三乗に分けないで、)ことごとく皆に教えたら、智慧が無い者は錯乱して、迷い惑って、仏教を受け入れなかっただろう。
(次のように、)私(、釈迦牟尼仏)は知っているのである。
このような(無知な)「衆生」、「生者」は、未だかつて、「善本」、「善行」を修行していないのである。
(無知な生者は、)「五欲」、「五感の欲望」に堅く執着してしまっている。
(無知な生者は、)「痴愛」、「盲目的な執着」のせいで悩みを生じてしまっている。
(無知な生者は、)諸々の欲という因縁のせいで、「三悪道」、「地獄、餓鬼、畜生」に堕ちてしまう。
(無知な生者は、)「六趣」、「六道」の中を輪廻転生して、全ての場所で、諸々の苦しみという毒を受けてしまっている。
「受胎している」、「孕(はら)んでいる」微(かす)かな形は、「世から世へ」、「生から生へ」、常に増上、成長する。
「徳」、「善行」が少なくて幸福が少ない人は、多くの苦しみで逼迫されている。
(善行が少ない人は、)「有」、「存在」または「無」等への邪悪な見解の「稠林」、「盛んに起こる煩悩」へ入ってしまって、この諸々の邪悪な見解を「依止してしまって」、「頼ってしまって」、「六十二見」を「具足してしまって」、「備えてしまって」、「虚妄な法」、「空虚な妄(みだ)りなもの」に深く執着してしまって、堅く受け入れてしまって、捨てる事ができない。
(善行が少ない人は、)「我慢してしまって」、「自分を特別視して思い上がってしまって」、自分だけで、おごり高ぶってしまう。
(善行が少ない人は、)こびへつらってしまって自分を曲げてしまって、心が不実である。
(善行が少ない人は、)幾千、幾万、幾億劫、仏という名前を聞かない。
また、(善行が少ない人は、)正しい法を聞かない。
このような人は仏土へ渡すのが難しい。
このため、
舎利弗よ、
私(、釈迦牟尼仏)は、(善行が少ない人の)為に、「方便」、「便宜的な方法」を設(もう)けて、諸々の、苦しみを無くし尽くす道を説くが、涅槃によって、苦しみを無くす道を示す。

私(、釈迦牟尼仏)は、涅槃を説くといえども、この涅槃もまた真の「滅」ではない。
(なぜなら、)「諸法」、「全てのもの」は本(もと)より常に自然に「寂滅」の相だからである。
仏の弟子は、仏道を修行し終わると、来世で仏に成る事ができ得る。
私(、釈迦牟尼仏)には、方便する力が有って、三乗に分けた仏法を開示する。
(しかし、実は、)一切の諸世尊は皆、一乗の仏道を説いているのである。
今、あなた達、諸々の大衆は皆、まさに、疑いや惑いを除いたはずである。
諸仏の言葉(同士)は異ならない。
唯一無二の仏乗だけなのである。
過去の無数劫の、量り知れないほど無数の「滅度した」、「肉体が死んだ」仏は、その(人)数が、幾百、幾千、幾万、幾億で量り知る事が不可能である。
このような諸世尊は、種々の因縁、譬喩、無数の方便する力で、「諸法」、「全てのもの」を説く。
この諸世尊らは皆、一(仏)乗の仏法を説いて、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を、教化して、「仏道」、「仏への道」へ入らせた。
また、諸大聖主(である諸仏)は、一切世間の天人、人、「群生類」、「生者」の心の奥深くの欲を知っている。
さらに、(諸仏は、)異なる「方便」、「便宜的な方法」で、第一の意義を助けて顕現させた。
もし、「衆生類」、「生者」が諸々の過去の仏に会う事が有って、仏法を聞いて、布施し、辱(はずかし)めを忍耐し、精進し、禅、智慧、等、幸福をもたらす「徳」、「善行」を種々に修行していたら、このような諸々の人、等は皆すでに仏道を成就している。
諸仏の「滅度」、「肉体の死」の後、もし、人の心が善で柔軟であれば、このような諸々の「衆生」、「生者」は皆すでに仏道を成就している。
諸仏の「滅度」、「肉体の死」の後、「舎利」、「仏の遺骨」を供養する者が、幾万、幾億の塔を建てて、「金と、銀と、『頗梨』、『水晶』と、『硨磲』、『シャコ貝の貝殻』と、瑪瑙と、『玫瑰』、『現在では謎の、赤い宝石』と、真珠」(という「七宝」)で、清浄に広く荘厳に飾って、諸々の塔を荘厳にしたら、
あるいは、石や、「栴檀」、「白檀という香木」や、沈(水)香という香木や、「木櫁」、「櫁(シキミ)という木」や、他の木材や、瓦、泥土、等で廟を建てた事が有ったら、
もしくは、曠野の中に、土を積んで仏の廟と成したら、
または、幼子が戯れで砂を集めて仏塔にしたら、

このような諸々の人達は皆すでに仏道を成就している。
もし、人が、仏のために、「形像」、「像」を建立して、彫刻して多数の相を形成したら、皆すでに仏道を成就している。
あるいは、「七宝」で形成し、「鍮鉐」、「真鍮」、「黄銅」や、赤白銅や、「白鑞」、「錫(すず)か、鉛(なまり)と錫(すず)の合金の白目」や、鉛(なまり)や、錫(すず)や、鉄や、木や、泥や、膠(にかわ)や、漆(うるし)や、布で荘厳に飾って、仏像を作ったら、このような諸々の人達は皆すでに仏道を成就している。
自ら、もしくは、人を使って、仏像の「百福荘厳相」の絵を描いたら、皆すでに仏道を成就している。
または、幼子が戯れで、草木や、筆や、指の爪甲で、仏像の絵を描いたら、このような諸々の人達は、徐々に功徳を積んで、大いなる慈悲の心を十分に備えて、皆、既に仏道を成就して、諸々の菩薩を教化して、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させる。
もし、人が、塔廟、宝による(仏)像、(仏の)画像を、華、香、「幢旛」、「天蓋」で、敬う心で、供養したら、
もし、人を使って音楽を奏でたり、太鼓を撃ったり、角貝を吹いたり、「簫笛」、琴、「箜篌」という弦楽器、琵琶、鐃と銅鈸というシンバルを鳴らしたりして、これらの多くの妙なる音で供養したら、あるいは、喜ぶ心で、一言でも小声でも、仏の徳を歌ったら、皆すでに仏道を成就している。
もし、人が、心が乱れていても、一本の華でも、(仏の)画像を供養したら、徐々に無数の仏を見る。
あるいは、人が、礼拝したり、一本の手を挙げるだけでも良いので、ただ合掌したり、少し頭を下げたりして、(仏)像を供養したら、量り知れないほど無数の仏を徐々に見て、自ら無上の仏道を成就して、無数の「衆生」、「生者」を広く仏土へ渡して、薪が尽き火が消滅するように「無余涅槃」へ入る。
もし、人が、心が乱れていても、塔廟の中へ入って、「南無、仏」と一度でも言ったら、皆すでに仏道を成就している。
諸々の過去の仏が現に存在していた時か「滅度」、「肉体の死」の後、もし、この法を聞く事が有ったら、皆すでに仏道を成就している。
未来の諸世尊は、その(人)数が量り知れない。
この(未来の)諸如来達もまた、方便して仏法を説く。
一切の諸如来は、量り知れないほど無数の「方便」、「便宜的な方法」で、諸々の「衆生」、「生者」を、仏土へ渡して解脱させて、仏の「無漏智」へ入らせる。

もし、仏法を聞く者がいれば、仏に成らない人は一人もいない。(仏法を聞く耳が有れば、仏に成れる。)
諸仏の本(もと)よりの誓願とは、あまねく「衆生」、「生者」にもまた同じく私の修行している仏道を得させたいと欲する事なのである。
未来の来世の諸仏は、幾百、幾千、幾億の無数の諸々の仏法への門を説くといえども、その実、一(仏)乗だけなのである。
諸仏、両足尊は「『法』、『物』は常に『無(自)性』、『空(くう)』である」と知っている。仏の種は縁によって起こる。
このため、(仏は、)「一(仏)乗」を説く。
この法は法の位に住んでいる。
世間の相は「常住」、「不変」である。
導師は、道場で、知り終わると、方便して、(仏法を)説く。
天人、人によって供養されている、その(人)数が「恒(河)沙のようである」、「ガンジス川の砂のように無数である」、現在の十方の仏もまた、世間に出現して、「衆生」、「生者」を安らかに穏やかにさせるため、このような仏法を説く。
(仏は、真の)第一の「寂滅」を知っている。(そのため、)方便する力で、
種々の道を示すといえども、その実、「(一)仏乗」だけなのである。
(仏は、)「衆生」、「生者」の、諸々の行い、心の奥深くの「所念」、「思考」、過去に身につけた業、欲、性質、精進する力、智慧などの諸々の能力の利発さ、または、鈍さを知っていて、種々の因縁、譬喩、言葉で、相手に応じて、方便して、(仏法を)説く。
今の私(、釈迦牟尼仏)もまた、同じなのである。
(私、釈迦牟尼仏も、)「衆生」、「生者」を安らかに穏やかにさせるため、
種々の仏法への門によって、仏道を示す。
私(、釈迦牟尼仏)は、智(慧)力で、「衆生」、「生者」の、性質、欲を知って、方便して、「諸法」、「全てのもの」を説いて、皆に喜びを得させる。
舎利弗よ、
まさに、知るべきである。
私(、釈迦牟尼仏)が「仏眼」で見ると、「六道」の「衆生」、「生者」は、貧窮し、「福慧」、「幸福をもたらす徳と智慧」が無く、生死の険しい道へ入ってしまい、苦しみを相続して不断で、犛牛(ヤク)が尾を愛するように
「五欲」、「五感の欲望」に深く執着してしまい、貪欲な執着で自身を隠蔽してしまい、心が盲目で見る目が無く、大勢の仏や苦しみを断つ仏法を求めず、諸々の邪悪な見解に深く入ってしまい、苦しみで苦しみを捨てようと欲してしまう。

私(、釈迦牟尼仏)は、この衆生のために、大いなる慈悲の心を起こして、最初は、道場に坐して樹を観たり、「経行したり」、「坐禅の合間に歩いたり」して、二十一日間、このような事を思惟した。
「
私(、釈迦牟尼仏)の得ている智慧は微細で絶妙で最も第一である。
『衆生』、『生者』は、智慧などの諸々の能力が鈍(にぶ)くて、快楽に執着して、無知で心が盲目である。
このような人等の類(たぐい)を、どうしたら、仏土へ渡す事が可能なのか？
」
その時、諸々の梵天王、諸々の帝釈天、(護世)四天王、大自在天、他の諸々の天人達、百千万の眷属は、恭しく敬って、合掌して礼して、私(、釈迦牟尼仏)の「転法輪」、「説法」を請い願った。
私(、釈迦牟尼仏)は、自ら、このように思惟した。
「
もし、ただ仏乗をほめたたえても、『衆生』、『生者』は、苦しみに沈没していて、この仏法を信じる事ができないだろう。
(生者は、)仏法を破って信じないせいで、『三悪道』、『地獄、餓鬼、畜生』へ堕ちてしまうだろう。
私(、釈迦牟尼仏)は、むしろ仏法を説かないで、早く涅槃へ入ろう。
」
(しかし、)すぐに、(このように思い直した。)
「過去の仏の行い、方便する力を思えば、私(、釈迦牟尼仏)は、今、得ている仏道も、まさに、三乗に分けて説くべきである」
このように思惟した時、十方の仏が、皆、現れて、「梵音」、「仏の妙なる声」で私(、釈迦牟尼仏)を慰めて言い聞かせた。
「
善きかな、
『釈迦文』、『釈迦牟尼』、第一の導師よ、
この無上の仏法を得て、諸々の一切の仏に従って、方便する力を用いようとするのは。
私達(、十方の諸仏)もまた皆、最も妙なる第一の仏法を得て、諸々の『衆生類』、『生者』の為に、(仏乗を三つに)分別して三乗と説いている。
智慧が矮小な人は、矮小な『法』、『もの』を願って、自身が仏に成れる事を信じない。
このため、『方便』、『便宜的な方法』で、分別して諸々の『果』、『結果』を説いている。

(しかし、)三乗と説いているといえども、ただ菩薩を教えるためなのである。
」
舎利弗よ、
まさに、知るべきである。
私(、釈迦牟尼仏)は、聖獅子、仏の奥深い清浄な微細で絶妙な音を聞いて喜んで、「南無、仏」と言った。
また、このように、思った。
「
私(、釈迦牟尼仏)は、『(五)濁悪世』、『悪い時代』に出現している。
諸仏が説いているように、私(、釈迦牟尼仏)もまた諸仏に従って行おう。
」
(私、釈迦牟尼仏は、)この事について思惟し終わると、「波羅奈」へ趣いたのである。
(厳密には、)「諸法」、「全てのもの」の寂滅の相は言葉で言い表す事は不可能である。
(そのため、「波羅奈」で、私、釈迦牟尼仏は、)方便する力で、「五比丘」の為に、仏法を説いた。
これを「転法輪」と名づけている。
それから、「涅槃」、「阿羅漢」、「法」、「僧」という区別する名前が有るのである。
遥か昔の劫から今まで、涅槃の法をほめたたえて示して「生死の苦しみを永遠に無くし尽くす(事ができる)」と私(、釈迦牟尼仏)は常に説いている。
舎利弗よ、
まさに、知るべきである。
私(、釈迦牟尼仏)には、仏の弟子、等の仏道を志して求める者が、幾千、幾万、幾億の量り知れないほど無数にいて、皆、恭しく敬う心で仏の所へ到来しているが、かつて諸仏に従って「方便」、「便宜的な方法」で説かれた仏法を聞いた事が有るのが、見えている。
私(、釈迦牟尼仏)は、このように思った。
「
如来が世に出現する理由は、仏の智慧を説くためなのである。
今が、まさに、その時なのである。
」
舎利弗よ、
まさに、知るべきである。

智慧などの能力が鈍(にぶ)くて矮小な人、相に執着し思い上がっている者には、この仏法を信じる事は不可能なのである。
今、私(、釈迦牟尼仏)は、喜んで、畏れる事無く、諸々の菩薩の中で、正直に、「方便」、「便宜的な方法」を捨てて、無上の仏道を説いている。
菩薩は、この法を聞いて、疑いという網を、皆すでに除いている。
千二百人の阿羅漢が皆、まさに、仏に成る。
「三世の」、「過去、現在、未来の」諸仏の説法の儀式のように、私(、釈迦牟尼仏)もまた、今、このように、(三乗に)分別しないで仏法を説いている。
諸仏の世の出現には、会うのが、とても難しい。
たとえ、諸仏が世に出現しても、この法を説くのは、また、難しい。
量り知れないほど無数の劫で、この法を聞くのは、また、難しい。
この法を聴く事ができた者に、会うのは、また、難しい。
例えば、優曇華は、一切の者達が皆、愛して開花に出会えるのを願うが、天人でも開花に出会えるのは稀有で、その時々に一度しか出現しないような物なのである。
仏法を聞いて喜んで、一言でも発して、ほめたたえれば、一切の「三世の」、「過去、現在、未来の」仏を既に供養した事に成るのである。
このような人は、優曇華を超えるほど、とても稀有な存在なのである。
あなた達は疑うなかれ。
私(、釈迦牟尼仏)は「諸法」、「全てのもの」の王なのである。
あまねく諸々の大衆に告げる。
「一(仏)乗」である仏道だけで諸々の菩薩を教化しているのである。
(実は、)声聞の弟子はいないのである。(声聞と独覚は実は既に菩薩の一員なのである。声聞と独覚は菩薩として仏に成る事を目指す必要が有る。)
あなた達、舎利弗、声聞、菩薩よ、
まさに、知るべきである。
この妙なる法は諸仏の重要な秘密なのである。
「五濁悪世」で、諸々の欲に、願って執着してしまう。
このような「衆生」、「生者」は、終に、仏道を求める事が無いのである。
「当来世の」、「未来の」悪人は、仏が「一(仏)乗」を説いたのを聞いて、迷い惑ってしまって、信じて受け入れないで、仏法を破ってしまって、
「(三)悪道」、「地獄、餓鬼、畜生」へ堕ちてしまう。
恥じ入っていて、清浄で、仏道を志して求める者がいるが、まさに、このような者達の為に、広く「一仏乗」をほめたたえるのである。
舎利弗よ、
まさに、知るべきである。

諸仏の仏法は、このように、幾万、幾億の「方便」、「便宜的な方法」によって、相手に応じて説かれているのである。
それを習って学んでいない者は、それを明らかに「了解」、「理解」できないのである。
あなた達は既に、諸仏、世の師が相手に応じて方便している事を知っている。
諸々の疑いや惑いを無くして、心に大いなる喜びを生じさせて、自ら、まさに、仏に成れる、と知りなさい。

譬喩品

その時、舎利弗は、心が踊躍して歓喜して、起立して、合掌して、釈迦牟尼仏の尊顔を仰ぎ見て、釈迦牟尼仏に言った。

今、世尊(、釈迦牟尼仏)より、この「法音」、「説法」を聞いて、心が踊躍を懐き未曾有を得ています。
理由は何か？　(と言うと、)
私(、舎利弗)は、
昔、釈迦牟尼仏より、このような法を聞いて、
諸菩薩が「受記して」、「仏に成る予言を受けて」、「作仏する」、「仏に成る」のを見て、
「しかし、私達は、このような事に、あずかれない」と(思って)、
自ら感じて心をひどく痛めていました。
「如来(、仏)の量り知れない知見を失ってしまう」と(思って)。
世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
私(、舎利弗)は、常に、山林で、樹の下で、独りで処して、坐禅したり坐禅の合間に歩行したりして、このように思っていました。
私達も、同じく、「法性」に入っているが、
どうして、如来(、釈迦牟尼仏)は、「小乗法」、「中途半端の法」で、仏土へ渡して救済したと見ているのか？　と。

(しかし、)これは、私達の咎でした。世尊(、釈迦牟尼仏)の落ち度ではありませんでした。
どういう事か？　(と言うと、)
もし、私達が、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を成就する原因である所の説を待てば、必ず「大乗」、「真の完全な法」によって、仏土へ渡って解脱する事を得ます。
しかし、私達は、「方便」、「便宜的な方法」による「随宜の」、「相手に応じた」、所説を理解できませんでした。
(しかし、)初めて仏法を聞いて、幸運にも、(仏法を、)信じて受け入れて、「思惟して」、「思考して」、証を取ることができました。
世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
私(、舎利弗)は、昔から、終日、夜通し、常に、自分を厳しく責めていました。

しかし、今、釈迦牟尼仏より、未だ聞いたことが無かった所の未曾有の法を聞いて、諸々の疑いや後悔を断つことができて、身心が「泰然として」、「落ち着いて不動に成って」、快適に成って、安穏となることを得ました。
今日、知ることができました。
私達は、仏の口からの智慧の言葉により生じた、法の教化により生じた、真の仏の子であるし、
仏法の分け前を得ている。と。

その時、舎利弗は、くり返し、この意義を説きたいと欲して、詩で説いて言った。

私(、舎利弗)は、この「法音」、「説法」を聞いて、(心が)未曾有に成ることを得て、心に大いなる歓喜を懐き、疑いという網(あみ)を全て既に除去できました。
昔から、釈迦牟尼仏の教えを被(こうむ)って、「大乗」、「真の完全な法」を失っていませんでした。
「仏音」、「釈迦牟尼仏の説法」は、とても希有で、「衆生」、「生者」の悩みを除去することが可能です。
私(、舎利弗)は、
「漏」、「煩悩」を無くし尽くすことを既にでき得ていますが、
釈迦牟尼仏の説法を聞いて、また更に、憂い悩みを除去できました。
私(、舎利弗)は、山谷に処したり、林の樹の下にいたりして、坐禅したり坐禅の合間に歩行したりして、常に、このような事を思考していました。
ああっ！　深く自身を責める！
どうして自身をだましているのか？
私達も、また、仏の子で、同じく「無漏法」、「煩悩の無い境地の法」に入っている。
(しかし、)未来に、無上の「道」、「真理」を演説することが不可能である。
仏の金色の相、仏の三十二相、仏の十力、諸々の解脱は、同じく共に、唯一の法の中に有る。しかし、私達は、これらの事を得ていない。
仏の妙なる八十種好、仏の徳である十八不共法、これらのような功徳を、しかし、私(、舎利弗)は、全て、既に、失ってしまっている。

私(、舎利弗)は、独りで坐禅の合間に歩行している時に、釈迦牟尼仏が大衆と共にいるのを見て、
釈迦牟尼仏の名声が十方に満ちているのを聞いて、

釈迦牟尼仏が広く「衆生」、「生者」に「饒益している」、「利益をもたらしている」のを見聞きして、
このように思っていました。
(私、舎利弗は、)このような利点(、徳)を失ってしまっている。
私(、舎利弗)は、自身をだましている。と。

私(、舎利弗)は、常に、日夜に、このように思っていて、
世尊(、釈迦牟尼仏)に「(私、舎利弗は、仏の徳などを)失ってしまっているのか？　失っていないのか？」と質問したいと欲していました。
私(、舎利弗)は常に、世尊(、釈迦牟尼仏)が諸々の菩薩を称讃しているのを見て、日夜、このような事を思っていました。
(私、舎利弗が)今、釈迦牟尼仏の言葉を聞いておりますと、「随宜に」、「相手に応じて」法を説かれています。
「無漏」、「煩悩の無い境地」は、思考によって推測するのは難しいです。
(仏法は、)「衆生」、「生者」を「道場」、「修行」に至らせます。
私(、舎利弗)は、本(もと)は、邪悪な見解に執着してしまって、諸々のバラモンの師と成ってしまっていました。
世尊(、釈迦牟尼仏)は、私(、舎利弗)の心を知って、(私、舎利弗を)邪悪から抜け出させて、「涅槃」、「寂静の無上の境地」を説きました。
(そのため、)私(、舎利弗)は、邪悪な見解をことごとく除去して、空(くう)の法で証を得ました。
(私、舎利弗は、)その時、心の中で、自ら、このように思いました。
「滅度」、「仏の悟りの境地」に至ることができ得た。と。

しかし、(私、舎利弗は、)今、このように自覚しています。
これ(、現在の境地)は、真実の「滅度」、「仏の悟りの境地」ではない。と。

もし(私、舎利弗が)仏に成ることができ得た時は、三十二相を「具足して」、「十分に備えて」、天人、夜叉達、龍神などが恭しく敬ってくれるはずです。
その時、思うべきです。
永遠に余すこと無く悪を滅ぼし尽くせた。と。

釈迦牟尼仏は、「大衆」、「集まっている者達」の中で、「私(達)は、まさに仏に成る」と説いてくれました。
このような「法音」、「説法」を聞いて、疑いや後悔をことごとく既に除去できました。

釈迦牟尼仏の所説(、法華経)を初めて聞いたときは、心中で大いに驚いて
疑ってしまいました。
魔が釈迦牟尼仏の姿に変身して、私の心を悩まし乱しているのではないか？
と。(しかし、)

釈迦牟尼仏は、種々の縁、譬喩、巧みな言説で、(私の、)その心を海のよう
に安心させてくれました。
私(、舎利弗)は、(法華経を)聞いて、疑いという網(あみ)を断てました。

釈迦牟尼仏は、このように説きました。
過去の世の、量り知れないほど無数の、「滅度した」、「肉体が死んだ」仏
達も、「方便」、「便宜的な方法」に、やすんじてから、また、皆、この法(、
法華経)を説いた。と。
現在や未来の仏達も、その数が量り知れないほど無数であるが、また、諸々
の「方便」、「便宜的な方法」によってから、このような法(、法華経)を演
説する。と。

今、世尊(、釈迦牟尼仏)も、生まれてから、出家して仏道を会得して「法輪
を転じて」、「法を説いて」から、また、方便によってから、(法華経を)説
きました。

世尊(、釈迦牟尼仏)は、真実の「道」、「真理」(、法華経)を説きました。
「波旬」、「魔」には、このような事(、法華経を説く事)は無いです。
このため、私(、舎利弗)は、確定して、このように知ることができました。
魔が釈迦牟尼仏の姿に変身して(法華経を説いて)いるのではない。と。

私(、舎利弗)は、疑いという網(あみ)に堕ちてしまっていたために、このよ
うに思ってしまっていたのです。
(法華経は、)魔の所説ではないか？　と。

釈迦牟尼仏の柔軟な説法、深遠に、とても微細に絶妙に演説された清浄な法
を聞いて、私(、舎利弗)は、心に、大いなる歓喜が生じて、疑いと後悔を永
遠に既になくし尽くすことができて、真実の智慧の中に安住できました。

私(、舎利弗)は、必ず、まさに、仏に成って、天人に敬われるようになって、
「無上の法輪を転じて」、「無上の法を説いて」、諸々の菩薩を教化します。

その時、釈迦牟尼仏は、舎利弗に、このように告げた。

私(、釈迦牟尼仏)は、今、天人、人、出家者、バラモンなど集まっている者達の中で、説いている。
私(、釈迦牟尼仏)は、昔、かつて、二兆人の仏達の所で、無上の仏道で、あなた(、舎利弗)を常に教化した。
あなた(、舎利弗)も、また、「長夜」、「輪廻転生」で、私(、釈迦牟尼仏)に従って、教えを受けて学んだ。
私(、釈迦牟尼仏)は、「方便」、「便宜的な方法」で、あなた(、舎利弗)を仏道に引き入れて導いたので、(あなた、舎利弗は)私(、釈迦牟尼仏)の法の中に生じた。
舎利弗よ、
私(、釈迦牟尼仏)は、昔、あなた(、舎利弗)に仏道を志させ願わせた。
あなた(、舎利弗)は、今(まで、)ことごとく(初心を)忘れてしまっていて、自ら、このように思ってしまっていた。
(私、舎利弗は、)既に「滅度」、「仏の悟りの境地」を会得している。と。

私(、釈迦牟尼仏)は、今、また、あなた(、舎利弗)に本(もと)からの願い、修行してきたことを思い出して欲しいので、諸々の声聞達に、「妙法蓮華」、「教菩薩法」、「仏所護念」という名前の、この「大乗経」を説いた。
舎利弗よ、
あなた(、舎利弗)は、未来の世で、無量の無限の、(人には)思考不可能なほど長い劫を過ぎてから、幾千、幾万、幾億の仏達に捧げものを捧げてから、正しい法をささげ持ってから、菩薩の行いの道を「具足して」、「十分に備えて」から、まさに、仏に成ることができ得る。
(仏に成った舎利弗の)称号は、華光仏と言う。
(舎利弗の仏)国土の名称は、離垢である。(「離垢」は「汚れを離れている」を意味する。)
その仏国土は、平で、正しく、清浄で、荘厳に飾られていて、安穏で、豊かで、楽しい。
天人が、燃えるように盛んである。
瑠璃(るり)を地と成している。
八つの交わる道が有る。
黄金を縄となして、道の境界にして、その道の横に、はられている。

その道のかたわらには、各々、「七宝」、「七種類の宝」の「行樹」、「並木」が有って、常に華、果実が有る。
華光仏(、舎利弗)も、また、「三乗」で、「衆生」、「生者」を教化する。
舎利弗よ、
この華光仏が出現する時は、悪の世界ではないが、本(もと)からの願いなので、「三乗」の法を説く。
その華光仏の劫の名前を大宝荘厳と言う。
なぜ大宝荘厳と言う名前なのか？　(と言うと、)
その華光仏の仏国土の中では、菩薩を大いなる宝とするからである。
(華光仏の仏国土の、)この諸々の菩薩は、量り知れないほど無数、無限、(人には)思考不可能なほど無数、数えたり例えたりすることが及ばないほど無数である。仏の智力がなければ、知ることが可能な者はいない。
(華光仏の仏国土では、)歩行時に、宝の華が足を受け止めてくれる。
(華光仏の仏国土の、)この諸々の菩薩は、
初心者ではない。
皆、幾百、幾千、幾万、幾億の量り知れないほど無数の仏達の所で、久しく、徳の本(もと)となる善行を種のように植えてきている。
「梵行」、「修行」を清浄に修行してきている。
常に諸仏にほめられている。
常に仏の智慧を修行している。
大いなる神通力を「具足している」、「十分に備えている」。
「一切の諸法」、「全てのもの」の門を善く知っている。
性質は正直で、虚偽が無い。
志、意思が、堅固である。
このような菩薩が、その華光仏の仏国土に、充満している。
舎利弗よ、
華光仏の(仮の身の)寿命は、十二小劫で、王子と成っていて未だ仏ではない時の期間は除く。
その華光仏の仏国土の国民の寿命は、八小劫である。
華光仏は、十二小劫を過ぎてから、堅満菩薩に「授記して」、「仏に成る予言を授けて」、諸々の出家者に、このように告げる。
堅満菩薩が、次に、まさに、仏に成る。
(仏に成った堅満菩薩の)称号は、華足安行仏と言う。

華足安行仏の仏国土も、また、華光仏の仏国土と同様である。

舎利弗よ、
この華光仏の「滅度」、「仮の身の死」の後、
正法の期間は、三十二小劫である。
像法の期間も、また、三十二小劫である。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、くり返し、この意義を説きたいと欲して、詩で説いて言った。

舎利弗よ、
(舎利弗は、)来世で、「普智尊」、「仏」と成る。
(仏と成った舎利弗の)称号、名称は、華光仏と言う。
(華光仏は、)まさに、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡す。
(舎利弗は、仏に成るまで、)無数の仏達に捧げものを捧げてきていて、
菩薩の行い、仏の十力などの功徳を「具足している」、「十分に備えている」。
無上の道を証している。
量り知れないほど長い劫が過ぎ終わると、大宝(荘)厳という名前の劫になる。
(華光仏の仏国土、)世界の名前は、離垢である。
清浄で、瑕(きず)、汚れが無い。
瑠璃を地となしている。
黄金の縄が、その道の境界となっている。
「七宝」、「七種類の宝」の複雑な色の樹があって、常に華、果実が有る。
この華光仏の仏国土の諸々の菩薩は、
志、意思が常に堅固である。
神通の「波羅蜜」、「到達」を皆、既に、ことごとく「具足している」、「十分に備えている」。
無数の仏達の所で、善く、菩薩の道を学んできている。
これらの「大士」、「大いなる修行者」、「菩薩」は、華光仏に教化されている。
華光仏は、王子と成った時に、国を捨て、世俗の繁栄を捨て、最後身の菩薩として出家して、仏道を成就する。
華光仏(の仮の身)が(仏国土、)世界に存在する寿命は、十二小劫である。
その仏国土の国民の寿命は、八小劫である。
華光仏の「滅度」、「仮の身の死」の後、

正法は、(仏国土、)世界に存在する期間が三十二小劫で、広く諸々の「衆生」、「生者」を仏土へ渡す。
正法が姿を隠し終わると、像法となって、期間は三十二小劫で、華光仏の「舎利」、「遺骨」が広く流布して、天人は、あまねく華光仏の遺骨に捧げものを捧げる。
華光仏の行う事は皆、このようなのである。
「両足聖尊」、「仏」である華光仏は、無上に優れていて、比類無いのである。
華光仏とは、(未来の、)あなた(、舎利弗)なのである。
(舎利弗は、)まさしく、まさに、自ら、喜ぶべきである。

その時、「四部衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」と、天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽など集まっている者達は、舎利弗が仏前において仏に成る予言を受けたのを見て、
心に大いなる喜びが生じて、心が無量なほど踊躍して、各々、身につけていた上衣を脱いで、(上衣を)釈迦牟尼仏に捧げた。

「釈提桓因」、「帝釈天」と「梵天王」、「梵天」などと、無数の天人も、また、天の妙なる衣、天曼陀羅華、摩訶曼陀羅華などを(釈迦牟尼仏に)捧げた。

捧げて空中に浮かべた天の衣は、空中に留まって、自ら回転した。

諸々の天人達は、幾百、幾千、幾万種類もの「伎楽」、「音楽」を空中で同時に演奏して、多数の天の華を天から雨のように降らして、このように言った。

釈迦牟尼仏は、昔、波羅奈で、初めて、「法輪を転じた」、「法を説いた」。
(釈迦牟尼仏は、)今、また、無上の最大の「法輪を転じた」、「法を説いた」。

その時、諸々の天人達は、くり返し、この意義を説きたいと欲して、詩で説いて言った。

(釈迦牟尼仏は、)昔、波羅奈で、(「苦集滅道」という)「四諦」の「法輪を転じて」、「法を説いて」、分別して「諸法」、「全てのもの」の「五衆」、「五蘊」の生、滅を説きました。
(そして、釈迦牟尼仏は、)今、また、最も妙なる無上の大いなる「法輪を転じました」、「法を説きました」。
この法は、とても奥深いです。
信じることが可能な者は少ないでしょう。
私達(、諸々の天人達)は、昔から、しばしば、世尊(、釈迦牟尼仏)の説を聞いてきました。
(しかし、)このような深く妙なる「上法」、「優れた法」は未だかつて聞いたことがありませんでした。
世尊(、釈迦牟尼仏)が、この法を説いてくれたので、私達(、諸々の天人達)は皆、喜んでいます。
大いなる智慧がある舎利弗が、今、尊い「受記」、「仏に成る予言を受けること」を得ました。
私達(、諸々の天人達や、法華経を聞く耳がある者達)も、また、(舎利弗と)同様に、必ず、まさに、一切世間で最も尊い者である無上である、仏に成れます。
仏道を思考で推測するのは難しいです。
(仏道は、)「方便」、「便宜的な方法」の、「随宜の」、「相手に応じた」説です。
今の生や過去の生で私達(、諸々の天人達)が所有している幸福をもたらす善業と、仏に見(まみ)えた功徳をことごとく仏道に回向し(て自他が悟ることができるように助け)ます。

その時、舎利弗は、釈迦牟尼仏に言いました。

世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
私(、舎利弗)は、今は、更なる疑いや後悔は無いです。
釈迦牟尼仏の前で、親しく、「受記」、「仏に成る予言を受けること」を得ました。
この諸々の千二百人の心が自在な者達(、阿羅漢達)は、昔、「学地」、「学ぶことがいまだある境地」にいました。
釈迦牟尼仏は、(昔、阿羅漢達を)常に教化して言いました。

私、釈迦牟尼仏の法によって、「生老病死」を離れることが可能であるし、「涅槃」、「寂静の無上の境地」を「究竟する」、「究める」ことが可能である。

これらの「(有)学」や「無学」の段階の人達も、また、各自、(誤った)「我見」、「私見」と(誤った)「有無」、「存在と無」の見解などを離れることで「涅槃」、「寂静の無上の境地」を会得したと(誤って)思っています。
しかし、今、世尊(、釈迦牟尼仏)の前で、未だ聞いたことがなかった所を聞いて、皆、疑惑に堕ちてしまっています。
(しかし、実は、疑惑は、真理を知る、きっかけとして、)善いことです。
世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
願わくば、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」のために、その「因縁」、「理由」を説いて、疑いや後悔から離れさせてあげてください。

その時、釈迦牟尼仏は、舎利弗に告げた。

私(、釈迦牟尼仏)は、先ほど、言わなかったか？　いいえ！　言った！
諸仏が種々の因縁、譬喩、「言辞」、「言葉遣い」、「方便」、「便宜的な方法」で法を説くのは皆、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」のためではないか？　はい！　「無上普遍正覚」のためである！
この諸仏の所説は皆、菩薩を教化するためのものなのである。(声聞と独覚も実は菩薩の一員なのである。)
しかも、舎利弗よ、今、まさに、また、例え話で、さらに、この意義を明らかにしよう。
諸々の智慧が有る者は、例え話で、理解することができ得る。
舎利弗よ、
仮に、ある国の、ある地方の、ある集落に、大金持ちがいるとする。
(大金持ちは、)その年を取って行っていて、衰えて行っている。
財産、富は量り知れないほど無数である。
「田宅」、「家と土地」と諸々の「僮僕」、「少年の下僕」を多数、有している。
その家は、広大で、門が一つだけ有る。
百人、二百人、または、五百人の多数の諸々の人達が、その家の中にいる。
その高く立派な家は、古くて老朽化して、牆壁が崩落して、「柱根」、「柱の基礎」が腐敗して、(要となる)梁(はり)、棟(むね)が傾いて危険である。
外縁部に、同時に、たちまち火が起こって、家を焼いている。

十人、二十人、あるいは、三十人に至る、金持ちの諸々の子達は、この家の中にいる。
金持ちは、四方から起こった、この大火事を見て、大いに驚き怖れて、このように思った。
私(、金持ち)は、この焼かれている家の門から安穏として脱出することができ得る。
しかし、諸々の子達は、火事の家の中で、戯れることを楽しんで執着して、(火事を)覚知できていないし、驚き怖れていない。
火が来て、身に迫って、自己が切に苦しんで痛くても、心は、うれえないで、いとわないで、(火事の家を)脱出しようと思うことを求めない。

舎利弗よ、
この金持ちは、このように思った。

私(、金持ち)の身、手には力が有って、(子達の)衣のすそを引っぱって、または、いくつかの案によって、まさに、(火事の)家から、この子達を脱出させるべきである。

(金持ちは、)また、さらに、思った。

この家は、門が一つだけで、狭くて細い。
諸々の子達は、幼稚で、「識」、「理解」が未だ無くて、戯れを恋い慕って執着して、もしかしたら、火に焼かれる羽目に陥ってしまうかもしれない。
私(、金持ち)は、まさに、子達のために、おそろしい事、この家が既に焼かれている事を説いて、(火事の家から)速やかに脱出するべき時である事を説いて、火に焼かれて害を受けないようにさせよう。

(金持ちは、)このように思い終わると、思った通りに、全てを、諸々の子達に告げた。
あなた達(、子達)よ、速やかに脱出しなさい。

父(である金持ち)は、(子達を)思いやって、善い巧みな言葉で、勧誘して、諭(さと)した。
しかし、諸々の子達は、戯れを楽しんで執着して、(父の言葉に)従わないで、信じて受け入れないで、驚かないで、畏(おそ)れないで、(火事の家を)脱出しようと思わなかった。

また、(子達は、)火とは何か？　家とは何か？　どうして失うとなすのか？と知らず、ただ、右へ左へ、さまよって奔走して、戯れて、父を見て止(や)まなかった。

その時、金持ちは、このように思った。

この家は既に大きな火に焼かれている。
私(、金持ち)と諸々の子達は、もし(火事の家を)脱出しない時は、必ず、焼かれてしまう。
私(、金持ち)は、今、まさに、「方便」、「便宜的な方法」を設けて、諸々の子達に、この害から免れることを得させよう。

父(である金持ち)は、諸々の子達が優先して心で各々好む所の物である種々の珍しい玩具(おもちゃ)、珍しい物、心情で必ず楽しんで愛着する所の物を知ることにした。

そして、(金持ちは、子達に)告げて、このように言った。

あなた達が好む所の物で、希有で、得るのが難しくて、あなた達が、もし取らなければ、後で、必ず、憂えて後悔するような、種々の羊車、鹿車、牛車が、今、門の外にあって、それらで遊び戯れるべきである。
あなた達、この火事の家を、まさしく、速やかに、脱出してくるべきである。
あなた達が欲する所に従って、皆、まさに、あなた達に与えよう。

その時、諸々の子達は、父の所説の珍しい玩具について聞くと、(自身の、)その願いに適うので、各々の心は勇猛で鋭敏に成って、相互に押しのけ合って、競って走り合って、競争して火事の家を脱出した。

この時、金持ちは、諸々の子達が安穏として(火事の家を)脱出することができ得て皆「四衢」、「十字路」の道の中の露地に坐って障害が無いのを見て、(金持ちの、)その心は泰然として歓喜して踊躍した。

その時、諸々の子達は、各々、父に言った。

父よ、先ほど許してくれた、玩具の羊車、鹿車、牛車を願わくば、今、与えてください。

舎利弗よ、

その時、金持ちは、諸々の子達の各々に、等しく、同一の大いなる車を与えた。
その車は、
高く、広い。
多数の宝で荘厳に組み合わされている。
「欄楯」、「柵」が、めぐらされている。
四面には鈴が懸けられている。
また、その(車の)上には、「幢旛」と「天蓋」が張られている。
また、この車は、珍しい多数の宝の組み合わせで、荘厳に飾られている。
宝の縄が絡(から)んでいる。
諸々の華の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」が垂らされている。
「綩」、「赤い布」と「綖」、「黒い布で包まれた正方形の板」が重ねて敷かれている。
赤い枕が安置されている。
皮膚の色が綺麗な、体の形が美しい好い、大きな筋力が有る、歩行が正しい、風のように速い、白い牛が車を引く。
また、多数の従僕が、この車のそばで仕えて護衛する。

(白い牛の車を与えた)理由は何か？　(と言うと、)

この金持ちは、財産、富が量り知れないほど無数で、種々の宝庫、蔵が、ことごとく皆、(宝で)みちあふれていたので、このように思った。

私の財宝は、無限である。
まさに、劣った車を諸々の子達に与えるべきではない。
今、これらの幼子は皆、私の子である。愛には、偏(かたよ)りが無い。
私には、このように「七宝」、「七種類の宝」の大いなる車があって、その(車の)数は量り知れないほど無数で、まさに、平等な(愛の)心で、各々(の幼子)に、この車を与えよう。
差別は、よくない。
理由は、何か？　(と言うと、)
私の、この車を一国(の国民の皆)に、あまねく与えても、なお、不足しない。
どうして、諸々の(幼)子達に与えないことがあるだろうか？　いいえ！
諸々の(幼)子達に与える！

この時、諸々の子達は、各々、大いなる車に乗って、(心が)未曾有になることを得たが、本(もと)の望んでいた所の物ではなかった。

舎利弗よ、
あなたは、どう思うか？
この金持ちは、諸々の子達に、等しく、珍しい宝の大いなる車を与えた。
「虚妄」、「空虚で妄りなこと」であるのか？　「空虚で妄りなこと」ではないのか？

舎利弗は、言った。
いいえ。(「空虚で妄りなこと」ではないです。)
世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
この金持ちが、諸々の子達に火事という災難を免れることを得させて身の命を保全させただけでも、「虚妄」、「空虚で妄りなこと」ではないのです。
なぜか？
もし身の命を保全すれば、「(身の命という)好い玩具を既に得た」となすからです。
まして、また、「方便」、「便宜的な方法」で、火事の家から、この子達を抜け出させて(苦しみから)救済しています。
世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
もし、金持ちが、最も小さなものである(羊)車、一台すら(幼子に)与えなくても、なお、「虚妄」、「空虚で妄りなこと」ではないのです。
なぜか？
金持ちは、先に、このように思いました。
私(、父である金持ち)は、「方便」、「便宜的な方法」で、子に脱出させることを得させよう。と。

このため、「虚妄」、「空虚で妄りなこと」ではないのです。
まして、金持ちは、財産、富が量り知れないほど無数であると自ら知っていて、諸々の子達に利益をもたらそうと欲して、大いなる車を等しく与えました。

釈迦牟尼仏は、舎利弗に告げました。

善いかな。

善いかな。
あなた(、舎利弗)の言葉は。
舎利弗よ、
如来(、仏)も、また、同様なのである。
仏は、
一切の「世間」、「世界」の父となっている。
諸々のおそれ、衰え、悩み、うれい、(心や智慧の)無明、暗さを永遠に余すこと無くなくし尽くしている。
無量の、知見、力、畏れる所が無いことをことごとく成就している。
大いなる神通力、および、知力を有している。
「方便」、「便宜的な方法」、智慧の「波羅蜜」、「到達」、大いなる思いやりを「具足している」、「十分に備えている」。
常に怠ること無く「善事」、「善行」を探求している。
一切のものに利益をもたらしている。
古くて老朽化している、火事の家である三界に(人として)生まれて、「衆生」、「生者」を「生老病死」、憂い悲しみ苦悩、愚かさ、(心や智慧の)暗さ、「三毒」の火から仏土へ渡すために、教化して、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得させる。

諸々の「衆生」、「生者」を見ると、
「衆生」、「生者」は、
「生老病死」、憂い悲しみ苦悩に焼かれ煮られている。
また、財産や利益への(五感への)「五欲」のせいで、種々の苦しみを受けている。
また、貪欲に執着して追い求めるせいで、現在では多数の苦しみを受けて、(死)後には地獄、畜生、餓鬼の苦しみを受けている。
または、天上に生まれて、および、人の間に存在して、貧困で困窮して苦しんだり、愛するものとの離別に苦しんだり、怨み憎んでいる人と会って苦しんだり、これらのように種々に諸々に苦しんだりしている。
(しかし、)「衆生」、「生者」は、その苦しみの中に沈没して、この三界という火事の家に、歓喜して、遊び戯れて、覚知しないで、驚かないで怖れないで、また、いとわないで、解脱を求めないで、右へ左へ、さまよって奔走して、大いなる苦しみに出会っても、うれいとしない。

舎利弗よ、
仏は、これを見終わると、このように思った。

私(、仏)は、「衆生」、「生者」の父となっている。
まさに、その苦難から抜け出させて、無量、無限の仏の智慧による安楽を与えて、その安楽に遊戯させよう。

舎利弗よ、
如来(、仏)は、また、このように思った。

もし私(、仏)が、ただ神通力、および、知力によって、「方便」、「便宜的な方法」を捨てて、諸々の「衆生」、「生者」のために、如来(、仏)の知見、力、畏れる所が無いことを讃えたら、「衆生」、「生者」が仏土へ渡ることを得るのは不可能であろう。
理由は何か？　(と言うと、)
この諸々の「衆生」、「生者」は、「生老病死」、憂い悲しみ苦悩を未だ免れていないので、三界という火事の家に焼かれているからである。
どうして仏の智慧を理解可能であろうか？　いいえ！　仏の智慧を理解不能である！

舎利弗よ、
例え話の金持ちが、身、手に力を有していても、これを用いずに、ただ慇懃な「方便」、「便宜的な方法」につとめて、諸々の子達を火事の災難から救済して、その後、各々に珍しい宝の大いなる車を与えたように。
如来(、仏)も、また、同様なのである。
(仏は、)力、畏れる所が無いことを有していても、これを用いずに、ただ智慧、「方便」、「便宜的な方法」によって、三界という火事の家から「衆生」、「生者」を抜け出させて救済するために、「声聞乗、『辟支仏乗』、『独覚乗』、仏乗」という「三乗」(という三つの段階)を(別個のように)説くのである。

そして、(仏は、)このように言う。

あなた達、三界という火事の家を楽しんで留まることなかれ。
「麤弊な」、「粗末な」(、幻である「この世」の)「色声香味触」を貪ることなかれ。
もし貪欲に執着して愛着を生じてしまえば、焼かれるはめになってしまう。

あなた達、三界を速やかに脱出して、まさに、「声聞乗、『辟支仏乗』、『独覚乗』、仏乗」という「三乗」(という三つの段階)を会得しなさい。

私(、釈迦牟尼仏)は、今、あなた達のために、この事(、法華経)を保持させて任せた。
(釈迦牟尼仏は、)終に、空虚には(、だましたり)しなかったことになる。
あなた達、ただ、まさに、精進につとめて修行しなさい。

如来(、仏)は、この(「三乗」という)「方便」、「便宜的な方法」で、「衆生」、「生者」を勧誘して精進させる。

また、釈迦牟尼仏は、このように言った。

あなた達は、まさに、知るべきである。
この「三乗」という法は、全て、聖者によって称歎されるのであるし、自由自在で「繋がれない」、「束縛されない」し、すがりつく所が必要無い物である。
「乗」、「乗り物」、「『火宅』、『火事の家』の例え話の車」とは、「三乗」なのである。
「無漏の」、「煩悩の無い」、五根、五力、七覚支、八正道、禅定、解脱、三昧などによって、自ら楽しんで、無量の安穏、快楽を得ることができる。

舎利弗よ、

もし、ある「衆生」、「生者」が内に知性が有って、仏により、法を聞いて、信じて受け入れて、慇懃に精進して、三界を速やかに脱出したいと欲して、自ら「涅槃」、「寂静の無上の境地」を求めたら、
この人を「声聞乗」(、「声聞の段階の人」)と名づける。
例え話の諸々の子達が、羊車を求めて、「火宅」、「火事の家」を脱出するような物なのである。

もし、ある「衆生」、「生者」が、仏により、法を聞いて、信じて受け入れて、慇懃に精進して、「自然慧」、「自然に得られる智慧」を求めて、独りの善い寂静を楽しんで、「諸法」、「全てのもの」の「因縁」、「原因と繋がり」を深く知ったら、
この人を「辟支仏乗」(、「独覚の段階の人」)と名づける。

例え話の諸々の子達が、鹿車を求めて、「火宅」、「火事の家」を脱出するような物なのである。

もし、ある「衆生」、「生者」が、仏により、法を聞いて、信じて受け入れて、精進につとめて修行して、「一切智」、「一切の智慧」、「仏智」、「仏の智慧」、「自然慧」、「自然に得られる智慧」、「無師智」、「師がいなくても得られる知」、如来(、仏)の知見、力、畏れる所が無いことを求めて、量り知れないほど多数の「衆生」、「生者」を思いやって安楽にさせて、天人に利益をもたらして、一切のものを仏土へ渡して解脱させたら、この人を「大乗」(、「菩薩の段階の人」)と名づける。
菩薩は、この「大乗」を求めるので、「摩訶薩」、「大いなる(生)者」と名づける。
例え話の諸々の子達が、牛車を求めて、「火宅」、「火事の家」を脱出するような物なのである。

舎利弗よ、
例え話の金持ちは、諸々の子達が、安穏として「火宅」、「火事の家」を脱出することができ得て、畏れる必要が無い所に到達したのを見て、財産、富が量り知れないほど無数であることを自ら思って、大いなる車を諸々の子達に等しく与えた。
如来(、仏)も、また、同様なのである。
(如来、仏は、)
一切の「衆生」、「生者」の父となっている。
幾千人、幾億人の量り知れないほど多数の「衆生」、「生者」が、仏教という門によって、三界という苦しい、おそろしい危険な道を脱出して、「涅槃」、「煩悩が寂滅した境地」の安楽を得るのを見て、
その時、このように思った。

私(、仏)には、無量、無限の智慧、力、畏れる所が無いこと等の諸仏の「法」、「物」が有る。
この諸々の「衆生」、「生者」は皆、私(、仏)の子なのである。
「大乗」を等しく与えよう。
(正しい)人が独りで(孤立して)「滅度」、「死」を得ることが無いようにしよう。
(正しい人が)皆、如来(、仏)の「滅度」、「悟りの境地」で、この肉体を「滅度する」、「死ぬ」ようにさせよう。

この諸々の「衆生」、「生者」、三界からの脱出者に、諸仏の禅定、解脱などの娯楽の道具をことごとく与えよう。
(諸仏の禅定などは、)全て、唯一の相、唯一の種類で、聖者に称歎される所の物で、清浄な妙なる「第一の」、「無上の」安楽を生じることが可能である。

舎利弗よ、
例え話の金持ちが、最初は三種類の車で諸々の子達を誘惑して引き寄せて、その後、宝物で荘厳に飾られた、安穏な「第一の」、「無上の」、大いなる車だけを与えたように。
しかも、例え話の金持ちには、「虚妄の」、「空虚に妄りに、だました」、「咎」、「罪」が無いように。
如来(、仏)も、また、同様なのである。
(仏は、)「虚妄」、「空虚に妄りに、だますこと」が無い。
最初は「三乗」と説いて「衆生」、「生者」を仏道に引き入れて導いて、その後、「大乗」だけで、三界という「火事の家」から仏土へ渡して脱出させるのである。
なぜか？
如来(、仏)には、無量の智慧、力、畏れる所が無いこと、「諸法」、「全てのもの」の蔵が有って、一切の「衆生」、「生者」に「大乗」の法を与えることが可能で、受け取って無くし尽くすことが不可能なのである。
舎利弗よ、
このため、まさに、知るべきである。
諸仏は、「方便」、「便宜的な方法」の力のため、唯一の「仏乗」を三つ(の段階)に分別して(別個であるかのように)説くのである。

釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を説きたいと欲して、詩で説いて言った。

例えば、金持ちに一つの大きな家が有るような物なのである。
その家は、古くて、壊れて脆弱になっている。
「堂舎」、「大小の家の部分」が、危険性が高い。
「柱根」、「柱の基礎」は、壊れたり、老朽化したりしている。
(要となる)梁(はり)、棟(むね)は、傾斜している。
階段は、壊れている。
牆壁は、倒れたり、裂けたりしている。
泥の塗装は、はがれ落ちている。

草で編んだ建物の覆いは、壊れて落ちている。
椽、梠は、くいちがったり、抜けたりしている。
周囲の障壁は、屈曲している。
雑多な汚れが、充満している。
五百人の人がいて、その中に留まっている。

鵄(トンビ)、
梟(フクロウ)、
鵰(タカ)、
鷲(ワシ)、
烏(カラス)、
鵲(カササギ)、
鳩(ハト)、
鴿(ドバト)、
蚖(イモリ)、
蛇(ヘビ)、
蝮(マムシ)、
蠍(サソリ)、
蜈蚣(ムカデ)、
蚰蜒(ゲジゲジ)、
守宮(ヤモリ)、
百足(ムカデ)、
鼬(イタチ)、
貍(タヌキ)、
鼷(ハツカネズミ)、
鼠(ネズミ)、
といった諸々の悪い害獣、害虫が、縦横無尽に走りまわっている。
排泄物で臭い所は、汚物が、流出して、あふれている。
蜣蜋(クソムシ)といった諸々の害虫が、その上に集まっている。
狐(キツネ)、狼(オオカミ)、野干(ジャッカル)が、死体の骨、肉を咀嚼して、踏みにじって、かじって、狼藉している。
これによって、犬の群れが、競って来て、取り合って、飢えて弱って、恐れ合って、至る所で食べ物を求めて、闘争して、取って、押さえつけて、牙をむき出して、吠えている。
その家の恐怖、異変は、このようなのである。

至る所に、全て、「魑魅魍魎(ちみもうりょう)」、「化物」、(悪い)夜叉、悪い鬼がいて、人の肉を食べる。
有毒生物類、諸々の悪い害獣が、卵を孵(かえ)したり乳で育てたりして、子を生産して、各自、隠して護っている。
(悪い)夜叉達が、競って来て、争って、人を取って食って、既に食べ飽きると、悪心をとても熾烈にして、とても、おそるべき、闘争の音声を出す。
(悪い、)鬼の鳩槃荼(クンバンダ)は、(善い鬼神クンバンダもいる。)
硬い土に、うずくまっている。
ある時は、一尺、二尺、地を離れて、行き来して、めぐり、「縦逸して」、「放逸して」、たわむれている。(一尺は約三十センチメートル。)
犬の両足をつかんだり、(犬を)なぐって黙らせたり、足で(犬の)首を踏みしめて、犬を怖がらせて楽しんでいる。
また、諸々の(悪い)鬼がいる。
その身長は大きい。
裸で、黒く、痩せている。
常に、その家の中に留まっている。
気持ち悪い大声を発して、叫んで、食べ物(である人)を呼び求めている。
また、喉が針のような(悪い)鬼がいる。
また、頭が牛のような(悪い)鬼がいる。
人の肉か狗(イヌ)を食べる。
頭の髪が、蓬(ヨモギ)のように茫々に乱れている。
残忍、有害、凶悪、危険である。
飢え渇きに逼迫されている。
叫び、わめき、走りまわっている。
(悪い)夜叉、餓鬼、諸々の悪い害鳥、害獣は、飢えて、急いで四方に向かって、窓から窺(うかが)って覗(のぞ)き見ている。
このような諸々の災難は、量り知れないほど、おそろしい。

この老朽化した古い家は、一人の主に属している。
その人が、近くに、出かけた。
家を後にして未だ久しくない間に、たちまち四方から火が起こって、一時で同時に、その火は熾烈になった。
棟(むね)、梁(はり)、椽、柱が、爆発音をだして、震えて、裂けて、折れて、墜落した。
牆壁は、崩壊して倒れた。
諸々の(悪い)鬼神などは、声をあげて大絶叫した。

鵰(タカ)、鷲(ワシ)といった諸々の鳥、(悪い)鳩槃茶(クンバンダ)などは、あまねく、驚いて、おそれて、自ら家を出ることが不能である。
悪い害獣、有毒生物は、穴々に隠れた。
毘舎闍(ピシャーチャ)という(悪い)鬼も、また、その家の中にいて、幸福をもたらす功徳が少ないせいで、火に逼迫されて、共に残忍に殺害して、血を飲み、肉を食べている。
野干(ジャッカル)など、並びに、以前、死んだ諸々の大きい悪い害獣が競って来て、食べている。
臭い煙が蓬(ヨモギ)のように四方に充満して立ち込めている。
蜈蚣(ムカデ)、蚰蜒(ゲジゲジ)、毒蛇などが、火に焼かれて、争って穴から走って出ている。
(悪い、)鬼の鳩槃茶(クンバンダ)は、「随意に」、「思うがままに」、取って食べている。
また、諸々の餓鬼は、頭上で火が燃えて、飢え渇き、熱に悩まされて、あまねく驚いて、悶(もだえ)て、走っている。
この家は、このように、とても、おそるべき物なのである。
毒の害、火災といった多数の災難で、一つの災難だけではないのである。

この時、家主は、門の外にいて、ある人の言葉を立って聞いた。

あなた(、家主、金持ち)よ、
諸々の子達は、「先から」、「以前から」、遊び戯れているせいで、この家に来て入っていて、幼くて無知で、喜んで楽しんで執着してしまっている。

金持ちは、聞き終わると、驚いて、火事の家に入って、まさに、まさしく、救済して、焼かれないように害を受けないようにさせようと、諸々の子達に、次のように、告げて、諭(さと)して、説いた。

多数の災難。
悪い鬼。
有毒生物。
火災の蔓延。
多数の苦しみの、状況と、あいついで絶えないこと。
毒蛇。
蚖(イモリ)。
蝮(マムシ)。

および、諸々の(悪い)夜叉。
(悪い、)鬼の鳩槃荼(クンバンダ)。
野干(ジャッカル)。
狐(キツネ)。
狗(イヌ)。
鵰(タカ)。
鷲(ワシ)。
鵄(トンビ)。
梟(フクロウ)。
百足(ムカデ)の類(たぐい)。
飢え渇きの悩みが急激であること。
とても、おそるべきであること。
この家が苦難の場所であること。
まして、大火事が起こっていること。

諸々の子達は、無知で、父の教えを聞いてもなお、戯れを楽しんで執着して止(や)めなかった。

この時、金持ちは、このように思った。

諸々の子達は、このように、私(、金持ち)の愁い悩みをましてしまっている。
今、この家には、楽しむべき物は一つも無いのに。
しかし、諸々の子達は、戯れに溺れて、私(、金持ち)の教えを受け入れないので、まさに、火の害をうけてしまうであろう。

(金持ちは、)諸々の「方便」、「便宜的な方法」を設けようと思い、諸々の子達に告げた。

私(、金持ち)には、種々の珍しい玩具、妙なる宝の好い車、羊車、鹿車、大いなる牛の車が有って、今、門の外にある。
あなた達(、子達)よ、(火事の家から)出て来なさい。
私(、金持ち)は、あなた達(、子達)のために、この車をつくった。
「随意に」、「思うがままに」、楽しみなさい。
車でもって、遊び戯れなさい。

諸々の子達は、(金持ちによって)これらの諸々の車が説かれるのを聞いて、即座に、競争して、走って、(火事の家を)出て、諸々の苦難を離れた空(あ)き地に到達した。

金持ちは、子達が火事の家を出ることができ得て「四衢」、「十字路」にいるのを見て、「獅子座」、「仏の座」に坐って、自ら喜んで、言った。

私(、金持ち)は、今、喜んでいる。
この諸々の子達は、生育が、とても難しく、愚かで未熟で無知で、多数の諸々の有毒生物、おそるべき「魑魅(ちみ)」、「化物」、大火、猛烈な火が四方から同時に起こっている、危険な家に入ってしまっていた。
そして、この諸々の子達は、戯れを貪って楽しんでしまっていた。
私(、金持ち)は、この諸々の子達を既に救って、災難から脱出させることができ得た。
このため、皆、
私(、金持ち)は、今、喜んでいるのである。

その時、諸々の子達は、父が安らかに坐しているのを知って、皆、父の所へ行って、父に言った。

願わくば、私達に、前に許してくれた、三種類の宝の車を与えてください。
(父は、)「
諸々の子達よ、
(火事の家から)出てきなさい。
まさに、三種類の車は、あなた達の欲する所にかなう。
」(と言ってくれました。)
今が、まさに、この時です。
与えてください。

金持ちは、
大いに富んでいる。
宝庫には、多数の金、銀、瑠璃(るり)、硨磲(しゃこ)、碼碯(めのう)を所蔵している。
多数の宝物で、諸々の大いなる車を造った。
(車は、)
(多数の宝で)荘厳に組み合わされている。

(多数の宝物で)荘厳に飾られている。
「欄楯」、「柵」が、めぐらされている。
四面には鈴が懸けられている。
黄金の縄が絡(から)んでいる。
真珠の網が、その車の上に張られている。
黄金の華の諸々の「纓」、「紐(ひも)状の飾り」が所々に垂らされている。
多数の、模様や色が施された絹織物が、組み合わされて飾られて、めぐらされている。
柔軟な、絵が描かれた紐(ひも)で作られた敷物がある。
上質な妙なる繊細な、幾千、幾億の価値の、あざやかな白い、清潔な、毛織物の敷物が、その上を覆っている。
筋骨隆々で、力が強い、体の形が美しい好い、大いなる白い牛がいて、宝の車を引く。
多数の従者が、この車のそばで仕えて護衛する。

(父は、)この妙なる車を諸々の子に等しく与えた。

諸々の子達は、この時、歓喜して、心が踊躍して、この宝の車に乗って、四方をめぐって、戯れて、自由自在に障害無く喜んだ。

(私、釈迦牟尼仏は、)舎利弗に告げる。

私(、仏)も、また、同様なのである。

(仏は、)多数の聖者の中で最も尊い。
(仏は、)「世間」、「世界」の父である。
一切の「衆生」、「生者」は皆、私(、仏)の子である。
(「衆生」、「生者」は、)俗世の快楽に深く執着している。
(多数の「衆生」、「生者」は、)智慧、(正しい)心が無い。
三界は、安らぎが無くて、火事の家のようですらある。
多数の苦しみが、充満している。
とても、おそるべき物なのである。
常に、「生老病死」、うれいが有る。
これらの、火のような物が、熾烈で、休息することが無い。
如来(、仏)は、火事の家である三界を既に離れて、静かに、林や野に、安らかに、処している。

今、この三界は皆、私(、仏)の所有物なのである。
その三界の中の「衆生」、「生者」は、ことごとく、私(、仏)の子なのである。
今、ここ(、三界)は、諸々の災難が多く、私(、仏)一人だけが救って護ることが可能なのである。
(しかし、ありのままの真実を生者に)教えても、信じて受け入れない。
(なぜなら、生者は、)諸々の欲に染まって貪欲に深く執着しているからである。
このため、「方便」、「便宜的な方法」で、生者のために、「三乗」を説いて、諸々の「衆生」、「生者」に三界が苦しみであることを知らせて、三界という「世間」、「世界」を脱出する道を開示して演説するのである。
この諸々の子達は、もし心が定まれば、三明および六神通を「具足して」、「十分に備えて」、「縁覚」、「独覚」、不退転の菩薩となり得る。
あなた、舎利弗よ、
私(、仏)は、「衆生」、「生者」のために、この例え話によって、唯一の仏乗を説く。
あなた達は、もし、この話を信じて受け入れることが可能であれば、一切、皆、まさに、仏道を成就することができ得る。
この仏乗は、微細で絶妙で、清浄で、諸々の世界で第一で、無上で、仏に喜ばれる物で、一切の「衆生」、「生者」に称讃されて供養されて礼拝される物である。
幾千、幾億の量り知れないほど無数の諸々の力、解脱、禅定、智慧、および、仏の他の「法」、「物」は、この仏乗で、得られる。
諸々の子達に、日夜、劫のように長い間、常に、諸々の、菩薩乗、および、声聞乗、この宝の仏乗と遊戯させることを得させて、直(す)ぐに、「道場」、「修行」に至らせる。
このため、十方で、求めても、仏乗以外の乗は更に無いのである。ただし、仏の「方便」、「便宜的な方法」は除く。
(私、釈迦牟尼仏は、)舎利弗に告げる。
あなた、あなた達は、皆、私(、仏)の子である。
私(、仏)は、父である。
あなた達は、劫を重ねて、多数の苦しみに焼かれていたが、
私(、釈迦牟尼仏)は、皆、救済して、抜け出させて、三界を脱出させた。
私(、釈迦牟尼仏)は、「先に」、「以前」、「あなた達は『滅度した』、『仏の悟りの境地を得た』」と説いたが、

しかし、生死(をくり返す原因)をなくし尽くすことができただけで、実は、
「滅(度)していないのである」、「仏の悟りの境地を得ていないのである」。
今、まさに、なすべきなのは、仏の智慧(を得ること)だけなのである。
もし、この集まっている者達の中に、菩薩(の段階の生者)がいるのであれば、
諸仏の真実の法を一心に聴くことが可能である。
諸仏は、「方便」、「便宜的な方法」で教化するといえども、教化された
「衆生」、「生者」は皆、菩薩(の段階の者)なのである。

もし人が智慧が未熟で、欲に深く執着して愛着していれば、
この人達のために、(仏は、)「苦諦」を説く。
「衆生」、「生者」の心は、喜んで、未曾有になることを得る。
仏の説である「苦諦」は、真実と異なることが無い(、真実である)。

もし、ある「衆生」、「生者」が、苦しみの本(もと)を知らないで、苦しみの原因に深く執着して、(貪欲、執着を)一時も捨てることが不可能であれば、
この生者達のために、「方便」、「便宜的な方法」で、諸々の苦しみの原因(である執着、貪欲)を説いて言う。貪欲(、執着)を(苦しみの)本(もと)となす。

もし、貪欲(、執着)を滅ぼせば、すがりつくものが無くなって、諸々の苦しみを滅ぼし尽くすことができる。これを「第三諦」(、「滅諦」)と名づける。

「滅諦」のために、「八正道」、「道諦」を修行すれば、諸々の苦しみの束縛から離れることができる。これを(「道諦」、)「解脱」と名づける。

この人は、何で、解脱を得ているのか？
「虚妄」、「空虚で妄りなこと」を離れているだけなのに、「解脱」と名づけてしまって、「解脱」としてしまっている。
しかし、実は、(真実の)一切の解脱を未だ得ていないのである。
仏は、「この人は、実は、『滅度』、『仏の悟りの境地』を未だ得ていないのである」と説く。
(なぜなら、)この人は、無上の仏道を未だ会得していないからである。
私(、仏)は、(生者をこの生だけで)「滅度」、「仏の悟りの境地」に至らせようと思っていない。
私(、仏)は、法の王である。
(私、仏は、)法において、自由自在である。
(私、仏は、)「衆生」、「生者」を安穏にさせたいのである。

そのため、(私、仏は、)この世に出現するのである。
あなた、舎利弗よ、
私(、仏)の、この法の印は、世界に利益をもたらしたいと欲するために、説かれているのである。
所在地、めぐっている先で、(法華経を)妄りに説いて伝えるなかれ。
もし、ある聞いた者が、喜んで、頂戴して受持したら、まさに、知るべきである、この人は、「阿鞞跋致」、「仏に成ることが予定されている不退転の菩薩」である。と。
もし、この(法華)経の法を信じて受け入れた者がいれば、この人は過去の諸仏を既に、かつて見たことがあって、恭しく敬って、供養したことになるのである。
また、この(法華経の)法を聞いて、あなた(、舎利弗)の所説を信じることができた人がいれば、私(、釈迦牟尼仏)と、あなた(、舎利弗)、および、出家者、僧、並びに、諸々の菩薩を見たことに成るのである。
この法華経は、智慧深い者のために、説かれている。
理解が浅はかな者は、この法華経を聞いて、迷惑して、理解できない。
一切の声聞、および、「辟支仏」、「独覚」は、この法華経の中には、力が及ばないのである。
あなた、(智慧が最も優れている)舎利弗ですらなお、この法華経には、信じることによってのみ、入ることができ得たほどなのである。
まして、他の声聞も、信じることによってのみ、法華経に入ることができ得る！
他の声聞も、仏の話を信じたために、この法華経に従うことができたのである。自己の智慧によって法華経の分け前を得たわけではないのである。

また、舎利弗よ、

思い上がって、怠けて、「計我する」、「我見する」、「誤った私見に執着する」者に、この法華経を説くなかれ。
浅はかな、(五感への)五欲に深く執着している凡人は、聞いても、理解不能なので、この者のために、(法華経を)説くなかれ。

もし人が、この法華経を信じないで、悪口を言ったら、一切世間の、仏となるための種を断とうとしたことになってしまうのである。
また、人が法華経を不快に感じて顔をしかめて疑惑を懐けば、一切世間の、仏となるための種を断とうとしたことになってしまうのである。

あなた(、舎利弗)よ、まさに、(私、仏の)説を聴くべきである。

このような人達の罪の報い、
仏の存命中に、または、仏の肉体の死後に、
この(法華経の)ような経典の悪口を言ったり、
法華経を読んだり法華経を受持したりしている者を見て、見下したり、憎んだり、嫉妬したり、恨んだりしたら、
このような人達の罪の報いは、
あなた(、舎利弗)よ、今、聴くべきである、
このような人達は、命が終わったら、一劫もの長い間、無間地獄に入ることになってしまう。
一劫を過ぎても、更に、この無間地獄のような場所に生まれて、転々として、無数の劫に至ることになってしまう。
地獄から出られても、狗(イヌ)、野干(ジャッカル)のような動物的な者になってしまう。
その姿形は、禿げて、痩せて、赤黒く、皮膚病で人に触られて悩まされる。
また、人になれても、劣悪な下賤な場所に生まれて、常に、貧困で、飢え渇き、骨肉は干からびて、生きているときは激しい苦痛を受け、死んだときは(死体に)瓦や石を投げられる。
仏となる種を断とうとしたため、このような罪の報いを受けるのである。
もし馲駝(ラクダ)や驢馬(ロバ)に生まれても、身に常に重いものを負うはめになって、諸々に杖で叩かれて、ただ飲食物のことだけを思って、他のものを知ることができない。
この法華経の悪口を言ったために、このような罪を得てしまったのである。
野干(ジャッカル)となって(人の)集落に来て入ったら、身体に皮膚病をわずらっているし片目が無いため、諸々の児童に叩かれて、諸々の苦痛を受けて、時には、死んでしまう。
(ジャッカルとして)死に終わると、更に大蛇の身を受けてしまう。
その姿形は、長く、大きく、五百由旬である。
耳が聞こえず、愚かで、足が無く、もがいて転ぶように腹をすって行くために諸々の小さな生物に食べられて、昼夜に苦しみを受けて休息できるときが無い。
この法華経の悪口を言ったために、このような罪を得てしまったのである。

もし、人になれても、

諸々の「根」、「能力」が、暗く鈍い。
(背などが、)短い。
(地位などが、)いやしい。
手足が動かない。
目が見えないし、耳が聞こえない。
背が曲がっている。
何か言っても、他人は信じてくれないし、受け入れてくれない。
口の息が常に臭い。
悪い鬼、悪い「魅」、「化物」に粘着されてしまう。
貧困で困窮する。
(地位などが)下賤なために、他人に、こき使われてしまう。
多病で、頭痛持ちで、痩せている。
頼れるものが無い。
他人に近づいても、他人は意に介しない。
もし所得が有っても、すぐに失ってしまう。
もし医術を修得して、正しい手順、方法で病を治そうとしても、更に他の病を増やしてしまうか、死に至らしめてしまう。
もし自身に病が有っても、治して救ってくれる人はいないし、良い薬を服用しても病の重さを劇的に増やしてしまう。
他人に反逆されたり、盗まれたり、脅されたりしてしまう。
これらの罪の報いが、横並びになって、災いをもたらす。
このような罪人は、長い間、諸々の聖者の王である仏、説法、教化に出会えない。
このような罪人は、常に、苦難がある場所に生まれて、狂って、聞く耳をもたず、心が乱れて、ガンジス河の砂の数のように長い間、仏法を聞くことができない。
生まれても、いつでも、耳が聞こえず、口がきけず、諸々の「根」、「能力」が備わっていない。
(死後は、)園、見晴らし台で遊ぶように、常に、地獄にいる。
(死後は、)自分の家のように、地獄以外の「悪道」にいる。
駝(ラクダ)、驢(ロバ)、猪(イノシシ)、狗(イヌ)が、その人達が行き着く場所である。
この法華経の悪口を言ったために、このような罪を得てしまっているのである。

人になれても、

耳が聞こえず、目が見えず、口がきけない。
貧困で困窮する。
諸々の衰えで自身を荘厳に飾るはめになる。
水腫(むくみ)、乾燥、頭痛、皮膚病、腫れといった病を衣服とするはめになる。
身が常に臭く、垢(あか)、汚れで汚れている。
「我見」、「誤った私見」に深く執着する。
怒りを増してしまう。
性欲が熾烈なほど盛んで、相手の動物を選ばないほどである。
この法華経の悪口を言ったために、このような罪を得てしまっているのである。

(私、釈迦牟尼仏は、)舎利弗に告げる。
この法華経の悪口を言う者の罪を、もし説いたら、劫を尽くしても、言い尽くすことができないほどなのである。
このため、私(、釈迦牟尼仏)は、あなた(、舎利弗)に告げる。
無知な人達の中で、この法華経を説くなかれ。

もし利発で智慧が明らかで博覧強記で仏道を求める者がいれば、このような人のために、(法華経を)説きなさい。
もし人が幾百、幾千、幾億の仏達に、かつて見(まみ)えて諸々の善の本(もと)となる善行を種のように植えて、信心深くて堅固ならば、このような人のために、(法華経を)説きなさい。
もし人が精進して常に修行して、思いやり深くて、身の命を惜しまなければ、このような人のために、(法華経を)説きなさい。
もし人が恭しく敬って、雑念が無くて、諸々の全ての愚かさを離れて、山の谷川に独りで処していれば、このような人のために、(法華経を)説きなさい。
また、舎利弗よ、
もし人が邪悪な師を捨てて、善知識を持つ人々に親しみ近づいているのを見たら、このような人のために、(法華経を)説きなさい。
もし仏の弟子が、清浄な光明に輝く宝玉のように清浄に戒を保持して、大乗経を求めているのを見たら、このような人のために、(法華経を)説きなさい。
もし人が怒らず、性質が正直で柔軟で、常に一切のものを思いやって、諸仏を恭しく敬っていれば、このような人のために、(法華経を)説きなさい。

もし仏の弟子が、集まっている者達の中で、清浄な心、種々の因縁、譬喩、「言辞」、「言葉遣い」で、障害を物ともせず、法を説いていれば、このような人のために、(法華経を)説きなさい。
もし出家者が、一切智のために、四方で法を求めて、大乗経を合掌して頂戴して受持して、大乗経の受持を楽しんで、大乗経以外の経を一つの詩すら受け入れなければ、このような人のために、(法華経を)説きなさい。
人が真心で「仏舎利」、「仏の遺骨」を求めて、このようにして大乗経を求めて、大乗経を既に頂戴して受持したら、大乗経以外の経を求めず、また、未だかつて外道の書籍を求めなければ、このような人のために、(法華経を)説きなさい。

(私、釈迦牟尼仏は、)舎利弗に告げる。

私(、仏)が、仏道を求める者の相を説いたら、劫を尽くしても、言い尽くすことができない。
これらのような人達は、法華経を信じて理解可能である。
あなた(、舎利弗)は、まさに、これらのような人達のために、妙法華経を説きなさい。

信解品

その時、「慧命」である須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連は、釈迦牟尼仏より、未曾有の法と、釈迦牟尼仏が舎利弗に「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」して仏に成る予言を授けたのを聞いて、希有な心が起きて、歓喜して、心が踊躍して、座より起立し、衣服を「偏袒右肩」に整え、右ひざを地に着けて、一心に合掌して、身をかがめて、恭しく敬って、釈迦牟尼仏の尊顔を仰ぎ見て、釈迦牟尼仏に言った。

私達は、僧の上位の座に居て、年長になって行って、自ら、このように思っていました。

「涅槃」、「寂静の無上の境地」を既に会得した。
務め、あたるべきものは、もう無い。

再び、精進して、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を求めていませんでした。

世尊(、釈迦牟尼仏)は、昔から、法を説いていて、既に久しいですが、
私達は、それらの時に、座にいても、身体が疲れてだるくなって、ただ、空(くう)、無相、無作を思っていただけでした。

菩薩の法で、神通に遊戯することや、
仏国土を清浄にすることや、
「衆生」、「生者」に仏道を成就させることを
心で、喜んだり、願ったりしていませんでした。

なぜか？

世尊(、釈迦牟尼仏)は、私達を三界から脱出させてくれて、「涅槃」、「寂静の無上の境地」の証を得させてくれました。

また、今では、私達は、既に年老いているので、
仏が菩薩に「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を教化することについて、

一念も、好んだり、願ったりする心を生じていませんでした。

私達は、今、仏前で、声聞に「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」して仏に成る予言を授けるのを聞いて、心が、とても喜んで、未曾有になることを得ています。

今になって、突然、希有の法を聞くことができ得るとは思っていませんでした。
深く自ら喜んで、大いなる善い利益、量り知れない珍しい宝を獲得できました。
求めていなかったのに、自然に得ることができました。

世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
私達は、今、例え話を説いて、この意義を明らかにしたいと願っています。

例えるならば、ある人が、幼い時に父を捨てて逃げて、十年、二十年、五十年、久しく他国に住んで、大きくなって、貧しくて困窮して、四方へ奔走して、衣食を求めて、徐々に、めぐっていって、偶然、本(もと)の国へ向かうような物なのです。

その父は、以前から、子を探し求めていましたが、見つけることができ得ていませんでした。
父は、ある都市の中に留まっていました。
その父の家は、大いに富んで、財宝が、金、銀、瑠璃(るり)、珊瑚(さんご)、琥珀(こはく)、「頗梨」、「水晶」の宝珠など、量り知れないほど無数でした。
その父の諸々の倉庫には、ことごとく皆、財宝が満ちあふれていました。
少年の従僕、家臣、補佐する役人、役人、国民が多数いました。
象(ゾウ)、馬車といった乗り物、牛、羊(といった家畜)が無数にいました。
財物を出し入れして商売して利益を増やして、経済力、影響力、権力は、あまねく他国に及んでいて、
商人も、また、とても多数いました。

時に、貧しくて困窮している子は、諸々の集落をめぐって、国、地方を経歴して、ついに、その父が留まっている都市に来ました。

父は、常に、五十年間余り、子と、子との離別を思っていました。
しかし、未だかつて、他人に向かって、子の事を話しませんでした。
ただ、心に悔恨を懐いて、自ら、このように思っていました。

年老いて、
財物が多数、有る。
金、銀、珍しい宝が、倉庫に満ちあふれている。
(しかし、)子がいない。
一旦、死んでしまえば、財物は散逸してしまう。
(しかし、)委ねて付属させる相手がいないのである。

このため、慇懃に、常に、子を思っていて、また、このように思っていた。

私は、もし子を見つけることができ得たら、財物を委ねて付属させて、落ち着けて、喜べて、憂慮することが、もう無くなるのに。

世尊(、釈迦牟尼仏)よ、

そのとき、困窮している子は、賃金をもらって雇われながら、転々として、偶然、父の家に来た。
門の側に立って、遥かに、その父を見ると、
獅子の座に腰かけて、
宝の台に足を乗せていた。
諸々の聖職者バラモン、貴族クシャトリヤ、商人バイシャが皆、恭しく敬って、囲んでいた。
幾千、幾万の価値の真珠の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」で、その身を荘厳に飾っていた。
役人、国民、少年の従僕が、手に「白払」、「害虫を払うための毛がついた棒である払子」を取って、左右に、そばに仕えて立っていました。
宝の帳(ヴェール)で覆われていた。
諸々の華の旗(はた)を垂らしていた。
香水を地にまいていた。
多数の名華をまいていた。
宝物を羅列して、出し入れして、取ったり与えたりしていた。
これらのように種々に荘厳に飾られていて、威徳があって、特別に尊重されていた。

困窮している子は、父が大いなる勢力を有しているのを見て、恐怖を懐き、ここへ来たことを後悔して、ひそかに、このように思った。

父は王である。また、父は王と等しい。
ここは、私の能力が買われて物を得ることができるような場所ではない。
貧しい里へ行くに越したことは無い。
店や、力の見せ場が有る地ならば、衣食をたやすく得ることができるだろう。
もし、ここに長く留まっていたら、私は脅迫されて強制的に酷使される目に遭うかもしれない。

このように思うと、走って、去った。

時に、金持ちである父は、獅子の座から、子を見かけて、我が子だと認識できて、心で大いに喜んで、このように思った。

宝庫に所蔵している私の財物を付属させることができる相手が今、いた。
私は、常に、この子を思ってきた。
この子を見つける手段が無かった。
しかし、突然、自分から来てくれた。
私の願いが、かなった。
私は、年老いたが、なお、子を貪欲なまでに惜しんでいるので、傍らにいる人を派遣して、急いで追いかけさせて、連れて帰らせよう。

その時、父の使者は、走って行って、とらえた。

困窮している子は、驚愕して、怨み言を言って、大いに喚いた。

私は罪を犯していません！
なぜ、とらえられる目に遭うのか？！

父の使者は、この子をとらえて、いよいよ急いで、強制的に連行して、連れ帰った。

時に、困窮している子は、自ら、このように思った。

無罪だが、とらえられた。

きっと死刑になるのだろう。

とても、おそれて、悶絶して、足が動かなくなって、地に倒れた。

父は、遠くから、これを見て、使者に言った。

この人を強制的に連れて来るなかれ。
冷水を顔にかけて、目をさまさせなさい。
また、会話するなかれ。

なぜか？

父は、子の志や意思が未熟である、と知った。
(父は、自身が)豪貴なので、子が難色をしめす、と自ら知った。
(父は、自分の)子である、と明らかに知った。
しかし、「方便」、「便宜的な方法」のため、他人には「我が子である」と言わなかった。

父の使者は、子に語った。

私(、使者)は、今から、あなたを解放する。
「随意に」、「思うがままに」、去りなさい。

困窮している子は、喜んで、心が未曾有になることを得て、地面から起き上がって、貧しい里へ去って、衣食をさがし求めた。

その時、金持ちである父は、子を誘惑して引き寄せたいと欲して、「方便」、「便宜的な方法」を設けて、姿や容色が憔悴していて威徳が無い者、二人を密(ひそ)かに派遣した。

(父は、密使に、このように言った。)

あなた達、彼の所へ行って、ゆっくりと言いなさい。
「この都市に働ける場所が有って、今の二倍の給料をあなたに払いましょう」と。
彼が、もし許せば、連れて来て、働かせなさい。
(彼が、)もし「どんな仕事ですか？」と言ったら、このように言いなさい。

「あなたを汚物掃除に雇います。私達、二人も、また、あなたと共に働きます」と。

時に、二人の密使は、困窮している子をさがし求めた。

(二人の密使は、)困窮している子を見つけることができ得ると、
上記の事をつぶさに述べた。

その時、困窮している子は、給料を前払いで受け取ると、
すぐに、二人の密使と共に、汚物掃除の務めについた。

父は、子を見て、思いやって、子の様子をさぐった。
また、別の日に、窓から、家の中から、遠くから、子を見ると、
体は、痩せていて、憔悴していて、汚物、塵にまみれて、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」を外し、纖細な柔軟な上等な服を脱ぎ、荘厳な飾りを外していた。
そして、粗末な垢や皮脂で汚れた衣服を着て、身が塵や土にまみれて、右手に汚物掃除の器具を持っていた。

(父が来ると、子は)畏怖する様子であった。

(父は、)諸々の作業員に、このように言った。

あなた達、精勤して働いてください。
だるそうにして、怠けるなかれ。

(父は、)「方便」、「便宜的な方法」で、子に近づいた。

そして、(父は、子に、)また、このように言った。

ちょっと、そこの君、
あなたは、ずっと、ここで、働いてください。
余所へ去らないでください。
(その代わりに、)あなたへの報酬を追加しましょう。
(追加報酬には、)諸々の、日用品の、盆、器、米、麺、塩、酢などが有ります。
「ありえない」と疑わないでください。

また、老人の使用人も、いますよ。
(あなたに、老人の使用人も)支給しましょう。
安心してください。
私は、あなたの父のような者なのです。
憂慮しないでください。
なぜか？　と言うと、
私は年老いていて、あなたは若いからです。
あなたは、常に、勤務中に、だましたり、怠けたり、怒ったり、怨み言を
言ったりしないでください。
あなたには、そういったことをしているのを見かけたことは全く無いですが。
他の作業員には、これらの諸々の悪行が有ります。
(あなたは、)今から、以後は、私から生まれた子のような者なのです。

時に、金持ちである父は、「字(あざな)」、「別名」を作って、与えて、子
に名づけて、養子にした。

その時、困窮している子は、この待遇に喜んだが、なお、自ら、このように
思っていた。

(私は、)客人、使用人、下賤な人間である。

このため、二十年間、常に、汚物掃除をさせた。
この二十年が過ぎると、心が通い合って、信頼しきった様子で、難色をしめ
さないで出入りするようになった。
しかし、住所は、なお、本(もと)の場所であった。

世尊(、釈迦牟尼仏)よ、

その時、金持ちである父は、病気になって、「遠からず死ぬだろう」と自ら
知って、困窮している子に言った。

私には、今、金、銀、珍しい宝が多数あって、倉庫に満ちあふれている。
そのうち、いくつか、出し入れしてください。
あなたは、私の宝について、ことごとく知ってください。
私は、このように思っているのです。
まさに、この思いを体感してください。

なぜか？　と言うと、
今、私と、あなたは、一心同体なのです。
よろしく、用心して、財産を無くさないようにしてください。

その時、困窮している子は、教えを受けて、金、銀、珍しい宝、および、
諸々の倉庫が所蔵している多数の物を知って理解した。
しかし、怖れて、気持ち一食分すらも(報酬として)取らなかった。
しかも、その住所は、本(もと)の場所のままであった。
未熟な心も、また、捨てることが未だ不可能であった。
(しかし、)さらに、少しの時を経ると、父は、子の心が、ようやく通じ終
わって落ち着いて大いなる心を成就して自ら以前の心をいやしむようになっ
た、と知った。
(父は、)命が終わろうとする時に臨んで、子に命じて、親族、国王、大臣、
貴族クシャトリヤ、商人バイシャを集めた。
皆ことごとく、集まり終わると、(父は、)自ら宣言した。

諸君、まさに、知ってください。
この子は、私から生まれた、我が子なのです。
某都市で、私を捨てて逃走して、五十年間余り、下僕として他人に酷使され
て辛く苦しみました。
その本(もと)の「字(あざな)」、「別名」は、何々です。
私の名前は、何々です。
昔、本(もと)の都市にいたとき、憂いを懐いて、探し求めていました。
突然、この間、偶然、この子に会うことができ得ました。
この子は、実の我が子なのです。
私は、実の父親なのです。
今、私の所有している一切の財物は皆、子が所有しています。
以前、出し入れしていた物は、子が知って理解しています。

世尊(、釈迦牟尼仏)よ、

この時、困窮していた子は、父の、これらの言葉を聞いて、大いに喜んで、
心が未曾有になることを得て、このように思いました。

私は、本(もと)から心で願い求めていなかったのに、今、この「宝蔵」、「蓄積されている宝」を自然に得るに至った。(「宝蔵」には「仏法」という意味も有る。)

世尊(、釈迦牟尼仏)よ、

大金持ちである父は、如来(、仏)の例えなのです。
私達は皆、仏の子のような者なのです。

如来(、釈迦牟尼仏)は、常に、説いてくれました。

私達は、(仏の)子なのである。と。

世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
私達は、「三苦」、「苦苦、壊苦、行苦」、「苦しみによる苦しみ、快楽が壊れる苦しみ、諸行無常による苦しみ」のせいで、生死の中で、諸々の熱く焼かれるような苦悩を受けて、迷い惑って、無知で、「小法」、「中途半端の法」、「矮小な物」を願い愛着していました。
今日、世尊(、釈迦牟尼仏)は、私達に思考させて、「諸法」、「全てのもの」について空虚に議論して戯れるという汚物を除去してくれました。
私達は、仏法の中で、精進につとめて、「涅槃」、「寂静の境地」に至ることができ得ました。

一日の対価をこの仏法から既に得終わって、心で大いに喜んで、自ら「満ち足りている」と見なして、このように、自ら思い、言った。

仏法の中で、精進につとめたので、広大な多数の所得を得ることができた。と。

しかも、世尊(、釈迦牟尼仏)は、以前から、私達の心が粗末なものへの欲望に執着して「小法」、「中途半端の法」、「矮小な物」を願いもとめている、と知っていたので、
(私達の心を)見ても許して捨て置いて、「あなた達には、まさに、如来(、仏)の知見、『宝蔵』、『仏法』の分け前が有る」と分別して説きませんでした。

世尊(、釈迦牟尼仏)は、「方便」、「便宜的な方法」の力で、如来(、仏)の智慧を説いていました。
私達は、仏より、一日の対価として「涅槃」、「寂静の境地」を得て、「大いなる物を得た」と見なして、この大乗を志して求めていませんでした。
私達も、また、如来(、仏)の智慧によって、諸々の菩薩のために、大乗を開示して演説していました。
しかし、自らは、この大乗を志して願いもとめていませんでした。
なぜか？　(と言うと、)
釈迦牟尼仏は、私達の心が「小法」、「中途半端の法」、「矮小な物」を願いもとめていたのを知って、「方便」、「便宜的な方法」の力で、私達に応じて、仏法を説いていたからです。
しかも、私達は、「私達は、真の仏の子である」と知りませんでした。
今、私達は、まさに、(「私達は、真の仏の子である」と)知りました。
世尊(、釈迦牟尼仏)は、仏の智慧を惜しみなくあたえてくれます。
なぜか？　(と言うと、)
私達は、昔から、真の仏の子であるからです。
しかし、「小法」、「中途半端の法」、「矮小な物」だけを願いもとめていたのです。
もし私達が大いなる心境を願い求めていたら、釈迦牟尼仏は、私達のために大乗法を説いてくれたはずです。
今、(釈迦牟尼仏は、)この法華経を説いた中で、唯一の仏乗を説きました。
そして、(釈迦牟尼仏は、)昔、菩薩達の前で、「小法」、「中途半端の法」、「矮小な物」を願いもとめている者である声聞を非難したことがありました。
仏は、実は、大乗で、(声聞も独覚も菩薩も)教化します。
このため、私達は、「本(もと)は願い求める心が無かったのに、今、法の王(である仏)の大いなる宝を自然に得るに至った」と説いているのです。
仏の子のように、まさに得るのに相応しい者は皆、既に、この(仏乗という)宝を(いつのまにか)得ているのです。

その時、摩訶迦葉は、くり返し、この意義を説きたいと欲して、詩で説いて言った。

私達は、今日、釈迦牟尼仏の言葉の教えを聞いて、歓喜して、心が踊躍して未曾有になることを得ています。
釈迦牟尼仏は、「声聞も、まさに、仏に成ることができ得る」と説きました。
無上の宝の山を、求めていなくても、自然に得たのです。

例えるならば、幼子が、幼いときに理解が無くて父を捨てて逃げて、遠く他の土地へ行って、五十年間余り、諸国をめぐり流れているような物なのです。
父は、憂慮して、四方を探し求めました。
父は、子をさがし求めて、疲れると、ある都市に留まって、家を建造、建立して、まさに、自らの喜びを欲しました。
その家は、巨額の富をあげました。
諸々の金、銀、硨磲(しゃこ)、碼碯(めのう)、真珠、瑠璃(るり)が多数ありました。
象、馬、牛、羊、乗り物、土地、仕事、少年の従僕、国民が多数、存在しました。
物を出し入れして商売して利益を増やして、経済力、影響力、権力は、あまねく他国に及びました。
商人がいない所が無いほどになりました。
幾千、幾万、幾億の大衆に、囲まれて、恭しく敬われて、常に権力者に愛顧されていました。
群臣、豪族は皆、共に、主要人物として尊重しました。
諸々の縁のため、往来する者が多かった。
このように富豪であった。
しかし、年老いて行って、ますます、憂いて、子を思った。

朝から夜まで一日中、このように思った。

死ぬ時が、まさに至ろうとしている。
愚者である子は、五十年間余り、私を捨てている。
倉庫に所蔵している諸々の物は、どうなってしまうのか？

その時、困窮している子は、地方から地方へ、国から国へ、衣食を探し求めていました。
所得が有ったり、所得が無かったりして、飢餓で痩せて、体に皮膚病が生じていた。
徐々に経歴して、父が留まっていた都市に来た。
金で雇われて、転々として、ついに、父の家に来た。
その時、金持ちである父は、門の内側で、大いなる宝の帳(ヴェール)を設けて、獅子の座に処していた。
眷属に囲まれて、皆が、そばに仕えて護衛していた。

また、金、銀、宝物を計算して、財産を出し入れして、証書に注記している者もいた。
困窮している子は、父が豪貴で尊くて威厳があるのを見て、思った。

父は、国王であるか、王と等しい。

(子は、)驚き怖れて、自ら不思議に思った。

なぜ、ここに来てしまったのか？

(子は、)ひそかに、自ら思って、言った。

私が、もし、長く留まっていたら、強迫されて強制的に酷使される目に遭うかもしれない。

(子は、)このように思い終わると、走って去った。

貧しい里を試しに、たずねてみて、雇ってもらおうと欲した。

金持ちである父は、この時、獅子の座にいて、遠くから、子を見つけて、
黙っていたが、子であると認識した。
そして、使者に命じて、追わせて、とらえさせて、連れて来させた。

貧窮している子は、驚いて、喚いて、迷って、悶えて、足が動かなくなって、地に倒れた。

「
この人は私をとらえた。きっと、殺される目に遭うんだ！
どうして、衣食を必要として、私は、ここへ来てしまったのか？！
」

金持ちである父は、子が愚者で、見識が狭く未熟で、父の言葉を信じず、父であると信じないのを知って、
「方便」、「便宜的な方法」で、他人を直視しない、(背などが)短い、低い地位の(服装の)、威徳が無い他の者を派遣した。

(父は、使者に、このように言った。)

あなた達は、あの人に、このように言いなさい。
「諸々の汚物掃除に雇いましょう。今の倍の給料をあなたに支払いましょう」と。

困窮している子は、この使者の言葉を聞いて、喜んで、ついて来て、汚物掃除をして、諸々の家を浄化した。

金持ちである父は、窓から、常に、子を見て、思った。

子は、愚者で未熟で、矮小なものを願って、矮小な事を為(な)す。

このため、金持ちである父は、粗末な垢(あか)まみれの衣服を着て、汚物掃除の器具を持って、子の所へ行って、「方便」、「便宜的な方法」で近づいて、話して、精勤につとめをなすようにさせた。

「
既に、あなたの報酬を増やすことを決めました。
また、足に油を塗ってあげましょう。
飲食物を充足させましょう。
敷物を厚くして暖かくなるようにさせましょう。
」

(そして、)このように苦言した。

あなたは、精勤につとめなさい。

また、穏やかに話した。

あなたを、我が子のように扱います。

金持ちである父には、智慧が有って、ようやく子を家に出入りさせることができた。
二十年、経つと、家の事をとりしきらせた。
金、銀、真珠、「頗梨」、「水晶」といった諸々の物の出し入れを示して、皆、知らせた。

(しかし、子は、)なお、門の外に処して、草の屋根の庵に留まって、自ら、取るに足りない事を思っていた。

私には、これらの物が無い。

父は、子の心が、ようやく明らかに広大になると、財物を与えたいと欲して、親族、国王、大臣、貴族クシャトリヤ、商人バイシャを集めた。
これらの集まってくれた者達に、このように説明した。

この子は、我が子なのです。
私を捨てて、五十年間、他所へ行っていました。
この子を見つけてから、今まで、既に、二十年です。
昔、ある都市で、この子を失ってしまいました。
あまねく、色々な場所へ行って、探し求めていました。
ついに、ここへ来ました。
全ての私の所有物、家、国民は、ことごとく、この子に付属させて委ねます。
思い通りに、用いなさい。

子は、思った。

昔は、貧しかったし、心も未熟であった。
今は、父の所で、珍しい宝、および、家といった一切の財物を大いに獲得できた。

(子は、)とても大いに喜んで、心が未曾有になることを得た。

仏も、また、同様なのです。
(仏は、)私達が矮小なものを願っていたのを知って、未だかつて「あなた達は仏に成る」と言ってくれませんでした。

そして、(仏は、)私達が「諸々の『無漏』、『煩悩の無い境地』を得て、『小乗』を成就している、声聞の弟子である」と説いていました。

仏は、私達に、このように説くように命じていました。

「『最上の道』、『無上の真理』を習って身につけた者は、まさに、仏に成ることができ得る」と。

私達は、仏の教えを受けて、大いなる菩薩のために、諸々の因縁、種々の譬喩、いくつかの「言辞」、「言葉遣い」で、無上の「道」、「真理」を説きました。
諸々の釈迦牟尼仏の弟子達は、私達から、法を聞いて、日夜、思考して、精勤に(無上の真理を)習って身につけました。
この時、諸仏は、その人達に「授記しました」、「仏に成る予言を授けました」。

「あなたは、来世、まさに、仏に成ることができ得る」と。

一切諸仏の秘蔵の法は、菩薩のためだけに、その真実が演説されます。
しかし、私達のためには、その真実の重要な法は説かれませんでした。
例え話の困窮している子が、父に近づいて、諸々のものを知るといえども、心で「もらえるようにしよう」と願わないような物だったのです。
私達は、仏法により「宝蔵」、「蓄積されている宝」を説くといえども、自らは、願って志しませんでした。例え話の困窮している子と同様だったのです。
私達は、内心の煩悩を滅ぼして、自ら思いました。

「満ち足りた」と見なそう。
この唯一の事(、煩悩を滅ぼす事)が終了したので、更に他の事をする必要は無いだろう。

私達は、仏国土を浄化することや、「衆生」、「生者」を教化することをたとえ聞いても、全く喜びませんでした。
なぜか？　(と言うと、)

一切の「諸法」、「全てのもの」は皆ことごとく、空(くう)であるし、寂静であるし、「無生無滅」、「実は、生滅することが無い」のであるし、「無大無小」、「実は、優劣が無い」のであるし、「無漏」、「実は、煩悩が無い」のであるし、「無為」、「不変の真理」なのである。

このように思って、喜びを生じませんでした。

私達は、輪廻転生して、仏の智慧に良い意味で貪欲に執着していませんでしたし、仏の智慧を再び願って志していませんでした。
そして、自ら、仏法について、このように思っていました。

(仏法を)究めている。
私達は、輪廻転生して、空(くう)の法を習って身につけて、三界の苦悩のうれいから脱出することができ得て、「最後身」、「輪廻転生しない最後の生身」の「有余涅槃」、「煩悩を寂滅した境地にいて、肉体だけが残りとして有ること」に留まっている。
釈迦牟尼仏の教化によって、「道」、「真理」を会得して、空虚ではない。
「釈迦牟尼仏の恩に報いることが既にでき得ている」と見なす。

私達は、諸仏の弟子達のために、「菩薩の法で仏道を探求しなさい」と説くといえども、
しかし、(私達は、今まで)長い間、菩薩の法を願っていませんでした。

導師である釈迦牟尼仏は、私達の心を見ても捨て置いて、最初は、「真実の利益が有る」と勧めて説きませんでした。

例え話の金持ちである父は、子の心が未熟であるのを知って、「方便」、「便宜的な方法」の力で子の心を懐柔して調伏して、その後で、一切の財宝を付属させて委ねました。
仏も、また、同様なのです。
(仏は、)希有な事を現して、矮小なものを願う者達を知ると、「方便」、「便宜的な方法」の力で、その心を調伏して、その後で、大いなる智慧を教えるのです。
私達は、今日、心が未曾有になることを得ました。
以前から所望していたわけではないのに、今、自然に得たのです。
例え話の困窮している子が無量の宝を得たような物なのです。
世尊(、釈迦牟尼仏)よ、
私達は、今、「道」、「真理」を会得して、果報を得て、「無漏法」、「煩悩が無い法」で清浄な「見る眼」を得ました。
私達は、輪廻転生して、仏の清浄な戒を守って保持して、初めて、今日、その果報を得ました。
法の王である仏の法の中で、長い間、修行して、今、「無漏の」、「煩悩が無い」無上の大いなる果報を得ました。

私達は、今、真の声聞であるのです。
仏道の言葉を一切のものに聞かせます。
私達は、今、真の阿羅漢であるのです。
諸々の世界で、
あまねく、天上でも、「魔」、「天魔波旬」の「第六天」、「他化自在天」でも、梵天の「大梵天」でも、
まさに、供養を受けるのに相応しいのです。
世尊(、釈迦牟尼仏)の大恩とは、希有な事によって、私達を、思いやって、教化して、私達に利益をもたらしてくれていることなのです。
幾億の無量の劫でも、誰が、報いることができるのか？
手足となって仕えて、頭頂で礼拝して、一切のものを「供養しても」、「捧げても」、全て、報いることは不能なものなのです。
また、ガンジス河の砂のように無数の劫の間、頂戴して、両肩で担って負って、心を尽くして恭しく敬っても、
また、美味な飲食物、無量の価値の宝の衣、および、諸々の寝具、種々の薬、「牛頭栴檀」、および、諸々の珍しい宝でも、「塔廟」を建てても、地に宝の衣をしいても、
ガンジス河の砂のように無数の劫の間、これらのようなものを「供養しても」、「捧げても」、また、報いることは不能なものなのです。
諸仏は、
希有です。
無量の、無限の、不可思議な、大いなる神通力があります。
「無漏です」、「煩悩が無いです」。
「無為です」、「不変の真理、そのものです」。
「諸法」、「全てのもの」の王です。
未熟な者のために、未熟さを忍耐可能で、凡人に取り組んで、「随宜に」、「相手に応じて」、法を説きます。
諸仏は、
法において、最も無上に自由自在です。
諸々の「衆生」、「生者」の種々の欲望と願い、および、意思力を知っています。
随所で、任務にあたって、無量の例え話で、生者のために、法を説きます。
諸々の「衆生」、「生者」が前世に植えた善の種である善行に応じて、
また、成熟した者、未熟な者を知って、
種々に「数えて」、「量って」、分別して、知り終わると、

唯一の仏乗という仏道を、「随宜に」、「相手に応じて」、(三段階に分けて別個であるかのように)三乗と説きます。

薬草喩品

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、(摩訶)迦葉、および、諸々の大いなる弟子に告げた。

善いかな。
善いかな。
迦葉よ、
如来の真実の功徳を善く説けている。
誠に、言った所説のように、如来(、仏)には量り知れないほどの無限の「阿僧祇の」、「無数の」功徳が有る。
あなた達が、もし幾億もの量り知れないほど無数の劫、説いても、説き尽くすことは不可能なのである。
迦葉よ、まさに、知るべきである。
如来(、仏)は「諸法の王」、「全てのものの王」である。
もし(仏に)所説が有れば、皆、虚しくは無い。
(仏は、)智慧の「方便」、「便宜的な方法」によって、これ、「一切の法」、「一切のもの」を演説する。
その(仏の)所説の法は、皆ことごとく、「一切智地」、「一切の智慧の基礎」に到る物なのである。
如来(、仏)は、「一切の諸法の帰趣する所」、「全てのものが帰る所」を観察して知っている。
また、(仏は、)一切の「衆生」、「生者」の心の奥深くと所行を知っている。
「無礙に」、「妨げられず」、通達している。
また、「諸法」、「全てのもの」を究め尽くして明らかに了解して、諸々の「衆生」、「生者」に一切の智慧を開示する。
迦葉よ、
例えば、「三千大千世界」の山、川、谿谷、土地に生じている、草木、叢林、および、諸々の薬草は、若干の種類があるが、名と色形が各々異なるが、「密雲」、「重なって厚く成った雲」が、あまねく行き渡って、「三千大千世界」を遍く覆って、「一時に」、「同時に」、等しく潤すような物なのである。
その潤いは、草木、叢林、および、諸々の薬草のうち、小さいものの根、茎、枝、葉も、中間のものの根、茎、枝、葉も、大いなるものの根、茎、枝、葉も、あまねく潤す。

諸々の樹の、大いなるものも、小さいものも、上中下の位に応じて各々受ける所の物が有る。
唯一の雲が降らす所の物は、その(草木の)「種性」、「素質」に応じて、華、果実を生じさせて成長させることができ得て、果実を広げさせる。
唯一の地に生じている所のものであるし、唯一の雨が潤す所のものである、といえども、諸々の草木には各々差異、区別が有る。
迦葉よ、まさに、知るべきである。
如来(、仏)も、また、同様なのである。
(仏が、)この世に出現するのは、大いなる雲が起こるような物なのである。
(仏の)大いなる「音声」、「仏教」が天上、人の間、阿修羅といった世界に普遍にいきわたるのは、この(仏という)大いなる雲が「三千大千世界」という仏国土を遍く覆うような物なのである。
(仏は、)大衆の中で、このような言葉を唱える。

私(、仏)は、如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊である。
(仏は、)未だ仏土へ渡っていない者を仏土へ渡らせる。
(仏は、)未だ(真理を)理解していない者を理解させる。
(仏は、)未だ安らかに成っていない者を安らかにさせる。
(仏は、)未だ「涅槃」、「寂静」を得ていない者に「涅槃」、「寂静」を得させる。
(仏は、)今世、後世を如実に知っている。
私(、仏)は、
一切を知っている者であるし、
一切を見ている者であるし、
「道」、「真理」を知っている者であるし、
「道」、「真理」を開示している者であるし、
「道」、「真理」を説いている者である。
あなた達、天人、人、阿修羅達よ、
皆、まさに、ここ(、仏の所)に到るべきである。
仏法を聴くために。

その時、幾千、幾万、幾億もの無数の種類の「衆生」、「生者」は仏の所に来て、仏法を聴く。
その時、如来(、仏)は、この「衆生」、「生者」の、諸々の「根」、「能力」が利発か愚鈍かを、精進しているか怠けているかを観察して、その者が

耐えられる所の物に応じて、種々に、量り知れないほど無数に、説法して、
皆、歓喜させて、快く、善い利益を得させる。
この諸々の「衆生」、「生者」は、この仏法を聞き終わると、現世では安穏
とできるし、「後生では」、「来世では」、善い所に処することができるし、
「道」、「真理」によって安楽を受けることができるし、また、仏法を聞く
ことができ得る。
既に仏法を聞き終わると、「諸法」、「全てのもの」の中で、諸々の障害を
離れて、力が可能とする所の物に応じて、徐々に「道」、「真理」へ入るこ
とができ得る。
大いなる雲が一切の草木、叢林、および、諸々の薬草に雨を降らすような物
なのである。
その(草木の)「種性」、「素質」が、(雨の)潤いをこうむって、「具足し
て」、「十分に備わって」、各々、生じて成長するような物なのである。
如来(、仏)の説法は、
「一相」、「究極的には唯一の相」であるし、
「一味」、「究極的には唯一」であるし、
いわゆる、
解脱の相であるし、
「離相である」、「生じたり滅んだりする相を離れている」し、
「滅相」、「寂滅の相」であるし、
究極的に「一切種智」に至る物である。

「衆生」、「生者」がいて、如来(、仏)の法を聞いて、もし受持したり、読
んだり、仏法の説の通りに修行したりしても、得られる所の功徳を自ら覚知
することはできない。
理由は何か？　(と言うと、)
如来(、仏)だけが、この「衆生」、「生者」の種類、相、実体、性質、何事
を思念しているのか、何事を思考しているのか、何事を修行しているのか、
どのように思念しているのか、どのように思考しているのか、どんな法に
よって思念しているのか、どんな法によって思考しているのか、どんな法に
よって修行しているのか、どんな法によって、どんな法を得ているのか、
知っているのである。
「衆生」、「生者」は種々の境地に住んでいるが、如来(、仏)だけが、如実
に、これ(、生者の境地)を見て、「無礙に」、「妨げられず」、明らかに了
解している。

草木、叢林、諸々の薬草達は、上中下の位の性質を自ら知らないような物なのである。
如来(、仏)は、
この「一相、一味の法」、「究極的には唯一である法」を知っている。
(究極的には唯一である法とは、)いわゆる、
解脱の相であるし、
「離相である」、「生じたり滅んだりする相を離れている」し、
「滅相」、「寂滅の相」であるし、
究極的に、涅槃の常に寂滅の相であるし、
最終的に、空(くう)に帰る物である。
仏は、これ(、究極的には唯一である法)を知り終わると、「衆生」、「生者」の心の欲望を観察して、これ(、究極的には唯一である法)を護ろうとする。
このため、生者のために「一切種智」をすぐには説かないのである。
あなた達よ、迦葉よ、
如来(、仏)による「随宜の」、「相手に応じた」説法を知ることが可能で、信じることが可能で、受け入れることが可能であることをとても希有であるとする。
理由は何か？　(と言うと、)
諸々の仏(世尊)による「随宜の」、「相手に応じた」説法は、理解が難しいし、知ることが難しいのである。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

「破有の」、「輪廻を破る」法の王(である仏)は、世間に出現する。
(仏は、)「衆生」、「生者」の欲望に応じて、種々に、説法する。
如来(、仏)は、尊いし、重要である。
(仏の)智慧は深遠である。
(仏は、)この(唯一の仏乗しかない、という)重要な秘密を久しい間、黙っていて、速(すみ)やかに説こうとつとめなかった。(なぜなら、)
智慧が有る者は、もし聞けば、信じて理解することが可能であるが、
智慧が無い者は、疑って後悔して、そのために(真理を)永遠に失くしてしまう。
このため、
迦葉よ、

(仏は、)生者の力に応じて、生者の為に、種々の「縁」、「つながり」によって(真理を)説いて、生者に正しい見解を得させせる。
迦葉よ、まさに、知るべきである。
例えば、世間に、大いなる雲が起こるような物なのである。
(仏の智慧という雲は、)一切のものをあまねく覆う。
(仏の)智慧という雲は潤いを含んでいる。
(仏の智慧という雲の)雷光は光る。
(仏の智慧という雲の)雷鳴は遠くまで震わせる。
(仏の智慧という雲は、)あらかじめ「衆生」、「生者」を喜ばせる。(なぜなら、)
(仏の智慧という雲は、)日光を覆い隠して、地上を清涼にするからである。
「靉靆」、「たなびいている雲」は垂れて行き渡って、受け止めることができるかのようである。
その(仏の智慧という雲の)雨は、あまねく平等に四方に同時に下って流れて潤す。
(仏の智慧という雨によって、)無量の全ての土は満たされて潤う。
山、川、険しい谷、「幽邃」、「静かな奥深く」には、草木、薬草、大小の諸々の樹、色々な穀物、稲の苗、甘蔗(サトウキビ)、蒲萄(ブドウ)が生じている。
(仏の智慧という)雨は、これら草木を潤して、豊かで満ち足らせる。
(仏の智慧という雨によって、)乾燥していた土地は、あまねく潤って、薬草と樹木は全て生(お)い茂って育つ。
その(仏の智慧という)雲が出す所の物である、「一味の水」、「究極的には唯一であるという智慧という水」によって、草木、叢林は、「分に応じて」、「位に応じて」、潤いを受ける。
一切の諸々の樹の上中下の位のものは、等しく、その大小に応じて、各々、根、茎、枝、葉、華、果実、光彩、色形を生じて成長することができ得る。
唯一の雨が及ぶ所のものは皆、生き生きとした美しい鮮(あざ)やかさ、潤いを得る。
その草木の実体、相、性質は大小に分かれていて、潤す所の(仏の智慧という)水は唯一であるが、各々、生(お)い茂って育つような物なのである。
仏も、また、同様なのである。
仏が、この世に出現するのは、大いなる雲が一切をあまねく覆うような物なのである。
仏は、この世に出現すると、諸々の「衆生」、「生者」の為に、(三乗に)分別して、「諸法の真実」、「全てのものの真実」を演説する。

「大聖世尊」、「仏」は、諸々の天人、人といった一切の者達の中で、このように宣言する。

私は、如来、両足尊(、仏)である。
仏が世間に出現するのは、大いなる雲が起こるような物なのである。
仏の智慧は、一切の枯れていた「衆生」、「生者」を満たして潤す。
仏は、生者の皆に、苦しみを離れさせて、安穏とした安楽、世間の安楽、および、「涅槃」、「寂静」の安楽を得させる。
諸々の天人、人達よ、
一心に善く聴いて、皆、まさに、ここ(、仏の所)に到って、無上尊(、仏)にまみえるべきである。
私は、世尊(、仏)である。
(仏以外で、)仏に及ぶことが可能な者はいない。
仏は、「衆生」、「生者」を安穏とさせるために、この世に出現する。
仏は、大衆の為に、甘露である清浄な法を説く。
その仏の法は、「一味」、「究極的には唯一である」し、解脱であるし、「涅槃」、「寂静」である。
仏は、唯一の妙なる「音」、「仏法」によって、この意義を広く説く。
仏は、常に、大乗の為に、因縁を作る。
私、仏は、一切をあまねく皆、平等に観察する。
仏には、あれこれと愛着したり憎んだりする心が無い。
私、仏には、貪欲な執着が無い。
また、仏には、限界、妨げが無い。
仏は、常に、一切のものの為に、平等に説法する。
仏は、一人のためにするように、多数のもの達のためにも、また、するのである。
仏は、常に仏法を演説して、かつて他の事をしたことが無いのである。
仏は、来たり去ったりしても、坐ったり立ったりしても、終(つい)に疲れて飽きること無く、世間を充足させるのである。
雨が、
高貴な者も、下賤な者も、
上位の者も、下位の者も、
戒を守っている者も、戒を破っている者も、
正しい身のこなしが十分に備わっている者も、十分に備わっていない者も、
正しい見解を持つ者も、邪悪な見解を持つ者も、
利発な者も、愚鈍な者も、

あまねく潤すように。

仏は、平等に、仏法という雨を降らし、飽きて怠ることが無い。
一切の「衆生」、「生者」のうち、私の仏法を聞き入れる者は、力、受け入れる所の物に応じて、諸々の境地に住む。

人、天人、転輪聖王、帝釈天、梵天といった諸々の王に処している者は、小さい薬草なのである。

「無漏の」、「煩悩が無い」法を知って、「涅槃」、「寂静」を得ることが可能で、「六神通」を起こして、「三明」を得て、山や林に独りで処して、常に禅定を修行して、「縁覚」、「独覚」の証を得る者は、中間の薬草なのである。

世尊、仏が処している境地を求めて、「私は、まさに、仏に成ろう」と、精進して定を修行する者は、上位の薬草なのである。(大いなる薬草なのである。)

諸々の仏の弟子のうち、仏道に専念して、常に「慈悲」、「思いやり」を修行して、「仏に成れる」と自ら知って決定的に確信して疑いが無い者を「小さい樹」と名づける。

「神通」、「理解」に安住して、不退転の法輪を転じて、幾百、幾千、幾億もの量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡すような菩薩を「大いなる樹」と名づける。

仏が平等に説くのは、「一味の」、「究極的には唯一である」雨のような物なのである。
「衆生」、「生者」が性質に応じて受け入れる所の物が異なるのは、草木が受け入れる所の物が各々異なるような物なのである。
仏は、このように例えによって、「方便で」、「便宜的な方法で」、種々の「言辞」、「言葉遣い」で、開示して、仏の智慧のうち、唯一の法を演説するのは、海の一滴のような物なのである。
私、仏は、仏法という雨を降らして、充満させる。

世間の者が「一味の」、「究極的には唯一である」仏法を、力に応じて、修
行するのは、叢林、薬草、諸々の樹が、その大小に応じて、徐々に増えて
茂って好くなるような物なのである。
諸仏の仏法は、常に、「一味」、「究極的には唯一であること」によって、
諸々の世間の者達に、あまねく得させて、「具足させて」、「十分に備わら
せて」、徐々に、修行させて、皆、「道」、「真理」を会得するという結果
を得させる。

声聞や「縁覚」、「独覚」のうち、山や林に処して「最後身」に住んで仏法
を聞いて真理を会得するという結果を得る者を「薬草」と名づける。
各々、向上、成長することができ得る。

諸々の菩薩のうち、智慧が堅固で「三界」を了解して通達して「最上乗」、
「仏」を探求する者を「小さい樹」と名づける。
各々、向上、成長することができ得る。

禅に住んでいて神通力を得て「『諸法』、『全てのもの』は空(くう)であ
る」と聞いて心が大いに歓喜して無数の光を放って諸々の「衆生」、「生
者」を仏土へ渡す者を「大いなる樹」と名づける。
(各々、)向上、成長することができ得る。

このように、
迦葉よ、
仏の所説の仏法は、例えるならば、大いなる雲のような物なのである。
「一味」、「究極的には唯一である」という雨によって、人という華を潤す。
各々、果実を成すことを得る。

迦葉よ、まさに、知るべきである。
私、釈迦牟尼仏が諸々の因縁、種々の譬喩によって仏道を開示するのは、私、
釈迦牟尼仏の「方便」、「便宜的な方法」なのである。
諸仏も、また、同様なのである。

(私、釈迦牟尼仏は、)今、あなた達の為に、最も真実な事を説いた。
諸々の声聞達は皆、真の「滅度」に未だいないのである。(ただし、)
あなた達の所行は、菩薩の道なのである。
徐々に、修習して学んで、みな、ことごとく、まさに、仏に成るべきである。

授記品

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、このような詩を説き終わると、諸々の大衆に告げて、このような言葉を話した。

私の、この弟子、摩訶迦葉は、未来、来世で、まさに、三百万億の諸仏にまみえる事ができ得て、(諸仏を)供養して、恭しく敬って、尊重して、ほめたたえて、諸仏の無量の大いなる法を広く説いて、
「最後身」で、光明仏と言う名前の仏に成ることができ得る。
(光明仏の)仏国土の名前は、光徳である。
(光明仏の)劫の名前は、大荘厳である。
(光明)仏の(仮の身の)寿命は、十二小劫である。
(光明仏の)正法は、その世に、二十小劫、住んで留まる。
(光明仏の)像法も、また、二十小劫、住んで留まる。
(光明仏の)仏国土、世界は、荘厳に飾られて、諸々の汚れ、悪いもの、瓦礫、荊棘(イバラ)、排泄物といった不浄なものが無い。
その(光明仏の)仏国土は平らで正しく、上下、穴や丘が無い。
瑠璃(るり)が地に成っている。
宝の樹が並んでいる。
黄金を縄となして、道の境界にして、その道の横に、はられている。
諸々の宝の華を、まき散らしている。
あまねく清浄である。
その仏国土の菩薩は、幾千億もの量り知れないほど無数にいる。
諸々の声聞達も、また、無数にいる。
「魔事」、「悪事」が無い。
「魔」、「悪い霊的存在」、および、「魔民」、「悪い人」がいても、皆、仏法を護っている。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

諸々の「比丘」、「出家者」に告げる。

私(、釈迦牟尼仏)が、仏眼で、この(摩訶)迦葉を見ると、未来、来世で、無数の劫を過ぎてから、まさに、仏に成ることができ得る。
来世で、三百万億の諸仏を供養して、(諸仏に)まみえて、

仏の智慧をえるために、清らかに仏道修行して、
「最上の二足尊」、「仏」を供養し終わると、一切の無上の智慧を修習して、
「最後身」で、仏と成ることができ得る。
その仏国土は清浄である。
瑠璃(るり)を地と成している。
多数の諸々の宝の樹が、道の横に並んでいる。
黄金の縄が、道の境界をしている。
見る者は歓喜する。
常に好い香りが出ている。
多数の名華をまき散らしている。
種々の「奇妙」、「不思議」で、荘厳に飾られている。
その地は平らで正しく、丘や穴が無い。
諸々の菩薩達が、数えられないほど無数にいて、
その心は調整されていて柔軟で、
大いなる「神通」、「理解」をとらえていて、
諸仏の大乗の経典をささげ持っている。

諸々の声聞達である「無漏の」、「煩悩が無い」、「最後身」である「法の王」、「仏」の子も、また、数えられないほど無数にいて、天眼でも数えて知ることは不可能なほどである。
その仏は、まさに、寿命が、十二小劫である。
正法は、その世に、二十小劫、住んで留まる。
像法も、また、二十小劫、住んで留まる。
(摩訶迦葉である)光明仏の事は、このようなのである。

その時、大目犍連、須菩提、摩訶迦旃延などは、皆ことごとく、(仏と成れることに)恐れ震えて、一心に合掌して、世尊を仰いで、じっと見つめて、目を一時も離さず、共同で声を出して、詩で説いて言った。

大いに英雄であり勇猛である世尊(、釈迦牟尼仏)、釈迦族の法の王(である釈迦牟尼仏)は、私達を思いやって、「仏音声」、「仏の教え」を与えてくれました。
私達の奥深くの心を知って見て、その為に、「授記する」、「仏に成れるという予言をする」のは、甘露を注いで熱をとり除いて清涼にさせることができ得るような物なのです。

飢えている国から来て、たちまち大いなる王の食事に遭遇するような物なのです。
(しかし、私達の)心は、なお、疑いと恐れを懐いてしまいます。
未だに、あえて、すぐには食べないような物なのです。
もし、また、「王の教え」、「仏の教え」を得られれば、その後で、あえて食べることができるような物なのです。
私達も、また、同様なのです。
常に、小乗の過ちを思考していましたが、まさに、どのようにすれば、仏の無上の智慧を得られるのか知りませんでした。
「私達は仏に成れる」と言う「仏音声」、「仏の教え」を聞いても、心は、なお、憂いと恐れを懐いてしまっています。
未だに、あえて、すぐには食べないような物なのです。
もし、仏からの「授記」、「仏に成れる予言」をこうむれば、それで、快く、安楽になれます。
大いに英雄で勇猛である世尊(、釈迦牟尼仏)は、常に、世間を安らかにさせようと欲しています。
願わくば、私達に、「記」、「仏に成れる予言」を与えてください。
飢えている者に、ぜひとも食べさせるような物なのです。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、諸々の大いなる弟子達の心に思っている所を知って、諸々の「比丘」、「出家者」達に告げた。

この須菩提は、未来、来世で、三百万億那由他の仏にまみえて、供養して、恭しく敬って、尊重して、ほめたたえて、
常に仏道修行して、菩薩の道を備えて、
「最後身」で、名相仏と言う称号の仏に成ることができ得る。
(名相仏の)劫の名前は、有宝である。
(名相仏の)仏国土の名前は、宝生である。
その地は平らで正しい。
「頗梨」、「水晶」を地と成している。
宝の樹で荘厳に飾られている。
諸々の丘や穴、砂礫、荊棘(イバラ)、排泄物といった汚れが無い。
宝の華が地を覆っている。
あまねく清浄である。
その土地の国民は、皆、宝の台、珍しい妙なる「楼閣」、「高い立派な建物」に処している。

声聞の段階の弟子は、量り知れないほど無数に、無限にいて、数えることも、例えることも、知ることも不可能なほどの所なのである。
諸々の菩薩達は、幾千万億那由他もの無数にいる。
仏の(仮の身の)寿命は、十二小劫である。
正法は、その世に、二十小劫、住んで留まる。
像法も、また、二十小劫、住んで留まる。
その仏は、常に虚空に処して、声聞や菩薩達の為に説法して、量り知れないほど無数の菩薩、および、声聞達を仏土へ渡して解脱させる。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

諸々の「比丘」、「出家者」達よ、
今、あなた達に告げるので、
皆、まさに、一心に、私の所説を聴きなさい。

私の大いなる弟子、須菩提は、まさに、名相仏と言う称号の仏に成ることができ得る。
まさに、幾万、幾億もの無数の諸仏を供養するだろう。
仏の所行に従って、徐々に、大いなる「道」、「真理」を備えていく。
「最後身」で、端正である、とても妙なる、宝の山のような、仏の三十二相を得る。
その仏国土は、「第一に」、「無上に」、荘厳に清浄である。
「衆生」、「生者」で、見る者は、必ず、愛し楽しむ。
名相仏は、その仏国土の中で、量り知れないほど無数の者達を仏土へ渡す。
その仏法の中で、多数の諸々の菩薩達は、皆ことごとく、利発で、不退転の法輪を転じる。
この仏国土は、常に、菩薩によって、荘厳に飾られている。
諸々の声聞達は、数えられないほど無数にいて、皆、「三明」を得ていて、「六神通」を備えていて、「八解脱」に住んで留まっていて、大いなる威徳が有る。
その名相仏の説法は、量り知れないほど無数の神通変化を現して、不可思議である。
諸々の天人、人の国民は、数が「恒(河)沙のようであって」、「ガンジス川の砂のように無数であって」、皆、共に、合掌して、仏の話を聴いて受け入れる。

その名相仏は、(仮の身の)寿命が、まさに、十二小劫である。
正法は、その世に、二十小劫、住んで留まる。
像法も、また、二十小劫、住んで留まる。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、また、諸々の「比丘」、「出家者」達に告げた。

私は、今、あなた達に語る。

この大迦旃延は、未来、来世で、諸々の物で、八千億の諸仏を供養して、仕えて、恭しく敬って、尊重して、
諸仏の(肉体の)死後、各々の仏の、塔廟を建てる。
塔廟の高さは、千由旬である。
塔廟の縦の奥行きと横の広さは、まさに等しく、五百由旬である。
塔廟は、金、銀、瑠璃(るり)、硨磲(しゃこ)、碼碯(めのう)、真珠、「玫瑰」、「現在では謎の、赤い宝石」という七種類の宝によって、合わせて形成される。
多数の華、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、塗香、抹香、焼香、「繒蓋」、「幢旛」によって塔廟を供養する。
この時を過ぎて以後、まさに、また、二万億の諸仏を、また同様にして、供養する。
これらの諸仏を供養し終わると、菩薩の道を備えて、まさに、閻浮那提金光仏と言う称号の仏と成る。
その仏国土は平らで正しい。
「頗梨」、「水晶」を地と成している。
宝の樹で荘厳に飾られている。
黄金を縄となして、道の境界にして、その道の横に、はられている。
妙なる華が地を覆っている。
あまねく清浄である。
見る者は歓喜する。
「地獄、餓鬼、畜生、阿修羅道」という「四悪道」が無い。
天人、人、諸々の声聞達、および、諸々の菩薩達が、幾万億もの量り知れないほど無数に、多数いて、その仏国土を荘厳に飾っている。
閻浮那提金光仏の(仮の身の)寿命は、十二小劫である。
正法は、その世に、二十小劫、住んで留まる。
像法も、また、二十小劫、住んで留まる。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、くり返し、この意義を話したいと欲して、
詩で説いて言った。

諸々の「比丘」、「出家」達よ、皆、一心に、聴きなさい。
私の所説は、真実である。

この(大)迦旃延は、まさに、種々の妙なる好い物で、諸仏を供養して、
諸仏の(肉体の)死後、七種類の宝の塔を建てる。
また、華、香で、「舎利」、「仏の遺骨」を供養する。
その「最後身」で、仏の智慧を得て、「等正覚」、「普遍正覚」を成就する。
仏国土は清浄である。
幾万億もの量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させて、皆、十方で供養される。
仏の光明に、勝ることが可能な者はいない。
その仏の称号は、閻浮金光仏と言う。
菩薩、声聞は、一切の「有」、「輪廻」を断って、量り知れないほど無数にいて、その仏国土を荘厳に飾る。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、また、大衆に告げた。

私は、今、あなた達に語る。

この大目犍連は、まさに、種々の物で、八千の諸仏を供養して、恭しく敬って、尊重して、
諸仏の(肉体の)死後、各々の仏の塔廟を建てる。
塔廟の高さは、千由旬である。
縦の奥行きと横の広さは、まさに等しく、五百由旬である。
塔廟は、金、銀、瑠璃(るり)、硨磲(しゃこ)、碼碯(めのう)、真珠、「玫瑰」、「現在では謎の、赤い宝石」という七種類の宝によって、合わせて形成される。
多数の華、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、塗香、抹香、焼香、「繒蓋」、「幢旛」によって塔廟を供養する。
この時を過ぎて以後、まさに、また、二百万億の諸仏を、また同様にして供養して、まさに、多摩羅跋栴檀香仏と言う称号の仏に成ることができ得る。
劫の名前は、喜満である。

仏国土の名前は、意楽である。
その仏国土は平らで正しい。
「頗梨」、「水晶」を地と成している。
宝の樹で荘厳に飾られている。
真珠の華をまき散らしている。
あまねく清浄である。
見る者は、歓喜する。
諸々の天人、人、菩薩、声聞が多数いて、その数は量り知れないほど無数である。
多摩羅跋栴檀香仏の(仮の身の)寿命は、二十四小劫である。
正法は、その世に、四十小劫、住んで留まる。
像法も、また、四十小劫、住んで留まる。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

私の、この弟子、大目犍連は、この身を捨て終わると、八千二百万億の諸仏にまみえて、仏道のために、供養して、恭しく敬って、
諸仏の所で、常に仏道修行して、量り知れないほど無数の劫、仏法をささげ持って、
諸仏の(肉体の)死後、七種類の宝の塔を建て、
(諸仏の塔廟の前に)「金刹」、「旗竿」を長く立てて表して、
華、香、「伎楽」、「音楽」によって、諸仏の塔廟を供養して、
徐々に、菩薩の道を十分に備え終わると、意楽という仏国土で、多摩羅栴檀之香仏と言う称号の仏と成ることができ得る。
その仏の(仮の身の)寿命は、二十四劫である。
常に、天人と人の為に、仏道を演説する。
声聞は、「恒(河)沙のようであって」、「ガンジス川の砂のように無数であって」、「三明六通」、大いなる威徳が有る。
菩薩は、無数にいて、志が固く、精進して、仏の智慧において皆、不退転である。
多摩羅栴檀之香仏の(肉体の)死後、正法は、まさに、その世に、四十小劫、住んで留まる。
像法も、また、同様である。

私の諸々の弟子のうち、威徳を十分に備えた者の数は五百で、「皆、まさに、未来、来世で、ことごとく、仏に成ることができ得る」と、まさに、「授記する」、「仏に成れる予言をする」。
私、および、あなた達の前世の因縁を、私は、いま、まさに、説きます。
あなた達、善く、聴きなさい。

化城喩品

釈迦牟尼仏は、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。

過去、無量、無限なほど幾不可思議阿僧祇劫もの昔、
その時、大通智勝仏という名前の仏がいた。
その(大通智勝仏の)国の名前は、好成である。
劫の名前は、大相であった。

諸々の「比丘」、「出家者」よ、
大通智勝仏の(肉体の)死後、以来、とても大いに遠い昔になっているのである。
例えば、「三千大千世界」に有る地を、仮に、ある人が磨(す)り潰(つぶ)して墨(すみ)にして、東方へ千の国土を通り過ぎたら、微細な塵(ちり)のような大きさの一点を下に落とすような物なのである。
また、千の国土を通り過ぎたら、また、一点を下に落とす。
このようにして、転々として、地による墨(すみ)を下に落とし尽くす。
あなた達の心において、どうであろうか？
このようにして通り過ぎた諸々の国土の数を、計算する役人、もしくは、計算する役人の弟子が、最後まで知ることができ得るか？　否か？

(諸々の「比丘」、「出家者」は釈迦牟尼仏に答えた。)

でき得ません。
世尊(、釈迦牟尼仏)よ。

(釈迦牟尼仏は、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。)

諸々の「比丘」、「出家者」よ、
点じたり点じなかったりした、例え話の人物が通り過ぎた国土を粉々にし尽くして塵(ちり)にして、
一つの塵を一劫とみなしても、
大通智勝仏の(肉体の)死後、以来、この数を、無量、無限なほど幾百千万億阿僧祇劫も超過しているのである。

私(、釈迦牟尼仏)は、仏の知見の力によって、この遠い昔のことを、今日のことであるかのように観察することができるのである。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

私(、釈迦牟尼仏)が、無量、無限なほど幾劫もの過去の世のことを思い出すと、
大通智勝仏という名前の「仏」、「両足尊」がいた。
ある人が「力」によって「三千大千世界」を磨(す)り潰(つぶ)して、この
諸々の地を尽くして、皆ことごとく墨(すみ)と成して、千の国土を通り過ぎると、一つの塵(ちり)の点を下に落とすような物なのである。
このようにして、転々として、この諸々の塵(ちり)による墨(すみ)を点じ尽くして、
このようにした諸々の点じた国土と点じなかった国土をまた粉々にし尽くして塵(ちり)にして、
一つの塵(ちり)を一劫とみなしても、
この諸々の微細な塵(ちり)の数よりも、その大通智勝仏の(肉体の)死後から釈迦牟尼仏までの劫の数は、超過しているのである。
大通智勝仏の(肉体の)死後から、このように、無量なほどの劫なのである。
(私、釈迦牟尼仏は、)仏の「無礙の智」、「妨げられない智慧」によって、この大通智勝仏の(肉体の)死、および、(大通智勝仏の弟子である)声聞と菩薩を、今、大通智勝仏(の肉体)が死んだかのように見ることができるのである。
諸々の「比丘」、「出家者」よ、まさに、知るべきである。
仏の智慧は、清浄であるし、細かく複雑で絶妙であるし、「無漏である」、「煩悩が無い」し、「無所礙である」、「妨げられない」し、無量の劫に通達している。

釈迦牟尼仏は、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。

大通智勝仏の(肉体の)寿命は、五百四十万億那由他劫であった。
その大通智勝仏は、本(もと)は、道場である菩提樹の下で坐禅して、「魔の軍」、「多数の悪」を破り終わって、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得ようとした。
しかし、諸仏の仏法は、目前に現れなかった。

このように、一小劫、そして十小劫まで、結跏趺坐して、身心が不動であった。
しかし、諸仏の仏法は、なお、目前に現れなかった。
その時、「忉利天」の諸々の天人達は、先んじて、大通智勝仏の為に、菩提樹の下に、高さ一由旬の「獅子の座」、「仏の座」を敷いた。
大通智勝仏は、この「獅子の座」、「仏の座」で、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得ることができた。
大通智勝仏が、この「獅子の座」、「仏の座」で坐禅していた時、諸々の梵天は、一辺が百由旬の一面に、多数の天の華を雨のように降らした。
良い香りの風が、その時、吹いて来て、しぼんだ華を吹き飛ばして、更に新しい華を雨のように降らした。
(諸々の梵天は、)このようにして、絶えず、満十小劫、大通智勝仏に捧げものを捧げた。
(さらに、諸々の梵天は、)大通智勝仏(の肉体)が死ぬまで、常に、この天の華を雨のように降らした。
四天王天の諸々の天人達は、大通智勝仏に捧げものを捧げるために、常に、天の太鼓を打ち鳴らした。
その他の諸々の天人達は、満十小劫、天の音楽を奏でた。
(さらに、天人達は、)大通智勝仏(の肉体)が死ぬまで、同様の捧げものを捧げた。
諸々の「比丘」、「出家者」よ、
大通智勝仏は、十小劫、坐禅して過ごすと、諸仏の仏法が目前に現れて、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を成就した。
その大通智勝仏には、未だ出家していない時に、十六人の子達がいた。
その大通智勝仏の長男の名前は智積と言う。
大通智勝仏の諸々の子達には、各々、種々の珍しい玩具(おもちゃ)が有った。
(大通智勝仏の子達は、)「父である大通智勝仏が『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を成就でき得た」と聞くと、皆、所有していた珍しい玩具(おもちゃ)を捨てて、大通智勝仏の所へ行った。
諸々の母達は、泣く泣く、従って、この大通智勝仏の子達を送った。
その祖父である転輪聖王と百人の大臣、および、その他の百千万億人の国民は、皆、共に、(大通智勝仏の子達を)囲んで、従って、道場である菩提樹の下に至った。
皆ことごとく、大通智勝仏に親しみ近づきたいと欲して、
大通智勝仏に捧げものを捧げ、恭しく敬い、尊重し、ほめたたえ、
菩提樹の下に到着し終わると、頭を大通智勝仏の足につけて敬礼して、

仏の周りを右回りに三周するという敬礼をし終わると、一心に合掌して、大通智勝仏を仰ぎ見て、詩をうたって、言った。

大いなる威徳がある世尊、大通智勝仏は、「衆生」、「生者」を仏土へ渡すために、無量なほど幾億年も坐禅して、仏に成ることができ得た。
(大通智勝仏は、)諸々の願いを既に十分に備えている。
善いかな。
(大通智勝仏の)「吉」、「善さ」は無上である。
仏は、とても希有なのである。
(大通智勝仏は、)一度に十小劫も坐禅して、身体、手足を静かに安らげて不動であった。
その大通智勝仏の心は、常に、あっさりとしていて、未だかつて散乱したことが無い。
(仏は、)最終的に、永遠に、(悪を)寂滅させている。
(仏は、)「無漏の」、「煩悩を無くす」仏法に安住している。
今、大通智勝仏が安穏として仏道を成就したのを見て、私達は、善い利益を得て、大いに喜んでいる。
「衆生」、「生者」は、常に、苦悩している。
(生者は、)盲目的であるし、導師がいない。
(生者は、)苦を無くし尽くす「道」、「真理」を知らない。
(生者は、)解脱を求めることを知らない。
(生者は、)「長夜」、「輪廻転生」で、「悪趣」、「悪行による状態」を増やしてしまう。
(生者は、)諸々の天人達の数に入ることができなくなってしまう。
(生者は、)闇から闇へと入っていってしまう。
(生者は、)長い間、「仏」という名前、言葉を聞くことができない。
今、大通智勝仏は、最上の、安穏とさせてくれる「無漏の」、「煩悩を無くす」仏法を得ました。
私達、および、天人、人は、最大の利益を得ることができるのです。
このため、皆ことごとく、頭を地につけて敬礼して、無上に尊い者である大通智勝仏に「帰命」、「帰依」します。

その時、大通智勝仏の十六王子達は、詩で、大通智勝仏をほめたたえ終わると、大通智勝仏に「法輪を転じること」、「法を説くこと」を勧めて請い願って、皆ことごとく、このような言葉を言った。

大通智勝仏の説法は、安穏とさせてくれる所が多いはずです。
諸々の天人、人をあわれんで、利益をもたらしてください。

(大通智勝仏の十六王子達は、)くり返し、詩で説いて言った。

「世雄」、「仏」は、無双であるし、比類無い。
(仏は、)多数の幸福をもたらす善行で自らを荘厳に飾っている。
(仏は、)無上の智慧を得ている。
願わくば、世間のために、説法して、私達、および、諸々の「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させてください。
そのために、仏の智慧を分別して、現して示して、得させてください。
私達が仏を得たように、「衆生」、「生者」も、また、そうなりますように。
仏は、「衆生」、「生者」の心の奥深くの思いを知っています。
また、(仏は、)生者の所行と道を知っています。
また、(仏は、)生者の知力、欲望、願望、および、幸福をもたらす修めている善行、前世の所行を知っています。
仏は、生者の、ことごとくを知り終わると、「無上の法輪を転じる」、「無上の仏法を説く」はずです。

釈迦牟尼仏は、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。

大通智勝仏が、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得た時、
十方の各方向の五百万億の諸仏の世界は(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動して、
それらの国々の中間、「幽冥の所」、「冥界」、太陽と月の威光が照らすことが不能な所が、皆、大いに明るくなった。
その中の「衆生」、「生者」は、各々、相互に見合うことができ得て、皆ことごとく、このような言葉を言った。

この中に、どうして、たちまち、「衆生」、「生者」が生じたのか？

また、その国の、諸々の天人達の宮殿、(大梵天にある)梵天の宮殿までも、
(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動した。
大いなる光が、あまねく照らして、あまねく世界に満ちて、諸々の天人達の光よりも勝っていた。

その時、東方の五百万億の諸々の国土の中の、(大梵天にある)梵天の宮殿を、光明が照らして、日常の明るさの倍の明るさになった。
(東方の)諸々の梵天は、各々、このように思った。

今、宮殿の、光明は、未だかつて無い。
どんな「因縁」、「理由」によって、この相が現されているのか？

この時、(東方の)諸々の梵天は、集まって来て、共に、この事について協議した。
この集まっている者達の中に、救一切という名前の一人の大いなる梵天がいて、(東方の)諸々の梵天達の為に、詩で説いて言った。

私達の諸々の宮殿の、光明は、未だかつて無い。
これは、どんな「因縁」、「理由」による物であるのか？
共に、これを探求するべきである。
「大徳」、「仏」が天に生じたのか？
仏が世間に出現したのか？
この大いなる光明は、十方をあまねく照らしている。

その時、(東方の)五百万億の国土の諸々の梵天は、宮殿と共に、各々、衣の裾(すそ)に諸々の天の華を盛って、共に、西方へ行って、この相を探し尋ねると、大通智勝仏が道場である菩提樹の下の「獅子の座」、「仏の座」に坐禅しているのを見た。
また、諸々の天人、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達が、大通智勝仏を、恭しく敬って、囲んでいるのを見た。
また、大通智勝仏の十六王子達が大通智勝仏に「法輪を転じること」、「法を説くこと」を請い願っているのを見た。
すぐに、(東方の)諸々の梵天は、頭を大通智勝仏の足につけて敬礼して、幾百、幾千周も大通智勝仏の周りを回って敬礼して、
天の華を大通智勝仏の上に、まき散らした。
その、まき散らされた天の華は、須弥山のように、高く蓄積された。
(東方の諸々の梵天は、)大通智勝仏の道場である菩提樹にも捧げものを捧げた。
その菩提樹の高さは十由旬であった。
(東方の諸々の梵天は、)天の華を捧げ終わると、各々、宮殿をこの大通智勝仏に捧げて、

このような言葉を言った。

ただ、私達をあわれんで、利益をもたらしてください。
捧げた宮殿を、願わくば、受け入れてください。

その時、(東方の)諸々の梵天は、大通智勝仏の前で、一心に、声を同じくして、詩をうたって、言った。

仏は、とても希有であり、会うのが難しい。
(仏は、)無量の功徳を備えている。
(仏は、)一切(の生者)を救って護ることが可能である。
(仏は、)天人、人の大いなる師である。
(仏は、)世間をあわれんでくれる。
十方の諸々の「衆生」、「生者」は、あまねく、皆、利益をこうむる。
私達は、五百万億の国から来ました。
(私達が、)深い禅定の楽しみを捨てたのは、仏に捧げものを捧げるためです。
私達の前世の、幸福をもたらす善行は、宮殿を、とても荘厳に飾っていますが、今、宮殿を仏に捧げます。
ただ、願わくば、あわれんで、受け入れてください。

その時、(東方の)諸々の梵天は、詩で大通智勝仏をほめたたえ終わると、
各々、このような言葉を言った。

ただ願わくば、大通智勝仏よ、「法輪を転じて」、「法を説いて」、「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させて、涅槃への道を開いてください。

その時、(東方の)諸々の梵天は、一心に、声を同じくして、詩で説いて言った。

「世雄」、「両足尊」、「仏」よ、ただ願わくば、法を演説して、大いなる「慈悲」、「思いやり」の力によって、苦悩している「衆生」、「生者」を仏土へ渡してください。

その時、大通智勝仏は黙って、これを許した。

また、諸々の「比丘」、「出家者」よ、

東南方の五百万億の国土の諸々の大いなる梵天は、各自、宮殿を光明が照らす未だかつて無い光景を見て、歓喜して、心が踊躍して、希有の心が生じて、各々、集まって来て、共に、この事を協議した。
その時、この集まっている者達の中に、大悲と言う名前の一人の大いなる梵天がいて、諸々の梵天達の為に、詩で説いて言った。

どんな「因縁」、「理由」によって、この事、この相が現されているのか？
私達の諸々の宮殿の、光明は、未だかつて無い。
「大徳」、「仏」が天に生じたのか？
仏が世間に出現したのか？
この相を未だかつて見たことが無い。
共に、一心に、探求するべきである。
千万億の土地を通り過ぎても、光を尋ねて、共に、この光の原因を探し求めるべきである。
多分、これは、仏が世に出現して、苦しんでいる「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させているのである。

その時、(東南方の)五百万億の諸々の梵天は、宮殿と共に、各々、衣の裾(すそ)に諸々の天の華を盛って、共に、西北方へ行って、この相を探し尋ねると、大通智勝仏が道場である菩提樹の下の「獅子の座」、「仏の座」に坐禅しているのを見た。
また、諸々の天人、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達が、大通智勝仏を、恭しく敬って、囲んでいるのを見た。
また、(大通智勝仏の)十六王子達が、大通智勝仏に「法輪を転じること」、「法を説くこと」を請い願っているのを見た。
その時、(東南方の)諸々の梵天は、頭を大通智勝仏の足につけて敬礼して、
幾百、幾千周も大通智勝仏の周りを回って敬礼して、
天の華を大通智勝仏の上に、まき散らした。
まき散らされた天の華は、須弥山のように、高く蓄積された。
また、大通智勝仏の菩提樹にも捧げものを捧げた。
天の華を捧げ終わると、各々、宮殿をこの大通智勝仏に捧げて、
このような言葉を言った。

ただ、私達をあわれんで、利益をもたらしてください。
捧げた宮殿を、願わくば、受け入れてください。

その時、(東南方の)諸々の梵天は、大通智勝仏の前で、一心に、声を同じくして、詩をうたって、言った。

神聖な主である仏よ、
「天の中の天」、「神の中の神」、「真の神」である仏よ、
迦陵頻伽のような美しい声で「衆生」、「生者」を思いやる者である仏よ、
私達は、今、仏を敬礼します。
仏は、とても希有である。とても長い時間に一度、出現する。
百八十劫も空しく仏無しで過ぎた時、
「地獄、餓鬼、畜生」という「三悪道」は(悪人で)充満したし、
諸々の天人達の数は減少してしまった。
今、大通智勝仏は、世に出現してくれました。
仏は、「衆生」、「生者」の為に、(正しくものを見る)眼を作ります。
仏は、世間のものが最終的に帰って行く所の者です。
仏は、一切(の生者)を救って護ります。
仏は、「衆生」、「生者」の父です。
仏は、(生者を)思いやり、利益をもたらす者です。
私達は、前世の幸福をもたらす善行によって、今、大通智勝仏に会うことができ得ました。

その時、(東南方の)諸々の梵天は、詩で大通智勝仏をほめたたえ終わると、各々、このような言葉を言った。

ただ願わくば、大通智勝仏よ、一切(の生者)をあわれんで、「法輪を転じて」、「法を説いて」、「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させてください。

その時、(東南方の)諸々の梵天は、一心に、声を同じくして、詩で説いて言った。

大いなる神聖な者である仏よ、「法輪を転じて」、「法を説いて」、「諸法」、「全てのもの」の相を現して示して、苦悩している「衆生」、「生者」を仏土へ渡して、大いなる喜びを得させてください。
「衆生」、「生者」が、この仏法を聞けば、「道」、「真理」を会得するか、もしくは、天に生じるので、(地獄といった)諸々の「悪道」は(悪人の数が)減少するし、忍耐強く善行を行う者は利益を増やすことができます。

その時、大通智勝仏は、黙って、これを許した。

また、諸々の「比丘」、「出家者」よ、
南方の五百万億の国土の諸々の大いなる梵天は、各自、宮殿を光明が照らす未だかつて無い光景を見て、歓喜して、心が踊躍して、希有の心が生じて、各々、集まって来て、共に、この事を協議した。

どんな「因縁」、「理由」によって、私達の宮殿に、この光が有るのか？

この集まっている者達の中に、妙法と言う名前の一人の大いなる梵天がいて、諸々の梵天達の為に、詩で説いて言った。

私達の諸々の宮殿を、光明の、非常な威光が照らしている。
これは、「因縁」、「理由」が有る。
この相を探求するべきである。
幾百、幾千劫を過ぎても、この相を未だかつて見たことが無い。
「大徳」、「仏」が天に生じたのか？
仏が世間に出現したのか？

その時、(南方の)五百万億の諸々の梵天は、宮殿と共に、各々、衣の裾(すそ)に諸々の天の華を盛って、共に北方へ行って、この相を探し尋ねると、大通智勝仏が道場である菩提樹の下の「獅子の座」、「仏の座」に坐禅しているのを見た。
また、諸々の天人、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達が、大通智勝仏を、恭しく敬って、囲んでいるのを見た。
また、大通智勝仏の十六王子が、大通智勝仏に、「法輪を転じること」、「法を説くこと」を請い願っているのを見た。
その時、(南方の)諸々の梵天は、頭を大通智勝仏の足につけて敬礼して、幾百、幾千周も大通智勝仏の周りを回って敬礼して、
天の華を大通智勝仏の上に、まき散らした。
まき散らされた天の華は、須弥山のように、高く蓄積された。
また、(南方の諸々の梵天は、)大通智勝仏の菩提樹にも捧げものを捧げた。
(南方の諸々の梵天は、)天の華を捧げ終わると、各々、宮殿を、この大通智勝仏に捧げて、
このような言葉を言った。

ただ、私達をあわれんで、利益をもたらしてください。
捧げた宮殿を、願わくば、受け入れてください。

その時、(南方の)諸々の梵天は、大通智勝仏の前で、一心に、声を同じくして、詩をうたって、言った。

仏は、会うのが、とても難しい。
諸々の煩悩を打ち破った者である仏に、百三十劫を過ぎて、今、一度、会うことができ得た。
諸々の飢え渇いていた「衆生」、「生者」が、法という雨によって満たされているのは、未だかつて見たことが無い。
無量の知恵者である仏は、「三千年に一度、咲く」と言われる優曇波羅華のように会うのが難しい。
今日、仏に会えた。
私達の諸々の宮殿は、(仏の)光をこうむって荘厳に飾られている。
大通智勝仏よ、大いなる「慈悲」、「思いやり」で、ただ願わくば、宮殿という捧げ物を受け入れてください。

その時、(南方の)諸々の梵天は、詩で大通智勝仏をほめたたえ終わると、
各々、このような言葉を言った。

ただ願わくば、大通智勝仏よ、「法輪を転じて」、「法を説いて」、一切の世間の諸々の天人、魔、梵天、「沙門」、「出家者」、バラモンといった皆に、安穏を獲得させて、仏土へ渡して、解脱でき得させてください。

その時、(南方の)諸々の梵天は、一心に、声を同じくして、詩をうたって、言った。

ただ願わくば、天人と人の無上の尊い者である仏よ、
「無上の法輪を転じて」、「無上の法を説いて」、
「大いなる法という太鼓を打ち鳴らして」、「大いなる法を説いて」、
大いなる法螺貝のラッパを吹いて、
大いなる法という雨をあまねく、雨のように降らして、
量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡してください。

私達は、皆ことごとく、仏に帰依して、深遠な「音」、「仏の教え」を演説してくれることを請い願います。

その時、大通智勝仏は、黙って、これを許した。

西南方から下方までの梵天も、また、同様であった。

その時、上方の五百万億の国土の諸々の大いなる梵天は、皆ことごとく、とまっている宮殿を、光明の威光が照らす未だかつて無い光景を自ら見て、歓喜して、心が踊躍して、希有の心が生じて、各々、集まって来て、共に、この事を協議した。

どんな「因縁」、「理由」によって、私達の宮殿には、この光明が有るのか？

この集まっている者達の中に、尸棄と言う名前の一人の大いなる梵天がいて、諸々の梵天達の為に、詩で説いて言った。

今、どんな「因縁」、「理由」によって、私達の諸々の宮殿を、威徳の光明が照らして荘厳に飾って、未だかつて無いのか？
このような妙なる相は、未だかつて見聞きしたことが無い。
「大徳」、「仏」が天に生じたのか？
仏が世間に出現したのか？

その時、(上方の)五百万億の諸々の梵天は、宮殿と共に、各々、衣の裾(すそ)に諸々の天の華を盛って、共に下方へ行って、この相を探し尋ねてみると、大通智勝仏が道場である菩提樹の下の「獅子の座」、「仏の座」に坐禅しているのを見た。
また、諸々の天人、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達が、大通智勝仏を、恭しく敬って、囲んでいるのを見た。
また、大通智勝仏の十六王子が、大通智勝仏に「法輪を転じること」、「法を説くこと」を請い願っているのを見た。
その時、(上方の)諸々の梵天は、頭を大通智勝仏の足につけて敬礼して、幾百、幾千周も大通智勝仏の周りを回って敬礼して、
天の華を大通智勝仏の上に、まき散らした。
まき散らされた天の華は、須弥山のように、高く蓄積された。

また、大通智勝仏の菩提樹にも捧げものを捧げた。
(上方の諸々の梵天は、)天の華を捧げ終わると、各々、宮殿を、この大通智勝仏に捧げて、
このような言葉を言った。

ただ、私達をあわれんで、利益をもたらしてください。
捧げた宮殿を、願わくば、受け入れてください。

その時、(上方の)諸々の梵天は、大通智勝仏の前で、一心に、声を同じくして、詩をうたって、言った。

善いかな。
救世の神聖な尊い者達、諸仏は、三界という牢獄から、つとめて、諸々の「衆生」、「生者」を救い出すことが可能です。
普遍の智慧がある天人と人の無上の尊い者である仏は、「群萌」、「生者」をあわれんで、甘露のように甘い法への門を開いて、一切の(生)者を広く仏土へ渡すことが可能です。
昔、量り知れないほど無数の劫、空しく時が過ぎて、仏が未だ出現しなかった時、
十方は、常に、闇であるし、暗かったし、
「三悪道」(の悪人)は増長してしまったし、
「阿修羅道」も、また、(悪人が)盛んであったし、
諸々の天人達は、「うたた」、「とても」減って、死んで、多数が、「悪道」に堕ちてしまったし、
仏に従って仏法を聞くことができなかったし、
常に、悪事を行ってしまったし、
色形、力、および、智慧、これらが皆、減少してしまったし、
罪業の因縁のために、安楽、および、安楽な想いを失ってしまったし、
邪悪な見解によるものに留まってしまったし、
善い規則を知らなかったし、
仏の化の導きをこうむれず、常に、「悪道」に堕ちてしまった。
仏は、世間(を正しく見る)眼を作る。
(仏は、)とても長い間に(一度、)出現する。
(仏は、)諸々の「衆生」、「生者」をあわれんで、世間に出現して、超越して、(無上普遍)正覚を成就する。
私達は、とても喜んでいます。

また、(上方の梵天以外の)他の一切の生者達も、(大通智勝仏が仏に成ったという)未だかつて無いことを喜んで、ほめたたえています。
私達の諸々の宮殿は、(仏の)光をこうむって、荘厳に飾られています。
今、宮殿を、大通智勝仏に捧げます。
ただ、あわれんで、受け入れてください。
願わくば、この功徳を、一切(の生者)に、あまねく及ぼして、私達(、上方の梵天)と「衆生」、「生者」が皆、共に、仏道を成就できますように。

その時、(上方の)五百万億の諸々の梵天は、詩で大通智勝仏をほめたたえ終わると、各々、大通智勝仏に言った。

ただ願わくば、大通智勝仏よ、「法輪を転じて」、「法を説いて」、多数の安穏をもたらしてください。多数の(生)者を仏土へ渡して解脱させてください。

その時、(上方の)諸々の梵天は、詩で説いて言った。

仏よ、
「法輪を転じてください」、「法を説いてください」。
「甘露のように甘い法という太鼓を打ち鳴らしてください」、「甘露のように甘い法を説いてください」。
苦悩している「衆生」、「生者」を仏土へ渡してください。
「涅槃」、「(悪の)寂滅」への道を開示してください。
ただ願わくば、私達の請願を受け入れて、大いなる細かく複雑で絶妙な「音」、「仏の教え」をあわれんでください。量り知れないほど無数の劫、修習してきている仏法を説明してください。

その時、大通智勝仏は、十方の諸々の梵天の請願、および、十六王子の請願を受け入れて、即時、「三転十二行相」、「四諦」、「苦集滅道」という「法輪を転じた」、「法を説いた」。
「三転十二行相」、「四諦」、「苦集滅道」は、(仏ではない)「沙門」、「出家者」、バラモン、天人、魔、梵天、他の世間のものには、「転じることが不可能な法である」、「説くことが不可能な法である」。
「三転十二行相」、「四諦」、「苦集滅道」とは、次のような物である。

(この世の全てのものは、)苦しみである。

(執着によって、)苦しみを集めてしまっている。
苦しみを滅ぼすことができる。
(「八正道」という)苦しみを滅ぼす道がある。

また、(大通智勝仏は、)「十二因縁」という法を広く説いた。
(「十二因縁」とは、次のような物である。)

「無明」が、「行」の原因である。
「行」が、「識」の原因である。
「識」が、「名色」の原因である。
「名色」が、「六入」の原因である。
「六入」が、「触」の原因である。
「触」が、「受」の原因である。
「受」が、「愛」、「愛着」の原因である。
「愛」、「愛着」が、「取」の原因である。
「取」が、「有」の原因である。
「有」が、「生」の原因である。
「生」が、「老死」という憂悲、苦悩の原因である。

「無明」が滅べば、「行」も滅ぶ。
「行」が滅べば、「識」も滅ぶ。
「識」が滅べば、「名色」も滅ぶ。
「名色」が滅べば、「六入」も滅ぶ。
「六入」が滅べば、「触」も滅ぶ。
「触」が滅べば、「受」も滅ぶ。
「受」が滅べば、「愛」、「愛着」も滅ぶ。
「愛」、「愛着」が滅べば、「取」も滅ぶ。
「取」が滅べば、「有」も滅ぶ。
「有」が滅べば、「生」も滅ぶ。
「生」が滅べば、「老死」という憂悲、苦悩も滅ぶ。

大通智勝仏が天人、人の大衆の中で、この法を説いた時、六百万億那由他の人が一切の「法」、「もの」を「受」しないことによって諸々の「漏」、「煩悩」から心が解脱することができ得て皆、深い妙なる「禅定」と三明六通を得て「八解脱」を備えた。

第二、第三、第四の説法の時、千万億恒河沙那由他の「衆生」、「生者」達も、また、一切の「法」、「もの」を「受」しないことによって諸々の「漏」、「煩悩」から心が解脱することができ得た。
この時より以後、諸々の声聞の段階の者達の数は、無限なほど、はかり知れないほど無数になった。
その時、大通智勝仏の十六王子は皆、まだ幼かったため、出家して「沙弥」、「未成年の出家者」と成った。
(大通智勝仏の十六王子は、)諸々の「根」、「能力」が利発で、智慧が聡明で、(前世で)既にかつて百千万億の諸仏に捧げものを捧げてきていて、清浄に仏道修行して、「阿耨多羅三藐三菩提」、「仏に成ること」を求めていて、共に大通智勝仏に言った。

大通智勝仏よ、
この諸々の幾千万億もの量り知れないほど無数の高徳な声聞の段階の者達は皆、既に声聞の段階を成就しています。
大通智勝仏よ、
私達の為に、「阿耨多羅三藐三菩提の法」、「仏に成るための法」を説くべきです。
私達は、聞き終わったら、皆で共に、修学します。
大通智勝仏よ、
私達は、仏の知見を得ようと志願しています。
(私達の)心の奥深くの思いは、大通智勝仏、御自身が明らかに御存知のはずです。

その時、(祖父である)転輪聖王が率いている者達の中の八万億人は、大通智勝仏の十六王子が出家するのを見た。
また、八万億人は、自身の出家を、求めた。
転輪聖王は、八万億人の出家を許した。
その時、この大通智勝仏は、「沙弥」、「未成年の出家者」に成った十六王子の請願を受け入れて、二万劫が過ぎ終わると、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の中で、「妙法蓮華」、「教菩薩法」、「仏所護念」という名前の、この大乗経を説いた。
大通智勝仏が、この経を説き終わると、十六王子である十六沙弥は、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」のために、皆、共に、受持して、読んで、通達して利益を得た。

大通智勝仏が、この経を説いた時、十六菩薩である十六沙弥は、皆ことごとく、信じて受け入れた。
声聞の段階の者達の中にも、また、信じて理解する者達がいた。
幾千万億種類もの、その他の「衆生」、「生者」達は、皆、疑惑を生じてしまった。
大通智勝仏は、この経を八千劫、説いて、未だかつて止めたことが無かった。
大通智勝仏は、この経を説き終わると、静かな部屋に入って、八万四千劫、禅定に留まった。
この時、十六菩薩である十六沙弥は、大通智勝仏が静かな部屋に入って静かに禅定しているのを知って、各々、法座に昇って、説法した。
また、十六菩薩は、八万四千劫、「四(部)衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の為に、妙なる法華経を広く説いて分別して、各々、皆、六百万億那由他恒河沙の「衆生」、「生者」達を仏土へ渡して、利益を教示して、喜ばせて、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を志して求める心を起こさせた。
大通智勝仏は、八万四千劫を過ぎ終わると、三昧より起きて、法座へ行って、安らかに、「詳(つまび)らかに」、「はっきりと」、坐禅して、大衆に、あまねく告げた。

この十六菩薩である十六沙弥は、とても希有なのである。
十六菩薩には、諸々の「根」、「能力」があって、仏法に通じて利益を得ているほどである。
十六菩薩は、智慧が、聡明である。
十六菩薩は、(前世で)既にかつて幾千万億の数もの量り知れないほど無数の諸仏に捧げものを捧げてきている。
十六菩薩は、諸仏の所で、常に、仏道修行してきている。
十六菩薩は、仏の智慧を受持して、開示して、「衆生」、「生者」をその仏の智慧の中に引き入れている。
あなた達は、皆、何度でも、十六菩薩に親しみ近づいて捧げものを捧げるべきである。
理由は何か？　(と言うと、)
もし、声聞と「辟支仏」、「独覚」と諸々の菩薩が能(よ)く、この十六菩薩の所説の経の法を信じて受持して破らず守れば、この人達は皆、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」の仏の智慧を得る。

釈迦牟尼仏は、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。

この十六菩薩は、常に、この妙法蓮華経を説くことを願った。
十六菩薩が各々化して導いた六百万億那由他恒河沙の「衆生」、「生者」は生から生へ十六菩薩と共に生きて、その十六菩薩に従って仏法を聞いて、ことごとく皆、信じて理解した。
(十六菩薩の一人であった私、釈迦牟尼仏は、)この因縁によって、四万億の諸仏に会うことができ得て、今も尽きることが無いのである。
諸々の「比丘」、「出家者」よ、私、釈迦牟尼仏は、今、あなた達に語る。
この大通智勝仏の弟子である十六沙弥は、今は、皆、「阿耨多羅三藐三菩提を得て」、「無上普遍正覚を得て」、「仏に成って」、
十方の仏国土で、現在も、説法していて、
幾百千万億もの量り知れないほど無数の菩薩と声聞がいて、眷属としているのである。

その十六沙弥のうち二人の沙弥は、東方で、仏と成っている。
一人目は、阿閦仏という名前であり、歓喜国にいる。
二人目は、須弥頂仏という名前である。
十六沙弥のうち二人の沙弥が、東南方の二人の仏である。
一人目は、獅子音仏という名前である。
二人目は、獅子相仏という名前である。
十六沙弥のうち二人の沙弥が、南方の二人の仏である。
一人目は、虚空住仏という名前である。
二人目は、常滅仏という名前である。
十六沙弥のうち二人の沙弥が、西南方の二人の仏である。
一人目は、帝相仏という名前である。
二人目は、梵相仏という名前である。
十六沙弥のうち二人の沙弥が、西方の二人の仏である。
一人目は、阿弥陀仏という名前である。
二人目は、度一切世間苦悩仏という名前である。
十六沙弥のうち二人の沙弥が、西北方の二人の仏である。
一人目は、多摩羅跋栴檀香神通仏という名前である。
二人目は、須弥相仏という名前である。
十六沙弥のうち二人の沙弥が、北方の二人の仏である。
一人目は、雲自在仏という名前である。
二人目は、雲自在王仏という名前である。

十六沙弥のうち一人の沙弥が、東北方の仏であり、壊一切世間怖畏仏という名前である。
十六沙弥のうち第十六番目が、私、釈迦牟尼仏であり、「娑婆」、「この世」で「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を成就して仏に成った。

諸々の「比丘」、「出家者」よ、
私達、十六人の仏が、十六沙弥であった時、各々教化した幾百千万億恒河沙もの量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」が、私達に従って仏法を聞いているのは、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」の為である。
この諸々の「衆生」、「生者」には、今でも声聞の境地に留まっている者がいる。
私、釈迦牟尼仏は、常に、この諸々の人達に、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を教化している。
この諸々の人達は、この法によって、徐々に、仏道へ入る。
理由は、何か？　(と言うと、)
仏の智慧は、信じることが難しいし、理解することが難しい。

釈迦牟尼仏達が、その十六沙弥であった時に化して導いた幾恒河沙もの量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」が、あなた達、諸々の「比丘」、「出家者」なのであるし、また、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後の未来、来世の声聞の弟子なのである。
私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、ある弟子は、この経を聞くことが無くて、菩薩の所行を覚知せず、自ら「所得している功徳によって悪を滅度した」という誤った想いを生じてしまって「涅槃」、「煩悩の寂静」に入ってとどまってしまう。(しかし、)
私、釈迦牟尼仏が他国で仏に成って更に釈迦牟尼仏とは異なる名前でも、この人は、「悪を滅度した」という誤った想いを生じてしまっていて「涅槃」、「煩悩の寂静」に入ってとどまってしまっていても、この他国で仏の智慧を求めて、この経を聞くことができ得る。
仏乗によってのみ、真の「悪の滅度」を得ることができるのである。
(仏乗以外に)更に他の乗は無いのである。(実は、声聞乗、独覚乗は仏乗の一部なのである。)
ただし、諸仏の「方便」、「便宜的な方法」の説法を除く。
諸々の「比丘」、「出家者」よ、
もし仏が「真の『涅槃』、『悪の寂滅』をもたらす時が到来した」と自ら知れば、

また、仏の弟子達も、また、清浄で、信じて理解する力が堅固で、「空(くう)の法」、「仏法」に明らかに通達していて、禅定に深く入ることができれば、
仏は、諸々の菩薩、および、声聞達を集めて、菩薩、独覚、声聞の為に、この経を説くのである。
世間には唯一無二の仏乗だけが存在していて、仏乗によってのみ真の「悪の滅度」を得ることができるのである。
唯一、仏乗のみが真の「悪の滅度」を得させるのである。
「比丘」、「出家者」よ、まさに、知るべきである。
仏は、「方便」、「便宜的な方法」で、「衆生」、「生者」の性質に深く入って、その生者の志が「小法」、「中途半端の法」、「矮小な物」を願ってしまっていて、生者が「五欲」、「五感の欲望」に深く執着してしまっているのを知って、これらの生者のために、「涅槃」、「煩悩の寂静」を説く。
これらの人達は、「涅槃」、「煩悩の寂静」を、もし聞けば、信じて受け入れる。
例えば、
空しく、地平線で道が絶えていて果てが見えず、無人で、恐ろしい場所である、五百由旬もの険しい困難な悪路の道があって、
この道を通り過ぎて、珍しい宝の場所へ至ろうと欲する、多数の者達がいて、聡明で智慧に明らかに通達していて、険しい道の通じていたり塞がっていたりする相を善く知っていて、人々を率いて導いて、この難所を通り過ぎたいと欲する、一人の導師がいるような物なのである。

率いられている人々は、途中で、怠けて、心を後退させて、導師に言った。

私達の疲れは極限に達しているし、恐ろしいので、前進することが不可能です。
前途は、なお遠いです。
今、後退して、元に戻りたいと欲します。

導師には諸々の「方便」、「便宜的な方法」が多数あって、導師は、このように思った。

これらの人々は、あわれむべき人々で、どうして、大いなる珍しい宝を捨てて、後退して、元に戻りたいと欲するのか？

導師は、このように思うと、「方便」、「便宜的な方法」の力で、険しい道中の三百由旬を過ぎたあたりに、一つの仮の城を化生させて作って、人々に告げて言った。

あなた達、
怖れることなかれ。
後退して元に戻ることなかれ。
今、この大いなる城の中で休むことが可能であり、思い通りに休むことができる。
もし、この城に入れば、快く安穏となることができ得る。
もし前進して宝の場所へ至ることが可能になったら、この城を去ることも、また、可能である。

この時、疲れが極限に達していた人々は、心が大いに歓喜して、未だかつて無いことをほめたたえて、言った。

私達は、今、この悪路の道を免れて、快く安穏となることができ得る。

ここで、人々は、前進して、仮の城に入って、「既に仏土へ渡り終わった」という誤った想いを生じてしまって、安穏な想いを生じた。

その時、導師は、この人々が既に休むことができ得て疲れが無く成ったのを知ると、仮の城を隠して、人々に語って言った。

あなた達、城を去って、来なさい。
宝の場所は、近くにある。
向こうの大いなる城は、私が化生させて作った物で、休ませるためだけの物なのである。

諸々の「比丘」、「出家者」よ、
仏も、また、同様なのである。
私、釈迦牟尼仏は、今、あなた達の為に、大いなる導師と成って、諸々の生死の煩悩という悪路の道は険しく困難で長く遠いが、脱出して去るべきであるし、仏土へ渡るべきであると知っている。

もし「衆生」、「生者」が、ただ、唯一の仏乗を聞けば、仏にまみえることを欲しないし、仏に親しみ近づくことを欲しないので、仏は、このように思った。

仏道は、長く遠く、長い間、精勤して苦しみを受けて、成就することができ得るのである。

仏は、この生者の心が、ひるむし、弱いし、下劣であるのを知って、
「方便」、「便宜的な方法」の力で、途中で休ませるために、(声聞乗と独覚乗という)二つの「涅槃」、「煩悩の寂静」を説いた。
もし「衆生」、「生者」が(声聞乗と独覚乗という)二つの境地に留まってしまったら、
仏は、その時、生者の為に、このように説く。

あなた達は、所作を未だわきまえていない。
あなた達が留まっている(声聞乗と独覚乗という)境地は、仏の智慧に近いのである。
得ている「涅槃」、「煩悩の寂静」を観察して数えて量れば、得ている「涅槃」、「煩悩の寂静」は真実の「涅槃」、「悪の寂滅」ではないとわかるはずである。
声聞乗と独覚乗とは、仏が「方便」、「便宜的な方法」の力で、唯一の仏乗を三段階に分別して説いただけの物なのである。
例え話の導師が、休ませるために、大いなる仮の城を化生させて作ったような物なのであるし、
例え話の導師が、例え話の人々が既に休み終わっているのを知ると、例え話の人々に告げて、このように言うような物なのである。

宝の場所は、近くにある。
この仮の城は、真実の物ではない。
私が、仮に一時的に化生させて作っただけの物なのである。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

大通智勝仏は十劫、道場である菩提樹の下で坐禅したが、仏法は目前に現れず、仏道を成就することができ得なかった。

諸々の天人、龍王、阿修羅達などは、常に、天の華を雨のように降らして、この大通智勝仏に捧げた。
諸々の天人は、天の太鼓を打ち鳴らしたし、多数の「伎楽」、「音楽」を演奏した。
良い香りの風が、しぼんだ華を吹き飛ばして、更に新しい好い華を雨のように降らした。
大通智勝仏は、十小劫を過ぎ終わると、仏道を成就することができ得た。
諸々の天人、および、世の人々は、皆、心が踊躍した。
この大通智勝仏の十六人の子達は、皆、その千万億人の眷属と共に、大通智勝仏を囲んだ。
大通智勝仏の十六人の子達は、共に、大通智勝仏の所へ行って至ると、頭を大通智勝仏の足につけて敬礼して、大通智勝仏が「法輪を転じること」、「法を説くこと」を請い願って、言った。

神聖なる獅子である仏よ、
法という雨で、私達、および、一切の生者を満たしてください。
仏に会うのは、とても難しい。
仏は、とても長い時間に一度、現れる。
仏は、「群生」、「生者」を悟らせるために、一切のものを震動させる。

さて、東方の諸世界の五百万億の国の梵天の宮殿を、(大通智勝仏の)光が照らしたのは、未だかつて無いことであった。
(東方の)諸々の梵天は、この相を見て尋ねて行って、大通智勝仏の所に至って、
天の華をまき散らして捧げて、
また、宮殿を捧げて、
大通智勝仏に「法輪を転じること」、「法を説くこと」を請い願って、詩で、ほめたたえた。
大通智勝仏は、時が未だ到来していないことを知っていたので、請願を受け入れたが、黙って坐禅していた。
(東方以外の)三方、および、「四維」、「四隅」と上下の諸々の梵天も、また、同様で、
天の華をまき散らして、
宮殿を捧げて、
大通智勝仏に「法輪を転じること」、「法を説くこと」を請い願って、言った。

仏に会うのは、とても難しい。
願わくば、大いなる「慈悲」、「思いやり」で、甘露のように甘い法への門を広く開いて、無上の「法輪を転じてください」、「法を説いてください」。

無量の知恵者である仏の、大通智勝仏は、この人達の請願を受け入れて、この人達の為に、種々の法、「四諦」、「十二因縁」を説いて言った。

「無明」から「老死」へ至るが、「老死」の原因は「生」なのである。

このような生者の過ち、患いを、あなた達は、まさに、知るべきである。

この法を説いた時、六百万億垓の者達は、諸々の苦しみの境地を無くし尽くして、皆、阿羅漢に成った。
第二の説法の時、幾千万もの「恒(河)沙のような」、「ガンジス川の砂のように無数な」者達も、また、「諸法」、「全てのもの」を「受」しないことによって、阿羅漢に成ることができ得た。
これより後、「道」、「真理」を会得した者の数は量り知れないほど無数で、幾万億劫、数えても、最後まで数えることは不可能なほどであった。
その時、大通智勝仏の十六王子は、出家して、「沙弥」、「未成年の出家者」と成って、皆、共に、この大通智勝仏に大乗の法を演説することを請い願って、言った。

私達、および、従者を営んでいる人達は、皆、仏道を成就したい。
願わくば、仏のように、無上の清浄な慧眼を得たい。

大通智勝仏は、十六人の子達の心と前世の所行を知って、無量の因縁、種々の諸々の譬喩で、「六波羅蜜」、および、諸々の神通の事を説いたし、真実の法、菩薩の所行と道を分別して、「恒(河)沙のような」、「ガンジス川の砂のように無数な」詩である、この法華経を説いた。
この大通智勝仏は法華経を説き終わると静かな部屋で禅定に入って、一心に一箇所で八万四千劫、坐禅した。
この諸々の十六沙弥達は、大通智勝仏が禅定から未だ出ていないのを知って、幾億もの量り知れないほど無数の生者達の為に、仏の無上の智慧を説いたし、各々法座に坐って、この大乗経を説いた。

十六沙弥は、大通智勝仏の(肉体の)死後、仏法を説いて、仏法の化の導きを助けた。
十六沙弥の各々が仏土へ渡した諸々の「衆生」、「生者」は、六百万億恒河沙いた。
この大通智勝仏の(肉体の)死後、これらの諸々の仏法を聞いた者達は、諸々の仏土にいて、師と共に生きた。
この十六沙弥は、仏道修行を十分に備えて、今現在、十方で各々「無上普遍正覚を成就することができ得ている」、「仏に成ることができ得ている」。
その時の仏法を聞いた者達は各々、諸仏の所にいる。
それらのうち、声聞の段階に留まっている者達は、仏道によって、徐々に教化されていく。
私、釈迦牟尼仏は、十六人の仏達の数に入っているのである。
かつても、また、あなた達の為に、説法したのである。
このため、「方便」、「便宜的な方法」で、あなた達を引き入れて仏の智慧へ向かわせているのである。
私、釈迦牟尼仏は、この本(もと)の因縁によって、今、法華経を説いて、あなた達を仏への道(、仏乗)へ引き入れるのである。
慎んで、驚きや恐れを懐くなかれ。
例えば、遠い、地平線に絶えていて果てが見えない、有毒生物が多い、飲食物が無い、人には恐ろしい場所である、険しい悪路の道のような物なのである。
幾千万もの無数の人達が、この険しい道を通り過ぎようと欲している。
その道は、とても空しく、長い。
五百由旬の道を通り過ぎた先に、一人の導師がいる。
導師は、理解力が強いし、
智慧が有るし、
心が決定的に、はっきりとしているし、
険しい道にいるし、
多数の困難から生者を救う。
人々は、皆、疲れて、導師に言った。

私達は、今、力が鈍(にぶ)り不足しました。(疲れました。)
ここで、後退して、元に戻りたいと欲します。

導師は、このように思った。

この人々は、とても、あわれむべき人々で、どうして、後退して、元に戻りたいと欲して、大いなる珍しい宝を失おうとするのか？

導師は、ただちに、「方便」、「便宜的な方法」を思いついて、神通力で設けて、大いなる仮の城を化生させて作った。
仮の城は、諸々の建物で荘厳に飾られている。
仮の城の周囲には、庭園の林が有る。
仮の城には、水路の流れ、および、水浴びできる池がある。
仮の城には、何重もの門がある。
仮の城には、高い建物がある。
男女は皆、仮の城に満たされた。
導師は、この仮の城を化生させて作り終わると、人々を慰めて、言った。

恐れるなかれ。
あなた達は、この城に入って、各々、思い通りにできます。

人々は、入城すると、皆、心が大いに歓喜して、安穏な想いを生じて、自ら、誤って、言った。

既に仏土へ渡り終わることができ得た。

導師は、人々が休み終わったと知ると、人々を集めて、言った。

あなた達、前進しなさい。
これは化生させて作った仮の城でしかないのです。
私は、あなた達の疲れが極限に達して、途中で、後退して、元に戻りたいと欲する場面を見ました。
そのため、「方便」、「便宜的な方法」の力で、仮に、この城を化生させて作ったのです。
あなた達は、今、精進に勤めて、共に、宝の場所へ至りましょう。

私、釈迦牟尼仏も、また、同様なのである。

私、釈迦牟尼仏は、一切の生者の導師と成って、諸々の求道者が、途中で、怠けて、生死の煩悩の諸々の険しい道から仏土へ渡ることができない場面を見た。

そのため、「方便」、「便宜的な方法」の力で、休ませる為に、(声聞乗と独覚乗という二つの)「涅槃」、「煩悩の寂静」を説いて、言った。

あなた達は、苦しみを滅ぼした。
所作を皆、既に、わきまえている。

仏は、大衆が「涅槃」、「煩悩の寂静」に到達して皆、阿羅漢を会得したのを知って、大衆を集めて、大衆の為に、真実の法を説く。
諸仏は、「方便」、「便宜的な方法」の力で、(唯一の仏乗を三段階に)分別して、三乗と説く。
しかし、実は、唯一の仏乗だけが存在するのである。
休ませる場所、境地とするために、声聞乗と独覚乗という二つを説いたのである。
今、あなた達の為に、真実を説く。
あなた達が得ている「涅槃」、「煩悩の寂静」は、真実の悪の滅ではないのである。
仏の一切の智慧の為に、まさに、大いに精進する心を起こすべきである。
あなた達、仏の一切の智慧、「十力」などの仏法を証して、仏の三十二相を備えたら、(仏に成ったら、)それが、真実の悪の滅なのである。
諸仏という導師は、休ませる為に、「涅槃」、「煩悩の寂静」を説くのである。
諸仏は、大衆が既に、この「涅槃」、「煩悩の寂静」で休み終わったのを知ると、仏の智慧へと引き入れるのである。

五百弟子受記品

その時、富楼那弥多羅尼子は、釈迦牟尼仏より、この智慧の「方便」、「便宜的な方法」の「随宜の」、「相手に応じた」説法を聞いて、
また、(釈迦牟尼仏が、)諸々の大いなる弟子に、「阿耨多羅三藐三菩提の記を授けた」、「仏に成れる予言を授けた」のを聞いて、
また、前世の因縁の事を聞いて、
また、諸仏が有している大いに自在な神通の力について聞いて、
心が未曾有になることを得て、心が清浄になって踊躍して、
座より起立して、釈迦牟尼仏の前に行って、頭を釈迦牟尼仏の足につけて敬礼して、座に戻って、釈迦牟尼仏の御尊顔を仰ぎ見て、目を一時も離さず、
このように思った。

世尊(、仏)は、とても特別に優れているし、行いが希有である。
(仏は、)世間の生者の、いくつかの「種性」、「素質」に応じて、「方便」、「便宜的な方法」の知見によって、生者の為に説法して、「衆生」、「生者」を色々なものへの貪欲な執着から抜け出させる。
私達は、仏の功徳を、(厳密には)言い表すことが不可能である。
仏だけが、私達の心の奥深くの本(もと)の願いを知ることが可能なのである。

その時、釈迦牟尼仏は、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。

あなた達は、この富楼那弥多羅尼子が見えるか？　否か？
私(、釈迦牟尼仏)は、常に、この富楼那を、「説法する人の中で、(雄弁さが)最も第一である」と、ほめたたえる。
また、(私、釈迦牟尼仏は、)常に、この富楼那の種々の功徳をほめたたえる。
(富楼那は、)私(、釈迦牟尼仏)の仏法に精勤的であるし、私(、釈迦牟尼仏)の仏法を破らず護って保持して、補助して説明する。
(富楼那は、)「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」に、「示教利喜」、「教示して鼓舞して喜ばせること」が可能である。
(富楼那は、)仏の正しい法を十分に備えて、(正しく)解釈して、大いに、同じ仏道修行者に利益をもたらす。
仏以外に、この富楼那の言論の雄弁さのように雄弁に説明し尽くせる者はいない。

あなた達、「富楼那は、ただ、私(、釈迦牟尼仏)の仏法を破らず護って保持して、補助して説明することが可能なだけである」と思うなかれ。
(富楼那は、)過去、九十億の諸仏の所でも、また、仏の正しい法を破らず護って保持して、補助して説明してきた。
(富楼那は、)この九十億の諸仏の所で説法する人の中でも、また、(雄弁さが)最も第一であった。
また、(富楼那は、)諸仏の所説の空(くう)の法を、明らめて通達している。
(富楼那は、)「法無礙智、義無礙智、辞無礙智、楽説無礙智」という「四無礙智」を得ている。
(富楼那は、)明らかに、清浄に、説法することができる。
(富楼那には、)疑惑が無い。
(富楼那は、)菩薩の神通の力を十分に備えている。
(富楼那は、)その寿命に応じて、常に、仏道修行してきている。
この九十億の諸仏の世の人々は、ことごとく皆、「この人(、前世の富楼那)が、真実の声聞なのである」と思った。
富楼那は、この「方便」、「便宜的な方法」によって、幾百、幾千もの量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」に利益をもたらしている。
また、(富楼那は、)幾阿僧祇もの量り知れないほど無数の人々に、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を奮(ふる)い立たせている。
(富楼那は、)仏国土を清浄にするために、常に、「仏事」、「仏の行い」を行(おこな)って、「衆生」、「生者」を教化する。
諸々の「比丘」、「出家者」よ、
富楼那は、また、「過去七仏」の時代の説法する人の中でも、(雄弁さで)第一位を得ていた。
富楼那は、また、私(、釈迦牟尼仏)の所で説法する人の中でも、(雄弁さが)第一なのである。
(富楼那は、)「賢劫」の中の未来の諸仏の時代の説法する人の中でも、また、(雄弁さが)第一なのである。
そして、(富楼那は、)「賢劫」の未来の諸仏の皆の所で、仏法を破らず護って保持して、補助して説明する。
また、(富楼那は、)未来、無限なほど量り知れないほど無数の諸仏の仏法を破らず護って保持して、補助して説明して、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を教化して利益をもたらして、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を奮(ふる)い立たせる。
(富楼那は、)仏国土を清浄にするために、常に、精進に勤めて、「衆生」、「生者」を教化して、徐々に、菩薩の道を十分に備える。

(富楼那は、)幾阿僧祇もの量り知れないほど無数の劫を過ぎると、まさに、この仏国土で、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得て、法明仏と言う称号の仏になる。
その法明仏は、幾恒河沙もの「三千大千世界」を一つの仏国土とする。
(法明仏の仏国土は、)「七宝」、「七種類の宝」を地とする。
地は、手のひらのように、平らである。
山と丘、谷、溝(みぞ)、穴が無い。
「七宝」、「七種類の宝」の「台観」、「高い建物」が、その仏国土の中に、満ちている。
諸々の天人の宮殿は、虚空の近くにある。
人と天人は、交流して接することができて、両方とも、相互に見合うことができ得る。
諸々の「悪道」、「悪事」が無い。
また、女性がいない。(男尊女卑ではない。)
(法明仏の仏国土の)一切の「衆生」、「生者」は皆、「化生」であるし、(悪い)性欲が無いし、大神通を得るし、身から光明を放出するし、飛行が自在であるし、志、意思が堅固であるし、精進するし、智慧があるし、あまねく皆、(仏のような)金色(の身)であるし、(仏のような)三十二相で自身を荘厳に飾る。
その法明仏の仏国土の「衆生」、「生者」は、常に、二つの物を食べ物、糧とする。
一つ目は、「法喜」、「仏法による喜び」を食べ物、糧とする。
二つ目は、「禅悦」、「禅定による喜び」を食べ物、糧とする。
幾阿僧祇千万億那由他もの量り知れないほど無数の諸々の菩薩達がいて、大神通と、「法無礙智、義無礙智、辞無礙智、楽説無礙智」という「四無礙智」を得るし、善く「衆生」、「生者」を教化することが可能である。
その法明仏の声聞達は、人数を数えて知ることが不可能で、皆、「三明六通」、および、「八解脱」を得て、十分に備えている。
その法明仏の仏国土には、これらのような無量の功徳が有って、(仏国土を)荘厳に飾るし、(富楼那である法明仏の願いを)成就する。
(法明仏の)劫の名前は、宝明である。
(法明仏の)仏国土の名前は、善浄である。
その法明仏の寿命は、幾阿僧祇劫もの量り知れないほど無数の劫である。
法明仏による仏法は、とても長い間、仏国土に住んで留まる。
法明仏の(仮の身の)死後、「七宝」、「七種類の宝」の塔が建てられて、その仏国土に、あまねく満ちる。

その時、世尊(、釈迦牟尼仏)は、くり返し、この意義を話したいと欲して、
詩で説いて言った。

諸々の「比丘」、「出家者」よ、明らかに、聴きなさい。
仏の子の行いとは、善く、「方便」、「便宜的な方法」を学ぶことなのである。
そのため、(仏の行い、仏の子の行いは)不可思議なのである。(俗人には思考することが不可能なのである。)
(諸々の菩薩は、)「衆生」、「生者」が、「小法」、「中途半端の法」、「矮小な物」を願って、(仏の)大いなる智慧を(得るために仏になるために修行することを)恐れてしまうのを知っている。
このため、諸々の菩薩は、声聞や「縁覚」、「独覚」に成って、無数の「方便」、「便宜的な方法」で諸々の「衆生」、「生者」を化して導いて、自ら、このように説くのである。

この声聞の段階の者は、仏道から、とても遠く離れ去ってしまっているのである。

菩薩は、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を皆ことごとく、仏土へ渡して解脱させて、仏道を成就させることができ得る。
(生者が)矮小な物を欲していて怠けていても、(菩薩は、)徐々に、まさに、(生者を)仏に成らせることができる。
(菩薩は、)内に、菩薩の行いを秘めて、外には、「声聞である」と現す。
(菩薩は、)少欲で、生死を嫌い、実に、自ら、仏国土を清浄にする。
(菩薩は、悪の例として、)「三毒」が有ることを「衆生」、「生者」に示す。
また、(菩薩は、悪の例として、)邪悪な見解の「相」、「外見」を現す。
私、釈迦牟尼仏の弟子は、このような「方便」、「便宜的な方法」で、「衆生」、「生者」を仏土へ渡す。
もし私、釈迦牟尼仏が「現化」、「仏や菩薩が生者を救うために色々な姿に変身して、この世に出現すること」を十分に備えて説いたら、「衆生」、「生者」は、この「現化」を聞けば、心に疑惑を懐いてしまう。
今、この富楼那は、昔、千億の仏の所で、仏の行いを修行することに勤めて、諸々の仏法を説いて破らず護って、無上の(仏の)智慧を探求してきているため、諸々の仏の所で、上位の仏の弟子として、この世に出現する。
(富楼那は、)仏法を多数、見聞きして学んでいる。
(富楼那には、)智慧が有る。

(富楼那の)所説には、恐れる所が無い。
(富楼那は、)「衆生」、「生者」を喜ばせることが可能である。
(富楼那は、)仏の行いを補助して、未だかつて疲れたり飽きたりしたことが無い。
(富楼那は、)大いなる神通に到達している。
(富楼那は、)「法無礙智、義無礙智、辞無礙智、楽説無礙智」という「四無礙智」を備えている。
(富楼那は、)「衆生」、「生者」の「根」、「能力」の利発、愚鈍を知ることができる。
(富楼那は、)常に、清浄な仏法を説いている。
(富楼那は、)この(法華経の)ような意義を広く説いて、幾千億もの諸々の「衆生」、「生者」を教えて「大乗法」に安住させて、自らは仏国土を清浄にする。
(富楼那は、)未来でも、また、量り知れないほど無数の仏に捧げものを捧げて、正しい仏法を破らず護って補助して説いて、また、自らは仏国土を清浄にする。
(富楼那は、)常に、諸々の「方便」、「便宜的な方法」で説法して、恐れる所が無く、無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡す。
(富楼那は、)「一切智」を成就する。
(富楼那は、)諸仏に捧げものを捧げる。
(富楼那は、)仏法、「宝蔵」、「宝に満ちている蔵に例えられる仏の教え」を破らず護って保持する。
(富楼那は、)その後、法明仏と言う称号、名前の仏に成る。
その仏国土の名前は、善浄であり、「七宝」、「七種類の宝」で合成されている。
劫の名前は、宝明である。
菩薩達が、とても多く、その人数は幾億もの量り知れないほど無数であり、皆、大いなる神通に到達するし、威徳の力を十分に備えるし、その仏国土に満ちる。
声聞も、また、無数であり、「三明」、「八解脱」、「四無礙智」を得る。
(大いなる神通に到達し威徳の力を十分に備えた菩薩か、「三明」、「八解脱」、「四無礙智」を得た声聞)、これらの者達を(真実の)僧とする。
その仏国土の諸々の「衆生」、「生者」は、皆、既に、(悪い)性欲を断っているし、純一であるし、化生であり、(仏のような)三十二相で自身を荘厳に飾る。

「法喜」、「仏法による喜び」と、「禅悦」、「禅定による喜び」を食べ物、糧として、更に他の物を食べようという想いが無い。
女性がいない。(男尊女卑ではない。)
また、諸々の「悪道」、「悪事」が無い。
富楼那は、功徳を、ことごとく完成して、まさに、このような「浄土」、「仏国土」を得る。
賢者、聖者達が、とても多い。
このような事が、量り知れないほど無数であり、私、釈迦牟尼仏は、今、簡略して説いただけなのである。

その時、千二百人の心が自在な者である阿羅漢は、このように思った。

私達は、喜んで、心が未曾有になることを得た。
もし世尊(、釈迦牟尼仏)が、他の大いなる弟子のように、私達、阿羅漢の各々にも「授記」、「仏に成れる予言」をしてくれたら快くなれるのではないか？

釈迦牟尼仏は、これらの千二百人の阿羅漢の心の思いを知って、摩訶迦葉に告げた。

この千二百人の阿羅漢に、私、釈迦牟尼仏は、今、まさに、目の前で、順番に、「阿耨多羅三藐三菩提の記を授け与える」、「仏に成れる予言を授け与える」。
この阿羅漢達の中の、私、釈迦牟尼仏の大いなる弟子、(阿若)憍陳如は、まさに、六万二千億人の仏に捧げものを捧げて、その後、普明仏と言う称号の仏に成ることができ得る。
五百人の阿羅漢、
優楼頻螺 迦葉、
伽耶 迦葉、
那提 迦葉、
迦留陀夷、
優陀夷、
阿㝹楼駄、
離婆多、
劫賓那、
薄拘羅、

周陀、
莎伽陀などは、
皆、まさに、普明仏と言う同一の称号、名前の仏と成ることができ得る。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

(阿若)憍陳如は、まさに、量り知れないほど無数の仏にまみえて、阿僧祇劫を過ぎて、「『等正覚』、『無上普遍正覚』を成就する」、「仏に成る」。
(阿若 憍陳如である仏は、)常に、大いなる光明を放つ。
(阿若 憍陳如である仏は、)諸々の神通を十分に備えている。
(阿若 憍陳如である仏の)名声は、十方に、あまねく聞こえることになる。
(阿若 憍陳如である仏は、)一切の生者に敬われることになる。
(阿若 憍陳如である仏は、)常に、無上の仏道を説く。
そのため、普明仏という称号なのである。
その普明仏の仏国土は清浄である。
普明仏の菩薩達は皆、勇猛である。
(普明仏の菩薩達は、)ことごとく、妙なる立派な高い建物に昇る。
(普明仏の菩薩達は、)諸々の十方の仏国土を巡って、無上の捧げ物を諸仏に捧げる。
(普明仏の菩薩達は、)このように捧げ終わると、心に大いなる喜びを懐いて、「須臾に」、「瞬時に」、本国へ帰還する。
(普明仏の菩薩達には、)このような(瞬間移動の)神通力が有る。
普明仏の寿命は、六万劫である。
普明仏の正法は、普明仏の寿命の倍、仏国土に住んで留まる。
普明仏の像法も、また、正法の倍、仏国土に住んで留まる。
(阿若 憍陳如である)普明仏の仏法が姿を隠すと、天人、人は憂う。
五百人の阿羅漢が、順番に、まさに、普明仏と言う同じ称号の仏に成る。
五百人の阿羅漢は、「転次して」、「転々と次々と」、このように「授記する」、「仏に成れる予言をする」。

私の(仮の身の)死後、〇〇は、まさに、仏に成る。
その仏に化されて導かれる世界、仏国土も、また、私の今日の仏国土の荘厳な清浄のようになる。
また、その仏の諸々の神通力、菩薩達、声聞達、正法および像法、寿命の長短も、皆、上の所説のように(私の今日のように)なる。

(摩訶)迦葉よ、あなたは、すでに、五百人の心が自在な者である阿羅漢(の仏に成る未来)を知ったことになる。
他の諸々の声聞達も、また、まさに、同様に(仏に)成る。
この集会に不在な者達には、あなた(、迦葉)が、まさに、その者達の為に、(仏に成れる予言を)説きなさい。

その時、五百人の阿羅漢は、釈迦牟尼仏の前で、「記」、「仏に成れる予言」を受けて得て終わると、喜んで、心が踊躍して、座より起立して、釈迦牟尼仏の前に進み出て、頭を釈迦牟尼仏の足につけて敬礼して、「悔過して」、「悔い改めて」、このように自らを責めた。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達は、常に、このように自ら思ってしまっていました。

既に、最終的な究極的な「滅度」を得た。

(しかし、)今、「このように思う者は無知者のような者である」と知りました。
理由は何か？　(と言うと、)
私達は、仏の智慧を得る必要が有ります。
しかし、(今までは、)自ら、「小智」、「中途半端の智慧」、「矮小な智慧」で「満ち足りている」としてしまっていました。
世尊、釈迦牟尼仏よ、
例えば、ある人が親友(である仏)の家へ行って、酒に酔ってしまって、眠り込んでしまっているような物なのです。
この時、親友は、公務のため、値段がつけられないほど貴重な宝玉を、その、ある人の衣の内側に結び付けて、宝玉を与えて、去って行きました。
その、ある人は、酔ってしまっていて、眠り込んでしまっていて、全く、覚知していませんでした。
ある人は、起きると、巡って、他国へ行って、衣食のために、つとめて、衣食を求めました。
ある人は、とても大いに困難して苦悩しました。
もし少しでも所得が有れば、「満ち足りている」としていました。
後に、親友は、ある人と会い、この状況を見て、このように言いました。

愚かであるかな。
一人前の人であるのに。
どうして、衣食の為に、このような状況に至ってしまったのか？
私は、昔、あなたに安楽を得させたい、五欲を思い通りにさせたいと欲して、〇〇年〇〇月〇〇日に、値段がつけられないほど貴重な宝玉をあなたの衣の内側に結び付けたのです。
そのため、今も、(宝玉が、あなたの衣の内側に)現に存在しています。
しかし、あなたは、知らずに、労苦して、憂い悩んで、自力で生活しようと求めてしまいました。
とても愚かです。
あなたは、今、この宝玉を売って、常に、思い通りに、欠乏が無いようにしなさい。

仏も、また、同様なのです。
菩薩と成っていた時、私達を教化して、私達に仏の「一切智」を求める心を起こさせました。
しかし、すぐに、忘れてしまって、知覚せず、阿羅漢を得て、このように自ら思ってしまいました。

「滅度」し終えた。

生きるのに困難して苦労しているのに、少しの物を得て「満ち足りている」としてしまっていました。
仏の「一切智」を求める願いは、なお、存在していて、失っていませんでした。
今、世尊、釈迦牟尼仏は、私達を悟らせて、このように言ってくれました。

諸々の「比丘」、「出家者」よ、あなた達の得ている物は、最終的な究極的な「滅度」ではない。
私、釈迦牟尼仏は、長い間、あなた達に、仏と成るための善の種と成る善行を植えさせて、「方便」、「便宜的な方法」として「涅槃」、「煩悩の寂静」の相を示した。
しかし、あなた達は、このように思ってしまいました。

真実の「滅度」を得たのである。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達は、今、知りました。

実は、菩薩なのである。(仏に成れていない。)

私達は、「阿耨多羅三藐三菩提の授記」、「仏に成れる予言」を得て、これにより、とても大いに喜んで、心が未曾有になることを得ました。

その時、阿若 憍陳如などは、くり返し、この意義を説きたいと欲して、詩で説いて言った。

私達は、無上の、安穏とさせる「授記」、「仏と成れる予言」の「声」、「教え」を聞いて、喜んで、心が未曾有になりました。
無量の智慧者である仏を敬礼します。
今、世尊、釈迦牟尼仏の前で、自ら、諸々の過(あやま)ち、咎(とが)を悔い改めます。
無量の仏の宝の中で、少し「涅槃」、「煩悩の寂静」の分け前を得ただけなのに、無知な愚者のように、自ら「満ち足りている」としてしまっていました。
例えば、貧困で困窮している、ある人が、親友(である仏)の家に行ったような物なのです。
その親友の家は、とても大いに富んでいて、色々と、諸々の御馳走(ごちそう)を設けてくれました。
(また、親友は、)値段がつけられないほど貴重な宝玉をある人の「内衣」、「肌着」の内側に結び付けて、黙って宝玉をある人に与えて、ある人を放置して、(公務しに行くため)去りました。
その時、ある人は、眠り込んでしまっていて、覚知していませんでした。
この、ある人は、起きると、巡って、他国へ行って、衣食を求めて、自力で済ませていました。
ある人は、生きるために、とても困難して苦労しました。
少しの物を得て、「満ち足りている」としてしまいました。
更に好い物を願いませんでした。
ある人は、知らずに、「内衣」、「肌着」の内側に、値段がつけられないほど貴重な宝玉を所有していました。
宝玉を与えた親友は、後に、この貧しい、ある人を見て、苦(にが)り切って、この、ある人を責め終わると、結び付けていた宝玉を示しました。

貧しい、ある人は、この宝玉を見て、その心を大いに喜ばせました。
ある人は、富んで、諸々の財宝を所有して、五欲を思い通りにしました。
私達も、また、(例え話の貧しい人と)同様なのです。
世尊、釈迦牟尼仏は、「長夜」、「輪廻転生」で、常に、(生者を)あわれんで、見てくれて、教化して、無上の仏を求める願いを植えさせました。
私達は、無知のため、覚知せず、少し「涅槃」、「煩悩の寂静」の分け前を得ただけなのに、自ら「満ち足りている」としてしまって、(仏の)他の物を求めていませんでした。
今、釈迦牟尼仏は、私達を悟らせて、このように言ってくれました。

(仏ではない者の「涅槃」、「煩悩の寂静」は、)真実の「滅度」ではない。
仏の無上の智慧を得たら、真実の「滅度」を得たことに成るのである。

私達は、今、釈迦牟尼仏から、「授記」、「仏と成れる予言」の荘厳な事を聞いて、また、「転次して」、「転々と次々と」、「受決する」、「仏と成れる予言を受けられる」と聞いて、身と心で、あまねく、喜んでいます。

授学無学人記品

その時、阿難、羅睺羅は、このように思った。

私達は、常に、自ら、このように思っていた。

「授記」、「仏に成れる予言」を得たら、快いのではないか？

(阿難、羅睺羅は、)座より起立して、釈迦牟尼仏の前に行って、頭を釈迦牟尼仏の足につけて敬礼して、共に、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達も、ここで、また、まさに、(仏に成れる予言の)分け前が有るはずです。
仏だけが、私達が帰依する所なのである。
また、私達は、一切の世間の天人、人、阿修羅によって見られて知られています。
阿難は、常に、そばに仕える侍者と成って、「法蔵」、「仏法」を破らず護って保持しています。
羅睺羅は、仏の子です。(釈迦牟尼仏の実の子であるし、仏の法の子でもある。)
もし釈迦牟尼仏によって「阿耨多羅三藐三菩提の記」、「仏に成れる予言」を授けられたならば、私達の願いは既に満ち足りますし、集まっている者達の望みも、また、満ち足ります。

その時、「(有)学」と「無学」の声聞の段階の弟子、二千人は、皆、座より起立して、「偏袒右肩」して、釈迦牟尼仏の前へ行って、一心に、合掌して、釈迦牟尼仏を仰ぎ見て、阿難、羅睺羅の願いのように(願って)、一面に立った。

その時、釈迦牟尼仏は、阿難に告げた。

あなた(、阿難)は、来世で、まさに、山海慧自在通王仏と言う称号の仏に成ることができ得る。

(阿難は、)まさに、六十二億の諸仏に捧げものを捧げて、「法蔵」、「仏法」を破らず護って保持して、その後、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得(て仏に成)る。
(阿難である山海慧自在通王仏は、)二十千万億恒河沙の諸々の菩薩達を教化して「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を成就させる。
仏国土の名前は、常立勝旛である。
その仏国土は、清浄である。
瑠璃(るり)を地と成す。
劫の名前は、妙音遍満である。
その山海慧自在通王仏の(仮の身の)寿命は、幾千万億阿僧祇もの量り知れないほど無数の劫である。
もし人が幾千万億もの量り知れないほど無数の阿僧祇劫の間、数えても、(山海慧自在通王仏の仮の身の寿命の量を)知ることは不可能である。
山海慧自在通王仏の正法は、山海慧自在通王仏の(仮の身の)寿命の倍、世に住んで留まる。
山海慧自在通王仏の像法は、山海慧自在通王仏の正法の倍、世に住んで留まる。
阿難よ、
この山海慧自在通王仏は、十方の幾千万億恒河沙もの量り知れないほど無数に等しい数の諸仏と共に、その功徳をほめたたえられる。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

私、釈迦牟尼仏は、今、僧たちの中で説く。
仏法を破らず護って保持している者である阿難は、まさに、諸仏に捧げものを捧げた、その後で、「(無上普遍)正覚」を成就して、山海慧自在通王仏と言う称号の仏に成る。
その仏国土は、清浄であり、名前は常立勝旛である。
(山海慧自在通王仏は、)諸々の菩薩を教化する。教化した菩薩の数は「恒(河)沙のようである」、「ガンジス川の砂のように無数である」。
山海慧自在通王仏は、大いなる威徳を有する。
山海慧自在通王仏の名声は、十方の全てに聞こえることになる。
山海慧自在通王仏の寿命は、量り知れないほど無数である。
「衆生」、「生者」への思いやりのため、山海慧自在通王仏の正法は、山海慧自在通王仏の寿命の倍、世に留まる。

山海慧自在通王仏の像法は、この山海慧自在通王仏の正法の倍、世に留まる。
「恒河沙」、「ガンジス川の砂の数」に等しい無数の諸々の「衆生」、「生者」は、この山海慧自在通王仏の仏法の中で、仏道との因縁を植える。

その時、集会の中の、新しく仏を求める心を起こしたばかりの菩薩、八千人は、皆ことごとく、このように思った。

私達ですらなお、諸々の大いなる菩薩が、このような「記」、「仏に成れる予言」を得た、と聞いたことが無い。
どんな因縁が有って、諸々の声聞が、このような「決」、「仏に成れる予言」を得たのか？

その時、釈迦牟尼仏は、諸々の新しく仏を求める心を起こしたばかりの菩薩の心の思いを知って、これらの新しく仏を求める心を起こしたばかりの菩薩に告げて言った。

諸々の善い男子よ、
私、釈迦牟尼仏と、阿難などは、等しく、空王仏の所で、同時に、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を起こした。
阿難は、常に、仏法を多数、見聞きすることを願った。
私、釈迦牟尼仏は、常に、精進に勤めた。
このため、私、釈迦牟尼仏は、既に、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を成就することができ得たのである。
そして、阿難は、私、釈迦牟尼仏の仏法を破らず護って保持するし、また、将来の諸仏の「法蔵」、「仏法」を破らず護って保持して、諸々の菩薩達を教化して仏に成ることを成就させる。
その阿難の本(もと)の願いとは、このような物であったのである。
そのため、(阿難は、)この「記」、「仏に成れる予言」を獲得できたのである。

阿難は、目の前で、釈迦牟尼仏の前で、自ら、「授記」、「仏に成れる予言」を聞いて、また、仏国土が荘厳に飾られて願いが全て備わることを聞いて、心が大いに喜び、心が未曾有になることを得た。
その時、(阿難は、)今、聞いたかのように、過去の幾千万億の量り知れないほど無数の諸仏の「法蔵」、「仏法」を思い出して、通達して、「無礙」、「自由自在」に成った。

また、(阿難は、自分の)本(もと)の願いを「識」、「理解」した。
その時、阿難は、詩で説いて言った。

仏は、とても希有である。
(釈迦牟尼仏は、)私(、阿難)に、今日、聞いたかのように、過去の量り知れないほど無数の諸仏の仏法を思い出させた。
私(、阿難)も、また、今、疑いは無く成った。
(私、阿難は、)仏道に安住することができた。
(私、阿難は、)「方便」、「便宜的な方法」で、釈迦牟尼仏のそばに仕える侍者と成って、諸仏の仏法を破らず護って保持します。

その時、釈迦牟尼仏は、羅睺羅に告げた。

あなた(、羅睺羅)は、来世で、まさに、踏七宝華仏と言う称号の仏に成ることができ得る。
(羅睺羅は、)まさに、十の世界の微細な塵(ちり)のように無数に等しい数の諸仏に捧げものを捧げる。
(羅睺羅は、)常に、諸仏の為に、今と同様に、仏の実の「長子」、「初子」と成る。
この踏七宝華仏の、仏国土が荘厳に飾られていること、(仮の身の)寿命の劫の数、化して導く弟子、正法の長さ、像法の長さもまた、山海慧自在通王仏と同様であり、異なることは無い。
また、(羅睺羅は、)この山海慧自在通王仏の為に、山海慧自在通王仏の実の「長子」、「初子」と成る。
(羅睺羅は、)これらを過ぎた後で、まさに、「阿耨多羅三藐三菩提」を得(て仏に成)る。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

私、釈迦牟尼仏が王子であった時、羅睺羅は実の「長子」、「初子」であった。
私、釈迦牟尼仏は今、仏道を成就して(仏に成って)いるが、(羅睺羅は)仏法を受け入れて法の子と成っている。

(羅睺羅は、)未来の来世で、幾億もの量り知れないほど無数の仏達にまみえて、その仏達の皆に対して、その仏の実の「長子」、「初子」と成って、一心に仏道を探求する。
羅睺羅の「密行」、「意味が込められている行い」を私、仏だけが知ることが可能なのである。
(羅睺羅は、)現在、私、釈迦牟尼仏の実の「長子」、「初子」として、幾千万、幾億もの量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」に、数えることができないほど無数の功徳を示している。
(羅睺羅は、)仏法に安住して、無上の仏道を探求している。

その時、釈迦牟尼仏は、「(有)学」と「無学」の者達、二千人を見た。
(「有学」と「無学」の者達は、)その心が柔軟であったし、静かであったし、清浄であった。
(「有学」と「無学」の者達は、)一心に、釈迦牟尼仏を見ていた。

釈迦牟尼仏は、阿難に告げた。

あなた(、阿難)は、この「(有)学」と「無学」の者達、二千人が見えるか？
否か？

(阿難は、釈迦牟尼仏に答えた。)

はい。
見えます。

(釈迦牟尼仏は、阿難に告げた。)

阿難よ、
この「(有)学」と「無学」の諸々の人達は、まさに、五十の世界の微細な塵(ちり)のように無数の諸仏に捧げものを捧げ、恭しく敬い、尊重し、「法蔵」、「仏法」を破らず護って保持し、最後に、同時に、十方の仏国土の各々で、皆、宝相仏と言う同一の称号、名前の仏に成ることができ得る。
宝相仏の(仮の身の)寿命は、一劫である。
仏国土が荘厳に飾られていること、声聞、菩薩、正法の長さ、像法の長さは、皆ことごとく、同等である。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

この(「有学」と「無学」の)二千人の声聞は、今、私、釈迦牟尼仏の前に留まっている。
(私、釈迦牟尼仏は、)ことごとく皆に、「授記」、「仏に成れる予言」を与える。
未来で、まさに、仏に成る。
捧げものを捧げる諸仏の数は、先ほど説いたように、塵(ちり)のように無数である。
その諸仏の「法蔵」、「仏法」を破らず護って保持した後で、まさに、「(無上普遍)正覚」を成就して、十方の仏国土の各々で、ことごとく、(宝相仏と言う)同一の名前、称号の仏に成る。
同時に、道場で坐禅して、(仏の)無上の智慧を証する。
皆の名前は、宝相仏である。
仏国土、および、弟子、正法と像法の長さは、ことごとく、等しく、異なることは無い。
ことごとく、諸々の神通力で、十方の「衆生」、「生者」を仏土へ渡す。
名声は、あまねく聞こえる。
徐々に、涅槃へ入る。

その時、「(有)学」と「無学」の者達、二千人は、釈迦牟尼仏からの「授記」、「仏に成れる予言」を聞いて、歓喜して、心が踊躍して、詩で説いて言った。

仏の智慧は、明かりである。
私達は、「授記」、「仏に成れる予言」の「音」、「仏の教え」を聞いて、甘露が注がれたかのように、心が歓喜して満ち足りています。

法師品

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、薬王菩薩によって、八万人の「大士」、「摩訶薩」、「菩薩」に告げた。

薬王菩薩よ、あなたは、この大衆の中の、量り知れないほど無数の諸々の天人、龍王、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達、および、「比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷」、「出家者の男女と在家信者の男女」、声聞を探求する者、「辟支仏」、「独覚」を探求する者、仏道を探求する者が見えますか？
これらの者達は、ことごとく、仏の前で、妙法華経の一つの詩、詩の一句を聞いて、一瞬でも心で喜べば、私、釈迦牟尼仏は、皆に、「まさに、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を得る」という「授記」、「仏に成れる予言」を与える。

釈迦牟尼仏は、薬王菩薩に告げた。

また、仏の(肉体の)死後、もし、ある人が、一つの詩、詩の一句でも妙法華経を聞いて、一瞬でも心で喜べば、私、釈迦牟尼仏は、また、「阿耨多羅三藐三菩提の記を授け与える」、「仏に成れる予言を与える」。
また、もし、ある人が、一つの詩でも、妙法華経を受け入れて保持したり、読んだり、解説したり、書き写したり、この法華経を仏であるかのように敬って見たり、華、香、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、塗香、抹香、焼香、「繒蓋」、「幢旛」、衣服、「伎楽」、「音楽」という種々の捧げものを捧げたり、合掌して恭しく敬ったりすれば、薬王菩薩よ、まさに、知るべきである、これらの諸々の人達は、既に、かつて、十万億の仏に捧げものを捧げていて、諸仏の所で大いなる願いを成就していて、「衆生」、「生者」を思いやって、この世の人の間に生まれたのである。
薬王菩薩よ、
もし、ある人が「どのような『衆生』、『生者』が、未来の来世で、まさに、仏に成ることができ得るのか？」と質問したら、まさに、「これらの諸々の人達が、未来の来世で、必ず、仏に成ることができ得る」と示しなさい。
理由は何か？　(と言うと、)
もし善い男子や善い女の人が、法華経を一句でも受け入れて保持したり、読んだり、解説したり、書き写したり、華、香、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾

り」、塗香、抹香、焼香、「繒蓋」、「幢旛」、衣服、「伎楽」、「音楽」という種々の捧げものを法華経に捧げたり、合掌して恭しく敬ったりすれば、この人は、一切の世間に、まさに、仰ぎ見られる。
まさに、仏への捧げものをこの人に捧げるべきである。
まさに、知るべきである。
この人は、大いなる菩薩であり、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を成就して、「衆生」、「生者」を思いやって、志願して、この世の人の間に生まれて、妙法華経を広く演説して分別しているのである。
まして、ことごとく能(よ)く受け入れて保持して種々の捧げものを捧げる者は、なおさらである。
薬王菩薩よ、まさに、知るべきである。
この人は、清浄な業の報いを自ら捨てて、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、「衆生」、「生者」を思いやって、「悪い世」、「悪い時代」に生まれて、この法華経を広く演説しているのである。
もし、この善い男子や善い女の人が、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、能(よ)く、ひそかに、一人の為にでも、法華経を、一句でも、説いたら、まさに、知るべきである、この人は、仏の使いであり、仏に派遣されて仏の行いを行(おこな)っているのである。
まして、大衆の中で、人の為に、広く説く者は、なおさらである。
薬王菩薩よ、
もし、ある悪人が、悪い心で、一劫の間中、目前で、仏の前で、常に、仏の悪口を言っても、その罪は、(法華経を読む正しい人の悪口を言う罪よりも、)なお軽いのである。
もし、人が、一言、法華経を読む在家信者や出家者の悪口を言ったら、その罪は、とても重いのである。
薬王菩薩よ、
まさに、しるべきである、ある法華経を読む者、この人は、仏の荘厳さで自らを荘厳に飾っているのであり、仏が肩で重荷を担ってくれるのである。
まさに、この人がいる所、方向へ向かって、敬礼して、一心に、合掌して、恭しく敬って、捧げものを捧げて、尊重して、ほめたたえるべきである。
華、香、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、塗香、抹香、焼香、「繒蓋」、「幢旛」、衣服、ごちそう、諸々の「伎楽」、「音楽」を奏でること、人の中で上質な捧げ物をこの人に捧げるべきである。
まさに、天の宝をもって、この人に、散らすように、捧げるべきである。
まさに、天上に蓄えられた宝を(この人に)捧げるべきである。
理由は何か？　(と言うと、)

この人が喜んで説く法を、短時間でも、聞けば、最終的に、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得(て仏に成)るからである。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

もし仏道に住んで留まって「自然智」を成就したいと欲するならば、常に、まさに、法華経を受け入れて保持している者に捧げ物を捧げることに勤めるべきである。
もし、ある人が「一切種智慧」を速やかに得たいと欲するならば、まさに、この法華経を受け入れて保持するべきであるし、また、法華経を受け入れて保持している者に捧げものを捧げるべきである。
もし能(よ)く妙法華経を受け入れて保持している者がいれば、まさに、知るべきである、この者は、仏に派遣されて、諸々の「衆生」、「生者」を思いやっているのである。
能(よ)く妙法華経を受け入れて保持している諸々の者は、清浄な仏国土を捨てて、「衆生」、「生者」を思いやって、この世の人の間に生まれたのである。
まさに、知るべきである。
このような人は、自由自在に欲する所に生まれることができて、能(よ)く、この「悪い世」、「悪い時代」に、無上の法を広く説いているのである。
まさに、天の華、天の香、および、天の宝、天の衣服、天上に蓄えられた妙なる宝を、法華経を説法する者に捧げるべきである。
私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、「悪い世」、「悪い時代」に、能(よ)く、この法華経を保持している者を、まさに、仏に捧げものを捧げるかのように、合掌して、敬礼するべきである。
とても甘美な上質の食べ物、および、種々の衣服を、この仏の弟子に捧げて、短時間でも、法華経を聞くことを得たいと願いなさい。
もし能(よ)く後世に、この法華経を受け入れて保持している者は、私、仏が派遣して、人の中に存在させて、仏の行いを行わせているのである。
もし一劫の間中、常に、悪い心を懐いて、顔の色を赤くして、仏の悪口を言ってしまったら、無量の重罪を獲得してしまう。
一瞬でも、この法華経を読んで保持している者の悪口を言ってしまったら、その罪(の重さ)は、この(一劫の間中、仏の悪口を言う重)罪を超過してしまうのである。

ある人が、仏道を探求して、一劫の間中、合掌して、私、釈迦牟尼仏の前にいて、無数の詩で、ほめたたえたら、この仏をほめたたえたことによって、無量の幸福をもたらす功徳を得る。
法華経を保持している者をほめたたえたら、その(善行がもたらす)幸福は、この(一劫の間中、仏をほめたたえた報いの)幸福を超過するのである。
八十億劫の間に、法華経を保持している者に、最も妙なる色形、音声、および、香り、味、触感の捧げものを捧げ終わって、もし短時間でも法華経を聞くことを得たら、「私は今、大いなる利益を獲得した」と自ら喜ぶべきである。
薬王菩薩よ、今、あなたに告げます。
この私、仏の所説である諸々の経の中で、法華経が最も第一なのである。(法華経は諸々の経の中の王なのである。)

その時、釈迦牟尼仏は、また、薬王菩薩(摩訶薩)に告げた。

私、仏の所説である経は、幾千万億もの量り知れないほど無数にあって、既に説いていたり、今、説いていたり、未来に説いたりするが、それらの経の中で、この法華経は最も、信じるのが難しいし、理解するのが難しいのである。
薬王菩薩よ、
この法華経は、諸仏の秘密の重要な智慧の蔵(、宝庫)なのである。
人に妄りに分け与えて広めて授け与えるべきではない。
法華経は、諸仏に守護されている。
法華経は、昔から、未だかつて、あからさまに(、暴露されて)説かれたことが無い。
この法華経には、仏がいる現在ですらなお、怨みや嫉みが多い。
まして、仏の(肉体の)死後は、なおさらである。
薬王菩薩よ、まさに、知るべきである。
仏の(肉体の)死後、能(よ)く、法華経を書き写したり、保持したり、読んだり、法華経に捧げものを捧げたり、他人の為に法華経を説いたりする者を、仏は、この人の為に、この人を衣で覆う。(仏は、この人の罪を覆ってくれる。仏は、この人を罪が無い者と見なしてくれる。)
また、(この人を)他の方向の現在の諸仏は念頭に置いて護ってくれる。
この人は、大いなる信じる力、および、「志願の力」、「希望する力」、諸々の「善根」、「善の種と成る善行」を行う力を有している。
まさに、知るべきである。

この人は、仏と共にいるのである。
仏は、この人の為に、手で、この人の、その頭を撫でる。
薬王菩薩よ、
法華経を説いたり、(声を出さないで)読んだり、声を出して読んだり、書き写したり、法華経が存在したりする、至る所に、皆、まさに、極めて高く広く荘厳に飾られている「七宝」、「七種類の宝」の塔を建てるべきである。
この塔には、「舎利」、「仏の遺骨」を必ずしも安置しなくても良い。
理由は何か？　(と言うと、)
この塔の中には、既に、仏の全身が存在するのである。
まさに、この塔に一切の華、香、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、「繒蓋」、「幢旛」、「伎楽」、「音楽」、「歌頌」、「ほめたたえる歌」を捧げて、恭しく敬って、尊重して、ほめたたえるべきである。
もし、ある人が、この塔を見ることを得て、礼拝して、捧げものを捧げれば、まさに、知るべきである、これらの人は皆、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」に近いのである。
薬王菩薩よ、
菩薩の道を行(おこな)っている在家信者や出家者は多くいるが、
もし、この法華経を見聞きしたり、読んだり、書き写したり、保持したり、捧げものを捧げたりすることができ得ていないならば、まさに、知るべきである、この人は、未だに、善く菩薩の道を行うことができていないのである。
もし、この法華経を聞くことを得ていたら、能(よ)く、善く菩薩の道を行うことができているのである。
ある「衆生」、「生者」の仏道を探求している者が、この法華経を見聞きして、見聞きし終わって、信じて理解して、受け入れて保持すれば、まさに、知るべきである、この人は、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」に近いのである。
薬王菩薩よ、
例えば、ある人が渇いたが、水が欠乏していて、水を求めて、高原に穴を穿っていって、なお、乾いている土を見て、「水は、なお、遠い」と知るような物なのである。
作業をやめないでいると、段々と湿っている土を見て、ついに、ようやく、泥に至ると、その心が決定的に確信して、「水は、必ず、近くにある」と知るような物なのである。
菩薩も、また、同様なのである。

もし、この法華経を未だ、聞いたり、理解したり、修習したりできないのであれば、まさに、知るべきである、この人は、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」から、なお遠く、離れ去っているのである。
もし、この法華経を聞いて、理解して、思考して、修習でき得たら、「『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』に近い」と必ず知りなさい。
理由は何か？　(と言うと、)
一切の菩薩の「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」は皆、この法華経に所属しているのである。
この法華経は、(真理への)「方便」、「便宜的な方法」という門を開いて、真実の相を示す。
この法華経という(仏の智慧の)蔵(、宝庫)は、堅固で奥深く、到達できた(仏ではない)人はいないのである。
今、仏は、菩薩を教化して(仏の智慧を)成就させる為に、法華経を開示したのである。
薬王菩薩よ、
もし、ある菩薩が、この法華経を聞いて、驚いたり、疑ったり、恐れたりしたら、まさに、知るべきである、この菩薩は、新しく仏を求める心を起こしたばかりの菩薩なのである。
もし(菩薩の道を行っていない)声聞の段階の人が、この法華経を聞いて、驚いたり、疑ったり、恐れたりしたら、まさに、知るべきである、この声聞の段階の人は、「増上慢の」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」者なのである。
薬王菩薩よ、
もし、ある善い男子や善い女の人が、仏の(肉体の)死後、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の為に、この法華経を説きたいと欲したならば、どのように、まさに、説くべきであるのか？
この善い男子や善い女の人は、(思いやりという)「如来の室」、「仏の部屋」に入って、(柔和で悪人からの辱めを忍耐する心という)「如来の衣」、「仏の衣」を着て、(「全てのものは空である」という仏の智慧という)「如来の座」、「仏の座」に坐禅して、まさに、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の為に、この法華経を広く説くべきである。
「如来の室」、「仏の部屋」とは、一切の「衆生」、「生者」の中の大いなる「慈悲」、「思いやり」の心である。
「如来の衣」、「仏の衣」とは、柔和で、(悪人からの)辱(はずかし)めを忍耐する心である。

「如来の座」、「仏の座」とは、「一切の法は空(くう)である」、「全てのものは空(くう)である」という仏の智慧である。
これらの中に安住して、怠惰ではない心(、精進する心)で、諸々の菩薩、および、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の為に、この法華経を広く、説きなさい。
薬王菩薩よ、
私、仏は、他国でも、化生した人を派遣して、この人の為に、法華経の法を聴く聴衆を集める。
また、(仏は、)化生した「比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷」、「出家者の男女と在家信者の男女」を派遣して、この人の(法華経の)説法を聴かせる。
これらの諸々の化生した人達は、(法華経の)法を聞いて、信じて受け入れて、従い、逆らわない。
もし(法華経を正しく)説法している者が、(人里離れた)静かな場所にいたならば、私、仏は、その時、天人、龍、鬼神、乾闥婆、阿修羅などを広く派遣して、その(法華経の)説法を聴かせる。
私、仏は、異国(、異界、仏国土)にいても、時々、(法華経を正しく)説法している者に、私、仏の(仮の)身を見ることを得させる。
もし、この法華経の詩の句を忘れてしまったら、私は、法華経を正しく説法している者の為に、(法華経を)説いて、備わせる。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

諸々の怠惰を捨てたいと欲するならば、まさに、この法華経を聴くべきである。
この法華経を聞くのは難しい。
法華経を信じて受け入れるのも、また、難しい。
人が渇いて、水を求めて、高原に穴を穿って、なお、乾燥した土を見て、「水から、なお、遠く、離れ去っている」と知るような物なのである。
ようやく、湿っている土、泥を見て、決定的に確信して、「水に近い」と知るような物なのである。
薬王菩薩よ、あなたは、まさに、知るべきである。
このように、諸々の人達は、法華経を聞かないのであれば、仏の智慧から、とても遠く、離れ去ってしまっているのである。
もし「法華経は、奥深い経である」と聞いて、声聞の法を決定的に了解して、「法華経は、諸々の経の王である」と聞いて、「法華経は、諸々の経の王で

ある」と明確に思い考えることができれば、まさに、知るべきである、この人達は、仏の智慧に近いのである。
もし人が、この法華経を説くのであれば、まさに、(思いやりという)「如来の室」、「仏の部屋」に入って、(柔和で悪人からの辱めを忍耐する心という)「如来の衣」、「仏の衣」を着て、(「全てのものは空である」という仏の智慧という)「如来の座」、「仏の座」に坐禅して、「衆生」、「生者」の中に処して、恐れる所無く、広く、生者の為に、分別して、法華経を説くべきである。
大いなる「慈悲」、「思いやり」が、「如来の室」、「仏の部屋」である。
柔和で、(悪人からの)辱(はずかし)めを忍耐する心が、「如来の衣」、「仏の衣」である。
「諸法は空(くう)である」、「全てのものは空(くう)である」という仏の智慧が、「如来の座」、「仏の座」である。
これらに処して、生者の為に、(法華経を)説法しなさい。
もし、この法華経を説いている時に、ある人が悪口を言ってきたり、刀剣で斬ってきたり、杖で叩いてきたり、瓦(かわら)や石を投げてきたりしても、仏も忍耐したことを思い出して、忍耐しなさい。
私、仏は、幾千万億の仏国土で、清浄な堅固な(仏の仮の)身を出現させて、幾億もの量り知れないほど無数の劫、「衆生」、「生者」の為に、(法華経を)説法している。
もし私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、「法師」、「仏法の教師」が、能(よ)く、この法華経を説けば、私、釈迦牟尼仏は、化生した比丘、比丘尼、および、(清)信士、(清)信女という「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」を派遣して、「法師」、「仏法の教師」に捧げものを捧げさせて、諸々の「衆生」、「生者」を引き寄せて導いて、この「法師」、「仏法の教師」の所に集めて、(法華経の)仏法を聴かせる。
もし人が悪口を言おうとしたり、刀剣で斬ろうとしたり、杖で叩こうとしたり、瓦(かわら)や石を投げようとしたりしたら、(仏は、)化生した人を派遣して、この法華経を正しく説いている人の為に、護衛をさせる。
もし法華経を正しく説法している人が、独りで、静かな、人による音声が無い(人里離れた)静かな場所にいて、この法華経を声に出して読んでいたら、私、仏は、その時、この法華経を正しく説法している人の為に、清浄な光明を放っている(仏の仮の)身を出現させる。
もし、法華経を正しく説法している人が、法華経の一章や一句を忘れてしまったら、この人の為に、法華経を説いて、法華経に通じさせて利益を得させる。

もし人が、(思いやり、柔和で悪人からの辱めを忍耐する心、「全てのものは空である」という仏の智慧という、)これらの徳を備えていたら、または、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の為に(人里離れた)静かな場所で法華経を声に出して読んで説いていたら、皆、私、仏の(仮の)身を見ることができ得る。
もし法華経を正しく説法している人が(人里離れた)静かな場所にいたら、私、仏は、天人、龍王、夜叉、鬼神などを派遣して、この人の為に、法華経の仏法を聴く聴衆と成らせる。
この人は、法華経の仏法を分別して、「無罣礙で」、「障害無く自由自在に」、「楽説する」、「他者の願う所に従って自在に仏法を説く事ができる」。
この人を、諸仏が念頭に置いて護っているおかげで、この人は、大衆を喜ばせることが可能なのである。
もし(法華経の正しい)「法師」、「仏法の教師」に親しみ近づけば、速やかに、菩薩の道を得る。
(法華経の正しい)「法師」、「仏法の教師」に従って学べば、「恒(河)沙の」、「ガンジス川の砂のように無数の」仏にまみえることができ得る。

見宝塔品

その時、釈迦牟尼仏の前に、高さが五百由旬、縦と横の広さが二百五十由旬の、ある「七宝」、「七種類の宝」の塔が、地から涌(わ)き出て、空中に浮かんだ。
種々の宝物が、この塔を荘厳に飾っていた。
五千の「欄楯」、「柵」と、幾千、幾万もの「龕室」、「厨子(ずし)」と、無数の「幢旛」が、(塔を)荘厳に飾っていた。
宝の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」を垂らしていた。
幾万、幾億もの宝の鈴が、その上に懸けられていた。
(塔は、)四面から皆、多摩羅跋と栴檀の香りを出していて、世界に、あまねく充満した。
その諸々の「幢旛」と「天蓋」は、金、銀、瑠璃(るり)、硨磲(しゃこ)、碼碯(めのう)、真珠、「玫瑰」、「現在では謎の、赤い宝石」という七種類の宝によって、合わせて形成されていた。
(塔の)高さは、四天王の宮殿にまで至っていた。
「三十三天」、「忉利天」の天人は天の曼陀羅華を雨のように降らして宝の塔に捧げた。
他の諸々の天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達、幾千、幾万、幾億の者達は、一切の華や、香や、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」や、「幢旛」や、「天蓋」や、「伎楽」、「音楽」を宝の塔に捧げて、恭しく敬って、尊重して、ほめたたえた。
その時、宝の塔の中から、大いなる音声が出て、(釈迦牟尼仏を)ほめたたえて、このように言った。

善いかな。
善いかな。
釈迦牟尼仏は、能(よ)く、平等な大いなる智慧によって、「教菩薩法」、「仏所護念」、「妙法華経」を大衆の為に説いている。
その通りである。
その通りである。
釈迦牟尼仏の所説は皆、真実である。

その時、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」は、大いなる宝の塔が空中に浮かんでいるのを見て、また、塔の中から出た音声を聞いて、皆、

「法喜」、「法悦」を得て、未だかつて無いことを怪しんで、座より起立して、恭しく敬って、合掌して、座に戻って、一面に留まった。
その時、大楽説菩薩と言う名前の菩薩(摩訶薩)がいて、一切の世間の天人、人、阿修羅などの心中の疑いを知って、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
どんな「因縁」、「理由」によって、この宝の塔は有って、地から涌き出たのですか？
また、(どんな「因縁」、「理由」によって、)その塔の中から、この音声が起こったのですか？

その時、釈迦牟尼仏は、大楽説菩薩に告げた。

この宝の塔の中には、如来の全身、仏の全身が有るのである。

昔、過去、東方の幾千万億阿僧祇もの無量の先の世界に、宝浄と言う名前の国があって、その国の中に、多宝仏と言う称号の仏がいた。
その多宝仏が本(もと)、菩薩の道を行っていた時に、このような大いなる誓願をした。

もし私(、多宝仏)が仏に成ったら、(多宝仏の仮の身の)死後、十方の国土で、法華経が説かれている所が有ったならば、私(、多宝仏)の塔廟が、この法華経を聴くために、その前に涌き出して現れて、聴衆の為に、証明と成って、「善いかな」と、ほめたたえて言おう。

その多宝仏は、仏道を成就し終わって、(仮の身の)死に臨んだ時、天人と人の大衆の中で、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。

私(、多宝仏の仮の身)の死後、私(、多宝仏)の全身に捧げものを捧げたいと欲するならば、まさに、一つの大いなる塔を建てなさい。

この多宝仏の、神通の願力によって、十方の世界の、ありとあらゆる所で、もし法華経を説く者がいれば、この多宝仏の宝の塔は、全ての場所で、その者の前に、涌き出す。(そして、)
多宝仏の全身が、塔の中に在って、「善いかな。善いかな」と、ほめたたえて言う。

大楽説菩薩よ、今、多宝仏の塔は、法華経が説かれているのを聞いたので、地から涌き出して、「善いかな。善いかな」と、ほめたたえて言ったのである。

この時、大楽説菩薩は、如来、仏の神(通)力によって、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達は、願わくば、この多宝仏の身を見たいと欲します。

釈迦牟尼仏は、大楽説菩薩(摩訶薩)に告げた。

この多宝仏には、深い重い願いが有る。

私(、多宝仏)の宝の塔が法華経を聴いて諸仏の(各仏の)前に出現した時、もし私(、多宝仏)の身を「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」に示したければ、(各仏は、)十方の世界にいて説法している、この各仏の分身である諸仏を尽(ことごと)く戻して一つの場所に集めなさい。
その後にのみ、私(、多宝仏)の身は出現する。

大楽説菩薩よ、(私、釈迦牟尼仏は、)十方の世界にいて説法している者である私(、釈迦牟尼仏)の分身である諸仏を今、まさに、集めよう。

大楽説菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達は、願わくば、釈迦牟尼仏の分身である諸仏も、また、見て、礼拝して、捧げものを捧げたいと欲します。

その時、釈迦牟尼仏は、白毫から一つの光を放った。
すると、東方の五百万億那由他恒河沙に等しい数の仏国土の諸仏が見えた。
この諸々の仏国土は皆、「頗梨」、「水晶」を地と成していた。
(この諸々の仏国土は、)宝の樹や、宝の衣で、荘厳に飾られていた。
幾千、幾万、幾億もの無数の菩薩が、その仏国土の中に充満していた。
(この諸々の仏国土は、)宝の「幔」、「幕(まく)」が、あまねく張られていた。
(この諸々の仏国土は、)宝の網(あみ)が上に懸けられていた。
この諸々の仏国土の諸仏は、大いなる妙なる音声で、諸法を説いていた。

また、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の菩薩が、諸々の仏国土に、あまねく満ちていて、「衆生」、「生者」の為に説法しているのが見えた。
南方、西方、北方、「四維」、「四隅」、上、下、白毫相の光に照らされている場所も、また、同様であった。
その時、十方の(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏は、各々、多数の菩薩達に告げて、言った。

善い男子よ、
私(、釈迦牟尼仏の分身である仏)は、今、まさに、「娑婆世界」、「この世」の釈迦牟尼仏の所へ行って、共に、多宝仏の宝の塔に捧げものを捧げよう。

その時、「娑婆世界」、「この世」は清浄に変わった。
(この世は、)瑠璃(るり)を地と成していた。
(この世は、)宝の樹で荘厳に飾られていた。
(この世は、)黄金を縄となして、八つの道の境界にしていた。
(この世には、)諸々の集落、村、町、海、大河、山、川、林が無くなった。
(この世は、)大いなる宝の香が焼香されていた。
(この世は、)曼陀羅華が、あまねく、その地に行き渡っていた。
(この世は、)宝の網(あみ)、宝の「幔」、「幕(まく)」が、その上に懸けられていて覆われていた。
(この世は、)諸々の宝の鈴が懸けられていた。
会衆だけは留められていて、(他の)諸々の天人、人は他の仏国土に移されて置かれていた。
この時、(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏は、各々、一人の大いなる菩薩を引き連れて、そばに仕える侍者として、「娑婆世界」、「この世」に来て、各々の宝の樹の下に到着した。
各々の宝の樹の高さは、五百由旬であった。
(宝の樹は、)枝、葉、華、果実の順に荘厳に飾られていた。
諸々の宝の樹の下には皆、高さが五由旬の「獅子の座」、「仏の座」が有った。
また、大いなる宝で、この「獅子の座」、「仏の座」は荘厳に飾られていた。
その時、(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏は、各々、これらの「仏の座」に結跏趺坐した。

(釈迦牟尼仏の分身である諸仏は、)このように転々として、三千大千世界に満ちた。
しかし、(三千大千世界では、)釈迦牟尼仏の、一方向の仏国土にいた分身ですらなお、未だ尽くすことができなかった。
その時、釈迦牟尼仏は、(釈迦牟尼仏の)分身である諸仏を受容しようと欲して、八方の各々の方向を更に変化させた。
(それによって、)二百万億那由他の仏国土は皆、清浄になって、「地獄、餓鬼、畜生、阿修羅」という「四悪道」が無く成った。
また、諸々の天人、人は移されて、他の仏国土に置かれた。
変化した仏国土も、また、瑠璃(るり)を地と成した。
(変化した仏国土は、)宝の樹で荘厳に飾られた。
(宝の)樹の高さは、五百由旬であった。
(宝の樹は、)枝、葉、華、果実で順に荘厳に飾られていた。
(宝の)樹の下には皆、高さが五由旬の宝の「獅子の座」、「仏の座」が有って、種々の諸々の宝で荘厳に飾られていた。
また、海、大河が無く成った。
また、目真隣陀(ムチャリンダ)山、摩訶 目真隣陀(ムチャリンダ)山、鉄囲山、大鉄囲山、須弥山などの諸々の山の王は通じていて、一つの仏国土を成した。
(変化した仏国土の)宝の地は、平らで、正しかった。
宝の「交露の」、「露(つゆ)を交えたように反射する宝玉を連(つら)ねた」、「幔」、「幕(まく)」が、その(変化した仏国土の)上をあまねく覆っていた。
(変化した仏国土には、)諸々の「幢旛」と「天蓋」が懸けられていた。
(変化した仏国土では、)大いなる宝の香が焼香されていた。
諸々の天の宝の華が、その(変化した仏国土の)地に、あまねく行き渡っていた。

釈迦牟尼仏は、(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏が来て坐禅できるように、八方の各々の方向を変化させたのである。
(それによって、)二百万億那由他の仏国土は皆、清浄に成って、「地獄、餓鬼、畜生、阿修羅」という「四悪道」が無く成ったのである。
また、諸々の天人、人は移されて、他の仏国土に置かれたのである。
変化した仏国土も、また、瑠璃(るり)を地と成したのである。
(変化した仏国土は、)宝の樹で、荘厳に飾られたのである。
(宝の)樹の高さは、五百由旬だったのである。
(宝の樹は、)枝、葉、華、果実の順に荘厳に飾られていたのである。

(宝の)樹の下には皆、高さが五由旬の宝の「獅子の座」、「仏の座」が有ったのである。
また、大いなる宝で、この「仏の座」は荘厳に飾られていたのである。
また、海、大河が無く成ったのである。
また、目真隣陀(ムチャリンダ)山、摩訶 目真隣陀(ムチャリンダ)山、鉄囲山、大鉄囲山、須弥山などの諸々の山の王は通じていて一つの仏国土を成したのである。
(変化した仏国土の)宝の地は、平らで正しかったのである。
宝の「交露の」、「露(つゆ)を交えたように反射する宝玉を連(つら)ねた」、「幔」、「幕(まく)」が、その(変化した仏国土の)上をあまねく覆っていたのである。
(変化した仏国土には、)諸々の「幢旛」と「天蓋」が懸けられていたのである。
(変化した仏国土では、)大いなる宝の香が焼香されていたのである。
諸々の天の宝の華が、その(変化した仏国土の)地に、あまねく行き渡っていたのである。

その時、東方の、釈迦牟尼仏の分身である、百千万億那由他恒河沙に等しい数の仏国土の中で各々説法していた諸仏は、この世に来て集まった。
同様に、順に、十方の(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏は皆ことごとく、来て集まって、八方で坐禅した。
その時、各々の方向の四百万億那由他の仏国土は、(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏が、その中に、あまねく満ちた。
この時、(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏は、各々、宝の樹の下にいて、「獅子の座」、「仏の座」に坐禅して、皆、侍者(としている一人の大いなる菩薩)を派遣して釈迦牟尼仏に「問訊させる」、「合掌し低頭し安否を尋ねさせる」ために、各々、手に満々と、すくった宝の華を(侍者としている一人の大いなる菩薩に)持たせて、この侍者(としている一人の大いなる菩薩)に告げて言った。

善い男子よ、
あなた(、菩薩)は、「耆闍崛山」、「霊(鷲)山」の釈迦牟尼仏の所へ行って、私(、釈迦牟尼仏の分身である仏)の言葉通りに言いなさい。

病が少なく、悩みが少なく、気力があって、安楽としていますか？
また、菩薩、声聞達は、ことごとく安穏としていますか？　否か？

この宝の華を釈迦牟尼仏の上に、まき散らして捧げて、このように言いなさい。

(釈迦牟尼仏の分身である)〇〇仏は、釈迦牟尼仏と共に、この宝の塔を開きたいと欲します。

(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏は、使いである菩薩を派遣して、同様にした。
その時、釈迦牟尼仏は、(釈迦牟尼仏の)分身である諸仏が、ことごとく既に来て集まって各々「獅子の座」、「仏の座」に坐禅しているのを見た。
また、釈迦牟尼仏は、(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏が皆、同じく、釈迦牟尼仏と宝の塔を開きたいと欲しているのを聞いた。
すると、釈迦牟尼仏は、座より起立して、空中に浮かんだ。
一切の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」は、起立して、合掌して、一心に釈迦牟尼仏を見つめた。
この時、釈迦牟尼仏は、右手の指で、「七宝」、「七種類の宝」の塔の戸を開いた。
すると、鍵を開いて大いなる城門を開けたような、大いなる音声が出た。
その時、一切の会衆は皆、多宝仏が宝の塔の中で「獅子の座」、「仏の座」で坐禅しているのを見た。
多宝仏の全身は、分解されて散ってはいなかった。
多宝仏は、禅定に入っているようであった。
また、その多宝仏の言葉が聞こえた。

善いかな。
善いかな。
釈迦牟尼仏は、快く、この法華経を説いている。
私、多宝仏は、この法華経を聴いて、ここに来たのである。

その時、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」などは、幾千万億もの無量劫の過去に(仮の身が)死んだ多宝仏が、このような言葉を説いているのを見て、「未だかつて無い」と、ほめたたえて、天に蓄えられた宝の華を多宝仏と釈迦牟尼仏の上に、まき散らした。
その時、多宝仏は、宝の塔の中で、座の半分を釈迦牟尼仏に分け与えて、このように言った。

釈迦牟尼仏よ、この座に就きなさい。

その時、釈迦牟尼仏は、その塔の中に入って、その多宝仏の座の半分に坐禅して結跏趺坐した。
その時、大衆は、(釈迦牟尼仏と多宝仏という)二人の仏が、「七宝」、「七種類の宝」の塔の中にいて、「獅子の座」、「仏の座」の上に結跏趺坐しているのを見て、各々、このように思った。

仏達は、高く遠くで坐禅している。
ただ、願わくば、仏が、神通力によって、私達をも共に空中に浮かべてくれますように。

その時、釈迦牟尼仏は、神通力で、諸々の大衆を近くに引き寄せた。
(そのため、大衆は、)皆、空中に浮かんだ。
(釈迦牟尼仏は、)大いなる音声で、あまねく、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」に告げた。

誰が、この「娑婆という仏国土」、「この世」で、妙法華経を広く説くことが可能であるのか？
今が、正に、この時である。
私、釈迦牟尼仏は、久しからず、「涅槃に入る」、「(肉体だけが)死ぬ」。
私、釈迦牟尼仏は、この妙法華経を付属させて存在させたいと欲する。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

「聖主」、「世尊」、「仏」である多宝仏は、(仮の身が)死んでから久しいといえども、宝の塔の中にいて、なお仏法の為に来たのである。
諸々の人達よ、どうして仏法の為に勤めないで善いであろうか？　いいえ！仏法の為に勤めるべきである！
この多宝仏の(仮の身の)死後、幾「無央数」、「阿僧祇」劫も過ぎているのである。
ありとあらゆる所で、仏法を聴くのには出会い難いので、この多宝仏は、本(もと)、願ったのである。

私、多宝仏の(仮の身の)死後、ありとあらゆる所で、常に、仏法を聴けますように。

また、私、釈迦牟尼仏の分身である、「恒(河)沙」、「ガンジス川の砂のように無数」に等しい数のような、量り知れないほど無数の諸仏が、来て、仏法を聴きたいと欲している。
また、(仮の身が)死んだ多宝仏を見るために、釈迦牟尼仏の分身である諸仏は各々、妙なる仏国土、弟子達、天人、人、龍神、諸々の捧げものを捨てて、仏法を久しく留めるために、この世に来ている。
釈迦牟尼仏は、(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏が坐禅できるように、神通力で、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を(他の仏国土へ)移して、仏国土を清浄にした。
清涼な池を蓮華が荘厳に飾るように、(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏は各々、宝の樹の下に来た。
その宝の樹の下の、その諸々の「獅子の座」、「仏の座」の上に、(釈迦牟尼仏の分身である)仏は坐禅した。
夜の闇の中で、大いなる、たいまつの火を燃やすように、光明が荘厳に飾っている。
(釈迦牟尼仏の分身である諸仏は、)身から妙なる香りを出していて、香りは十方の仏国土に行き渡っている。
「衆生」、「生者」は、香りをこうむって、喜びにたえることができない。
例えば、大いなる風が小さな樹の枝に吹いているような物なのである。

このような「方便」、「便宜的な方法」で、仏法を久しく留めさせる。

諸々の大衆に告げる。

私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、誰が、この法華経を破らず護って保持して、読むことが可能であろうか？
今、釈迦牟尼仏の前で、自ら、誓って言いなさい。

多宝仏は、(仮の身が)死んでから久しいといえども、大いなる誓願によって、「獅子吼している」、「獅子(ライオン)が吼(ほ)えるように説法している」。
多宝仏、釈迦牟尼仏、釈迦牟尼仏が集めた釈迦牟尼仏の化身である諸仏は、まさに、この意義を知っている。
諸々の仏の弟子達よ、誰が、仏法を破らず護ることが可能であろうか？

まさに、大いなる願いを起こして、仏法を久しく留めさせなさい。

この法華経の仏法を能(よ)く破らず護っている者は、私、釈迦牟尼仏と多宝仏に捧げものを捧げていることに成るのである。
この多宝仏が、宝の塔に処しながら、常に十方を巡っているのは、この法華経のためなのである。
また、法華経の仏法を破らず護っている者は、この世に来た釈迦牟尼仏の化身である諸仏、諸世界を荘厳に光で飾っている者達に捧げものを捧げていることに成るのである。
もし、この法華経を説けば、釈迦牟尼仏、多宝仏、釈迦牟尼仏の化身である諸仏を見ることに成るのである。
諸々の善い男子よ、各々、明らかに、思考しなさい。
これは、難しい事なのである。
まさに、大いなる願いを起こしなさい。

(法華経以外の)他の諸々の経は数が「恒(河)沙のようである」、「ガンジス川の砂のように無数である」といえども、これらの経を説いても、未だ難しいとはしないのである。
須弥山を近くに引き寄せて、他方向の無数の仏国土に投げて、置いても、また、未だ難しいとはしないのである。
足の指で、大千世界を動かして、他の仏国土へ遠く投げても、また、未だ難しいとはしないのである。
「有頂天」に立って、「衆生」、「生者」の為に、量り知れないほど無数の(法華経以外の)他の経を演説しても、また、未だ難しいとはしないのである。
仏の(仮の身の)死後、「悪世」、「悪い時代」の中で、能(よ)く、この法華経を説くことは、難しいのである。
たとえ人が手で虚空をとらえたまま巡り歩いても、また、未だ難しいとはしないのである。
私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、法華経を自ら書いたり、自ら保持したり、他人に書かせたりすることは、難しいのである。
大地を足の甲の上に置いて「大梵天」に昇天しても、また、難しいとはしないのである。
仏の(仮の身の)死後、「悪世」、「悪い時代」の中で、短時間でも、この法華経を読むことは、難しいのである。
たとえ乾燥した草を背負って「劫火」が焼いている中に入って焼かれなくても、また、未だ難しいとはしないのである。

私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を保持して、一人の為にでも、説くことは、難しいのである。
八万四千の「法蔵」、「経」、「十二部経」を保持して他人の為に演説して諸々の聴衆に六神通を得させても、また、未だ難しいとはしないのである。
私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を聴いて受け入れて、その意義を問うことは、難しいのである。
人が説法して、幾千万億もの量り知れないほど「恒(河)沙のように」、「ガンジス川の砂のように」無数の「衆生」、「生者」に阿羅漢を得させて、六神通を備えさせても、この利益は有るといえども、また、未だ難しいとはしないのである。
私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を捧げ持つことは、難しいのである。

私、釈迦牟尼仏は、仏道の為に、量り知れないほど無数の仏国土で、「最初」から今に至るまで、諸々の経を広く説いているが、その中で、この法華経は第一の経なのである。

もし法華経を保持できていれば、仏の身を保持していることになるのである。

諸々の善い男子よ、
私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、誰が、この法華経を受け入れて保持して読むことが可能であろうか？
今、釈迦牟尼仏の前で、自ら誓って言いなさい。

この法華経を保持することは、難しいのである。
もし短時間でも法華経を保持していれば、私、釈迦牟尼仏は喜ぶのである。
諸仏も、また、同様に喜ぶのである。
このような人は、諸仏に、ほめたたえられるのである。
法華経を保持している人は、勇猛なのである。
法華経を保持している人は、精進しているのである。
法華経を保持している人を、「戒を保持して『頭陀行』を行(おこな)っている者」と名づけるのである。
法華経を保持している人は、速(すみ)やかに、無上の仏道を会得する。
来世で、この法華経を読んで保持できれば、真の仏の弟子であるし、「淳」、「ありのまま」の善い境地に留まることができる。

仏の(仮の身の)死後、この法華経の意義を解説できる者は、諸々の天人、人、世間の眼なのである。
恐ろしい世の中で、短時間でも、法華経を説くことができた者に、一切の天人、人は皆、まさに、捧げものを捧げるべきである。

提婆達多品

その時、釈迦牟尼仏は、諸々の菩薩、および、天人、人、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」に告げた。

私、釈迦牟尼仏は、過去の量り知れないほど無数の劫の間、法華経を求めて、飽きて怠ることが無かった。
多数の劫の間、常に、国王と成って、「無上菩提」、「無上覚」を願い求める心を起こして、心が不退転であった。
「布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧」という「六波羅蜜」を満足に行おうと欲して、布施を行うことに勤めて、心の中で、象(ゾウ)、馬、「七珍」、「七宝」、「七種類の宝」、国、城、妻子による奉仕、「奴婢」による奉仕、少年の下僕による奉仕、頭、目、髄、脳、身の肉、手、足を惜しまなかった。
また、身の命を惜しまなかった。
その時、世の人民の寿命は量り知れないほどであった。
仏法のため、国の王位を捨てて、王子に政治を委ねて任せた。
太鼓を打ち鳴らして、宣言して、四方で、仏法を求めた。

誰が、私(、前世の釈迦牟尼仏)の為に、「大乗経」、「法華経」を説くことが可能な者であるのか？
私(、前世の釈迦牟尼仏)は、まさに、終身、捧げものを供給し、「走使」、「奉仕する下僕」と成ろう。

その時、(阿私陀と言う名前の)仙人がいて、来て、王(である前世の釈迦牟尼仏)に言った。

私(、阿私陀)には、「妙法蓮華経」と言う名前の「大乗経」の知識が有ります。
もし私(、阿私陀)に対して約束を違えなければ、まさに、あなた(、前世の釈迦牟尼仏)の為に、「妙法蓮華経」を説きましょう。

王(である前世の釈迦牟尼仏)は、(阿私陀と言う名前の)仙人の言葉を聞いて、喜んで、心が踊躍して、(阿私陀と言う名前の)仙人に従って、必要とするものを供給し、草木の果実を採ったり水を汲んだり薪を拾ったりして食事を設け、自身を椅子にしたりまでしたが、身心を怠けさせることが無かった。

(前世の釈迦牟尼仏は、)(阿私陀と言う名前の)仙人に仕えて千年が経ったが、仏法のために、精勤して、給仕して、不足が無いようにした。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

私、釈迦牟尼仏は、過去の劫を思い出すと、世の国王と成っていたが、大いなる仏法を求めるために、「五欲」、「五感の欲望」をむさぼらず、鐘を打ち鳴らして、四方に告げた。

誰が、大いなる仏法の知識が有る者であるのか？
もし私(、前世の釈迦牟尼仏)の為に解説してくれるならば、自身は、まさに下僕と成ろう。

時に、阿私(陀)と言う名前の仙人がいて、来て、大いなる王(である前世の釈迦牟尼仏)に言った。

私、阿私陀には、微細で絶妙な仏法、世間で希有とされている物の知識が有ります。
もし能(よ)く修行するならば、私、阿私陀は、まさに、あなた(、前世の釈迦牟尼仏)の為に説きましょう。

その時、王(である前世の釈迦牟尼仏)は、阿私陀仙人の言葉を聞いて、心に大いなる喜びを生じて、阿私陀仙人に従って、必要とするものを供給し、薪および草木の果実を採って随時、恭しく敬って与えた。
心が妙なる仏法に存在していて、身心を怠けさせることが無かった。
あまねく諸々の「衆生」、「生者」の為に、大いなる仏法を求めることに勤めた。
また、己の身および「五欲」、「五感の欲望」の快楽の為ではなく、大いなる国王と成って、この仏法を獲得することを求めて勤めた。
遂に、仏と成ることを得るに到った。
今、そのため、あなたたちの為に説いているのである。

釈迦牟尼仏は、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。

その時の王が、私、釈迦牟尼仏なのである。

その時の仙人が、今の提婆達多(デーヴァダッタ)なのである。
提婆達多(デーヴァダッタ)は(前世で)「善知識」、「善友」であったので、
私、釈迦牟尼仏は、「六波羅蜜」と、「慈悲喜捨」と、「三十二相」と、
「八十種好」と、「紫磨金色」、「紫色を帯びた最上質の純金の色」(の身)
と、「十力」と、「四無所畏」と、「四摂法」と、「十八不共(法)」と、神
通の道力を十分に備えて、「等正覚」、「普遍正覚」を成就して、広く「衆
生」、「生者」を仏土へ渡しているのである。
これらは皆、提婆達多(デーヴァダッタ)が(前世で)「善知識」、「善友」で
あったことによる物なのである。
諸々の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」に告げる。
提婆達多(デーヴァダッタ)は、無間地獄が終わった後、無量の劫を過ぎてか
ら、まさに、天王仏と言う称号の仏に成ることができ得る。
天王仏の世界、仏国土の名前は、天道である。
その時、天王仏は、天道と言う世界、仏国土に、二十中劫、住んで留まる。
広く、「衆生」、「生者」の為に、妙なる仏法を説く。
「恒河沙の」、「ガンジス川の砂のように無数の」、「衆生」、「生者」が、
阿羅漢果を得る。
量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」が、「縁覚」、「独覚」を求め
る心を起こす。
「恒河沙の」、「ガンジス川の砂のように無数の」、「衆生」、「生者」が、
無上の道心を起こして、「無生忍」、「生滅を超越した真理の認識」を得て、
不退転に留まる。
天王仏の(仮の身の)死後、正法は、二十中劫、世に住んで留まる。
全身の「舎利」、「遺骨」で、高さが六十由旬で、縦の奥行きと横の広さが
四十由旬である、「七宝」、「七種類の宝」の塔が建てられる。
諸々の天人、人は、ことごとく、多様な華、抹香、焼香、塗香、衣服、「瓔
珞」、「紐(ひも)状の飾り」、幢旛、宝蓋、「伎楽」、「音楽」、「歌頌」、
「ほめたたえる歌」を捧げて、「七宝」、「七種類の宝」の妙なる塔を礼拝
する。
量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」が、阿羅漢果を得る。
無数の「衆生」、「生者」が、「辟支仏」、「独覚」を悟る。
幾不可思議もの無数の「衆生」、「生者」が、「菩提」、「無上普遍正覚」
を求める心を起こして、不退転に成る。

釈迦牟尼仏は、諸々の「比丘」、「出家者」に告げた。

未来の来世の中で、もし善い男子、善い女の人がいて、妙法華経の提婆達多品を聞いて、清浄な心で信じて敬って、疑惑を生じなければ、
地獄、餓鬼、畜生に堕ちないし、
十方の仏の前に生じて、生まれた所で常に、この法華経を聞くし、
もし人の中、天上の中に生まれたら、優れた妙なる快楽を受けるし、
もし仏の前に存在するならば、蓮華から化生して生まれる。

その時、下方の、智積菩薩と言う名前の、多宝仏が従えている菩薩が、多宝仏に言った。

まさに、本(もと)の仏国土に帰還しましょう。

釈迦牟尼仏は、智積菩薩に告げて言った。

善い男子、智積菩薩よ、少し待ちなさい。
ここに、文殊師利菩薩と言う名前の菩薩がいる。
文殊師利菩薩とまみえて妙なる仏法を論じて、本(もと)の仏国土に帰還しなさい。

その時、文殊師利菩薩は、千枚の葉の、車輪のような大きさの蓮華に坐禅していた。
文殊師利菩薩と共に来ていた菩薩は、また、宝の蓮華に坐禅していた。
(文殊師利菩薩と共に来ていた菩薩は、)大海の娑竭羅龍王の宮殿から、自然と涌(わ)き出して、空中に浮かんで、霊鷲山へ行って、蓮華から下りて、釈迦牟尼仏と多宝仏の前に進んで、頭を釈迦牟尼仏と多宝仏の足につけて敬礼して、敬礼し終わると、智積菩薩の所へ行って、共に相互に、挨拶して安否を尋ねて、退いて、一面に坐禅していた。
智積菩薩は、文殊師利菩薩に質問した。

あなた、文殊師利菩薩が娑竭羅龍王の宮殿に行って教化した「衆生」、「生者」のその数は、幾ら、何名ですか？

文殊師利菩薩は、言った。

その数は、量り知れないほど無数で、数えることが不可能なほどですし、言い尽くすことができないほどですし、心で測ることができないほどです。

少し待ってください。
自然と、まさに、証が現れるはずです。

未だ言い終わらないうちに、無数の菩薩が、宝の蓮華に坐禅して、海より涌(わ)き出して、霊鷲山へ行って、空中に浮かんだ。
これらの諸々の菩薩は皆、文殊師利菩薩が教化して仏土へ渡した生者であった。
(文殊師利菩薩が教化した菩薩は、)菩薩の行いを備えていた。
皆、共に、六波羅蜜を論じて解説していた。
本(もと)は声聞の人であった。
空中に浮かんで、声聞の行いを説いていた。
今は、皆、大乗の空(くう)の意義を修行していた。

文殊師利菩薩は、智積菩薩に言った。

海で教化した、その事、人数は、このようなのです。

その時、智積菩薩は、詩で、ほめたたえて言った。

(文殊師利菩薩の)大いなる智慧と徳は、勇ましく健やかである。
(文殊師利菩薩は、)量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を教化して仏土へ渡している。
今、この諸々の大会衆、および、私、智積菩薩は皆、(文殊師利菩薩が)実の相の意義を説いて、一乗の仏法を開いて明かして、諸々の「群生」、「生者」を広く導いて速(すみ)やかに「菩提」、「無上普遍正覚」を成就させているのを既に見ている。

文殊師利菩薩は、言った。

私、文殊師利菩薩は、海中で、ただ、常に、妙法華経を説いています。

智積菩薩は、文殊師利菩薩に質問して言った。

この法華経は、とても深く、微細で絶妙で、諸々の経の中で宝であり、世で希有とされています。
精進を加えることに勤めて、この法華経を修行して速(すみ)やかに仏に成ることを得ている「衆生」、「生者」は少しでもいるのか？　否か？

文殊師利菩薩は、言った。

います。
娑竭羅龍王の龍王女は、年が八歳ですが、
智慧があります。
「根」、「能力」が利発です。
「衆生」、「生者」の諸々の「根」、「能力」による行いを善く知っています。
「陀羅尼」、「真理の保持」を得ています。
諸仏の所説の、とても深い秘蔵の智慧をことごとく能(よ)く受け入れて保持しています。
禅定に深く入っています。
「諸法」、「全てのもの」を了解、通達しています。
「刹那」、「一瞬」、「菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を起こして不退転になることを得ています。
雄弁の才能を「無礙」、「自由自在」にしています。
「衆生」、「生者」を赤子であるかのように思いやっています。
功徳を十分に備えています。
心の思い、言葉が、微細で絶妙で、広大です。
思いやり深いです。
「仁譲」、「思いやり深いし、謙遜深い」です。
心が柔和で優雅です。
能(よ)く「菩提」、「無上普遍正覚」に至っています。

智積菩薩は言った。

私、智積菩薩は、釈迦牟尼仏が量り知れないほど無数の劫、難行苦行して功徳を積み重ねて菩薩道を探求して未だかつて止めたことがないのを見ています。
三千大千世界を観察すると、「衆生」、「生者」のために釈迦牟尼仏が菩薩として身の命を捨てた場所ではない場所は芥子(からし)の種ほども無いです。
その後、(釈迦牟尼仏は、)「菩提」、「無上普遍正覚」、(仏)道を成就することができ得たのです。
この娑竭羅龍王女が一瞬で(無上普遍)正覚を成就したとは信じられません。

未だ言い終わらないうちに、娑竭羅龍王女が、たちまち目前に現れて、頭を釈迦牟尼仏と多宝仏の足につけて敬礼して、退いて、一面に留まって、詩で、ほめたたえて言った。

(仏は、)罪の報いの相と、幸福をもたらす善行の報いの相に深く通達しています。
(仏は、)十方をあまねく照らしています。
仏の法身は微細で絶妙で清浄です。
仏は、「三十二相」を備えています。
仏は、「八十種好」を用いて法身を荘厳に飾っています。
仏は、天人、人に頭上に戴かれて仰がれています。
龍神は、ことごとく、仏を恭しく敬っています。
一切の「衆生類」、「生者」で、仏を崇拝し奉らない者はいません。
また、私、娑竭羅龍王女が法華経を聞いて「菩提」、「無上普遍正覚」を成就しているのを、仏だけが、まさに、明らかに知っています。
私、娑竭羅龍王女は、「大乗の教え」、「法華経」を明かして、苦しんでいる「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させています。

その時、舎利弗は、娑竭羅龍王女に語って言った。

あなたは「久しからずして無上の仏道を会得した」と言いますが、
そのような事を信じるのは難しいです。
理由は何か？　(と言うと、)
女の身は、汚れで、仏法の器ではないからです。
(女の身で、)どうして「無上菩提」、「無上普遍正覚」を会得することが可能でしょうか？　いいえ！
仏道は、遠くに懸かっているような物なのです。
労苦して勤めて修行を積んで、量り知れないほど無数の劫を経て、諸々の「六度」、「六波羅蜜」をことごとく修行して、その後、仏道を成就することができるのです。
また、女の人の身では、五つの障害が有るのです。
(一)梵天王に成ることができ得ない。
(二)帝釈天に成ることができ得ない。
(三)第六天魔王波旬に成ることができ得ない。
(四)転輪聖王に成ることができ得ない。
(五)仏に成ることができ得ない。

どうして、女の身で、速(すみ)やかに、仏に成ることができ得るでしょうか？　いいえ！

その時、娑竭羅龍王女は、三千大千世界と等価である一つの宝玉を持っていて、宝玉を釈迦牟尼仏に捧げた。
釈迦牟尼仏は、娑竭羅龍王女の宝玉を受け入れた。
娑竭羅龍王女は、智積菩薩と舎利弗に言った。

私、娑竭羅龍王女は、宝玉を釈迦牟尼仏に捧げました。
釈迦牟尼仏は、私、娑竭羅龍王女の宝玉を受け入れました。
この事は速(すみ)やかでしたか？　否か？

智積菩薩と舎利弗は答えて言った。

とても速(すみ)やかでした。

娑竭羅龍王女は、言った。

あなた達の神通力で、私、娑竭羅龍王女が仏に成る所を見なさい。
私、娑竭羅龍王女が仏に成る速さは、釈迦牟尼仏が私、娑竭羅龍王女の宝玉を受け入れたよりも速(すみ)やかなのです。

当時の会衆は皆、娑竭羅龍王女が、たちまちのうちに、変身して男性に成って、菩薩の行いを備えて、南方の汚れが無い世界へ行って、宝の蓮華に坐禅して、「等正覚」、「無上普遍正覚」を成就して、仏の「三十二相」、「八十種好」で、あまねく十方の一切の「衆生」、「生者」の為に妙なる仏法を演説するのを見た。
その時、「娑婆世界」、「この世」の菩薩、声聞、「天龍八部衆」といった、人と、人ではない者は皆、遥かに、この娑竭羅龍王女が仏に成って、あまねく、その時の会の人、天人に説法しているのを見て、心に大いなる喜びを生じて、ことごとく、遥かに、娑竭羅龍王女を敬礼した。
量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」は、娑竭羅龍王女の説法を聞いて、理解して悟って、不退転になることができ得た。
量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」は、娑竭羅龍王女から「記」、「仏に成れる予言」を受けることができ得た。

汚れが無い世界は、くり返し、(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動した。
「娑婆世界」、「この世」の三千の「衆生」、「生者」は、後退しない境地に留まった。
三千の「衆生」、「生者」は、「菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を起こして、「記」、「仏に成れる予言」を受けることができ得た。
智積菩薩、舍利弗、一切の会衆は、黙って、信じて受け入れた。

勧持品

その時、薬王菩薩、大楽説菩薩、眷属の二万の菩薩は共に皆、釈迦牟尼仏の前で、このように誓って言った。

ただ、願わくば、釈迦牟尼仏よ、憂慮しないでください。
私達、薬王菩薩、大楽説菩薩、眷属の二万の菩薩が、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、まさに、この法華経を捧げ持って保持し、読み、説きます。
後世の悪い世では、「衆生」、「生者」は、善の種と成る善行が、とても少ないし、多くが「増上慢である」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」し、利益や仏法僧への捧げものをむさぼるし、悪の種と成る悪行を増やすし、解脱から遠く離れてしまうので、教化し難いが、私達、薬王菩薩、大楽説菩薩、眷属の二万の菩薩は、まさに、大いなる忍耐力を発揮して、この法華経を読み、保持し、説き、書き写し、種々の捧げものを捧げて、身の命を惜しみません。

その時、会衆の中の五百人の阿羅漢、「記」、「仏に成れる予言」を受けた者達は、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達、五百人の阿羅漢も、また、「他の国土でも、この法華経を広く説きます」と自ら誓い願います。

また、八千人の「(有)学」と「無学」の者達、「記」、「仏に成れる予言」を受けた者達は、座より起立して、合掌して、仏に向かって、このように誓って言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達、八千人の「(有)学」と「無学」の者達も、また、他の国土でも、この法華経を広く説きます。
理由は何か？　(と言うと、)
「この娑婆国の中の人」、「この世の人」は、多くが悪いし、「増上慢を懐いている」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」し、「功徳」、「善行」が浅はかであるし、誤って怒りやすいし、「濁である」、

「汚れている」し、こびへつらうし、心が不実であるからである。(だから、逆に、私達は法華経を説く必要が有るのである。)

その時、釈迦牟尼仏の叔母である(最初の女性の出家者である)摩訶波闍波提比丘尼と六千人の「(有)学」と「無学」の比丘尼は共に、座より起立して、一心に、合掌して、釈迦牟尼仏の御尊顔を仰ぎ見て、目を一時も離さなかった。
その時、釈迦牟尼仏は、憍曇弥とも呼ばれる摩訶波闍波提比丘尼に告げた。

なぜ、憂いた顔色で私、釈迦牟尼仏を見るのか？
あなた、摩訶波闍波提比丘尼は、心で、まさに、私、釈迦牟尼仏が、あなた、摩訶波闍波提比丘尼の名前を説いて「阿耨多羅三藐三菩提の記を授けなかった」、「仏に成れる予言をしなかった」と誤って思っているのか？
憍曇弥とも呼ばれる摩訶波闍波提比丘尼よ、
私は、先ほど、まとめて、このように説いたのである。

一切の声聞の段階の者の皆に、既に、「記を授ける」、「仏に成れる予言をする」と。

今、あなたが、「記」、「仏に成れる予言」を知りたいと欲するならば、(教えよう。)
(あなた、摩訶波闍波提比丘尼は、)将来の世で、まさに、六万八千億の諸仏の仏法の中で、大いなる法師と成る。
また、六千人の「(有)学」と「無学」の比丘尼も共に、(将来の世で、)法師と成る。
あなた、摩訶波闍波提比丘尼は、このように、徐々に、菩薩の道を備えて、まさに、一切衆生喜見仏と言う称号の仏に成る。
憍曇弥とも呼ばれる摩訶波闍波提比丘尼よ、
この一切衆生喜見仏と、六千人の菩薩は、「転次して」、「転々と次々と」、「授記して」、「仏に成れる予言をして」、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得る。

その時、羅睺羅の母である(釈迦牟尼仏の妻であった)耶輸陀羅比丘尼は、このように思った。

釈迦牟尼仏は、「授記する」、「仏に成れる予言をする」中で、独り、私、耶輸陀羅比丘尼の名前を説かなかった。

釈迦牟尼仏は、耶輸陀羅比丘尼に告げた。

あなた、耶輸陀羅比丘尼は、来世で、幾百、幾千、幾万、幾億もの諸仏の仏法の中で、菩薩の行いを修行して、大いなる法師と成る。
徐々に仏道を備えて、善い国の中で、まさに、具足千万光相仏と言う称号の仏に成ることができ得る。
具足千万光相仏の(仮の身の)寿命は、幾阿僧祇もの量り知れないほど無数の劫である。

その時、摩訶波闍波提比丘尼、耶輸陀羅比丘尼、その眷属の比丘尼達は皆、大いに喜んで、心が未曾有になることを得て、釈迦牟尼仏の前で、詩で説いて言った。

世尊、導師である釈迦牟尼仏は、天人、人を安穏とさせてくれる。
私達、比丘尼達は、「記」、「仏に成れる予言」を聞いて、心が安らかに満たされました。

諸々の比丘尼達は、この詩を説き終わると、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達、比丘尼達も、また、能(よ)く、他方の国土でも、この法華経を広く説きます。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、八十万億那由他の諸々の菩薩達を見た。
これらの諸々の菩薩は皆、「阿惟越致」、「不退転」であって、不退転の法輪を転じていて、諸々の「陀羅尼」、「真理の保持」を得ていて、座より起立して、釈迦牟尼仏の前に進んで、一心に、合掌して、このように思った。

もし釈迦牟尼仏が私達、菩薩達に、この法華経を保持して説くように命じてくれたら、まさに、釈迦牟尼仏の教えの通りに、この法華経を広く説くのに。

また、菩薩達は、このように思った。

釈迦牟尼仏は今、黙っていて、命じてくれない。

私達、菩薩達は、まさに、どうするべきか？

その時、諸々の菩薩達は、釈迦牟尼仏の意思を敬って、従って、また、自ら本(もと)の願いを満たしたいと欲して、釈迦牟尼仏の前で、「獅子吼して」、「獅子(ライオン)が吼えるように雄弁に」、誓って言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
私達、菩薩達は、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、十方世界を巡って行き来して、能(よ)く、「衆生」、「生者」に、この法華経を書き写させ、受け入れさせて保持させ、読ませ、その法華経の意義を解説して仏法の通りに修行させ、正しく記憶させます。
(しかし、)これらは皆、釈迦牟尼仏の威力による物なのです。
ただ、願わくば、釈迦牟尼仏が、他方にいても、遥かに見守って、守護してくれますように。

その時、諸々の菩薩は共に、同じく声を発して、詩で説いて言った。

ただ、願わくば、釈迦牟尼仏よ、憂慮しないでください。
釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、恐怖の悪い世の中でも、私達、菩薩達は、まさに、法華経を広く説きます。
諸々の無知な人がいて、悪口などを言ったり、刀で斬ってきたり、杖で叩いてきたりしても、私達、菩薩達は、まさに、忍耐します。
悪い世の中の似非(えせ)僧侶は、悪賢い心であるし、こびへつらうし、未だ仏法を会得していないのに「仏法を会得している」と思い上がって、「我慢な」、「自我による高慢な」心に満ちています。
また、孤立して「納衣」、「袈裟」を着て静かな場所にいるだけで、「真の仏道を行(おこな)っている」と誤って自ら思い上がって、他の人間を軽蔑する者がいて、利益に貪欲に執着しているのに、「白衣」、「在家者」に説法して、六通を会得している阿羅漢であるかのように、世で恭しく敬われてしまう。
これらの人々、似非(えせ)僧侶どもは、悪い心を懐き、常に世俗の事を思考し、「人里離れた静かな場所にいる出家者」を仮に名乗って、私達、菩薩達を過(あやま)ちに見せることを好んで、このように言ってしまう。

これらの諸々の出家者は、利益を貪るため、外道の議論を説いて、この法華経を自作して、世間の人をだまして惑わして、名声を求めて、この法華経を分別して説く、と。

似非(えせ)僧侶どもは、常に大衆の中にいて、私達、菩薩達の悪口を言おうと欲して、国王、大臣、バラモン、「居士」、「未出家の修行者」、他の「比丘」、「出家者」達に向かって、私達、菩薩達をこのように悪く言ってしまう。

邪悪な見解を持っている人なのであるし、
外道の論議を説いているのである、と。

私達、菩薩達は、釈迦牟尼仏を敬うので、ことごとく、これらの諸々の悪を忍耐します。
私達、菩薩達は、このように軽んじられて言われてしまうでしょう。

あなた達は皆、仏である、と。

私達、菩薩達は、これらの軽蔑による高慢な言葉を皆、まさに、忍耐します。
汚れた時代、悪い世の中では、諸々の恐怖が多数、有ります。
悪い霊が、それらの悪人の身に入って、私達、菩薩達の悪口を言います。
私達、菩薩達は、釈迦牟尼仏を敬い信じて、まさに、忍辱の鎧を着ます。
この法華経を説くため、これらの諸々の困難な事を忍耐します。
私達、菩薩達は、身の命を愛着せず、ただ、無上の仏道だけを惜しみます。
私達、菩薩達は、来世で、釈迦牟尼仏から付属された仏法を破らず護って保持します。
釈迦牟尼仏、御自身が、まさに、御存知です。
汚れた世の悪い似非(えせ)僧侶は、釈迦牟尼仏の「方便」、「便宜的な方法」による「随宜の」、「相手に応じた」所説の仏法を知ることができず、悪口を言い、不快そうに顔をしかめて、私達、菩薩達は、追放されて、塔や寺から遠く離されてしまう。
これらのような多数の悪事を、釈迦牟尼仏が命じてくれたように思って、皆、まさに、忍耐します。
諸々の集落、町で、仏法を求める者がいれば、私達、菩薩達は、皆、その場所に行って、釈迦牟尼仏から付属された仏法を説きます。
私達、菩薩達は、仏の使いなのです。

恐れる所が無いことが多いように身を処して、私達、菩薩達は、まさに、善く、仏法を説きます。
願わくば、釈迦牟尼仏よ、安穏としてください。
私達、菩薩達は、釈迦牟尼仏の前で、諸々の来臨されている十方の諸仏に、このように誓って言います。
釈迦牟尼仏、御自身が、私達、菩薩達の心を御存知です。

安楽行品

その時、法王子とも呼ばれる文殊師利菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。

世尊、釈迦牟尼仏よ、
これらの諸々の菩薩達は、とても希有です。
釈迦牟尼仏を敬い従うので、「後世の悪の世でも、この法華経を破らず護って保持し、読み、説きます」という大いなる誓願を起こしました。
世尊、釈迦牟尼仏よ、
菩薩は、後世の悪の世で、どのようにしたら、この法華経を説くことが可能ですか？

釈迦牟尼仏は、文殊師利菩薩に告げた。

もし菩薩が、後世の悪の世でも、この法華経を説きたいと欲するならば、四つの法に安らかに留まるべきである。

(菩薩は、)第一に、「菩薩の行処」と「菩薩の親近処」に安らかに留まれば、「衆生」、「生者」の為に、この法華経を演説することが可能である。

文殊師利菩薩よ、
どのような物を「菩薩の行処」と名づけるのか？　(と言うと、)
もし菩薩が忍辱の境地に留まっていて、柔和で、善に従っていて、短気ではなく、心を驚かせず、「仏法を行う所が無く」、「(いつまでも)意識して仏法を行おうとせず」、「『諸法』、『全てのもの』は、ありのままの相である」と観察していて、(いつまでも意識して仏法を)行おうとせず、(誤った)分別をしなければ、これを「菩薩の行処」と名づける。

どのような物を「菩薩の親近処」と名づけるのか？　(と言うと、)
菩薩は、国王、王子、大臣、長官に親しみ近づくなかれ。
諸々の外道、バラモン、尼犍子という外道など、世俗的な書物の作者、外道の書物をほめたたえて歌う者、路伽耶陀という外道の者、逆路伽耶陀という外道の者に親しみ近づくなかれ。
諸々の悪い遊戯、腕相撲、相撲や、「那羅」などの種々の変化による遊戯に親しみ近づくなかれ。

「旃陀羅」、「屠殺人、漁師、猟師」、猪(イノシシ)、羊、鶏、犬を屠殺する家畜とする者、猟師、漁師、諸々の悪へ陥(おとしい)れるものに親しみ近づくなかれ。
これらの人が、ある時、来れば、これらの人の為に説法するが、(親しみ近づこうと)希望するなかれ。
声聞の段階(に停滞すること)を求める出家者の男女と在家信者の男女に親しみ近づくなかれ。(声聞の段階に停滞することを求める人に)合掌し低頭し安否を尋ねるなかれ。
(声聞の段階に停滞することを求める人と、)部屋の中でも、坐禅の合間に歩いた先でも、「講堂」の中でも、共にいるなかれ。
(声聞の段階に停滞することを求める人が、)ある時、来れば、「随宜に」、「相手に応じて」説法するが、(親しみ近づこうと)希望するなかれ。
文殊師利菩薩よ、
菩薩は、女の人の身に対して「十二因縁」の「取」をして性欲の想いの相を生じるなかれ。
(性欲無しで、)女の人の為に、説法するべきである。
(性欲によって、)女の人の身を見たいと願うなかれ。
(性的な誤解をされないように、)もし他人の家に入っても、少女、処女、未亡人などと話すなかれ。
(性的な誤解をされないように、)「五種不男の」、「性器に障害が有る」人に近づくなかれ。(「五種不男の」、「性器に障害が有る」人に)親しむなかれ。
(菩薩は、)独りで他人の家に入るなかれ。
もし理由が有って、独りで他人の家に入る時は、ただ、一心に、仏について思いなさい。
もし女の人の為に説法するならば、歯を露出して笑うなかれ。胸中の思いを現すなかれ。仏法の為に、親しむなかれ。その他の事もするなかれ。
若い弟子、未成年の出家者、子どもを願って養うなかれ。
若い弟子、未成年の出家者、子どもと、願って師を同じくするなかれ。
常に坐禅を好み、人里離れた静かな場所にいて、心を正して修行しなさい。
文殊師利菩薩よ、
これを「菩薩の最初の親近処」と名づける。

次に、菩薩は、「一切の法は、空(くう)である」「一切のものは、空(くう)である」と観察するし、
「一切のものは、ありのままの相である」、

「一切のものは、転倒しない」、
「一切のものは、不動である」、
「一切のものは、不退転である」、
「一切のものは、虚空のように、性質が無い」、
「一切のものは、一切、言い表せない」、
「一切のものは、生じていない」、
「一切のものは、出現していない」、
「一切のものは、引き起こされていない」、
「一切のものは、名づけることができない」、
「一切のものは、相が無い」、
「一切のものは、実は、存在していない」、
「一切のものは、量り知れない」、
「一切のものは、限界が無い」、
「一切のものは、妨げられないし、障害が無い(、自由である)」、
「一切のものは、ある理由によって、存在しているだけである」、
「一切のものは、転倒によって、生じている」と観察する。
そのため、これらのように、「法」、「もの」の相を常に願って観察するように説くのである。
これを「菩薩の第二の親近処」と名づける。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

もし菩薩が、後世の悪い世で、恐れる心無く、この法華経を説きたいと欲するならば、まさに、「菩薩の行処」と「菩薩の親近処」に入るべきである。
国王、王子、大臣、長官、悪い遊戯をしている者、「旃陀羅」、「屠殺人、漁師、猟師」、外道、バラモンから常に離れなさい。
「増上慢の」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」人、「小乗」、「中途半端の仏法」に貪欲に執着している経典の似非(えせ)学者、戒を破っている出家者、名前だけの(実体が伴わない偽の)阿羅漢、戯れて笑うことを好んでいる女性の出家者、「五欲」、「五感の欲望」に深く執着して現在での「滅度」、「悟り」を求めている諸々の女性の在家信者に親しみ近づくなかれ。
もし、これらの人達が、好奇心で、菩薩の所に到来して、仏道について聞いたら、菩薩は、恐れる所が無い心で、希望を抱かず、これらの人達の為に、説法しなさい。

(性的な誤解をされないように、)未亡人、処女、諸々の「不男」、「性器に障害が有る人」に親しみ近づくなかれ。
「屠児」、「屠殺者」、「魁膾」、「死刑執行人」、猟師、漁師、利益の為に殺害する者、肉の販売で自ら生活する者、遊女といった、これらのような人に親しみ近づくなかれ。
悪い遊戯をしている者、相撲をしている者、種々の遊戯をしている者、諸々の遊女などに親しみ近づくなかれ。
(性的な誤解をされないように、)独りで、人目の無い場所で、女の為に、説法するなかれ。
説法する時は、戯れて笑うなかれ。
人里へ入って乞食(こつじき)するならば、一人の比丘を引き連れなさい。
もし比丘がいなければ、一心に、仏について思いなさい。
これを「菩薩の行処」と「菩薩の親近処」と名づける。
この「菩薩の行処」と「菩薩の親近処」という二つの物によって、安楽に、法華経を説くことが可能である。
「菩薩という上の仏法を行おう」とか「独覚という中間の仏法を行おう」とか「声聞という下の仏法を行おう」とするなかれ。「『有為な』、『作為的な』仏法を行おう」とか「『無為な』、『自然な』仏法を行おう」とするなかれ。「真実のほうの仏法を行おう」とか「真実ではないほうの仏法を行おう」とするなかれ。
「〇〇は、男である」とか「〇〇は、女である」と分別するなかれ。
「諸法」、「全てのもの」を得ようとし過ぎるなかれ。
全てのものを知ろうとし過ぎるなかれ。
全てのものを見ようとし過ぎるなかれ。
これを「菩薩の行処」と名づける。

一切の「諸法」、「全てのもの」は、空(くう)である。
全てのものは、存在していない。
全てのものは、永遠に不変ではない。
全てのものは、引き起こされていないし、滅びない。
これを「知者の親近処」(、「菩薩の親近処」)と名づける。

転倒して(誤って)
「『諸法』、『全てのもの』は、存在している」とか
「全てのものは、虚無である」とか
「全てのものは、真実である」とか

「全てのものは、真実ではない」とか
「全てのものは、生じている」とか
「全てのものは、生じていない」と分別しているのである。

人里離れた静かな場所にいなさい。
その心を正して修行しなさい。
須弥山のように、不動に安定しなさい。
「虚空のように、一切の『法』、『もの』は皆、無で、存在していない」と観察しなさい。
「一切のものは、堅固ではない」、
「一切のものは、生じていない」、
「一切のものは、出現していない」、
「一切のものは、不動である」、
「一切のものは、不退転である」、
「一切のものは、『一相』、『究極的な唯一の相』に常に留まっている」と観察しなさい。
これを「(菩薩の親)近処」と名づける。

出家者が、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この「菩薩の行処」と「菩薩の親近処」に入って、この法華経を説く時、恐れるものは無い。
菩薩が、ある時、静かな部屋に入って、「正憶念」、「正しく記憶したもの」によって、法華経の意義に従って、「法」、「もの」を観察して、禅定より起きて、諸々の国王、王子、役人、民、バラモン等の為に、「開化して」、「教え導いて」、この法華経を広く説けば、その心は安穏として、恐れるものは無い。
文殊師利菩薩よ、
これを「菩薩が最初の法に安住している」と名づける。

(このようにすれば、菩薩は、)後世で、法華経を説くことが可能である。

文殊師利菩薩よ、
釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、末法の中で、この法華経を説きたいと欲するならば、まさに、「安楽行」に留まるべきである。
口(くち)で説いたり、読んだりする時、人や経の過ちを願って説くことなかれ。
(自分以外の)他の諸々の法師を、思い上がって、見下すなかれ。

他人の好き嫌い、他人の長所や短所を説くなかれ。
声聞の段階の人について、名前を言って、その過(あやま)ち、悪い所を説くなかれ。
また、(声聞の段階の人について、)名前を言って、その美点をほめたたえるなかれ。
怨んだり嫌ったりする心を生じるなかれ。
このような安楽な心を善く修行すれば、諸々の聴衆は、その意に逆らわない。
非難されて返答を迫られたら、「小乗法」、「中途半端の仏法」によって答えるなかれ。
ただ、「大乗」、「法華経」をその人の為に解説して、「一切種智」を得させなさい。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

菩薩は、安穏に仏法を説くことを常に願いなさい。
清浄な心の境地で、「牀座施しなさい」、「座や立場を他人に譲ってあげなさい」。
油を身に塗りなさい。
身の塵(ちり)、汚れを洗浄しなさい。
新しい清浄な衣を着なさい。
内外を共に清浄にして、安らかに法座に処して、質問に応じて、生者の為に、法華経を説きなさい。
出家者の男女と在家信者の男女がいても、国王、王子、大臣、役人、平民がいても、微細な絶妙な意義について、柔和な顔つきで、人々の為に、法華経を説きなさい。
非難されて返答を迫られたら、法華経の意義に従って、答えなさい。
「因縁」、「譬喩」を説明して、「方便」、「便宜的な方法」で分別して、皆に、無上普遍正覚を求める心を起こさせなさい。
徐々に利益を増やして仏道に入って、怠惰な心と想いを除去して、諸々の憂い悩みから離れて、思いやりの心で、仏法を説きなさい。
昼も夜も常に、諸々の「因縁」、量り知れないほど無数の「譬喩」で、無上の仏道の教えを説いて、「衆生」、「生者」に仏の知見を開示して、ことごとく、喜ばせなさい。
衣服、寝具、飲食物、医薬品の中にいても、(衣服、寝具、飲食物、医薬品を)希望することなかれ。

ただ、一心に、仏法が説かれる「因縁」、「理由」について思って、仏道を成就することを願って、「衆生」、「生者」にも、また、同様に、仏道を成就させなさい。
これは、大いなる利益であるし、安楽に捧げものを捧げることである。
私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、出家者が、この妙法華経を演説できれば、心から嫉妬、怒り、諸々の障害が無くなるし、憂いが無くなるし、悪口を言う者がいなくなるし、刀で斬ってこられたり杖で叩いてこられたりする恐れが無くなるし、追放されることが無くなる。(なぜなら、)
忍耐に安らかに留まるからである。
知者は、このように、善く、その心を修行して、安楽に留まることが可能である。
私、釈迦牟尼仏が今まで説いたような、そのような人の功徳は、幾千、幾万、幾億劫、数えたり、例えたりしても、説き尽くすことが不可能なのである。

文殊師利菩薩よ、
後世の末法の世で、仏法が姿を隠そうとする時、この法華経を受け入れて保持して読む者は、嫉妬、こびへつらい、ごまかす心を懐くなかれ。
仏道を学ぶ者を見下して悪口を言うなかれ。その者の長所や短所をうかがい求めるなかれ。
出家者の男女と在家信者の男女、声聞の段階を求める者、「辟支仏」、「独覚」の段階を求める者、菩薩の道を求める者を悩ますなかれ。それらの人達に疑惑や後悔を生じさせるなかれ。それらの人達に、このように言うなかれ。
「
あなたは、仏道を離れ去っていて、仏道から、とても遠くて、終に、『一切種智』を得ることは不可能である。
理由は何か？　(と言うと、)
あなたは、『放逸な人』、『怠け者』である。(なぜなら、)
仏道を怠けているからである。
」と。

「諸法」、「全てのもの」について議論して戯れるなかれ。議論して争うなかれ。議論して競争するなかれ。

まさに、一切の「衆生」、「生者」に、大いなる思いやりの想いを起こしなさい。
「諸々の如来、仏は、思いやり深い父である」という想いを起こしなさい。

「諸々の菩薩は、大いなる師である」という想いを起こしなさい。
十方の諸々の大いなる菩薩を、常に、まさに、「深心」、「真心」で、恭しく敬って、礼拝しなさい。
一切の「衆生」、「生者」に、平等に、仏法を説きなさい。
「仏法に従っているから」と、(不平等に、)「仏法を多く説こう」とするなかれ。「仏法を少なく説こう」とするなかれ。
「仏法を深く愛好している者であるから」と、(不平等に、)その者の為に「仏法を多く説こう」とするなかれ。
文殊師利菩薩よ、
このようにしている菩薩が、後世の末法の世で、仏法が姿を隠そうとする時、この第三の「安楽行」を成就すれば、この法華経を説く時、悩まされて心を乱される可能性が無いし、同じく学ぶ好い者を得て共に、この法華経を読むことができる。
また、来て、法華経を聴いて受け入れる、大衆を得ることができるし、
聴き終わったら、能(よ)く、保持し、
保持し終わったら、能(よ)く、読み、
読み終わったら、能(よ)く、説き、
説き終わったら、能(よ)く、書いたり、他人に書かせたりして、
この法華経に捧げものを捧げて、恭しく敬って、尊重して、ほめたたえる。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

もし、この法華経を説きたいと欲するならば、
まさに、嫉妬、怒り、思い上がり、こびへつらい、ごまかし、邪悪、虚偽の心を捨てなさい。
常に、正直な行いを修行しなさい。
他人を軽蔑するなかれ。
仏法を議論して戯れるなかれ。
このように言って、他人に疑惑や後悔を生じさせるなかれ。
「
あなたは、仏になることができ得ない。
」と。

このようにする仏の弟子は、仏法を説きなさい。
常に、柔和でありなさい。

能(よ)く忍耐しなさい。
一切の生者を思いやりなさい。
怠け心を生じるなかれ。

十方の大いなる菩薩は「衆生」、「生者」をあわれんで仏道を修行しているので、まさに、「十方の大いなる菩薩は、私の大いなる師である」と恭しく敬う心を生じさせなさい。

「諸仏は、無上の父である」という想いを生じさせなさい。

思い上がって他人を見下す心を打ち破りなさい。
妨げ無く自由自在に、仏法を説きなさい。
第三の法「安楽行」とは、このような物なのである。
知者は、まさに、守りなさい。
一心に、安楽に行えば、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」に敬われる。

文殊師利菩薩よ、
後世の末法の世で、仏法が姿を隠そうとする時、法華経を受け入れて保持する者は、在家信者や出家者の中で大いなる思いやりの心を生じさせて、菩薩ではない人々の中で大いなる思いやりの心を生じさせて、このように思いなさい。
「
これらの人々は、仏の『方便』、『便宜的な方法』の『随宜の』、『相手に応じた』説法(である法華経)を大いに失ってしまっているのである。
法華経を聞いていないし、知らないし、悟っていないし、たずねないし、信じないし、理解しない。
その人々が、この法華経をたずねなくても、信じなくても、理解しなくても、私は、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を得て仏に成った時、どの地にいても、応じて、神通力と知力によって、この人々をこの法華経の法の中に引き入れて住まわせよう。
」と。

文殊師利菩薩よ、
このようにする菩薩は、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この第四の法を成就すれば、この法華経の法を説く時、過失が無い。

常に、出家者の男女と在家信者の男女、国王、王子、大臣、平民、バラモン、「居士(バイシャ)」、「商人」などに捧げものを捧げられて、恭しく敬われて、尊重されて、ほめたたえられる。
虚空の諸々の天人は、説法を聴くために、常に、従って、そばに仕える。
集落、町、人里離れた静かな林の中にいて、人が来て非難して返答を迫ろうと欲しても、諸々の天人は、昼も夜も常に、仏法のために、この菩薩を護衛して、聴衆を皆、喜ばせる。
理由は何か？　(と言うと、)
この法華経は、一切の過去、現在、未来の諸仏の神通力で護られているからである。

文殊師利菩薩よ、
この法華経は、量り知れないほど無数の国の中で、名前を聞くことすらでき得ないほどなのである。
まして、見て、受け入れて保持して、読むことができ得ようか！　いいえ！難しい！

文殊師利菩薩よ、例えば、このような物なのである。
強力な転輪聖王が、威力、勢力によって、諸国を降伏させたいと欲する。
諸々の小国の王が、その転輪聖王の命に従わない時、転輪聖王は種々の兵達を起こして討伐しに行く。
転輪聖王は、兵達の中で、戦いで功績が有った者を見ると、大いに喜んで、功績に応じて、褒賞を与える。あるいは、田畑と住宅、集落、町を与える。あるいは、衣服、身を荘厳に飾る装身具を与える。あるいは、種々の珍しい宝、金、銀、瑠璃(るり)、硨磲(しゃこ)、碼碯(めのう)、珊瑚(さんご)、琥珀(こはく)、象(ゾウ)、馬、乗り物、「奴婢」、民を与える。
(しかし、)唯一、「髻」、「頭上で束ねた髪」の中の光明に輝く宝玉だけは、与えない。
理由は何か？　(と言うと、)
王の頂上に有るのは、この唯一の髻の宝玉だけだからである。
もし、この髻の宝玉を与えたら、王の諸々の眷属は必ず大いに驚き怪しむ。
文殊師利菩薩よ、
如来、仏も、また、同様なのである。
仏は、禅定と知力によって、仏法、仏国土、三界の王となることを得ている。
諸々の魔王が従わなければ、如来、仏は、賢者達や聖者達という諸々の将軍と共に戦う。

仏も、また、魔との戦いで功績が有った者を見ると、心で喜んで、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の中で、その者の為に、諸々の経を説いて、その者の心を喜ばせて、禅定と、解脱と、「無漏の」、「煩悩の無い」、「五根」と「五力」と、「諸法」、「全てのもの」という財宝と、「涅槃」という城を与えて、「(あなたは、)『滅度』、『悟り』を得た」と言って、その者の心を仏道へ引き入れて導いて、皆、喜ばせる。
しかし、その者の為に、この法華経を(すぐには)説かない。
文殊師利菩薩よ、
転輪聖王が、諸々の兵達で、大いなる功績が有る者を見ると、心をとても喜ばせて、信じ難いほど貴重な、妄りには与えない、この髻の宝玉を今、与えるような物なのである。
如来、仏も、また、同様なのである。
仏は、三界の中で大いなる法の王であり、仏法で一切の「衆生」、「生者」を教化する。
如来、仏も、また、「五陰魔」、「煩悩魔」、「死魔」と、共に戦った賢者と聖者の軍で、「三毒」を滅ぼし、三界を脱出し、魔の網を打ち破った、大いなる功績が有った者を見た時、大いに喜んで、「衆生」、「生者」を「一切種智」に至らせることが可能である、一切の世間で多くの人が怨んで信じ難いので、以前は説かなかった、この法華経を今、説く。
文殊師利菩薩よ、
この法華経は、諸々の如来、諸仏の第一の説なのである。
法華経は、諸々の説の中で、最も、とても、深いのである。
法華経は、最後に与える経なのである。
例え話の強力な転輪聖王が長い間、護っていた髻の、光明に輝く宝玉を今、与えるような物なのである。
文殊師利菩薩よ、
この法華経は、諸々の如来、諸仏の秘密の蔵なのである。(法華経は諸仏の秘密の宝庫なのである。)
法華経は、諸々の経の中で、最上の経なのである。
この法華経を、「長夜」、「輪廻転生」の間、守護していて妄りには説かなかったが、初めて今日、あなた達に与えて、説明しているのである。

その時、世尊、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

常に忍辱を行い、一切の生者をあわれむことで、仏が、ほめたたえる法華経を演説することが可能となるのである。
後世の末法の世、時代で、この法華経を保持する者は、在家信者と出家者と菩薩ではない人々に対する、このような思いやりを生じさせなさい。
「
これらの人々は、この法華経を聞かないし、信じないで、大いに失ってしまう。
私は、仏道を会得したら、諸々の『方便』、『便宜的な方法』で、これらの人々の為に、この法華経の法を説いて、これらの人々を、その法華経の法の中に住まわせよう。
」と。

例えば、強力な転輪聖王が、兵で、戦いで、功績が有った者に、諸々の物、象(ゾウ)、馬、乗り物、身を荘厳に飾る装身具、諸々の田畑と住宅、集落、町、衣服、種々の珍しい宝、「奴婢」、財宝を喜んで与えるような物なのである。
勇ましく健やかに困難な事を成し遂げた者に、転輪聖王は、髻の中から光明に輝く宝玉を外して与える。
如来、仏も、また、同様なのである。
仏は、「諸法」、「全てのもの」の王である。
仏には、忍辱する大いなる力がある。
仏には、智慧という宝の蔵がある。
仏は、大いなる思いやりで、仏法の通りに、世を教化する。
仏は、一切の人が諸々の苦悩を受け、解脱を求めることを欲し、諸々の魔と戦っているのを見ると、これらの「衆生」、「生者」の為に、種々の法を説き、大いなる「方便」、「便宜的な方法」で諸々の経を説く。
転輪聖王が髻から光明に輝く宝玉を外して与えるように、仏は、「『衆生』、『生者』が力を得終わった」と知ると、最後に、生者の為に、この法華経を説く。
この法華経は、尊い経なのである。
この法華経は、諸々の経の中で、最上の経なのである。
私、釈迦牟尼仏は、法華経を常に守護して妄りには開示しなかった。
今、まさに、法華経を開示する時なのである。
あなた達の為に、法華経を説く。

私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、仏道を求める者が、安穏に、この法華経を演説したいと欲するならば、まさに、このような四つの法に親しみ近づきなさい。
この法華経を読む者は、常に憂い悩みが無くなるし、病気が無くなるし、顔色が鮮やかに白くなるし、貧困で困窮する者として生まれないし、身分の低い者として生まれないし、醜い者として生まれない。
「衆生」、「生者」は、賢者や聖者を慕うように、法華経を読む者を見ようと願う。
天人の諸々の童子は、給仕と成る。
刀で斬ってこられたり、杖で叩いてこられたりしない。
毒で害することは不可能である。
もし人が法華経を読む者の悪口を言ってしまったら、口(くち)が閉塞してしまう。
百獣の王である獅子(ライオン)のように、恐れること無く、巡ることができる。
智慧の光明は、太陽が照らすかのようになる。
夢の中では、妙なる事だけを見る。
諸仏が「獅子の座」、「仏の座」に坐禅して、諸々の出家者達に囲まれて、説法するのを見る。
龍神、阿修羅などが恭しく敬って合掌するのを見る。
自身が、龍神や阿修羅などの為に、説法するのを見る。
諸仏が、身の相が金色で、無量の光を放って一切を照らして、「梵音声」、「清浄な音声」で諸法を演説するのを見る。
仏が、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の為に、無上の法を説くのを見る。
自身を見ると、合掌して仏をほめたたえて、仏法を聞いて喜んで捧げものを捧げて、「陀羅尼」、「真理の保持」を得て、不退転の智慧を証している。
仏は、その生者の心が「深く仏道に入った」と知ると、その生者の為に、「無上普遍正覚を成就する」と、「授記する」、「仏に成れる予言をする」。
あなた達、善い男子よ、
まさに、来世で、無量の智慧を得て、仏の大いなる「道」、「真理」を会得する。
仏国土は、荘厳に清浄で、広大で、無比である。
仏国土には、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」がいて、合掌して、仏法を聴く。

自身が「山林の中にいて、善い法を修習して、諸法の実の相を証して、禅定に深く入って、十方の仏を見る」のを見る。

諸仏が、身が金色で、多数の幸福の相で荘厳に飾られていて、仏法を聞き、他人の為に仏法を説く。
常に、このような好い夢が有る。

夢で、国王と成ったが、宮殿と眷属と上品な妙なる「五欲」、「五感の欲望」を捨てて、道場である菩提樹の下に行って、「獅子の座」、「仏の座」に処して、仏道を探求して七日を過ぎて、諸仏の智慧を得て、無上の仏道を成就し終わると、起きて、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の為に「法輪を転じて」、「法を説いて」、幾千、幾万、幾億劫も経ってから、「無漏の」、「煩悩を無くす」妙なる法を説いて、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」を仏土へ渡して、その後、まさに、煙が尽きるように、灯が消えるように、「涅槃に入る」、「肉体が死ぬ」。

もし後世の悪い世の中で、この法華経という第一の法を説けば、その人は、今まで説いた諸々の功徳のような大いなる利益を得る。

従地涌出品

その時、他方の仏国土から来ている、八恒河沙を超過する数の、諸々の菩薩は、大衆の中で、起立して、合掌して、敬礼して、釈迦牟尼仏に言った。

釈迦牟尼仏よ、
もし私達、他方の仏国土の菩薩に、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、「この娑婆世界」、「この世」にいて、精進を加えることに勤めて、この法華経を破らず護って保持し、読み、書き写し、捧げものを捧げることを許してくれるならば、まさに、「この仏国土」、「この世」で、この法華経を広く説きましょう。

その時、釈迦牟尼仏は、他方の仏国土の諸々の菩薩達に告げた。

止めなさい。善い男子よ、
あなた達が、この法華経を破らず護って保持する必要は無いです。
理由は何か？　(と言うと、)
私、釈迦牟尼仏の「娑婆世界」、「この世」には、六万恒河沙の菩薩達がいます。
各々の菩薩には、六万恒河沙の眷属がいます。
これらの諸々の人達が、能(よ)く、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を破らず護って保持し、読み、広く説くからです。

釈迦牟尼仏が、このように説いた時、「娑婆世界の三千大千世界の仏国土」、「この世」の地は、皆、震えて裂けて、その中から、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の菩薩がいて、同時に、涌き出した。
この世の地から涌き出した、これらの諸々の菩薩は皆、身が金色であり、三十二相をそなえ、無量の光明をはなっていた。
この世の地から涌き出した菩薩は、以前から、皆ことごとく、「娑婆世界」、「この世」の下方の世界の空中に住んでいた。
この世の地から涌き出した、これらの諸々の菩薩は、釈迦牟尼仏の説法の音声を聞いて、この世の下方から起こって来たのである。
この世の地から涌き出した、菩薩は皆、各々、大衆の「唱導」の首位の者である。
この世の地から涌き出した、菩薩は、六万恒河沙の眷属を引き連れていた。

また、この世の地から涌き出した者達には、五万恒河沙、四万恒河沙、三万恒河沙、二万恒河沙、一万恒河沙の眷属を引き連れている者がいた。
また、恒河沙、恒河沙の半分、恒河沙の四分の一、千万億那由他分の一の眷属を引き連れている者がいた。
また、千万億那由他の眷属を引き連れている者がいた。
また、一万億の眷属を引き連れている者がいた。
また、千万、百万、一万の眷属を引き連れている者がいた。
また、千、百、十の眷属を引き連れている者がいた。
また、五、四、三、二、一の弟子を引き連れている者がいた。
また、己、単身で、執着などを遠離する行いを願っている者がいた。
この世の地から涌き出した、これらの者達は、無限なほど、量り知れないほど無数で、数えても、例えても、知ることが不可能なほどであった。
この世の地から涌き出した、これらの諸々の菩薩は、地から涌き出し終わると、各々、空中の多宝仏の七種類の宝の妙なる塔の、多宝仏と釈迦牟尼仏の所に行って、頭を多宝仏と釈迦牟尼仏の足につけて敬礼した。
また、諸々の宝の樹の下の「獅子の座」、「仏の座」の上の釈迦牟尼仏の分身である諸仏の所にも行って、敬礼して、右回りに三周まわって敬礼して、合掌して、恭しく敬って、諸々の菩薩の種々のほめたたえる方法で、ほめたたえた。
そして、一面に留まって、喜んで、多宝仏と釈迦牟尼仏という二人の仏を仰ぎ見た。
これらの諸々の菩薩は、地から涌き出して、諸々の菩薩の種々のほめたたえる方法で、仏をほめたたえた。
このようにして、五十小劫もの時間が経った。
この時、釈迦牟尼仏は黙って坐禅していて、また、諸々の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」も、また、皆、黙っていて、五十小劫も経ったが、釈迦牟尼仏の神通力のおかげで、諸々の大衆は半日しか経っていないかのように思った。
その時、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」も、また、釈迦牟尼仏の神通力のおかげで、この世の地から涌き出した、諸々の菩薩が、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の国土の空中に、あまねく満ちたのを見た。
この世の地から涌き出した、これらの菩薩達の中には、四人の導師がいた。
一人目の名前は、上行である。
二人目の名前は、無辺行である。
三人目の名前は、浄行である。

四人目の名前は、安立行である。
この四人の菩薩は、それらの菩薩達の中で、最上の首位の者であった。
この四人の菩薩は、「唱導」の導師であった。
この四人の菩薩は、大衆の前で、各々、共に、合掌して、釈迦牟尼仏を観て、「問訊して」、「合掌し低頭し安否を尋ねて」、このように言った。

釈迦牟尼仏よ、病が少なく、悩みが少なく、安楽として、行(おこな)っていますか？　否か？
まさに仏土へ渡すべき者は、釈迦牟尼仏の教えを受け入れやすいですか？
否か？
まさに仏土へ渡すべき者は、釈迦牟尼仏に、疲労を生じさせないですか？

その時、この世の地から涌き出した菩薩のうち、四人の大いなる菩薩は、詩で説いて言った。

釈迦牟尼仏よ、安楽として、病が少なく、悩みが少ないですか？
「衆生」、「生者」を教化して、疲れることは無いですか？
また、諸々の「衆生」、「生者」は教化を受け入れやすいですか？　否か？
生者は、釈迦牟尼仏に、疲労を生じさせないですか？

その時、釈迦牟尼仏は、この世の地から涌き出した、諸々の菩薩の大衆の中で、このように言った。

その通りである。
その通りである。
諸々の善い男子よ、
如来、仏は、安楽としていて、病が少なく、悩みが少ない。
諸々の「衆生」、「生者」達は、教化して仏土へ渡しやすく、疲労させられることは無い。
理由は何か？　(と言うと、)
これらの諸々の「衆生」、「生者」は、「世から世へ」、「生から生へ」、常に、私、釈迦牟尼仏の教化を受けている。
また、過去の諸仏に捧げものを捧げてきていて、尊重してきていて、諸々の善の種となる善行を植えてきている。
これらの諸々の「衆生」、「生者」は、初めて、私、釈迦牟尼仏の身と所説を見聞きしたときに、皆、信じて受け入れて、如来、仏の智慧に入った。

以前から「小乗」、「声聞と独覚」を修習して学んでいた者は除く。
これらの人々に、私、釈迦牟尼仏は、今、この法華経を聞かせて、また、仏の智慧に入れたのである。

その時、この世の地から涌き出した、諸々の四人の大いなる菩薩は、詩で説いて言った。

善いかな。
善いかな。
大いなる英雄である、世尊である、釈迦牟尼仏よ、
諸々の「衆生」、「生者」達は、教化して仏土へ渡しやすい。
生者は、諸仏の、とても深い智慧を質問できて、聞き終わると、信じて理解する。
私達、この世の地から涌き出した菩薩は、喜びます。

その時、釈迦牟尼仏は、この世の地から涌き出した、四人の最上位の首位の大いなる菩薩をほめたたえた。

善いかな。
善いかな。
善い男子よ、
あなた達は、如来、仏を喜ぶ心を起こすことができた。

その時、弥勒菩薩と、八千恒河沙の諸々の菩薩達は皆、このように思った。

私達は、このような大いなる菩薩達が、地から涌き出して、釈迦牟尼仏の前に留まって、釈迦牟尼仏に合掌して、捧げものを捧げて、「問訊する」、「合掌し低頭し安否を尋ねる」のを昔より見聞きしたことが無い。

その時、弥勒菩薩は、八千恒河沙の諸々の菩薩達の心の思いを知って、また、自らの疑いを解決しようと欲して、合掌して、釈迦牟尼仏に向かって、詩で質問した。

この世の地から涌き出した、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の諸々の菩薩の大衆を、昔より未だかつて見たことが無いです。
願わくば、両足尊である釈迦牟尼仏よ、説いてください。

この世の地から涌き出した菩薩は、どこから来たのですか？
どんな「因縁」、「理由」で集まってきたのですか？
この世の地から涌き出した菩薩は、巨体であるし、
大いなる神通力があるし、
思いはかるのが難しいほどの智慧があるし、
その志、意思は堅固であるし、
大いなる忍辱の力が有るので、
「衆生」、「生者」は見ることを願うほどである。
この世の地から涌き出した菩薩は、どこから来たのですか？
この世の地から涌き出した菩薩が各々引き連れている眷属は、その数が、「恒河沙」、「ガンジス川の砂の数」に等しいほど、量り知れないほど無数です。
六万恒河沙の眷属を引き連れている、この世の地から涌き出した、大いなる菩薩がいます。
この世の地から涌き出した、これらの諸々の大衆は、一心に、仏道を探求しています。
この世の地から涌き出した、六万恒河沙の、これらの諸々の大いなる師達、菩薩達は、共に来て、釈迦牟尼仏に捧げものを捧げ、この法華経を破らず保持して護っています。
この世の地から涌き出した者達には、五万恒河沙の眷属を引き連れている者がいて、その数は、六万恒河沙を超過しています。
四万恒河沙、三万恒河沙、二万恒河沙、一万恒河沙の眷属を引き連れている者もいます。
千恒河沙、百恒河沙などの眷属を引き連れている者もいます。
また、一恒河沙、恒河沙の半分、恒河沙の三分の一、恒河沙の四分の一、恒河沙の一億分の一、恒河沙の万分の一の眷属を引き連れている者もいます。
千万那由他、万億の諸々の弟子、一億の半分の眷属を引き連れている者は、その数が、今まで話した者の数を超過しています。
百万、一万の眷属を引き連れている者もいます。
千、百、五十、十、三、二、一の眷属を引き連れている者もいます。
己、単身で、眷属はおらず、独りで処している者を願っている者も、共に、釈迦牟尼仏の所に来たが、その数は、今まで話した者の数をとても超過しています。
これらの諸々の大衆は、もし人が数えようとしても、恒河沙劫を過ぎてもなお、ことごとく知るのは不可能です。

誰が、この世の地から涌き出した、これらの諸々の大いなる威徳がある精進している菩薩達の為に、その仏法を説いて、教化して、完成させたのですか？
誰によって、この世の地から涌き出した菩薩達は、初めて「発心した」、「悟りを求めることを思い立って心した」のですか？
この世の地から涌き出した菩薩達は、どんな仏法をほめたたえているのですか？
この世の地から涌き出した菩薩達は、誰が説いた経を受け入れて保持して行(おこな)っているのですか？
この世の地から涌き出した菩薩達は、どんな仏道を修習しているのですか？
これらの諸々の菩薩は、神通力があり、大いなる知力があり、四方の地が震えて裂けると、皆、中から涌き出しました。
釈迦牟尼仏よ、
私、弥勒菩薩は、昔より、このような事を未だかつて見たことが無いです。
願わくば、この世の地から涌き出した菩薩達が従っている仏国土の名称、称号を説いてください。
私、弥勒菩薩は、常に、諸国を巡っていますが、このような事を未だかつて見たことが無いです。
私、弥勒菩薩は、この世の地から涌き出した、この菩薩達の中で、一人も知りません。
こつ然と、地から涌き出しました。
願わくば、その「因縁」、「理由」を説いてください。
今、この大いなる会の、幾百、幾千、幾億もの量り知れないほど無数の、これらの諸々の菩薩達は皆、この事について知りたいと欲しています。
この世の地から涌き出した、この諸々の菩薩達には、「本末に」、「全てに」、「因縁」、「理由」があるのでしょう。
無量の徳がある釈迦牟尼仏よ、ただ、願わくば、菩薩達の疑いを解決してください。

その時、幾千、幾万、幾億の他方の仏国土から来ている者である、釈迦牟尼仏の分身である諸仏は、八方の諸々の宝の樹の下の「獅子の座」、「仏の座」の上にいて、結跏趺坐していた。
その釈迦牟尼仏の分身である仏の侍者として、そばに仕えている菩薩は、各々、この世の三千大千世界の四方の地から涌き出した、これらの菩薩の大衆が、空中に浮かんだのを見て、その釈迦牟尼仏の分身である仏に言った。

釈迦牟尼仏の分身である仏よ、
この世の地から涌き出した、これらの諸々の、無限なほど、量り知れないほど無数の菩薩の大衆は、どこから来たのですか？

その時、釈迦牟尼仏の分身である諸仏は、各々、侍者として、そばに仕えている菩薩に告げた。

諸々の善い男子よ、
しばらく待ちなさい。
釈迦牟尼仏が「次に、後に、仏に成る」と「授記した」、「仏に成れる予言をした」、弥勒菩薩と言う名前の菩薩がいて、この事について質問している。
釈迦牟尼仏は、今、このことについて答える。
あなた達は、まさに、これによって、答えを聞くことができ得る。

その時、釈迦牟尼仏は、弥勒菩薩に告げた。

善いかな。
善いかな。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩は、このような一大事を私、釈迦牟尼仏に、能(よ)く、質問することができました。
あなた達は、まさに、共に、一心に、精進という鎧をまとって、堅固な意思を起こしなさい。
私、釈迦牟尼仏は、今、諸仏の智慧、諸仏の自由自在の神通力、諸仏の獅子奮迅の力、諸仏の猛威の大勢力を現し起こし説き示したいと欲している。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

まさに、精進して、一心になりなさい。
私、釈迦牟尼仏は、この事について説きたいと欲している。
疑ったり後悔したりするなかれ。
仏の智慧は、思いはかるのが難しい。
あなた達は、今、信じる力を出して、忍耐強く善行を行いなさい。
昔より未だかつて聞いたことが無い法を、今、皆、まさに、聞くことができ得る。
私、釈迦牟尼仏は、今、あなた達を慰安する。

疑いや恐れを懐くなかれ。
仏には、不実な言葉は無い。
仏の智慧は、(厳密には)量ることが不可能である。
仏が得ている第一の法は、とても深く、分別が難しい。
このようなことについて、今、まさに、説こう。
あなた達は、一心に、聴きなさい。

その時、釈迦牟尼仏は、このような詩を説き終わると、弥勒菩薩に告げた。

私、釈迦牟尼仏は、これらの大衆において、あなた達に告げる。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
量り知れないほど無数の、これらの諸々の大いなる菩薩は、地から涌き出した。
この世の地から涌き出した菩薩は、あなた達が昔より未だかつて見たことがない者である。
私、釈迦牟尼仏は、「この娑婆世界」、「この世」で、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得終わると、この世の地から涌き出した、これらの諸々の菩薩を教化して、示して導いて、その心を「調伏して」、「調節して悪を降伏させて」、「道意」、「道心」を起こさせた。
これらの諸々の菩薩は皆、「この娑婆世界」、「この世」の下方の世界の空中に浮かんで、諸々の経を読み、通じて利益を得、思考し、分別し、正しく記憶している。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
この世の地から涌き出した、これらの諸々の善い男子達は、大衆の中にいて多く説くことを願わない。
常に静かな場所を願って、精進を行うことに勤めて未だかつて止めたことが無い。
また、人と天人に依存して頼らないでいて、常に深い智慧を願って、妨げられることが無い。
また、常に諸仏の仏法を願って、一心に精進して、無上の智慧を探求している。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、あなたは、まさに、知るべきである。

この世の地から涌き出した、これらの諸々の大いなる菩薩は、無数の劫、仏の智慧を修習してきている。
ことごとく、私、釈迦牟尼仏に教化されて、大いなる道心を起こしたのである。
この世の地から涌き出した、これらの菩薩は、私、釈迦牟尼仏の(法の)子である。
「この世界」、「この世」をよりどころとして留まって、常に「頭陀行」を行(おこな)っている。
志は、静かな場所を願って、大衆の「憒閙」、「騒乱」を捨てて、多く説くことを願わない。
これらの諸々の、釈迦牟尼仏の子達である、この世の地から涌き出した菩薩達は、私、釈迦牟尼仏の仏道、仏法を学習して、昼も夜も常に精進している。
仏道を探求するため、「娑婆世界」、「この世」の下方の空中に浮かんでいる。
意思力は、堅固である。
常に、智慧を求めることに勤めている。
種々の妙なる仏法を説いている。
その心は、恐れる所が無い。
私、釈迦牟尼仏は、伽耶城(ガヤー)の菩提樹の下で、坐禅して、「最正覚」、「無上普遍正覚」を成就することができ得て、無上の法輪を転じて、この世の地から涌き出した、これらの菩薩に道心を初めて起こさせた。
今は、この世の地から涌き出した菩薩は皆、不退転の境地にいて、ことごとく、まさに、仏になることができ得ている。
私、釈迦牟尼仏は、今、真実の話を説いている。
あなた達は、一心に、信じなさい。
私、釈迦牟尼仏は、久遠の昔より、この世の地から涌き出した、これらの菩薩達を教化してきている。

その時、弥勒菩薩と、この世の無数の菩薩達は、心に疑惑を生じて、未だかつて無い話であると怪しんで、このように思った。

どうして、釈迦牟尼仏は、少ない時間で、この世の地から涌き出した、これらの量り知れないほど無数の諸々の大いなる菩薩達を、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」に住まわせることができたのか？

そのため、弥勒菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。

釈迦牟尼仏よ、
釈迦牟尼仏は、王子であった時、釈迦族の宮殿を出て、伽耶城(ガヤー)の近くに去って、道場である菩提樹の下で、坐禅して、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を成就することができ得ました。
この時より、四十年余りが過ぎています。
釈迦牟尼仏よ、
どうして、この少ない時間で、大いなる「仏事」、「仏の働き」を為すことができたのですか？
この世の地から涌き出した、これらの量り知れないほど無数の大いなる菩薩達を教化して「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を成就させたのは、仏の勢力によるのですか？　仏の功徳によるのですか？
釈迦牟尼仏よ、
この世の地から涌き出した、これらの大いなる菩薩達は、たとえ人が幾千、幾万、幾億もの劫をかけても、数え尽くすことは不可能であるし、その果てを得ることは無いです。
この世の地から涌き出した、これらの菩薩達は、久遠の昔より、無限なほど、量り知れないほど無数の諸仏の所で、諸々の善の種となる善行を植えて、菩薩の道を成就して、常に仏道修行しています。
釈迦牟尼仏よ、
このような事は、俗世では、信じるのが難しいです。
例えば、
色形が美しい髪が黒い二十五歳の人がいて、百歳の人を指して、「私の子です」と言うような物ですし、
その百歳の人も、また、若い人を指して、「私の父です。私達を生み育ててくれました」と言うような物です。
このような事は、信じるのが難しいです。
釈迦牟尼仏も、また、同様なのです。
仏道を会得して以来、実に、未だ久しくないです。
しかし、この世の地から涌き出した、これらの諸々の菩薩達の大衆は、既に、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の劫、仏道のために、精進を行うことに勤めて、善く、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の三昧に入ったり、出たり、留まったりして、大いなる神通力を得て、久しく仏道修行していて、善く、能く、次第に、諸々の善の「法」、「もの」を集めて、問答が巧みで、人の中の宝ですし、一切の世間で、とても希有です。
今日、釈迦牟尼仏は、まさに、言いました。

「
仏道を会得した時に、この世の地から涌き出した菩薩に、初めて『発心させて』、『悟りを求めることを思い立たせて心させて』、教化して、示して導いて、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』へ向かわせた。
」と。
釈迦牟尼仏は、仏に成ることができ得てから、未だ久しくないです。
それなのに、このような大いなる功徳の事を為しとげることができています。
私達、弥勒菩薩と、この世の菩薩達は、仏の「随宜の」、「相手に応じた」所説と、仏の発言した言葉は、未だかつて虚妄であったことが無い、と信じていますが。
(そのため、)仏を知っている者は皆ことごとく、通達しています。
しかし、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後の、諸々の新しく仏を求めることを思い立って心したばかりの菩薩が、もし、この話を聞いたら、もしかしたら、信じて受け入れず、仏法を破る罪、悪業、因縁を引き起こしてしまうかもしれません。
ただ、ただ、釈迦牟尼仏よ、願わくば、後世の生者の為に、解説して、私達、弥勒菩薩と、この世の菩薩達や、後世の生者達の、疑いを除去してください。
未来の来世の諸々の善い男子が、この話を聞き終わって、疑いを生じないようにしてください。

その時、弥勒菩薩は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

釈迦牟尼仏は、昔、釈迦族から出家して、伽耶城(ガヤー)の近くで、菩提樹の下で、坐禅して以来、なお、未だ久しくないです。
これらの諸々の仏の(法の)子達である、この世の地から涌き出した菩薩達は、その数は量ることが不可能なほどで、久しく既に仏道修行してきていて、神通力と知力に留まって、善く、菩薩の道を学んで、蓮華が(泥)水の上に存在するように、世間の「法」、「もの」に汚染されていません。
菩薩達は、地から涌き出して、皆、釈迦牟尼仏を恭しく敬う心を起こして、釈迦牟尼仏の前に留まっています。
このような事は、思い量るのが難しいです。
どうして、信じることができるでしょうか？　いいえ！　信じ難い！
釈迦牟尼仏が仏道を会得したときは、とても近いが、成就した事は、とても多い。

願わくば、「衆生」、「生者」達の疑いを除去する為に、ありのままに、分別して説いてください。
例えば、
年が二十五歳の若く盛んな人が、白髪の顔に皺(しわ)がある百歳の人を指し示して、「この子達は、私から生まれました」と言うような物ですし、
また、(百歳の)子が、(二十五歳の父を指し示して、)「父です」と言うような物です。
父が若くて、子が老いているのは、世の全てを挙げて、信じられません。
釈迦牟尼仏も、また、似ているのです。
釈迦牟尼仏が仏道を会得してから、とても近いです。
この世の地から涌き出した、これらの諸々の菩薩達は、志、意思が堅固で、臆病ではないです。
量り知れない無数の劫、菩薩の道を修行してきています。
非難されて返答を迫られても巧みに答えることができて、その心には、恐れる所が無いです。
忍辱の心を、決定的に持っています。
正しくて、威徳が有ります。
十方の諸仏に、ほめたたえられています。
善く、能(よ)く、分別して、説くことができます。
人々の中にいることを願わず、常に好んで禅定に留まっています。
仏道を探求するため、この世の下方の空中に浮かんでいます。
私達、弥勒菩薩と、この世の菩薩達は、釈迦牟尼仏から、この話を聞いて、疑うことは無いです。
願わくば、釈迦牟尼仏よ、未来の生者の為に、演説して、未来の生者に理解させてください。
もし、この法華経について疑いを生じて信じなければ、まさに、地獄などの「悪道」に堕ちてしまうかもしれません。
願わくば、今、未来の生者の為に、解説してください。
どうして、この世の地から涌き出した、これらの量り知れないほど無数の菩薩を、少ない時間で、教化して、「発心させて」、「悟りを求めることを思い立たせて心させて」、不退転の境地にいさせることができたのですか？

如来寿量品

その時、釈迦牟尼仏は、諸々の菩薩と、一切の大衆に告げた。

「諸々の善い男子よ、あなた達は、まさに、仏の真実の話を信じて理解しなさい」

また、釈迦牟尼仏は、大衆に告げた。

「あなた達は、まさに、仏の真実の話を信じて理解しなさい」

またまた、釈迦牟尼仏は、諸々の大衆に告げた。

「あなた達は、まさに、仏の真実の話を信じて理解しなさい」

この時、菩薩の大衆は、弥勒菩薩を先頭にして、合掌して、釈迦牟尼仏に言った。

「
釈迦牟尼仏よ、
ただ、願わくば、この事について、説いてください。
私達は、まさに、仏の話を信じて受け入れます。
」

菩薩達は、同様の言葉を三度、言い終わると、また、言った。

「
ただ、願わくば、この事について、説いてください。
私達は、まさに、仏の話を信じて受け入れます。
」

その時、釈迦牟尼仏は、諸々の菩薩が三度、要請して止めなかったのを知って、告げて言った。

あなた達は、仏の秘密、仏の神通力について、明らかに、聴きなさい。
一切の世間の天人、人、阿修羅は皆、このように(誤って)思っている。

「
今、釈迦牟尼仏は、釈迦族の宮殿を出て、伽耶城(ガヤー)から遠くない場所へ去って、道場である菩提樹の下で、坐禅して、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を得(て仏に成っ)た。
」と。
しかし、善い男子よ、私、釈迦牟尼仏が、実は、仏に成って以来、幾百千万億那由他もの、無限なほど、量り知れないほど無数の劫がたっているのである。
例えば、
五百千万億那由他阿僧祇の三千大千世界を、仮に、ある人が、粉々にして、微細な塵(ちり)にして、東方の五百千万億那由他阿僧祇の国を過ぎたら、一つの塵を下に落とすような物なのである。
このようにして、東方へ行って、この微細な塵(ちり)を下に落とし尽くす。
諸々の善い男子よ、どう思うであろうか？
これらの諸々の世界を、考えて、その数を知ることはでき得るであろうか？否か？

弥勒菩薩達は、共に、釈迦牟尼仏に言った。

釈迦牟尼仏よ、
これらの諸々の世界は、無限なほど、量り知れないほど無数で、数えて、知ることができないほどですし、心の力が及ばないほどです。
一切の声聞と、「辟支仏」、「独覚」が、「無漏の」、「煩悩が無い」智慧によって、思考しても、その果ての数を知ることは不可能です。
私達、菩薩達は、「阿惟越致」、「不退転」の境地にいますが、この事について、通達していません。
釈迦牟尼仏よ、
これらの諸々の世界は、無限なほど、量り知れないほど無数です。

その時、釈迦牟尼仏は、大いなる菩薩達に告げた。

諸々の善い男子よ、今、まさに、明らかに、あなた達に話そう。
例え話の、微細な塵(ちり)を着けたり、着けなかったりした、これらの諸々の世界を、ことごとく、塵(ちり)にして、一つの塵(ちり)を一劫とする。
私、釈迦牟尼仏が仏に成って以来、これを超過して、百千万億那由他阿僧祇劫たっているのである。

私、釈迦牟尼仏が仏に成った、この時から、私、釈迦牟尼仏は、常に、「この娑婆世界」、「この世」にいて、説法して、教化している。
また、この世以外の他の場所である百千万億那由他阿僧祇の仏国土で、「衆生」、「生者」を導いて、利益をもたらしている。
諸々の善い男子よ、
この法華経の途中で、私、釈迦牟尼仏は、燃灯仏などについて説き、また、その燃灯仏が「涅槃に入ったこと」、「(肉体が)死んだこと」について言った。
これらは皆、「方便」、「便宜的な方法」で、分別しているのである。
諸々の善い男子よ、
もし、ある「衆生」、「生者」が、私、釈迦牟尼仏の所に来たら、私、釈迦牟尼仏は、「仏眼」で、その生者の信心などの諸々の「根」、「能力」の利発、愚鈍を観察して、仏土へ渡すべき者に応じて所々で自ら不同の名前、不同の年数を説く。
また、私、釈迦牟尼仏は、この世に(肉体をまとって)出現して、「まさに、涅槃に入る」、「まさに、(肉体が)死ぬ」と言う。
また、私、釈迦牟尼仏は、種々の「方便」、「便宜的な方法」で、微細で絶妙な仏法を説いて、「衆生」、「生者」に喜ぶ心を起こさせることが可能である。
諸々の善い男子よ、
釈迦牟尼仏は、諸々の「衆生」、「生者」が「小法」、「中途半端の法」を願っているのを見て、この人々の為に、「私、釈迦牟尼仏は、若くして、出家して、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を得た」と説く。
しかし、私、釈迦牟尼仏は、実は、このように、仏に成って以来、久遠なのである。
ただ、「方便」、「便宜的な方法」で「衆生」、「生者」を教化して仏道に入らせるために、このように説くのである。
諸々の善い男子よ、
仏が演説する経は皆、「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させる為の物なのである。
仏は、自身について説いたり、他者について説いたりする。
仏は、自身について示したり、他者について示したりする。
仏は、自身の事について示したり、他者の事について示したりする。
仏の諸々の所説は皆、実に、虚しい物ではないのである。
理由は何か？　(と言うと、)
仏は、ありのままに、三界の相を知見している。

仏には、生死が無い。
仏は、(あえて)退いたり、(あえて)出現したりする。
仏には、存命も、「滅度」、「死」も無い。
仏は、(肉体が)真実でもないし、虚しいものでもない。
仏は、似ている者がいないし、(生者と全く)異なる者ではない。
(仏の知見は、)三界における凡人が三界を見るようではないのである。
このような事を、仏は明らかに見て、誤りが無い。
諸々の「衆生」、「生者」には種々の性質、種々の欲望、種々の行い、種々の推測の想像と分別が有るので、仏は、生者に、諸々の善の種となる善行を生じさせたいと欲して、幾つかの「因縁」、「譬喩」、言葉遣いで種々に説法して、「仏事」、「仏の働き」を行(おこな)って未だかつて一時も止めたことが無い。
このように、私、釈迦牟尼仏は、仏に成って以来、とても大いに久遠なのである。
仏の寿命は、幾阿僧祇もの無量の劫なのである。
仏は、常に存在していて、不滅なのである。
諸々の善い男子よ、
私、釈迦牟尼仏は、本(もと)より、菩薩の道を行って形成している(仏の)寿命は今なお未だ尽きないし、また、(仏の寿命は)先の数(、菩薩の道を行って形成している仏の寿命の量)の倍なのである。
そして、今、真実の「滅度」、「(仏の実体の)死」ではないが、しかし、「まさに、滅度する」、「まさに、(仏の肉体が)死ぬ」と言うのである。
仏は、このような「方便」、「便宜的な方法」で、「衆生」、「生者」を教化するのである。
理由は何か？　(と言うと、)
もし仏が長い間、この世に存在したら、徳の少ない人は、善の種となる善行を植えず、貧困で困窮し、下賤で、「五欲」、「五感の欲望」に貪欲に執着して、推測の妄想の(誤った)見解の網(あみ)の中に入ってしまう。
もし仏が常に存在していて不滅であるのを見たら、徳の少ない人は、思い上がって他者を見下し、わがままに振る舞う心を起こして、善行を嫌がり怠ける心を懐いて、「仏には会い難い」という想いと、仏を恭しく敬う心を生じることができない。
このため、仏は、「方便」、「便宜的な方法」で説くのである。
「
『比丘』、『出家者』よ、まさに、知るべきである。
諸仏の、この世への出現には出会い難いのである。

」
理由は何か？　(と言うと、)
諸々の徳が少ない人には、幾百千万億もの量り知れないほど無数の劫を過ぎても、仏にまみえることができる人もいれば、仏にまみえることができない人もいる。
このため、私、釈迦牟尼仏は、このように言うのである。
「
諸々の『比丘』、『出家者』よ、
仏には、出会い難いのである。
」
これらの「衆生」、「生者」達は、このような言葉を聞くと、必ず、まさに、「仏には会い難い」という想いを生じて、渇いた人が水を恋い慕うように、心に仏を恋い慕う気持ちを懐いて、善の種となる善行を植える。
このため、仏は、実は(実体は)滅びないが、「滅度する」、「(肉体が)死ぬ」と言うのである。
また、善い男子よ、
諸仏の仏法も皆、同様なのである。
「衆生」、「生者」を仏土へ渡す為に、仏法は皆、実に、虚しい物ではないのである。
例えば、
ある名医は、智慧が聡明で通達していて、薬の処方に明るくて、善く多数の病を治していた。
その名医である人には、十人、二十人から百人の数の諸々の息子がいた。
ある事情、ある関係で、名医である父は、遠い他の国へ行った。
名医の息子は、後に、他のものによる毒薬を飲んでしまった。
毒薬は、名医の息子を悶えさせて乱れさせて、地に転がさせた。
この時、その息子の、名医である父が帰国して、家に帰った。
諸々の名医の子達は、毒薬を飲んで、本心を失っている者もいれば、本心を失っていない者もいた。
名医の息子は、その名医である父を遠くから見つけると、皆、大いに喜んで、礼拝して、ひざまずいて、合掌し低頭し安否を尋ねた。
「
善く、安穏として、帰ってこられました。
私達は、愚かで、誤って、毒薬を服用してしまいました。
願わくば、救って、治療して、寿命を全うさせてください。
」

名医である父は、子達が、このように苦悩しているのを見た。
名医である父は、諸々の薬の処方によって、色も良くて香りも良くて美味であることを皆ことごとく十分に備えた、好い薬草を求め、潰(つぶ)して、ふるい分けて、和合させて薬にして、子に与えて服用させるために、このように言った。
「
この大いなる良薬は、色も良くて、香りも良くて、美味であることを皆ことごとく十分に備えている。
あなた達、服用しなさい。
薬は、速やかに、苦悩を除去してくれる。
また、薬は、多数の患いを無くしてくれる。
」
その名医の諸々の子達の中で、本心を失っていない者は、色も香りも共に好い、この良薬を見て、この良薬を服用し、病が、ことごとく除去されて、癒えた。
その他の、本心を失ってしまっている者は、その父である名医が来るのを見て喜んで、合掌し低頭し安否を尋ねて、病の治療を求めた。しかし、名医である父が、その良薬を与えると、本心を失ってしまっている者は、服用を拒否してしまった。
理由は何か？　(と言うと、)
毒気が、深く入ってしまっていて、本心を失わせてしまっているので、この好い色と香りの良薬を、不快に思ってしまったのである。
名医である父は、このように思った。
「
この子は、あわれむべきである。
毒に中(あ)てられて、心が皆、転倒してしまっていて、名医である父である私を見て喜んで、救済と治療を求めても、この好い良薬の服用を拒否してしまう。
私、名医である父は、今、まさに、『方便』、『便宜的な方法』を設けて、この良薬を服用させよう。
」
そして、名医である父は、このように言った。
「
あなた達は、まさに、知るべきである。
私は、今、老衰していて、死ぬ時が既に来てしまっている。
この好い良薬は、今、ここに置いておく。

あなた達は、服用するべきである。
『癒えないのではないか？』と心配するなかれ。
」
名医である父は、このように教え終わると、他国に行って、使者を派遣して、告げさせた。
「あなたの父は、既に、死んでしまいました」
この時、諸々の子達は、名医である父が「死んだ」と聞いて、心が大いに憂い悩んで、このように思った。
「
もし父がいれば、私達を、能(よ)く、思いやってくれて、救ってくれて、
護ってくれただろう。
今は、私達を捨てて、遠くの他の国で死んでしまわれた。
自ら考えると、孤児になってしまったし、父といった頼ることができる者がいない。
」
常に悲しみの感情を懐いて、遂(つい)に心の目が覚めて「その良薬は色も良くて香りも良くて美味である」と知って、その良薬を服用して、毒による病が皆、癒えた。
その子の父である名医は、「子が、ことごとく既に癒えた」と聞いて、すぐに、帰って来て、子の、ことごとくに、この帰って来た姿を見せた。
諸々の善い男子よ、どう思うであろうか？
人が「この名医には虚しい妄りな嘘をついた罪が、とても重く有る」と説くことは可能であるか？　否か？

(菩薩達は、釈迦牟尼仏に答えた。)
「
否です。
釈迦牟尼仏よ。
」

釈迦牟尼仏は言った。

私、釈迦牟尼仏も、また、同様なのである。
私、釈迦牟尼仏は、仏に成って以来、無限なほど、幾百千万億那由他阿僧祇もの量り知れないほど無数の劫がたっているのである。

仏は、「衆生」、「生者」のために、「方便」、「便宜的な方法」の力で、「まさに、滅度する」、「まさに、(肉体が)死ぬ」と言うのである。
また、「私、釈迦牟尼仏は、虚しい妄りな嘘をついた過ちがある者である」と仏法に従って説くことが可能な人はいないのである。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

私、釈迦牟尼仏が仏に成ってから、経過した諸々の劫の数は、幾百千万億年も量り知れないほど無数なのである。
私、釈迦牟尼仏は、常に説法して、幾億もの無数の「衆生」、「生者」を教化して仏道に入らせて以来、量り知れないほど無数の劫がたっているのである。
私、釈迦牟尼仏は、「衆生」、「生者」を仏土へ渡すために、「方便」、「便宜的な方法」で、「涅槃」、「(肉体の)死」を現すが、実は「滅度せず」、「(実体が)死なず」、常に、この世に留まっていて、説法するのである。
私、釈迦牟尼仏は、常に、この世に留まっていて、諸々の神通力によって、(心や智慧などが)転倒している「衆生」、「生者」に、近くにいるといえども、見えないようにしているのである。
「衆生」、「生者」は、私、釈迦牟尼仏の「滅度」、「(肉体の)死」を見て、「舎利」、「仏の遺骨」に広く捧げものを捧げて、ことごとく皆、渇いた人が水を恋い慕うように、仏を恋い慕う心を生じて懐く。
「衆生」、「生者」は、既に仏を信頼して従うと、正直になって、心が柔軟になって、一心に仏を見ることを欲して、自らの身の命を惜しまないようになる。
その時、私、釈迦牟尼仏と、僧達は、共に、霊鷲山に出現する。
その時、私、釈迦牟尼仏は、「衆生」、「生者」に語りかける。
「
仏は、常に、この世に存在していて、(実体は)不滅である。
『方便』、『便宜的な方法』の力によって、『(肉体の)滅び』と『(実体の)不滅』を現すのである。
」と。
他国で、ある「衆生」、「生者」が、仏を恭しく敬って、仏を信じて、仏を見ることを願えば、私、釈迦牟尼仏は、その他国の中でも、ある生者の為に、無上の仏法を説く。

あなた達は、この事について聞く耳が無かったので、ただ、「私、釈迦牟尼仏も滅度してしまう」、「釈迦牟尼仏も死んでしまう」と(誤って)思っていたのである。
私、釈迦牟尼仏は、諸々の「衆生」、「生者」が苦しみという海に沈没しているのを見て、生者の為に、(肉体という仮の)身を出現させて、それらの生者に、渇いた人が水を恋い慕うように、仏を恋い慕う心を生じさせる。
その心が仏を恋い慕うと、仏は出現して、その人の為に、説法する。
仏の神通力とは、このような物なのである。
「阿僧祇の」、「無数の」劫、私、釈迦牟尼仏は、常に、霊鷲山と他の諸々の場所に存在している。
「衆生」、「生者」が劫が尽きるときの劫火という大いなる火で焼かれるのを見る時でも、私、釈迦牟尼仏の、(この世という、)この仏国土は、安穏としていて、天人、人が常に充満している。
釈迦牟尼仏の、(この世という、)この仏国土は、園林、諸々の高い立派な建物、種々の宝で荘厳に飾られている。
釈迦牟尼仏の、(この世という、)この仏国土では、宝の樹に、華や果実が多くなっていて、「衆生」、「生者」が遊んで楽しんでいる。
諸々の天人は、天の太鼓を打ち鳴らして、常に、多数の「伎楽」、「音楽」を演奏し、曼陀羅華を雨のように降らして、釈迦牟尼仏と大衆に、まき散らす。
私、釈迦牟尼仏の「浄土」、「仏国土」は、不壊なのである。
しかし、(罪のある)「衆生」、「生者」は、「(この世には、)焼き尽くされる憂いや恐れと、諸々の苦悩が、このように、ことごとく充満している」と見てしまう。
これらの諸々の罪のある「衆生」、「生者」は、悪業を犯した因縁によって、「阿僧祇の」、「無数の」劫が過ぎても、「仏と仏法と僧」という「三宝」という名前を聞くことすらできない。
諸々の「功徳」、「善行」を修行していて、柔和で、正直な者は皆、私、釈迦牟尼仏の身が、この世に存在していて説法しているのを見ることができる。
あるいは、その時、この仏を見ることができた「衆生」、「生者」の為に、私、釈迦牟尼仏は、「仏の寿命は無量なのである」と説く。
長い時間がたってから仏を見ることができる者の為に、私、釈迦牟尼仏は、「仏に会うのは難しい」と説く。
私、釈迦牟尼仏の知力とは、このような物なのである。
仏の智慧の光は、無量のものを照らすのである。
仏の寿命は、無数の劫なのである。

長い間、善業を修行して、仏の寿命を得ることができるのである。
あなた達、智慧が有る者よ、この事について、疑いを生じるなかれ。
まさに、疑いを断じて、疑いを永遠になくし尽くしなさい。
仏の話は、実に、虚しい物ではないのである。
例え話の父である名医が、善く、「方便」、「便宜的な方法」で、狂っている子を治すために、実は、生きて存在しているのに、「死んだ」と言うような物なのである。
「父である名医は、虚しい妄りな嘘をついた」と説くことは不可能なのである。
私、釈迦牟尼仏も、また、世の父と成って、諸々の苦しんでいる患者(である生者)を救っているのである。
凡人が(心や智慧などが)転倒しているため、私、釈迦牟尼仏は、実は存在しているのに、「滅度する」、「(肉体が)死ぬ」と言うのである。
私、釈迦牟尼仏を常に見ることができたら、生者は、思い上がって他者を見下し、わがままに振る舞う心を生じてしまって、正道から逸脱してしまって、「五欲」、「五感の欲望」に執着してしまって、地獄などの「悪道」の中に堕ちてしまう。
私、釈迦牟尼仏は、「衆生」、「生者」の行っている道と、行っていない道を常に知っている。
私、釈迦牟尼仏は、仏土へ渡すべき者に応じて、仏土へ渡すべき者の為に、種々の仏法を説いて、常に、自ら、このように思っているのである。
「
どうしたら、『衆生』、『生者』を無上の仏道へ入らせて、速やかに、仏の身を成就させることができ得るであろうか？
」と。

分別功徳品

その時、会の大衆は、仏が仏の寿命の劫の数が、このように長いと説いたのを聞いて、無限なほど、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」は大いなる利益を得た。
その時、釈迦牟尼仏は、弥勒菩薩に告げた。

阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
私、釈迦牟尼仏が、このように仏の寿命が長いと説いた時、六百八十万億那由他恒河沙の「衆生」、「生者」が「無生法忍」、「生滅を超越した真理の認識」を得た。
また、その千倍の菩薩が、聞くことができ得て、「陀羅尼」、「真理の保持」の「門」、「法門」、「仏法への門」を保持した。
また、「一世界」、「一小世界」の微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、「楽説無礙」の雄弁の才能を得た。
また、「一世界」、「一小世界」の微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の、「陀羅尼」、「真理の保持」をめぐらすことができ得た。
また、「三千大千世界」の微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、不退転の「法輪を転じる」、「法を説く」ことができた。
また、「二千中国土」、「二中千世界」の微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、清浄な「法輪を転じる」、「法を説く」ことができた。
また、「小千国土」、「小千世界」の微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、八生後に、まさに、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得た。
また、「四天下」のうち四つの微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、四生後に、まさに、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得た。
また、「四天下」のうち三つの微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、三生後に、まさに、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得た。
また、「四天下」のうち二つの微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、二生後に、まさに、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得た。
また、「四天下」のうち一つの微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、一生後に、まさに、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得た。
また、「八世界」、「八小世界」の微細な塵(ちり)の数の「衆生」、「生者」がいて、皆、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を起こした。

釈迦牟尼仏が、このように諸々の菩薩が大いなる仏法の利益を得たと説いた時、(帝釈天と梵天が、)空中より、曼陀羅華、摩訶曼陀羅華を雨のように降らして、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の宝の樹の下の「獅子の座」、「仏の座」の上の諸仏と、七種類の宝の塔の中の「獅子の座」、「仏の座」の上の釈迦牟尼仏と「滅度してから」、「(仮の身が)死んでから」久しい多宝仏に、まき散らし、また、一切の諸々の大いなる菩薩と「四部衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」に、まき散らした。
また、(帝釈天と梵天が、)細かく粉々にした栴檀香、沈水香などを空中から雨のように降らした。
天の太鼓が、自ら鳴って、妙なる音声が出て、深遠にまでとどいた。
また、幾千種類もの天の衣を雨のように降らした。
(帝釈天と梵天が、)真珠の「瓔珞」、「摩尼珠」の「瓔珞」、「如意珠」の「瓔珞」といった諸々の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」をあまねく九種類の方向へ垂らした。
(帝釈天と梵天が、)多数の宝の香炉で、値段がつけられないほど貴重な香を焼香すると、(香りが、)自然と行き渡り、会の大衆に捧げられた。
各々の仏の上には、諸々の菩薩がいて、「幢旛」と「天蓋」をとって持って、次第に上って、「大梵天」にまで至った。
これらの諸々の菩薩は、妙なる音声で、量り知れないほど無数の、ほめたたえる歌を歌って、諸仏をほめたたえた。
その時、弥勒菩薩は、座から起立して、「偏袒右肩」にして、合掌して、釈迦牟尼仏に向かって、詩で説いて言った。

釈迦牟尼仏は、希有な仏法を説きましたが、昔より未だかつて聞いたことが無いです。
仏には、大いなる力が有ります。
仏の寿命は、量ることができない。
無数の諸々の仏の弟子は、釈迦牟尼仏が(仏の寿命が長いと)分別して説いたのを聞いて、仏法の利益を得て、喜びが「遍身」、「体中」に満ちました。
あるいは、不退転の境地に到達しました。
あるいは、「陀羅尼」、「真理の保持」を得ました。
あるいは、「楽説無礙」で、幾万、幾億もの「総持」、「陀羅尼」、「真理の保持」をめぐらすことができました。
あるいは、「大千界」、「大千世界」の微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、各々、皆、不退転の「法輪を転じる」、「法を説く」ことができました。

また、「中千界」、「中千世界」の微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、各々、皆、不退転の「法輪を転じる」、「法を説く」ことができました。
また、「小千界」、「小千世界」の微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、各々、今生の他に八生が存在して、(八生後に、)まさに、仏道を成就することができ得ました。
あるいは、「四天下」のうち四つ、三つ、二つの微細な塵(ちり)の数の菩薩がいて、四、三、二に応じた数の生の後に、仏に成りました。
あるいは、「四天下」のうち一つの微細な塵(ちり)の数の菩薩は、今生の他に一生が存在して、まさに、「一切種智」を得ました。
これらの「衆生」、「生者」は、仏の寿命が長いと聞いて、無量の「無漏の」、「煩悩が無い」清浄な果報を得ました。
また、「八世界」、「八小世界」の微細な塵(ちり)の数の「衆生」、「生者」がいて、釈迦牟尼仏が仏の寿命について説いたのを聞いて、皆、無上普遍正覚を求める心を起こしました。
釈迦牟尼仏は、無量の不可思議な仏法を説いて、多くの利益をもたらしていますが、虚空が無限であるような物なのです。
帝釈天と梵天は、天の曼陀羅華、天の摩訶曼陀羅華を雨のように降らして、「恒(河)沙」、「ガンジス川の砂」のように無数の仏国土から来て、鳥が空を飛んで下りてくるように、栴檀香、沈水香を、雨のように降らして、「繽紛させて」、「乱れ散らせて」、乱れ落として、諸仏に捧げて、まき散らしました。
天の太鼓は、空中で、自然と、妙なる音声を出しました。
幾千、幾万、幾億の、天の衣は、回転して、下りて来ました。
(帝釈天と梵天が、)多数の宝の妙なる香炉で、値段がつけられないほど貴重な香を焼香すると、(香りが、)自然と、ことごとく、行き渡って、諸仏に捧げられました。
その諸仏の大いなる菩薩達は、高い妙なる七種類の宝による幾万、幾億種類の「幢旛」と「天蓋」をとって、次第に上って、「大梵天」にまで至りました。
(諸仏の大いなる菩薩達は、)諸仏の各々の前で、宝の「幢旛」を「勝旛」、「勝利の旗(はた)」に懸けました。
また、(諸仏の大いなる菩薩達は、)幾千、幾万の詩で、諸仏について歌いました。
これらの種々の事は、昔より未だかつて無いです。
仏の寿命が無量であると聞いて、一切の生者は皆、喜んでいます。

仏の名声は十方に聞こえていて、「衆生」、「生者」に広く利益をもたらしています。
(仏は、)善の種となる善行の一切を備えていて、無上普遍正覚を求める心を助けてくれます。

その時、釈迦牟尼仏は、弥勒菩薩に告げた。

阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
「衆生」、「生者」が、このように仏の寿命は長いと聞いて、一念でも信じて理解しようという思いを生じれば、得ることができる功徳は無限の量なのである。
もし善い男子や善い女の人が「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」のために八十万億那由他劫の間、「般若波羅蜜」、「知」を除く「五波羅蜜」、「檀(那)波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禅(那)波羅蜜」、「布施、持戒、忍辱、精進、静慮」を修行しても、この功徳を、前の功徳(、仏の寿命は長いと信じる功徳)に比べると、百分の一、千分の一、百千万億分の一にも及ばないし、(仏の寿命は長いと信じる功徳は、)数えても、例えても、知ることが不可能なのである。
もし善い男子に、このような功徳(、仏の寿命は長いと信じる功徳)が有れば、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」から後退する事は無い。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

もし人が仏の智慧を求めて八十万億那由他の数の劫の間、「五波羅蜜」を修行して、この諸々の劫の間中、布施して仏と「縁覚」、「独覚」の段階の弟子と諸々の菩薩達に珍しい飲食物、上質な服、寝具、栴檀を捧げて、精舎を建てて園林で荘厳に飾って、これらのような種々の、皆、微細で絶妙な布施をこれらの諸々の数の劫の間、尽くして、仏道に回向しても、
また、もし禁戒を保持していて、清浄で、欠点や漏れが無く、無上の仏道を探求して、諸仏に、ほめたたえられても、
また、もし忍辱を修行して、心を調節した柔和な境地にいて、もし多数の悪を加えて来られても、その心を傾けず動かさず、諸々の仏法を得た者がいて「増上慢」、「悟っていないのに『悟った』という思い上がり」を懐いて、これら(の思い上がった人)に軽んじられ悩まされても、これらのような事を忍耐できても、

また、もし精進に勤めて、意思が常に堅固で、幾億もの量り知れないほど無数の劫の間、一心に、怠らず、無数の劫の間、人里離れた静かな場所で生活していて、坐禅したり、坐禅の合間に歩いたりして、眠気を除去して、常に心を正して整えて、この因縁によって諸々の禅定を生じることができて、八十億万劫、禅定に安住して心を乱さず、この一心の幸福を保持して、無上の仏道を願い求めて、「私は、『一切種智』を得て、諸々の禅定の限界まで尽くそう」と思って、この人が幾百、幾千、幾万、幾億もの数の劫の間中、これらの諸々の功徳を修行しても、上述の通りなのである。(仏の寿命は長いと信じる功徳には及ばないのである。)
善い男女などがいて、私、釈迦牟尼仏が仏の寿命について説いたのを聞いて、一念でも信じれば、その功徳による幸福は、これらの功徳による幸福を超過するのである。
もし人が、一切の諸々の疑いや後悔が、ことごとく無く、深く信じる心で、一瞬でも、(仏の寿命は長いと)信じれば、その功徳による幸福は、このようなのである。
諸々の菩薩が量り知れないほど無数の劫の間、仏道修行して、私、釈迦牟尼仏が仏の寿命について説いたのを聞いて、信じて受け入れることができれば、これらの諸々の人達は、この法華経を「頂受できて」、「聞いて受け入れることができて」、「願わくば、私達は、未来で、長寿になって、『衆生』、『生者』を仏土へ渡して、今日の釈迦牟尼仏、諸々の釈迦族の中の王のように、道場である菩提樹の下で、『獅子吼して』、『獅子(ライオン)が吼えるように』恐れる所無く説法して、私達は、未来の来世で、一切の生者に尊敬されて、道場である菩提樹の下で坐禅した時に、仏の寿命について、同様に説けますように」と思う。
もし深く信じる心が有れば、清浄であるし、正直であるし、仏法を多く聞くし、「総持」、「陀羅尼」、「真理の保持」ができるし、正しい意義に従って仏の言葉を解釈できる。
これらの諸々の人達は、これらについて、疑い無い。

また、阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
もし仏の寿命は長いと聞いて、その言葉の意味を理解すれば、この人が得る功徳は無限の量であるし、仏の無上の智慧を起こすことが可能である。
まして、
この法華経を広く聞いたり、
法華経を他人に聞かせたり、
法華経を自ら保持したり、

法華経を他人に保持させたり、
法華経を自ら書いたり、
法華経を他人に書かせたり、
華や香や「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」や「幢旛」や「繒蓋」や香油や蘇の蝋燭(ロウソク)を法華経に捧げたりしたら、
この人の功徳は無量、無限であるし、「一切種智」を生じることが可能である。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
もし善い男子や善い女の人が、私、釈迦牟尼仏が仏の寿命は長いと説いたのを聞いて、深く信じる心で信じて理解すれば、私、釈迦牟尼仏が常に「耆闍崛山」、「霊鷲山」にいて大いなる菩薩達と諸々の声聞の段階の者達と共にいて囲まれて説法しているのを見るし、「この娑婆世界」、「この世」は、地が瑠璃であるし、平坦で正しいし、「閻浮檀金」、「紫を帯びた赤黄色の最上質の金」を八つの道の境界としているし、宝の樹が並んでいるし、諸々の高い建物は皆ことごとく宝で形成されているし、それらの菩薩達が、ことごとく、その中に処しているのを見る。
もし、これらのようなものを見ることができた者がいれば、まさに、知るべきである、これらは「深信解相」、「深く信じて理解した相」なのである。
また、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、もし、この法華経を聞いて、非難せず、喜ぶ心を起こせば、まさに、知るべきである、既に「深信解相」、「深く信じて理解した相」なのである。
まして、法華経を読み、受け入れて保持している者、この人は、仏を頂戴しているのである。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
これらの善い男子や善い女の人は、私、釈迦牟尼仏の為に、塔や寺を建てたり、「僧坊」、「僧が住む建物」を作ったり、「四事」、「寝具、衣服、飲食仏、医薬品」を僧達に捧げたりする必要は無い。
理由は何か？　(と言うと、)
これらの善い男子や善い女の人は、この法華経を受け入れて保持し、読めば、既に塔を建てたり、「僧坊」、「僧が住む建物」を造立したり、僧達に捧げものを捧げたりしていることになるのである。
また、「舎利」、「仏の遺骨」によって、高い、広い、頂上が徐々に狭くなっていって「大梵天」にまで至る、七種類の宝の塔を建てて、諸々の「幢旛」と「天蓋」と多数の宝の鈴を懸けて、華、香、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、塗香、抹香、焼香を捧げたり、多数の太鼓を打ち鳴らしたり、「伎楽」、「音楽」を捧げたり、「簫笛」や「箜篌」を吹いたり、種々の

「舞戯」を捧げたり、妙なる音声で、ほめたたえる歌を歌ったりしていることになるのである。
また、既に、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の劫、これらの供養をし終わっていることになるのである。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
もし私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を聞いて、受け入れて保持して、自ら書いたり、他人に書かせたりすれば、「僧坊」、「僧が住む建物」を建てたり、「赤栴檀」で、高さが八多羅樹である、高い、広い、荘厳に飾られている、好い、諸々の三十二の殿堂を作って、その中に、幾百、幾千の出家者を住まわせて、園林、水浴びできる池、坐禅の合間に歩ける空間、「禅窟」、「坐禅できる場所」、衣服、飲食物、寝床、医薬品といった一切の捧げ物をその中に満たして、これらの「僧坊」、「僧が住む建物」や堂閣をその数、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数を私、釈迦牟尼仏と出家者に「現前で」、「目前で」捧げていることになるのである。
このため、私、釈迦牟尼仏は説いたのである。
「
釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、もし法華経を受け入れて保持して読んで、他人の為に説いたり、自ら書いたり、他人に書かせたりして、法華経に捧げものを捧げれば、塔や寺を建てたり、『僧坊』、『僧が住む建物』を造ったり、僧達に捧げものを捧げたりする必要は無い。
」と。
まして、この法華経を保持して、それに兼ね合わせて、「布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧」、「布施、持戒、忍辱、精進、静慮、智慧」、「六波羅蜜」を修行すれば、その徳は、最も優れていて、無量、無限なのである。
例えば、虚空が、東西南北、「四維」、「四隅」、上下に、無量、無限であるような物なのである。
この人の功徳も、また、同様なのである。
無量、無限で、速(すみ)やかに、「一切種智」に至ることができる。
もし人が、この法華経を読んで、受け入れて保持して、他人の為に説いたり、自ら書いたり、他人に書かせたりすれば、塔を建てたり、「僧坊」、「僧が住む建物」を造ったり、声聞の僧達に捧げものを捧げて、ほめたたえたり、幾百、幾千、幾万、幾億もの、ほめたたえる方法で菩薩の功徳をほめたたえたりしていることになるのである。
また、他人の為に種々の「因縁」で義に従って、この法華経を解説すれば、清浄に戒を保持して、柔和な者と共同して、忍辱して、怒らず、意思が堅固で、常に坐禅を尊んで、諸々の深い定を得て、勇猛に精進して、諸々の善い

法を摂取して、「根」、「能力」が利発で、智慧があって、非難されて返答を迫られても善く答えるであろう。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
もし私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、諸々の善い男子や善い女の人が、この法華経を受け入れて保持して、読めば、これらの諸々の善い功徳が有る。
まさに、知るべきである。
この人は、既に、道場である菩提樹の下へ趣(おもむ)いて、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」に近づいて、「道樹」、「菩提樹」の下で坐禅しているのである。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
この善い男子や善い女の人が、坐禅したり、立ったり、坐禅の合間に歩いたりした場所には、この場所の中に、まさに、塔を建てるべきであるし、一切の天人と人は皆、まさに、仏の塔のように、捧げものを捧げるべきである。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

もし私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を捧げ持てば、
この人の幸福が無量であることは、今まで話したようになるのである。
また、一切の諸々の捧げものを十分に備えて、「舎利」、「仏の遺骨」によって、とても高い、広い、頂上が徐々に狭くなっていって「大梵天」にまで至る、七種類の宝の塔を建てて、荘厳に飾って、「刹」、「旗竿」を表に立てて、風で動いて妙なる音を出す、幾千、幾万、幾億の宝の鈴をかけて、無量の劫、この塔に、華、香、諸々の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、天の衣、多数の「伎楽」、「音楽」を捧げて、香油、蘇の蝋燭(ロウソク)を燃やして周囲を常に明るく照らしていることになるのである。
悪い世、末法の時代に、能(よ)く、この法華経を保持している者は、既に、今まで話したように、諸々の捧げものを十分に備えていることになるのである。
もし能(よ)く、この法華経を保持すれば、仏が現に存在する前で、「牛頭栴檀」で「僧坊」、「僧が住む建物」を建てて、三十二の、高さが八多羅樹である、堂を捧げて、上質な食べ物、妙なる衣服、寝床を皆、十分に備えて、その場所に、幾百、幾千の僧達を住まわせて、園林、水浴びできる池、坐禅の合間に歩ける空間、「禅窟」、「坐禅できる場所」を種々にして、皆、荘厳に飾って、好くしているような物なのである。

もし信じて理解する心が有って、法華経を受け入れて保持して、読んで、書いたり、他人に書かせたり、法華経に捧げものを捧げたりして、華、香、抹香をまき散らして、「須曼」と、「瞻蔔」という華と、「阿提目多伽」の香油を常に燃やせば、このように法華経に捧げものを捧げる者は、無量の功徳を得る。
虚空が無限であるような物なのである。
その幸福をもたらす功徳も、また、同様なのである。
まして、この法華経を保持して、それに兼ね合わせて、布施して、戒を保持して、忍辱して、禅定を願って、怒らず、悪口を言わず、仏の塔廟を恭しく敬って、諸々の出家者に対して謙遜して、思い上がる心を遠く離れて、常に(仏の)智慧について思考して、非難されて返答を迫られても怒らず従って非難者の為に解説すれば、
もし、このような行いを行うことができれば、その功徳は、量ることができないのである。
もし、この「法師」、「仏法の教師」が、このような功徳を成就すれば、まさに、天の華をまき散らして、天の衣で、その法師の身を覆って、頭をその法師の足につけて敬礼して、仏と想うような心を生じるべきであるし、このように思うべきである。
「
久しからず、道場である菩提樹の下に行って、『無漏の』、『煩悩が無い』、『無為』、『不変絶対の真理』を得て、諸々の天人や人に広く利益をもたらそう。
」と。
その法師がいた場所、坐禅の合間に歩いた場所、坐った場所、横に成った場所、詩を一つでも説いた場所、この場所の中に、まさに、塔を建てて、荘厳に飾って、妙なる好い種々のものを捧げるべきである。
仏の弟子が、この法師の地にいれば、仏は、(仏の弟子を)受け入れて、常に、その法師の地の中にいて、坐禅の合間に歩いたり、坐ったり、横に成ったりする。

随喜功徳品

その時、弥勒菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
善い男子や善い女の人が、この法華経を聞いて喜んだら、どれくらいの幸福を得ることができますか？
」

(弥勒菩薩は、釈迦牟尼仏に、)詩で言った。
「
釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を聞いて喜んだら、どれくらいの幸福を得ることができますか？
」

その時、釈迦牟尼仏は、弥勒菩薩に告げた。

阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、出家者の男性や女性や、在家信者の男性や女性や、他の年長の知者や幼い知者が、この法華経を聞いて喜んで、法華経という仏法が説かれた集まりから退出して、他の場所に行って、「僧坊」、「僧が住む建物」や、人里離れた静かな場所や、町や、路地や、集落や、田畑や山里にいて、聞いた通りに、父や母や、親族や、善い友人や善知識を持つ人々の為に、自分の力に応じて、演説すると、これらの諸々の人達も、聞いて喜んで、また、「転じて」、「説いて」、教え、他の人も、また、聞いて喜んで、「転じて」、「説いて」、(他の人に)教えていったとする。
このようにしていき、転々としていき、第五十番目の善い男子や善い女の人に至ったとする。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
その第五十番目の善い男子や善い女の人が喜んだ功徳。私、釈迦牟尼仏は、今、これについて説こう。
あなたは、まさに、善く、聴きなさい。
四百万億阿僧祇世界の「六趣」、「六道」、「地獄、餓鬼、修羅、畜生、人間、天」の「四生」、「胎生、卵生、湿生、化生」の「衆生」、「生者」には、「胎生、卵生、湿生、化生」や、「有形、無形」、「肉眼の目に見える

者、肉眼の目に見えない者」や、「有想、無想、非有想、非無想」や、足が無い者、二本足の者、四本足の者、多足の者といった、これらの「衆生」、「生者」がいる数のうち、ある人が、幸福を求めて、それらの生者達の欲望に応じて、娯楽の物を、皆に与えたとする。
各々の生者に、「閻浮提」、「この世」に満ちる金、銀、瑠璃(るり)、硨磲(しゃこ)、碼碯(めのう)、珊瑚(さんご)、琥珀(こはく)といった諸々の妙なる珍しい宝や、象(ゾウ)、馬や、乗り物や、七種類の宝で成っている宮殿や高い建物などを与えたとする。
この大いなる布施をした主が、満八十年間、このように布施し終わると、このように思ったとする。
「
私は、既に、『衆生』、『生者』達に、娯楽の物を、心の欲望に応じて、布施した。
これらの生者達は皆、既に、老衰して、年が八十歳を過ぎて、髪が白く、顔面に皺(しわ)ができて、まさに、久しからず、死にそうである。
私は、まさに、仏法で、これらの生者達を、教え導こう。
」と。
そこで、これらの生者達を集めると、仏法を広く教えて、教化して、「示教利喜して」、「教示して鼓舞して喜ばせて」、一時で、皆に、「須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢」、「四果」の仏道の果報を得させて、諸々に有る「漏」、「煩悩」を無くし尽くさせて、深い禅定によって、皆、自由自在になることを得させて、「八解脱」を備えさせたとする。
あなた(、弥勒菩薩)は、どう思うであろうか？
この大いなる布施をした主が得た功徳は、多いであろうか？　否か？

弥勒菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
この例え話の人の功徳は、とても多く、無量、無限です。
もし、この布施をした主が、ただ、『衆生』、『生者』達に、一切の娯楽の物を布施しただけだったとしても、功徳は無量です。
まして、生者達に、阿羅漢の仏道の果報を得させたならば、なおさら、功徳は多いです。
」

釈迦牟尼仏は、弥勒菩薩に告げた。

私、釈迦牟尼仏は、今、明らかに、あなた、弥勒菩薩に語ろう。
この例え話の人が一切の娯楽の物を四百万億阿僧祇世界の「六趣」、「六道」、「地獄、餓鬼、修羅、畜生、人間、天」の「衆生」、「生者」達に布施し、また、阿羅漢果を得させて得た功徳は、別の例え話の第五十番目の人が法華経の一つの詩を聞いて喜んだ功徳には、及ばないのである。
百分の一、千分の一、百千万億分の一に及ばないのである。
また、数えても、例えても、知ることは不可能なほどなのである。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
この例え話の第五十番目の人が、転々として、法華経を聞いて喜んだ功徳ですらなお、無量、無限、「阿僧祇」、「無数」なのである。
まして、最初に、会の中で、法華経を聞いて喜べば、その幸福は、なおさら、優れていて、無量、無限、「阿僧祇」、「無数」で、比べることができ得ないほどなのである。
また、阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
もし人が、この法華経のために、「僧坊」、「僧が住む建物」へ行って、
坐ったり、立ったりして、一瞬でも、法華経を聞いて受け入れたら、この功徳によって、「転身して」、「身が生まれ変わって」、生まれた所で、好い上質な妙なる象(ゾウ)、馬、乗り物、珍しい宝の乗り物を得るし、天の宮殿に住める。
また、もし人が、法華経の仏法が説かれている場所に坐っていて、別の人が来ると、座を勧めて坐らせて法華経を聴かせたり、座を分けて坐らせたりすれば、この人は、功徳によって、「転身したら」、「身が生まれ変わったら」、帝釈天が坐る座か、梵天が坐る座か、転輪聖王が坐る座を得る。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、
また、もし人が、他の人に、「『法華経』という名前の経が有ります。共に、行って、聴きましょう」と言ったならば、
その他の人が、その教えてくれた言葉を受けて、一瞬でも、法華経を聴けば、この人は、功徳によって、「転身したら」、「身が生まれ変わったら」、「陀羅尼菩薩」と同じ場所に生まれることができ得るし、「根」、「能力」が利発になるし、智慧をえるし、幾百、幾千、幾万の生でも、終に、話せなくなることも聞けなくなることも無いし、口(くち)からの息は臭くないし、舌が常に無病であるし、口も無病であるし、歯が汚れで黒くならないし、黄色くならないし、まばらにならないし、欠落しないし、不揃いにならないし、斜めに生えたりしないし、唇が垂れ下がらないし、めくれて萎縮しないし、ざらつかないし、皮膚病にならないし、欠けたり壊れたりしないし、歪まな

いし、厚くならないし、大きくならないし、黒くならないし、諸々の悪い所が無いし、鼻が平らではないし、曲がらないし、顔面の色が黒くならないし、狭く長くならないし、くぼんだり曲がったりしないし、一切の喜ぶべきではない相は無いし、唇や舌や犬歯や歯が、ことごとく皆、荘厳で好いし、鼻が長いし、高いし、真っ直ぐであるし、顔面、容貌が円満であるし、眉が高いし、長いし、額(ひたい)が広いし、平らであるし、端正であるし、(善い)人相を十分に備えるし、生から生へ、生まれた所で、仏を見るし、仏法を聞くし、仏教を信じて受け入れる。
阿逸多とも呼ばれる弥勒菩薩よ、あなたは、しばらく、この事について観察しなさい。
一人に勧めて、行かせて、法華経の仏法を聴かせる功徳は、このようなのである。
まして、一心に、法華経を聞いて、説いて、読んで、大衆の中で他の人の為に分別して、教えの通りに修行する功徳は、なおさら、善いのである。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

もし人が仏法が説かれる集まりで、詩、一つでも、この法華経を聞くことができ得て喜んで、他の人の為に説いたとする。
このようにして、転々として、教えて、第五十番目の人に至ったとする。この最後の第五十番目の人が獲得できる幸福、今、まさに、この幸福について分別しよう。
例えば、
大いなる布施をした主がいて、量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」達に、あれこれ、満八十年間、生者達の心の欲望に応じて、娯楽の物を供給したとする。
布施をした主は、髪が白い、顔面に皺(しわ)がある、歯がまばらである、姿形が乾いて干からびたかのようである、この生者達の老衰の相を見て、このように思ったとする。
「
死ぬのは、遠くない。
私は、今、まさに、仏法を教えて、仏道の果報を得させよう。
」と。
そして、生者達の為に、「方便」、「便宜的な方法」で、涅槃の真実の仏法を説いたとする。

「
この世のものは皆、水しぶきや泡や火のように、堅牢、堅固ではない。
あなた達は、ことごとく、まさに、速(すみ)やかに、『厭離の心』、『この世を嫌い離れる心』を生じさせなさい。
」と。
諸々の人達は、このような仏法を聞いて、皆、阿羅漢を会得して、「六神通」と「三明」と「八解脱」を十分に備えた。
最後の第五十番目の人が法華経の詩の一つを聞いて喜べば、この第五十番目の人の幸福は、大いなる布施をした主の幸福よりも優れていて、例えることが不可能なほどなのである。
このように、転々として、(第五十番目に、)法華経を聞いた、その幸福ですらなお、無量なのである。
まして、法華経の仏法が説かれた集まりで、最初に、法華経を聞いて喜んだ者の幸福は、なおさら、善いのである。
もし一人の人に勧めて、まさに、引き寄せて、法華経を聴かせようとして、このように言ったとする。
「
この法華経は、深く、絶妙で、幾千、幾万の劫がたっても出会うのは難しい。
」と。
この一人の人が、その教えてくれた言葉を受けて、行って、一瞬でも法華経を聞いたとする。この人の幸福、報いを、今、まさに、分別して説こう。
生から生へ、口の疾患が無いし、歯がまばらにも黄色くも黒くもならないし、唇が厚くもならないしめくれも欠けもしないし、悪い相が無いし、舌が乾かないし黒くも短くもならないし、鼻が高いし、長いし、真っ直ぐであるし、額(ひたい)が広いし、平らであるし、端正であるし、顔や姿が、ことごとく端正であるし、荘厳であるし、他人が見ることを喜ぶし、口(くち)からの息は、臭くないし、汚れていないし、優鉢羅華の香りが常に、その口(くち)から出る。
法華経を聴きたいと欲したために、「僧坊」、「僧が住む建物」に行って、一瞬でも法華経を聞いて喜んだとする。今、まさに、その幸福を説こう。
後の生で、天人の中に生まれて、妙なる象(ゾウ)、馬、車、珍しい宝の乗り物を得るし、天の宮殿に住む。
もし法華経の仏法が説かれている場所で他人に勧めて坐らせて法華経を聴かせたならば、この幸福をもたらす因縁によって、帝釈天や梵天や転輪聖王の座を得る。

まして、法華経を一心に聴いて、その意義を解説して、教えの通りに修行すれば、その幸福は無限なのである。

法師功徳品

その時、釈迦牟尼仏は、常精進菩薩に告げた。

もし善い男子や善い女の人が、この法華経を受け入れて保持して、(声を出さないで)読んだり、声を出して読んだり、解説したり、書き写したりすれば、これらの人は、まさに、八百の眼の功徳、千二百の耳の功徳、八百の鼻の功徳、千二百の舌の功徳、八百の身の功徳、千二百の「意」、「心」の功徳を得て、これらの功徳で「六根」、「眼、耳、鼻、舌、身、意」を荘厳に飾って、皆、清浄にする。
これらの善い男子や善い女の人は、父と母から生まれた清浄な肉眼で、「三千大千世界」の内外に有る山、林、河、海を、下は「阿鼻地獄」から上は「有頂天」に至るまで、見る。
また、それらの中の一切の「衆生」、「生者」を見る。
また、業による因縁、果報により生まれる所の、ことごとくを見て、ことごとくを知る。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

大衆の中で、恐れる所が無い心で、この法華経を説く。あなた(、常精進菩薩よ、)その功徳を聴きなさい。
これらの人は、八百の功徳による特別に優れている眼を得て、この眼で(肉眼を)荘厳に飾るため、その(肉)眼は、とても清浄なのである。
父と母から生まれた(肉)眼で、「三千界」の内外、弥楼山、須弥山、鉄囲山、諸々の他の山、林、大海、大河、河を、下は「阿鼻地獄」から上は「有頂天」に至るまで、ことごとく見る。
また、それらの中の諸々の「衆生」、「生者」を一切、皆、ことごとく見る。
天人の「天眼」を未だ得ていなくても、肉眼の力が、このようになるのである。

(釈迦牟尼仏は、常精進菩薩に言った。)

また、次に、常精進菩薩よ、
もし善い男子や善い女の人が、この法華経を受け入れて保持して、(声を出さないで)読んだり、声を出して読んだり、解説したり、書き写したりすれば、千二百の耳の功徳を得て、これらによる清浄な耳で、「三千大千世界」の下は「阿鼻地獄」から上は「有頂天」に至るまで、それらの中の、内外の種々に有る言葉、音声、象(ゾウ)の声、馬の声、牛の声、車の音声、泣き叫ぶ声、嘆きの声、法螺貝を吹く音、太鼓を打ち鳴らす音、鐘を打ち鳴らす音、鈴の音、笑い声、話し声、男の声、女の声、童子の声、童女の声、仏法を説く声、仏法ではない声、苦しんでいる声、楽しんでいる声、凡人の声、聖人の声、喜んでいる声、喜んでいない声、天人の声、龍の声、夜叉の声、乾闥婆の声、阿修羅の声、迦楼羅の声、緊那羅の声、摩睺羅伽の声、火の音声、水の音声、風の音声、地獄の音声、畜生界の音声、餓鬼界の音声、出家者の男性の声、出家者の女性の声、声聞の声、「辟支仏」、「独覚」の声、菩薩の声、仏の声を聞く。
要約して、この事について言うと、
「三千大千世界」の中の、一切の、内外に有る諸々の音声を、天人の「天耳」を未だ得ていなくても、父と母から生まれた清浄な通常の耳で、皆ことごとく、聞いて知る。
また、このように、種々の音声を分別しても、耳を壊さない。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

父と母から生まれた耳が、清浄になって、汚れが無くなって、この通常の耳で、「三千世界」の音声を、象や馬や車や牛の音声、鐘や鈴や法螺貝や太鼓を鳴らす音声、琴や瑟や「箜篌」を鳴らす音声、「簫笛」を吹く音声、清浄な好い歌声を聞く。
これらを聞いても執着しない。
無数の種類の人の声を聞いて、ことごとく理解することが可能になる。
また、諸々の天人の声、微細で絶妙な歌声を聞く。
また、男や女の声、童子や童女の声、山や川や険しい谷の中の「迦陵頻伽」の声を聞く。
「命命鳥」などの諸々の鳥の、その音声をことごとく聞く。
地獄の多数の苦痛による種々の激しい苦痛による声、餓鬼が飢え渇いて飲食物を探し求める声、諸々の阿修羅などが大海の海辺にいて自ら共に話し合う

時に出す大いなる音声。この法華経の仏法を説く者は、これらの間に安住して、遥か遠くから、これらの多数の音声を聞いても、耳を壊さない。
十方の世界の中の禽獣は鳴いて相互に呼び合うが、この法華経の仏法を説く人は、この世で、これらをことごとく聞く。
それらの(十方の)諸々の「大梵天」や「光音天」、「極光浄天」や「遍浄天」から「有頂天」までの言葉、音声。(法華経の)「法師」、「仏法の教師」は、これらに住んで、ことごとく皆、これらを聞くことができ得る。
一切の出家者の男性や、諸々の出家者の女性が、経を読んだり、他人の為に説いたりすれば、(法華経の)「法師」、「仏法の教師」は、これらの場所にいて、ことごとく皆、これらを聞くことができ得る。
また、諸々の菩薩がいて、経の仏法を読んだり、他人の為に説いたり、撰集したり、その意義を解説したりする、これらの諸々の音声。(法華経の「法師」、「仏法の教師」は、)ことごとく皆、これらを聞くことができ得る。
諸仏は、「衆生」、「生者」を教化する者として、諸々の大いなる会の中で、微細で絶妙な仏法を演説する。この法華経を保持している者は、ことごとく皆、これらを聞くことができ得る。
下は「阿鼻地獄」から上は「有頂天」に至るまでの「三千大千世界」の内外の諸々の音声。皆、それらの音声を聞いても、耳を壊さない。
その耳は利発なので、ことごとく分別して知ることが可能である。
この法華経を保持している者は、天人の「天耳」を未だ得ていなくても、父と母から生まれた耳だけを用いて、功徳が、このようになるのである。

(釈迦牟尼仏は、常精進菩薩に言った。)

また、次に、常精進菩薩よ、
もし善い男子や善い女の人が、この法華経を受け入れて保持して、(声を出さないで)読んだり、声を出して読んだり、解説したり、書き写したりすれば、八百の鼻の功徳を成就して、これらによる清浄な鼻で、「三千大千世界」の上下、内外の種々の諸々の香りを感じる。
「須曼那」の華の香、「闍提」の華の香、「末利」の華の香、「瞻蔔」の華の香、「波羅羅」の華の香、赤蓮華の香、青蓮華の香、白蓮華の香、樹の華の香、果樹の果実の香、「栴檀香」、「沈水香」、「多摩羅跋」の香、「多伽羅」という香、千万種の香を和合した香を粉々にしたり、丸めたり、塗ったりしたとする。この法華経を保持している者は、これらの間にいて、ことごとく、分別することが可能である。

また、「衆生」、「生者」の香り、象(ゾウ)の香り、馬の香り、牛、羊などの香り、男の香り、女の香り、童子の香り、童女の香り、草木、叢林の香りを分別して知ることが可能である。
近くや遠くに有る諸々の香をことごとく皆、感じて、分別して、誤らないことができ得る。
この法華経を保持している者は、この世にいても、天上の諸々の天人の香りを感じることができる。
天の「波利質多羅」、天の「拘鞞陀羅」の樹の香、天の「曼陀羅華」の香、天の「摩訶曼陀羅華」の香、天の「曼殊沙華」の香、天の「摩訶曼殊沙華」の香、天の「栴檀香」、天の「沈水香」、天の種々の抹香、天の諸々の多様な華の香、これらの天の香を和合した香を、感知する。
また、諸々の天人の身の香り、「釈提桓因」、「帝釈天」が優れた宮殿にいて「五欲」、「五感の欲望」の娯楽に遊び戯れている時の香り、帝釈天が妙なる法堂にいて「忉利天」の諸々の天人の為に説法している時の香り、帝釈天が諸々の園で遊び戯れている時の香り、他の天人達の男女の身の香りを皆ことごとく、遥か遠くから、感じる。
また、このように、転々として、「大梵天」から上は「有頂天」に至るまでの諸々の天人の身の香り。これらを皆、感じる。
また、諸々の天人の焼香の香りを感じる。
また、声聞の香り、「辟支仏」、「独覚」の香り、菩薩の香り、諸仏の身の香りを皆、遥か遠くから感じて、それらの所在を知る。
これらの香りを感じても、鼻を壊さないし、誤らない。
もし他人の為に(、これらの香りを)分別したいと欲しても、説くことができるし、記憶しているし、誤らない。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

このような人の鼻は、清浄で、この世界の中で、良い香りの物や臭う物を、種々に、ことごとく、感じて知る。
「須曼那」の香、「闍提」の香、「多摩羅」の香、「栴檀香」、「沈水香」、「桂」の香、種々の華や果実の香、「衆生」、「生者」の香り、男子や女の人の香りを知る。
(法華経の)仏法を説く者は、遠くにいても、香りを感じて、所在を知る。

大いなる勢力をもつ転輪聖王、小転輪聖王、転輪聖王の王子、群臣、諸々の役人の香りを感じて、所在を知る。
身に着けられている珍しい宝、地中の宝の蔵、転輪聖王の「宝女」、「女宝」、「玉女」、「宝玉のように美しい妻」の香りを感じて、所在を知る。
諸々の人の身を荘厳に飾る装身具、衣服、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、種々の塗香の香りを感じて、それらを着けている身を知る。
諸々の天人が歩いたり、坐ったり、遊び戯れたり、神変を起こしたりした香りを、この法華経を保持している者は感じて、ことごとく知ることが可能である。
諸々の樹の華の香気、果実の香気、「蘇油」の香気を、法華経を保持している者は、この香気の中にいれば、ことごとく、その(香気の元の)所在を知る。
諸々の山々の深く険しい場所で栴檀の樹に華が広がれば、「衆生」、「生者」の中にいても、栴檀の樹の華の香りを感じて、(所在を)皆、知ることが可能である。
鉄囲山、大海、地中の諸々の「衆生」、「生者」を、法華経を保持している者は、香りを感じて、ことごとく、その所在を知る。
阿修羅の男女や、その阿修羅の眷属が、闘争して遊び戯れている時の香りを感じて、(所在を)皆、知ることができる。
荒野の険しい場所の獅子(ライオン)、象(ゾウ)、虎、狼、野牛、水牛などの香りを感じて、所在を知る。
もし懐妊している者がいて、その子が男か、女か、「無根か」、「性器が無いか」、人ではない者の化生か、を未だ見分けることができていなくても、香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
香りを感じる力で、その初懐妊が成就するか、成就しないか、幸福な子を安楽に産めるか、知る。
香りを感じる力で、男や女の、思いと、欲に汚染されていることによる貪欲さ、「痴」、「愚かさ」、怒りという「三毒」の心を知るし、「修善している者」、「善行を積んでいる者」を知る。
地中の多数の「伏蔵」、「宝の蔵」の、銅の器に盛られている、金、銀、諸々の珍しい宝の香りを感じて、(所在を)ことごとく知ることが可能である。
種々の諸々の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」を、その価値を知らなくても、香りを感じて、価値の高い、低い、出処(でどころ)、所在を知る。
天上の諸々の華々、天の「曼陀羅華」、天の「曼殊沙華」、天の「波利質多」の樹の華の香りを感じて、(所在を)ことごとく知ることが可能である。
天上の諸々の宮殿の、上中下の区別、多数の宝の華によって荘厳に飾られていることを、香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。

天人が、天の園林、天の優れた宮殿、天の諸々の「観」、「高い建物」、天の妙なる法堂の中にいて楽しんでいる時の香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
諸々の天人が、仏法を聞いたり、「五欲」、「五感の欲望」を受け入れたり、行き来したり、歩いたり、坐ったり、横に成ったりしている時の香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
天女が、着ている衣を、好い華の香りで荘厳に飾って、回転させて遊び戯れている時の香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
このように、転々として、上は「大梵天」に至るまでの、禅に入っている者や、禅から出た者の香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
「光音天」、「極光浄天」や「遍浄天」から「有頂天」に至るまでの、天に生まれたばかりの時の香りや、「退没した」、「堕天した」時の香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
諸々の出家者達が、仏法について常に精進して、坐禅したり、坐禅の合間に歩いたり、経の仏法を読んだり、林の樹の下にいて「専精」、「精神集中」したりしている時の香りを、法華経を保持している者は感じて、その所在をことごとく知る。
菩薩が、意思が堅固で、坐禅して、経を読んだり、他人の為に仏法を説いたりしている時の香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
至る所の仏が、一切の生者に恭しく敬われていて、「衆生」、「生者」をあわれんで仏法を説いている香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
「衆生」、「生者」が仏の前にいて経を聞いて皆、喜んで仏法の通りに修行している時の香りを感じて、ことごとく知ることが可能である。
菩薩の「無漏法」、「煩悩が無い在り方」から生まれた鼻を未だ得ていなくても、この法華経を保持している者は、先んじて、このような鼻の「相」、「有様」を得る。

(釈迦牟尼仏は、常精進菩薩に言った。)

また、次に、常精進菩薩よ、
もし善い男子や善い女の人が、この法華経を受け入れて保持して、(声を出さないで)読んだり、声を出して読んだり、解説したり、書き写したりすれば、千二百の舌の功徳を得て、好きな物、嫌いな物、美味な物、不味い物、諸々の苦く渋い物が舌に在れば皆、天の甘露のような上質の美味に変化して、美味くなる。

もし、(このような)舌で、大衆の中で、演説すれば、深い妙なる声が出て、それらの大衆の「心に入る」、「気に入られる」ことが可能で、皆を喜ばせる。
また、諸々の天人、天女、帝釈天、梵天といった諸々の天人は、この深い妙なる音声で演説されている言論を聞くと、皆ことごとく、やって来て聴く。
また、諸々の龍、龍女、夜叉、夜叉女、乾闥婆、乾闥婆女、阿修羅、阿修羅女、迦楼羅、迦楼羅女、緊那羅、緊那羅女、摩睺羅伽、摩睺羅伽女は、仏法を聴くために、皆、やって来て、親しみ近づいて、恭しく敬って、捧げものを捧げる。
また、出家者の男性、出家者の女性、在家信者の男性、在家信者の女性、国王、王子、群臣、眷属、「小転輪聖王」、「大転輪聖王」、「転輪聖王」の「七宝」のもの達、「転輪聖王」の千人の王子、内外の眷属は、その各々の宮殿に乗って、共に、やって来て、仏法を聴く。
このような菩薩は善く仏法を説くので、祭司バラモン、商人バイシャ、国内の人民は、その姿形、寿命を尽くして、従い、そばに仕えて、捧げものを捧げる。
また、諸々の声聞、「辟支仏」、「独覚」、菩薩、諸仏は、常に、このような人を見ることを願う。
このような人がいる場所の方向に向かって、諸仏は皆、仏法を説いてくれる。
一切の仏法をことごとく受け入れて保持することが可能である。
また、深い妙なる、仏法を説く音声を出すことが可能である。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

このような人の舌は、清浄で、終に、悪い味を受けることが無い。
その人が食べる物は、ことごとく皆、甘露に成る。
深い清浄な妙なる声で、大衆に、仏法を説く。
諸々の「因縁」、「譬喩」で、「衆生」、「生者」の心を導いて仏道へ引き入れる。
聞いた者は皆、喜んで、諸々の上質な捧げものを捧げる。
諸々の天人、龍、夜叉、阿修羅などは皆、恭しく敬う心をもって、共に、やって来て、仏法を聴く。
このように仏法を説く人が、もし、「妙なる音声を『三千界』に、あまねく満たしたい」と欲したならば、思い通りに、行き渡らせることが可能である。

「大転輪聖王」、「小転輪聖王」、「転輪聖王」の千人の王子、「転輪聖王」の眷属は、合掌して、恭しく敬う心で、常に、やって来て、仏法を聴いて受け入れる。
諸々の天人、龍、夜叉、羅刹、毘舎闍(ピシャーチャ)という鬼は、喜ぶ心をもって、常に、来て、捧げものを捧げたい、と願う。
梵天、「第六天魔王波旬」、「自在天」、「大自在天」といった、これらの諸々の天人達は、常に、その場所に来る。
諸仏、諸仏の弟子は、その仏法を説く音声を聞くと、常に、念頭に置いて、守護して、時には、その人の為に、身を出現させる。

(釈迦牟尼仏は、常精進菩薩に言った。)

また、次に、常精進菩薩よ、
もし善い男子や善い女の人が、この法華経を受け入れて保持して、(声を出さないで)読んだり、声を出して読んだり、解説したり、書き写したりすれば、八百の身の功徳を得て、清浄な透明な瑠璃(るり)のような清浄な身を得て、「衆生」、「生者」は喜んで見る。
そのような人の身は清浄なので、「三千大千世界」の「衆生」、「生者」の生まれた時、死ぬ時、上下、美醜、善い場所や悪い場所に生まれる事をことごとく身の中に現す。
また、鉄囲山、大鉄囲山、弥楼山、摩訶弥楼山などの諸々の山の王と、その中の「衆生」、「生者」をことごとく身の中に現す。
下は「阿鼻地獄」から上は「有頂天」に至るまでに有るものと「衆生」、「生者」をことごとく身の中に現す。
また、声聞、「辟支仏」、「独覚」、菩薩、諸仏の説法の、その形を皆、身の中に現す。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

もし法華経を保持すれば、その身が、清浄な透明な瑠璃(るり)のように、とても清浄になって、「衆生」、「生者」は皆、喜んで見る。

また、清浄な「明鏡」、「くもりの無い良く映る鏡」で、ことごとく、諸々の形を見るように、このような菩薩は、清浄な身によって、皆、世に有るものを見る。
他の人には見えないものを、単独で、自ら、明らかに知る。
「三千世界」の中の一切の諸々の「群萌」、「生者」、天人、人、阿修羅、地獄の悪人、餓鬼、畜生界の悪人などの、これらの諸々の形を皆、身の中に現す。
「有頂天」に至るまでの諸々の天人達の宮殿、鉄囲山、弥楼山、摩訶弥楼山、諸々の大海、川などを皆、身の中に現す。
諸仏、声聞、仏の弟子、菩薩などが独りでいたり、大衆の中にいて仏法を説いたりしている形をことごとく皆、現す。
「無漏」、「煩悩が無いこと」による「法性」、「法の本性」である妙なる身を未だ得ていなくても、清浄な通常の身体によって、一切を身の中に現す。

(釈迦牟尼仏は、常精進菩薩に言った。)

また、次に、常精進菩薩よ、
もし善い男子や善い女の人が、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を受け入れて保持して、(声を出さないで)読んだり、声を出して読んだり、解説したり、書き写したりすれば、千二百の「意」、「心」の功徳を得る。
この清浄な「意」、「心」によって、経の一つの詩でも、経の詩の一句でも聞けば、無限なほど、量り知れないほど無数の意義に通達して、この意義を理解し終わると、その経の一つの詩、その経の詩の一句について、一か月間や四か月間から一年間、演説することが可能である。
諸々の、仏法を説く言葉が、その意義に適(かな)い、皆、「実相」、「真実の相」に背(そむ)かない。
もし俗世間の古典の故事、俗世の統治のための言葉、生活のための職業などについて説いても、皆、正しい仏法に適(かな)う。
「三千大千世界」の「六趣」、「六道」、「地獄、餓鬼、修羅、畜生、人間、天」の「衆生」、「生者」の心の中で想像している所行、心の動き、心の中で戯れている議論を皆ことごとく知る。
「無漏の」、「煩悩が無い」智慧を未だ得ていなくても、その「意」、「心」は、このように清浄になる。
このような人に有る思考、言説は皆、仏法であるし、真実であるし、過去の仏の経の中の所説なのである。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

このような人の「意」、「心」は清浄であるし、明らかであるし、利発であるし、汚れていない。
このような妙なる「意」、「心」によって、上中下の「法」、「もの」を知る。
経の詩の一句でも聞けば、量り知れないほど無数の意義に通達する。
仏法の通りに、一か月間や四か月間から一年間、説くことができる。
この世界の内外の一切の諸々の「衆生」、「生者」、天人、龍、人、夜叉、鬼神などの、それらの者達が「六趣」、「六道」、「地獄、餓鬼、修羅、畜生、人間、天」の中にいて思っている幾つかの種類のことを、法華経を保持している報いによって、一時で、皆ことごとく知る。
十方の無数の諸仏が、「百福荘厳相」で、「衆生」、「生者」の為に説いている仏法をことごとく聞いて、受け入れて保持して、量り知れないほど無数の意義を思考して、量り知れないほど無数に説法して、終始、忘れないし、誤らないことが可能である。
法華経を保持しているので、「諸法」、「全てのもの」の相をことごとく知って、意義に従って理解して、次第に名前や言葉に通達して、智慧の通りに演説する。
このような人に有る所説は皆、過去の仏の仏法なのである。
このような仏法を演説するので、大衆に対して恐れる所が無いのである。
法華経を保持している者の「意」、「心」は、このように、清浄なのである。
「無漏」、「煩悩が無いこと」を未だ会得していなくても、先んじて、このような相が有るのである。
このような人は、この法華経を保持して、希有な境地に安住して、一切の「衆生」、「生者」を喜ばせて、(法華経の仏法を)愛させて、敬わせる。
法華経を保持しているので、幾千、幾万種類の善い巧みな言葉によって、分別して、演説することが可能である。

常不軽菩薩品

その時、釈迦牟尼仏は、得大勢菩薩に告げた。

あなた(、得大勢菩薩)は、今、まさに、知るべきである。
もし出家者の男女や在家信者の男女が法華経を保持していて、もし(法華経を保持している出家者の男女や在家信者の男女の)悪口を言えば、先に話した通り、大罪の報いを得てしまう。
また、(出家者の男女や在家信者の男女が法華経を保持していることによる、)その得ることができる功徳は、先に話した通り、「眼、耳、鼻、舌、身、意」が清浄になることなのである。
得大勢菩薩よ、
過去、昔に、幾不可思議阿僧祇もの、無限なほど、量り知れないほど無数の劫を過ぎて、威音王仏と言う名前の仏がいた。
威音王仏の劫の名前は、離衰であった。
威音王仏の仏国土の名前は、大成であった。
その威音王仏は、存命中に、天人、人、阿修羅の為に、仏法を説いた。
声聞を求める者の為に、対応する、「四諦」の仏法を説いて、生老病死から仏土へ渡して、涅槃を究めさせた。
「辟支仏」、「独覚」を求める者の為に、対応する、「十二因縁法」を説いた。
諸々の菩薩の為に、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」によって、対応する、「六波羅蜜」の仏法を説いて、仏の智慧を究めさせた。
得大勢菩薩よ、
この威音王仏は、寿命が、四十万億那由他恒河沙劫であった。
正法が世に留まった劫の数は、一つの閻浮提の微細な塵(ちり)の数のようであった。
像法が世に留まった劫の数は、「四天下」の微細な塵(ちり)の数のようであった。
その威音王仏は、「衆生」、「生者」に利益をもたらし終わった後、(仮の身が)死んだ。
正法と像法が姿を隠した後、この仏国土に、また、威音王仏という称号の仏が出現した。
このように、順に、二万億の仏がいて、皆、威音王仏という同一の称号であった。

最初の威音王仏が既に(仮の身が)死んで、正法が姿を隠した後、像法中に、「増上慢の」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」出家者が大きな勢力をもってしまった。
その時、「常不軽」と名づけられた一人の菩薩、出家者がいた。
得大勢菩薩よ、
どんな理由で、「常不軽」と名づけられたのか？　(と言うと、)
この出家者は、出家者の男女や在家信者の男女を見ることが有れば、常に、皆をことごとく礼拝して、ほめたたえて、このように言った。
「
私は、あなた達を深く敬って、あえて、思い上がって軽蔑しません。
理由は何か？　(と言うと、)
あなた達は皆、菩薩の道を行っていて、まさに、仏に成ることができ得るからです。
」
この出家者は、経を読むことに専念せず、礼拝だけを行った。
「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」を遠くから見かけると、そのために、おもむいて、礼拝して、ほめたたえて、このように言った。
「
私は、あえて、あなた達を軽蔑しません。
あなた達は皆、まさに、仏に成るからです。
」
「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の中に、怒る心を生じた、心が不浄な者がいて、悪口を言って、このように言った。
「
この無知な比丘は、どこから来て、自ら『私は、あなた達を軽蔑しません』と言って、私達に『まさに、仏に成る』という『授記』、『仏に成れる予言』を与えるのか？
私達には、このような虚妄な『授記』、『仏に成れる予言』は不要である。
」
このように多年を経て、常に悪口を言われたが、怒る心を生じないで、常に、このように言った。
「
あなた達は、まさに、仏に成る。
」

このような言葉を説いた時、多数の人々が杖、木、瓦、石で打ちかかってきたり、投擲してきたりしたため、避けて走って遠ざかると、なお、大声で、このように言った。
「
私は、あえて、あなた達を軽蔑しません。
あなた達は皆、まさに、仏に成る。
」
常に、このような言葉を言ったので、「増上慢の」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」出家者の男女や在家信者の男女は、この菩薩に「常不軽」という称号を名づけた。
この常不軽菩薩、出家者は、命が終わろうとする時に臨んで、空中で、威音王仏が過去に説いた法華経の二十千万億の詩を全て聞いて、ことごとく受け入れて保持することができて、上述の通りに、眼が清浄になって、「耳、鼻、舌、身、意」が清浄になって、これら「六根」、「眼、耳、鼻、舌、身、意」が清浄になり終わると、寿命が二百万億那由他歳さらに増えて、広く、他の人の為に、この法華経を説いた。
その時、「増上慢の」、「悟っていないのに『悟った』と思い上がっている」出家者の男女や在家信者の男女、この人を「常不軽」と名づけた者達は、その常不軽菩薩が大いなる神通力、「楽説弁才」、「他者の願う所に従って自在に仏法を説く事ができる弁舌の才能」の力、大いなる善寂の力を得たのを見たり、その常不軽菩薩の所説を聞いたりして、皆、信じて服従した。
この常不軽菩薩は、また、幾千、幾万、幾億の「衆生」、「生者」を教化して、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」に住まわせて、命が終わった後、皆、日月灯明仏と言う称号である二千億の仏に会うことができ得て、その仏法の中で、この法華経を説いた。
この因縁によって、また、雲自在灯王仏と言う同一の称号の二千億の諸仏に会って、この諸仏の仏法の中で、この法華経を受け入れて保持して、読んで、諸々の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の為に説いたので、この通常の肉眼が清浄になることができ得て、「耳、鼻、舌、身、意」などの諸々の「六根」が清浄になって、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」の中で仏法を説いても心に恐れる所が無かった。
得大勢菩薩よ、
この常不軽菩薩は、このように幾人もの諸仏に捧げものを捧げて、恭しく敬って、尊重して、ほめたたえて、諸々の善の種となる善行を植えて、後に、また、幾千、幾万、幾億もの仏に会って、また、これらの諸仏の仏法の中で、この法華経を説いて、功徳が成就して、まさに、仏に成ることができ得た。

得大勢菩薩よ、どう思うであろうか？
その時の常不軽菩薩が、今の私、釈迦牟尼仏なのである。
もし私、釈迦牟尼仏が前世で、この法華経を受け入れて保持して、読んで、他人の為に説かなかったならば、速(すみ)やかに、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得ることは不可能であっただろう。
私、釈迦牟尼仏は、過去の諸仏の所で、この法華経を受け入れて保持して、読んで、他人の為に説いたので、速(すみ)やかに、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得たのである。
得大勢菩薩よ、
その時の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」は、私、釈迦牟尼仏を怒る心で軽蔑してしまったので、二百億劫の間、常に、仏に出会えず、仏法を聞けず、僧に出会えず、千劫の間、「阿鼻地獄」で大いなる苦悩を受けて、その罪が終わると、また、常不軽菩薩が「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を教化しているところに出会えた。
得大勢菩薩よ、どう思うであろうか？
その時の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」が、今の、この会の中の、跋陀婆羅たち五百人の菩薩と、獅子月たち五百人の出家者の男性と、尼思仏たち五百人の在家信者の男性といった、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」に不退転な者たちなのである。
得大勢菩薩よ、まさに、知るべきである。
この法華経は、諸々の菩薩に大いなる利益をもたらして、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」に至らせることが可能なのである。
このため、諸々の菩薩は、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、常に、まさに、この法華経を受け入れて保持して、読んで、解説して、書き写すべきなのである。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

過去に、威音王仏と言う称号の仏がいた。
威音王仏は、神の智慧が無量にあって、一切の生者を引き連れて導いた。
威音王仏に、天人、人、龍神は共に捧げものを捧げた。
この威音王仏の(仮の身の)死後、仏法が姿を隠そうとしている時に、常不軽菩薩と言う名前の一人の菩薩がいた。
その時、諸々の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」は、仏法を誤って推測して執着していた。
常不軽菩薩は、その人達の所に行くと、このような言葉を言った。

「
私は、あなた達を軽蔑しません。
あなた達は、仏道を修行して、皆、まさに、仏に成る。
」
諸々の人々は、このような言葉を聞き終わると、常不軽菩薩を軽蔑して悪口を言った。
常不軽菩薩は、これらの悪口などを忍耐できた。
常不軽菩薩は、その罪が終わって、命の終わりに臨んだ時に、この法華経を聞くことができ得て、「六根」、「眼、耳、鼻、舌、身、意」が清浄に成って、神通力のおかげで寿命が増えて、また、諸々の人々の為に、広く、この法華経を説いた。
諸々の仏法に執着していた者達は皆、常不軽菩薩の教化をこうむって、完成して、仏道に住んだ。
常不軽菩薩は、命が終わると、無数の仏に会って、この法華経を説いたので、無量の幸福を得て、徐々に功徳を備えていって、速(すみ)やかに仏道を成就した。
その時の常不軽菩薩が、今の私、釈迦牟尼仏なのである。
その時の「四部衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」、仏法に執着していた者達は、「あなた達は、まさに、仏に成る」と言う常不軽菩薩の言葉を聞いて、その因縁によって、無数の仏に出会えた。
その時の出家者の男女と在家信者の男女が、この会の五百人の菩薩達と在家信者の男女といった「四部衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」、今、私、釈迦牟尼仏の前で法華経の仏法を聴いている者達なのである。
私、釈迦牟尼仏は、前世で、これらの諸々の人々に勧めて、この法華経の第一の仏法を、聴かせて受け入れさせて、諸々の人々に開示して教えて涅槃に住まわせて、生から生へ、この法華経を受け入れさせて保持させた。
幾億億万もの劫から幾不可思議もの劫に至るまでの間で、稀にしか、この法華経を聞くことができ得ないのである。
幾億億万もの劫から幾不可思議もの劫に至るまでの間で、稀にしか、諸仏は、この法華経を説かないのである。
このため、仏道修行者よ、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を聞いたら、疑惑を生じることなかれ。
まさに、この法華経を一心に広く説いて、生から生へ仏に出会って、速(すみ)やかに仏道を成就するべきである。

如来神力品

その時、「千世界」の微細な塵(ちり)に等しい数の菩薩達、この世の地から涌き出した者達は皆、釈迦牟尼仏の前で、一心に、合掌して、釈迦牟尼仏の尊顔を仰ぎ見て、釈迦牟尼仏に言った。

釈迦牟尼仏よ、
私達、この世の地から涌き出した菩薩達は、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、釈迦牟尼仏の分身の仏がいる仏国土、(肉体といった仮の身が)死んだ場所で、まさに、広く、この法華経を説きます。
理由は何か？　(と言うと、)
私達、この世の地から涌き出した菩薩達は、自ら、この(法華経の)真実の清浄な大いなる仏法を得て、受け入れて保持して、読んで、解説して、書き写して、捧げものを捧げたいと欲します。

その時、釈迦牟尼仏は、文殊師利菩薩達、古くより「娑婆世界」、「この世」にいる幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の菩薩達と、諸々の出家者の男女と在家信者の男女、天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達の一切の者達の前で、大いなる神通力を現して、仏の「広長舌相」を出して上の「大梵天」という世界にまで至らせて、一切の毛穴から無量の無数の色の光を放って、十方の世界を皆ことごとく、あまねく照らした。
多数の宝の樹の下の「獅子の座」、「仏の座」の上の諸仏も、また、同様に、仏の「広長舌相」を出して、無量の光を放った。
釈迦牟尼仏と、宝の樹の下の諸仏が、神通力を現していた時間は、満幾百年間、満幾千年間になった。
その後、仏の「舌相」、「広長舌相」を(口の中に)戻しておさめると、同時に、咳払いをすると共に、指を弾いた。
これらの二つの音は、十方の諸仏の世界に、あまねく到達して、地が皆、(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動した。
それらの中の「衆生」、「生者」達、天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達は、釈迦牟尼仏の神通力のおかげで、皆、「この娑婆世界」、「この世」の幾百、幾千、幾万、幾億もの、無限なほど、量り知れないほど無数の多数の宝の樹の下の「獅子の座」、「仏の座」の上の諸仏を見た。

また、釈迦牟尼仏が、多宝仏と共に、宝の塔の中にいて、「獅子の座」、「仏の座」に坐禅しているのを見た。
また、幾百、幾千、幾万、幾億もの、無限なほど、量り知れないほど無数の菩薩と、諸々の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」が、釈迦牟尼仏を恭しく敬って、囲んでいるのを見た。
これらを見終わると、皆、大いに喜んで、心が未曾有になることを得た。
その時、諸々の天人は、空中で、大声で、このように言った。
「
これらの幾百、幾千、幾万、幾億、幾阿僧祇もの、無限なほど、量り知れないほど無数の世界を過ぎると、『娑婆』と言う名前の仏国土が有る。
この中に、釈迦牟尼仏と言う名前の仏がいる。
(釈迦牟尼仏は、)今、諸々の菩薩の為に、『妙法蓮華』、『教菩薩法』、『仏所護念』と言う名前の『大乗経』を説いている。
あなた達は、まさに、深く信じる心で、喜ぶべきであるし、また、まさに、釈迦牟尼仏を礼拝して、捧げものを捧げるべきである。
」
これらの諸々の「衆生」、「生者」達は、空中からの声を聞き終わると、合掌して、「娑婆世界」、「この世」に向かって、このように言った。
「
南無、釈迦牟尼仏。(釈迦牟尼仏を敬礼します。)
南無、釈迦牟尼仏。(釈迦牟尼仏を敬礼します。)
」
種々の華、香、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、「幢旛」と「天蓋」、諸々の身を荘厳に飾る装身具、珍しい宝、妙なる物を、皆、共に、遥か遠くから、「娑婆世界」、「この世」へ、まき散らした。
まき散らされた諸々の物は十方から来て、例えば雲が集まるように、変化して宝の帳(ヴェール)に成って、この(十方と「この世」の)間、諸仏の上をあまねく覆った。
その時、十方の世界は「通達して」、「滞り無く通じて」、妨げが無く、一つの仏国土であるかのようになった。
その時、釈迦牟尼仏は、上行菩薩などの菩薩の大衆に告げた。

諸仏の神通力は、このように、無量なのであるし、無限なのであるし、不可思議なのである。
もし私、釈迦牟尼仏が、この神通力で、幾百、幾千、幾万、幾億、幾阿僧祇もの、無限なほど、量り知れないほど無数の劫の間、法華経の仏法を付属さ

せるために、この法華経の功徳を説いたとしても、なお、説き尽くすことは不可能なほどなのである。
要約して、このことについて言うと、
仏が所有している一切の仏法、仏の一切の自由自在な神通力、仏の一切の秘密の重要な智慧の蔵、仏の一切のとても深い事は、皆、この法華経で、明らかに説かれているのである。
このため、あなた達は、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、まさに、法華経を一心に受け入れて保持して、読んで、解説して、書き写して、法華経の教えの通りに修行するべきである。
あなた達がいる仏国土(、世界)で、もし法華経を受け入れて保持して読んで解説して書き写して法華経の教えの通りに修行する者がいれば、また、法華経がある場所が有れば、園の中でも、林の中でも、樹の下でも、「僧坊」、「僧が住む建物」でも、「白衣舎」、「在家者用の宿舎」でも、「殿堂」、「仏を祭っている建物」でも、山、谷、荒野でも、この中に、皆、まさに、塔を建てて捧げものを捧げるべきである。
理由は何か？　(と言うと、)
まさに、知るべきである。
このような場所は、道場なのである。
諸仏は、このような場所で、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得たのである。
諸仏は、このような場所で、「法輪を転じた」、「法を説いた」のである。
諸仏は、このような場所で、「般涅槃した」、「(肉体といった仮の身が)死んだ」のである。

その時、釈迦牟尼仏は、くり返し、この意義を話したいと欲して、詩で説いて言った。

この世を救う者である諸仏は、大いなる神通力に住んでいて、「衆生」、「生者」を喜ばせるために、無量の神通力を現して、「舌相」、「広長舌相」を「大梵天」にまで至らせて、身から無数の光を放って、仏道を探求している者の為に、このような希有な事を現した。
諸仏の咳払いの音と指を弾いた音は、あまねく十方の仏国土で聞こえて、地が皆、(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動した。
釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、この法華経を保持することができたら、諸仏は皆、喜んで、無量の神通力を現す。

この法華経を付属させているので、法華経を受け入れて保持している者をほめたたえたら、量り知れないほど無数の劫の間ですらなお、ほめたたえ尽くすことは不可能なのである。
このような人の功徳は、十方の虚空が果てしないように、無限である。
この法華経を保持できている者は、既に、私、釈迦牟尼仏、多宝仏、釈迦牟尼仏の分身である諸仏、私、釈迦牟尼仏が今日、教化している諸々の菩薩を見ていることになるのである。
この法華経を保持できている者は、私、釈迦牟尼仏、釈迦牟尼仏の分身である諸仏、(肉体といった仮の身が)死んでいる多宝仏の一切を皆、喜ばせる。
(この法華経を保持できている者は、)十方の過去、現在、未来の諸仏を見ていることになるのであるし、捧げものを捧げていることになるのであるし、喜ばせる。
諸仏が道場で坐禅して得た秘密の重要な仏法を、この法華経を保持できている者も、遠からず、まさに、得る。
この法華経を保持できている者は、風が空中で妨げが一切無いように、「諸法」、「全てのもの」の意義、名前、言い方について、無限に、「楽説」、「他者の願う所に従って自在に仏法を説くこと」ができる。
(この法華経を保持できている者は、)私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、私、釈迦牟尼仏が説いた経の「因縁」、「理由」と「次第」、「一部始終」を知って、(経の)意義に従って、ありのままに説く。
太陽と月の光明が諸々の闇を除去できるように、このような人は、世間で(善行を)行って「衆生」、「生者」の闇を滅ぼすことができて、量り知れないほど無数の菩薩を教えて最終的に「一乗」、「仏乗」に住まわせることができる。
このため、智慧が有る者は、これらの功徳の利益を聞いて、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、まさに、この法華経を受け入れて保持するべきである。
このような人は、仏道を決定的に確信して、疑いが無い。

属累品

その時、釈迦牟尼仏は、法座から起立して、大いなる神通力を現して、右手で量り知れないほど無数の菩薩の頭頂部を撫でて、このように言った。
「
私、釈迦牟尼仏は、幾百、幾千、幾万、幾億、幾阿僧祇もの量り知れないほど無数の劫、この得るのが難しい『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』の仏法を修習しています。
今、これをあなた達に付属させます。
あなた達は、まさに、一心に、この仏法を流布させて、広く利益を増やさせるべきである。
」
(釈迦牟尼仏は、)同様に、三度、諸々の菩薩の頭頂部を撫でて、このように言った。
「
私、釈迦牟尼仏は、幾百、幾千、幾万、幾億、幾阿僧祇もの量り知れないほど無数の劫、この得るのが難しい『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』の仏法を修習しています。
今、これをあなた達に付属させます。
あなた達は、まさに、この仏法を受け入れて保持して、読んで、広く説いて、一切の『衆生』、『生者』が、あまねく聞いて知ることができ得るようにさせなさい。
理由は何か？　(と言うと、)
如来、仏には、大いなる思いやりが有って、諸々の、物を惜しむことが無く、恐れる所無く、『衆生』、『生者』に仏の智慧、如来の智慧、『自然智慧』、『自然に得られる智慧』を与えることができる。
仏は、一切の『衆生』、『生者』に大いなる布施をしている主なのである。
あなた達は、まさに、仏法に従い、仏法を学ぶべきである。
物を惜しむことなかれ。
未来の来世で、もし善い男子や善い女の人が仏の智慧を信じることが有れば、まさに、この人の為に、この法華経を演説して、(この人が)聞いて知ることができ得るようにさせなさい。
この人に仏の智慧を得させるためである。

もし『衆生』、『生者』が(仏の智慧を)信じて受け入れないことが有れば、
まさに、仏の他の深い仏法の中から『示教利喜する』、『教示して鼓舞して喜ばせる』べきである。
あなた達が、もし、このようにすることができれば、既に、諸仏の恩に報いているのである。
」
その時、諸々の菩薩は、釈迦牟尼仏が、このように説いたのを聞き終わって、皆、大いに喜んで、喜びが、その身に、あまねく満ちて、喜びが、ますます加わって、釈迦牟尼仏を恭しく敬って、身をかがめて、低頭して、合掌して、釈迦牟尼仏に向かって共に声を出して言った。
「
釈迦牟尼仏が命じた通りに、まさに、全て、行います。
ただ、釈迦牟尼仏よ、願わくば、憂慮しないでください。
」
諸々の菩薩達は、同様に、三度、共に声を出して言った。
「
釈迦牟尼仏が命じた通りに、まさに、全て、行います。
ただ、釈迦牟尼仏よ、願わくば、憂慮しないでください。
」
その時、釈迦牟尼仏は、十方から来ていた釈迦牟尼仏の分身である諸仏を
各々、本(もと)の仏国土に帰還させて、このように言った。
「
(釈迦牟尼仏の分身である)諸仏よ、安んじていた場所に従いなさい。
多宝仏の塔よ、帰還して、本(もと)の通りになりなさい。
」
釈迦牟尼仏が、このように説いた時、宝の樹の下の「獅子の座」、「仏の座」に坐禅している者達である十方の無量の釈迦牟尼仏の分身である諸仏と、多宝仏と、上行菩薩達、無限なほどの幾阿僧祇もの菩薩の大衆と、舎利弗たち声聞と、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」と、一切の世間の天人、人、阿修羅たちは、釈迦牟尼仏の所説を聞いて、皆、大いに喜んだ。

薬王菩薩本事品

その時、宿王華菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。

釈迦牟尼仏よ、
薬王菩薩は、どうして、「娑婆世界」、「この世」を巡るのですか？
釈迦牟尼仏よ、
この薬王菩薩には、幾百、幾千、幾万、幾億、幾那由他もの難行苦行が有ります。
善いかな。
釈迦牟尼仏よ、願わくば、少し解説してください。
諸々の天人、龍神、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達と、他の仏国土から来ている諸々の菩薩と、この声聞達は、聞けば、皆、喜びます。

その時、釈迦牟尼仏は、宿王華菩薩に告げた。

昔、過去、幾恒河沙もの量り知れないほど無数の劫の前、日月浄明徳仏と言う称号の仏がいた。
その日月浄明徳仏には、八十億の大いなる菩薩と、七十二恒河沙の大いなる声聞達がいた。
日月浄明徳仏の(仮の身の)寿命は、四万二千劫であった。
日月浄明徳仏の菩薩の寿命も、また、等しい時間、四万二千劫であった。
この日月浄明徳仏の仏国土には、女の人、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅達と、諸々の災難が無かった。
日月浄明徳仏の地は、掌(てのひら)のように平らで、瑠璃(るり)で形成されていた。
宝の樹が荘厳に飾っていた。
宝の帳(ヴェール)が上を覆っていた。
宝の華の「幢旛」を垂らしていた。
宝の瓶(びん)と香炉が、仏国土、世界に、あまねくあった。
七種類の宝を台にして、一つの宝の樹に一つの宝の台があった。
その宝の樹は、宝の台から、「一箭道」という距離を尽くすだけ離れ去っていた。

これらの諸々の宝の樹々には皆、菩薩と、声聞がいて、その宝の樹の下に坐禅していた。
諸々の宝の台の上には、各々、百億の諸々の天人がいて、天の「伎楽」、「音楽」を演奏して歌で日月浄明徳仏をほめたたえる捧げものを捧げていた。
その時、この日月浄明徳仏は、一切衆生喜見菩薩と、多数の菩薩と、諸々の声聞達の為に、法華経を説いた。
この一切衆生喜見菩薩は、日月浄明徳仏の仏法の中で志願して苦行を修習して、精進して、(坐禅して)坐禅の合間に歩いて、満一万二千年間、一心に仏になることを求め終わると、「現一切色身三昧」、「教化する相手に応じて、一切の色形、身を現すことができる三昧」を得た。
(一切衆生喜見菩薩は、)この「現一切色身三昧」を得終わると、心が大いに喜んで、このように思って言った。
「
私、一切衆生喜見菩薩は、『現一切色身三昧』を得た。
皆、法華経を聞いて得た力である。
私、一切衆生喜見菩薩は、今、まさに、日月浄明徳仏と法華経に捧げものを捧げよう。
」
(一切衆生喜見菩薩は、)その時、この「現一切色身三昧」に入って、空中から曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、細かく粉々にした堅い黒栴檀を雨のように降らして、雲のように空中を満たしてから降下させた。
(一切衆生喜見菩薩は、)また、海の此岸の栴檀香を雨のように降らした。
この、海の此岸の栴檀香は、「六銖」という重さで、価値が、「娑婆世界」、「この世」ほどあった。
(一切衆生喜見菩薩は、)これらを日月浄明徳仏に捧げた。
(一切衆生喜見菩薩は、)これらを捧げ終わると、「現一切色身三昧」から起きて、自ら、このように思って言った。
「
私、一切衆生喜見菩薩は、神通力で日月浄明徳仏に捧げ物を捧げたが、身を捧げるには、及ばない。
」
(一切衆生喜見菩薩は、)すると、栴檀香、薫陸香、兜楼婆香、畢力迦香、沈水香、膠香といった諸々の香を服用して、また、瞻蔔といった諸々の華の香油を飲んで、満千二百年間がすぎ終わると、香油を身に塗って、日月浄明徳仏の前で、自ら天の宝の衣を身に纏(まと)い終わると、諸々の香油を(天の宝の衣に)かけて、神通力の願力によって、自らの身を燃やした。

その光明は、八十億恒河沙の世界をあまねく照らした。
それらの世界の中の諸仏は、同時に、(一切衆生喜見菩薩を)ほめたたえて言った。
「
善いかな。
善いかな。
善い男子よ、
これは、真の精進なのである。
これを『如来、仏に捧げものを捧げる真の方法』と名づける。
もし華、香、『瓔珞』、『紐(ひも)状の飾り』、焼香、抹香、塗香、『繒蓋』の『天蓋』、『幢旛』と『天蓋』、海の此岸の栴檀香といった、これら種々の諸々の物を捧げても、(一切衆生喜見菩薩の捧げものには、)及ばないのである。
たとえ国、城、妻子による奉仕を布施しても、また、(一切衆生喜見菩薩の捧げものには、)及ばないのである。
善い男子よ、
これを『第一の布施』と名づける。
諸々の布施の中で、(一切衆生喜見菩薩の捧げもの、布施は、)最も尊く、最上なのである。
諸仏に『法供養』、『行供養』、『至処道供養』をしているからである。
」
(八十億恒河沙の世界の中の諸仏は、)このように言い終わると、各々、沈黙した。

(一切衆生喜見菩薩は、)千二百年間、その身を火で燃やした。
この千二百年間が過ぎ終わった後、(一切衆生喜見菩薩の、)その身は燃え尽きた。
一切衆生喜見菩薩は、このような「法供養」、「行供養」、「至処道供養」をし終わって、命が終わった後、また日月浄明徳仏の仏国土の中に生まれた。
(一切衆生喜見菩薩は、)浄徳王の家に、結跏趺坐した姿で、こつ然と、化生した。
(一切衆生喜見菩薩は、)すると、その父である浄徳王の為に、詩で説いて言った。
「
大いなる(浄徳)王よ、今、まさに、知ってください。

私(、一切衆生喜見菩薩)は、あの日月浄明徳仏の所で、(坐禅して)坐禅の合間に歩いていて、その時に『一切現諸身三昧』、『教化する相手に応じて、諸々の身の一切を現すことができる三昧』を得て、大いなる精進を行うことに勤めて、愛していた身を(燃やして)捨てたのです。
」
(一切衆生喜見菩薩は、)このような詩を説き終わると、父である浄徳王に言った。
「
日月浄明徳仏は、今も、古くから、現に存在しています。
私(、一切衆生喜見菩薩)は、先の前世で、日月浄明徳仏に捧げものを捧げ終わって、『解一切衆生語言陀羅尼』、『一切の衆生、生者の言葉を理解して真理を保持する能力』を得ました。
また、この法華経の、八百千万億那由他の、『甄迦羅』という数の、『頻婆羅』、『阿僧祇』の、『阿閦婆等』という数の詩を聞きました。
大いなる(浄徳)王よ、
私(、一切衆生喜見菩薩)は、今、まさに、(日月浄明徳仏の所に)帰還して、この日月浄明徳仏に捧げものを捧げます。
」
(一切衆生喜見菩薩は、)このように言い終わると、七種類の宝の台に坐禅して、空中に、七多羅樹という高さまで、上昇して、日月浄明徳仏の所に行くと、頭を日月浄明徳仏の足につけて敬礼して、両手の十本の指を合わせて(合掌して)、詩で日月浄明徳仏をほめたたえた。
「
(日月浄明徳仏は、)容貌、顔つきが、とても珍しく優れています。
(日月浄明徳仏の)光明は、十方を照らしています。
私(、一切衆生喜見菩薩)は、かつて捧げものを捧げました。
(私、一切衆生喜見菩薩は、)今、また、(日月浄明徳仏の所に)帰還して、親しみ近づきます。
」
その時、一切衆生喜見菩薩は、このような詩を説き終わると、日月浄明徳仏に言った。
「
日月浄明徳仏よ、
日月浄明徳仏は、なお、昔のように、この世に存在しつづけますか？
」
その時、日月浄明徳仏は、一切衆生喜見菩薩に告げた。

「
善い男子よ、
私(、日月浄明徳仏)の(仮の身の)死ぬ時が来た。
(日月浄明徳仏の仮の身が)滅んで尽きる時が来た。
あなた(、一切衆生喜見菩薩)は、安んじて落ち着いて、寝床を布施しなさい。
私(、日月浄明徳仏)は、今夜、まさに、(仮の身が)死にます。
」
(日月浄明徳仏は、)また、一切衆生喜見菩薩に命じた。
「
善い男子よ、
私(、日月浄明徳仏)は、仏法をあなた(、一切衆生喜見菩薩)と諸々の菩薩の段階の大いなる弟子に付属させます。
また、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』の仏法と、『三千大千七宝世界』と、諸々の宝の樹々と宝の台と、給仕してくれる諸々の天人をことごとく、あなた(、一切衆生喜見菩薩)に付属させます。
私(、日月浄明徳仏)の(仮の身の)死後、『舎利』、『日月浄明徳仏の遺骨』も、また、あなた(、一切衆生喜見菩薩)に付属させます。
(私、日月浄明徳仏の遺骨を)まさに、流布させて、広く捧げものを捧げさせなさい。
まさに、幾千もの塔を建てなさい。
」
日月浄明徳仏は、一切衆生喜見菩薩に、このように命じ終わると、後夜に、「涅槃に入った」、「(仮の身が)死んだ」。
その時、一切衆生喜見菩薩は、日月浄明徳仏の(仮の身の)死を見て、悲しみを感じて、悩み悶えて、日月浄明徳仏を恋い慕って、海の此岸の栴檀を薪として、日月浄明徳仏の身に捧げて、この日月浄明徳仏の身を焼いた。
火が消え終わった後、日月浄明徳仏の遺骨を取って収めた八万四千の宝の瓶(びん)を作って、八万四千の宝の瓶(びん)を安置した、「三世界」より高い、八万四千の塔を建てて、「刹」、「旗竿」を表に立てて荘厳に飾って、諸々の「幢旛」と「天蓋」を垂らして、多数の宝の鈴を懸けた。
その時、一切衆生喜見菩薩は、また、このように、自ら思って言った。
「
私(、一切衆生喜見菩薩)は、これらの捧げものを捧げたが、心が、なお、未だ満足しない。
私(、一切衆生喜見菩薩)は、今、まさに、日月浄明徳仏の遺骨に捧げものを捧げよう。

」
(一切衆生喜見菩薩は、)すると、諸々の菩薩の段階の大いなる弟子と、天人と、龍と、夜叉達といった一切の大衆に語った。
「
あなた達は、まさに、一心に日月浄明徳仏について思うべきである。
私(、一切衆生喜見菩薩)は、今、まさに、日月浄明徳仏の遺骨に捧げものを捧げる。
」
(一切衆生喜見菩薩は、)このように言い終わると、八万四千の塔の前で、七万二千年間、「百福荘厳相」の腕を燃やした。
この一切衆生喜見菩薩の捧げものは、無数の声聞の段階を求める者達と、量り知れないほど無数の人に、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を起こさせて、皆を「現一切色身三昧」に住まわせた。
その時、諸々の菩薩、天人、人、阿修羅達は、一切衆生喜見菩薩の腕が無いのを見て、憂い悩み悲しんで、このように言った。
「
この一切衆生喜見菩薩は、私達の師であるし、私達を教化してくれる者である。
しかし、今、腕を焼いて、身が欠損してしまっている。
」
その時、一切衆生喜見菩薩は、大衆の中で、このような誓いを立てた。
「
私(、一切衆生喜見菩薩)は、両腕を捨てて、必ず、まさに、仏の金色の身を得よう。(仏に成ろう。)
もし、(仏に成るという言葉が、)真実で、虚しくなければ、私(、一切衆生喜見菩薩)の両腕は、また、もとのようになるように。
」
(一切衆生喜見菩薩が、)このように誓うと、自然と、(両腕が)復元した。
この一切衆生喜見菩薩の幸福をもたらす功徳と智慧が「淳」、「ありのまま」で厚かったので、このような結果になるに至ったのである。
まさに、その時、「三千大千世界」は(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動して、天から宝の華が雨のように降って、一切の天人、人は心が未曾有になることを得た。

釈迦牟尼仏は、宿王華菩薩に告げた。

あなた(、宿王華菩薩)は、どう思うであろうか？
一切衆生喜見菩薩が、今の薬王菩薩なのである。
身を捨てて布施した所は、このように、幾百、幾千、幾万、幾億、幾那由他もの量り知れないほど無数の数なのである。
宿王華菩薩よ、
もし発心して「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を得たいと欲する者がいれば、能(よ)く手の指や足の指を一本、燃やして仏の塔に捧げたら、国、城、妻子による奉仕、「三千大千国土」の山、林、河、池、諸々の珍しい宝物を捧げる者に勝(まさ)るのである。
また、もし「三千大千世界」を七種類の宝で満たして仏、大いなる菩薩、「辟支仏」、「独覚」、阿羅漢に捧げても、この人が得る功徳は、一つの四句の詩でも、この法華経を受け入れて保持している功徳には及ばないのである。
その(法華経を受け入れて保持していることによる、)幸福をもたらす功徳は、最も多いのである。
宿王華菩薩よ、
例えば、一切の川、流れ、大河といった諸々の水の中で、海が第一であるような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経は、)諸仏が説く経の中で、最も深い大いなる物なのである。
また、土山、黒山、小鉄囲山、大鉄囲山、十宝山といった多数の山の中で、須弥山が第一であるような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経は、)諸々の経の中で、最上なのである。
また、多数の星々の中で、月が最も第一であるような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経の仏法は、)幾千、幾万、幾億種類の諸々の経の仏法の中で、最も照らして明らかにするのである。
また、太陽が諸々の闇を能(よ)く除去するような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経は、)能(よ)く一切の善くない闇を破るのである。
また、諸々の小王の中で、転輪聖王が、最も第一であるような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経は、)多数の経の中で、最も尊いのである。
また、「三十三天」の中で、帝釈天が、王であるような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。

(法華経は、)諸々の経の中で、王なのである。
また、梵天が、一切の「衆生」、「生者」の父であるような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経は、)一切の賢者、聖者、「(有)学」の段階の者、「無学」の段階の者、菩薩の段階を求める心を起こした者の父なのである。
また、一切の凡人の中で、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、「辟支仏」、「独覚」が、第一であるような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経は、)一切の仏の所説、菩薩の所説、声聞の所説である、諸々の経の仏法の中で、最も第一なのである。
この法華経を能(よ)く受け入れて保持している者がいれば、また、(法華経と)同様なのである。
(法華経を受け入れて保持している者も、)また、一切の「衆生」、「生者」の中で、第一なのである。
一切の声聞、「辟支仏」、「独覚」の中で、菩薩が、第一である。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経の仏法は、)一切の諸々の経の仏法の中で、最も第一なのである。
仏が、「諸法」、「全てのもの」の王であるような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経は、)諸々の経の中で、王なのである。
宿王華菩薩よ、
この法華経は、一切の「衆生」、「生者」を救うことが可能なのである。
この法華経は、一切の「衆生」、「生者」を諸々の苦悩から離れさせることが可能なのである。
この法華経は、大いなる利益を一切の「衆生」、「生者」にもたらして、それらの願いを満たすことが可能なのである。
清涼な池が、一切の諸々の渇いて水が欠乏している者を満たすことが可能であるような物なのである。
寒い者が、火を得るような物なのである。
裸の者が、衣服を得るような物なのである。
商人が、主を得るような物なのである。
子どもが、母を得るような物なのである。
渡りに船を得るような物なのである。
病で、医者を得るような物なのである。
暗闇で、明かりを得るような物なのである。
貧しさの中で、宝を得るような物なのである。

民が、王を得るような物なのである。
商人が、海を得るような物なのである。
たいまつが、暗闇を除去するような物なのである。
この法華経も、また、同様なのである。
(法華経は、)「衆生」、「生者」を一切の苦しみ、一切の病痛から離れさせることが可能なのである。
(法華経は、)一切の生死の束縛を解除することが可能なのである。
もし人が、この法華経を聞くことができ得て、自ら書いたり、他人に書かせたりすれば、得る功徳は、仏の智慧で、いくつなのか数えて量っても、その果てを得ることができない。
もし、この法華経を書いて、華、香、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」、焼香、抹香、塗香、「幢旛」と「天蓋」、衣服、蘇の蝋燭(ロウソク)、油の蝋燭(ロウソク)、諸々の香油の蝋燭(ロウソク)、「瞻蔔」の香油の蝋燭(ロウソク)、「須曼那」の香油の蝋燭(ロウソク)、「波羅羅」の香油の蝋燭(ロウソク)、「婆利師迦」の香油の蝋燭(ロウソク)、「那婆摩利」の香油の蝋燭(ロウソク)といった種々の蝋燭(ロウソク)を捧げたら、得る功徳も、また、無量なのである。
宿王華菩薩よ、
もし人が、この法華経の薬王菩薩本事品を聞けば、また、無量の無限の功徳を得る。
もし女の人が、この法華経の薬王菩薩本事品を聞いて、受け入れて保持することができれば、その女の身が尽きた後、(女の身を)また受けない。
釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、「後五百歳」、「末法」の中で、もし女の人が、この法華経を聞いて、教えの通りに修行すれば、この世で命が終わったら、安楽な世界、阿弥陀仏を大いなる菩薩達が囲んで住んでいる場所に行って、蓮華の中の宝の座の上に生まれて、貪欲に悩まされず、怒りや愚かさに悩まされず、思い上がりや嫉妬といった諸々の汚れに悩まされず、菩薩の神通力と「無生法忍」、「生滅を超越した真理の認識」を得る。
そして、この「無生法忍」、「生滅を超越した真理の認識」を得終わると、眼が清浄になって、この清浄な眼で、七百万二千億那由他恒河沙に等しい数の諸仏を見る。

この時、諸仏は、遥か遠くから、共に、ほめたたえて言った。

善いかな。
善いかな。

善い男子よ、あなた達が能(よ)く釈迦牟尼仏の仏法の中で、この法華経を受け入れて保持して、読んで、思考して、他人の為に説いて得た幸福をもたらす功徳は無量、無限なのである。
火で焼くことは不可能なのである。
水で押し流して漂わせることは不可能なのである。
あなた達の功徳は、幾千もの諸仏が共に説いても、説き尽くすことは不可能なのである。
あなた達は今、既に、能(よ)く諸々の魔の賊を破り、生死の軍を壊滅させ、諸々の他の怨敵を皆ことごとく壊滅させている。
善い男子よ、幾百、幾千の諸仏は、神通力で、共に、あなた達を守護しているのである。
一切の世間の天人、人の中で、あなた達と等しい者はいないのである。
ただし、仏だけは除く。
諸々の声聞や「辟支仏」、「独覚」や菩薩で、智慧と禅定が、あなた達と等しい者はいないのである。
宿王華菩薩よ、
この薬王菩薩は、このような功徳と智慧の力を成就しているのである。
もし人が、この法華経の薬王菩薩本事品を聞いて、喜んで、「善い」と、ほめたたえることができれば、この人は、現世で、口(くち)の中から常に青蓮華の香りを出すし、身の毛穴の中から常に牛頭栴檀香を出すし、得る功徳は上述の通りなのである。
このため、宿王華菩薩よ、この法華経の薬王菩薩本事品を、あなた達に付属させる。
私達、諸仏の(肉体といった仮の身の)死後、「後五百歳」、「末法」の中で、広く説いて、「閻浮提」、「この世」に流布させて、断絶してしまって悪魔、魔の民、諸々の天人、龍、夜叉、鳩槃荼(クンバンダ)という鬼などが好機を得ないようにさせなさい。
宿王華菩薩よ、あなた達は、まさに、神通力で、この法華経を守護しなさい。
理由は何か？　(と言うと、)
この法華経は、「閻浮提」、「この世」の人の病気への良薬なのである。
もし人に病気が有っても、この法華経を聞くことができ得れば、病気が消滅して、不老不死になる。
宿王華菩薩よ、あなた達は、もし、この法華経を受け入れて保持している者を見ることが有れば、まさに、青蓮華に抹香を盛って満たして、その人の上に、まき散らして捧げなさい。
まき散らして捧げ終わったら、このように思って言いなさい。

「
この人は、遠からず、必ず、まさに、草を取って、道場で坐禅して、諸々の魔の軍を破って、まさに、法螺貝を吹き鳴らして、大いなる法の太鼓を打ち鳴らして、一切の『衆生』、『生者』を老病死という海から仏土へ渡して解脱させる。
」と。
このため、仏道を探求している者は、この法華経を受け入れて保持している人がいるのを見たら、まさに、このように、恭しく敬う心を生じさせなさい。

この法華経の薬王菩薩本事品を説いた時、八万四千の菩薩は、「解一切衆生語言陀羅尼」を得た。
多宝仏は、宝の塔の中から、宿王華菩薩をほめたたえて言った。
「
善いかな。
善いかな。
宿王華菩薩よ、あなたは、不可思議な功徳を成就して、このような事を釈迦牟尼仏に質問できて、量り知れないほど無数の一切の『衆生』、『生者』に利益をもたらした。
」と。

妙音菩薩品

その時、釈迦牟尼仏は、「大人相」、「三十二相」の「肉髻」から光明を放って、また、「眉間白毫相」から光を放って、東方の百八万億那由他恒河沙に等しい数の諸仏の世界をあまねく照らした。
この(百八万億那由他恒河沙の)数(の世界)を過ぎると、浄光荘厳と言う名前の世界が有る。
その国には、浄華宿王智仏と言う称号の仏がいる。
(浄華宿王智仏は、)無限なほど、量り知れないほど無数の菩薩の大衆に恭しく敬われて、囲まれて、菩薩達の為に、仏法を説いている。
釈迦牟尼仏は、「眉間白毫相」からの光明で、その国をあまねく照らした。
その時、浄光荘厳という仏国土の一切の中に、妙音菩薩と言う名前の一人の菩薩がいた。
(妙音菩薩は、)長い間、既に、多数の功徳、善行という本(もと)、種を植えて、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の諸仏に捧げものを捧げて、親しみ近づいて、とても深い智慧をことごとく成就して、妙幢相三昧、法華三昧、浄徳三昧、宿王戯三昧、無縁三昧、智印三昧、解一切衆生語言三昧、集一切功徳三昧、清浄三昧、神通遊戯三昧、慧炬三昧、荘厳王三昧、浄光明三昧、浄蔵三昧、不共三昧、日旋三昧を得て、これらのような百千万億恒河沙に等しい数の諸々の大いなる三昧を得ていた。
釈迦牟尼仏の光が、その(妙音菩薩の)身を照らすと、(妙音菩薩は、)浄華宿王智仏に言った。
「
浄華宿王智仏よ、
私(、妙音菩薩)は、まさに、『娑婆世界』、『この世』へ行って、釈迦牟尼仏を礼拝して、親しみ近づいて、捧げものを捧げます。
また、法王子とも呼ばれる文殊師利菩薩、薬王菩薩、勇施菩薩、宿王華菩薩、上行意菩薩、荘厳王菩薩、薬上菩薩にまみえます。
」
その時、浄華宿王智仏は、妙音菩薩に告げた。
「
あなた(、妙音菩薩)は、あの仏国土(、この世)を軽蔑して、『(この世の仏、菩薩、この世という仏国土は)下劣である』という想いを生じるなかれ。
善い男子よ、

あの『娑婆世界』、『この世』には、高低があって、平らではなく、土石、諸々の山、汚れている悪いものに満ちていて、仏の身が卑小で、諸々の菩薩達の姿形も、また、卑小である。
しかし、あなた(、妙音菩薩)の身は、四万二千由旬である。
私(、浄華宿王智仏)の身は、六百八十万由旬である。
あなた(、妙音菩薩)の身は、第一に端正で、幾百、幾千、幾万もの幸福があって、光明が特に絶妙である。
このため、あなた(、妙音菩薩)は、行っても、あの仏国土(、この世)を軽蔑したり、『(この世の)仏、菩薩、(この世という)仏国土は下劣である』という想いを生じたりするなかれ。
」
妙音菩薩は、その浄華宿王智仏に言った。
「
浄華宿王智仏よ、
私(、妙音菩薩)は、今、『娑婆世界』、『この世』へ行きます。
これは皆、仏の力、仏が神通力に遊戯していること、仏の功徳と智慧の荘厳さによる物なのです。
」
この時、妙音菩薩は、座から起立せずに、身を動揺させず、三昧に入って、三昧の力によって、「耆闍崛山」、「霊鷲山」の法座から遠く離れていない場所に、八万四千の多数の宝の蓮華を化生させた。
(宝の蓮華は、)茎が、「閻浮檀金」、「紫を帯びた赤黄色の最上質の金」であった。
葉が、白銀であった。
鬚が、金剛(ダイアモンド)であった。
その(宝の蓮華の)台が、「甄叔迦宝」、「赤い宝石」であった。

その時、法王子とも呼ばれる文殊師利菩薩は、この宝の蓮華を見て、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
どんな理由で、この瑞兆が先ほどから現れているのですか？
幾千、幾万もの宝の蓮華が有って、茎が『閻浮檀金』、『紫を帯びた赤黄色の最上質の金』で、葉が白銀で、鬚が金剛(ダイアモンド)で、その(宝の蓮華の)台が『甄叔迦宝』、『赤い宝石』です。
」

その時、釈迦牟尼仏は、文殊師利菩薩に告げた。
「
妙音菩薩が、浄華宿王智仏の仏国土から、八万四千の菩薩に囲まれて、『この娑婆世界』、『この世』に来て、私(、釈迦牟尼仏)に捧げものを捧げて、親しみ近づいて、礼拝しようとしているのである。
また、(妙音菩薩が、)法華経に捧げものを捧げて、聴こうとしているのである。
」
文殊師利菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
この(妙音)菩薩は、どんな善行という本(もと)、種を植えて、どんな功徳、善行を修行して、このような大いなる神通力が有るのですか？
(妙音菩薩は、)どんな三昧を行(おこな)っているのですか？
願わくば、私達の為に、この(妙音菩薩の)三昧の名前を説いてください。
私達も、また、この三昧を修行することに勤めて、この三昧を行(おこな)って、この(妙音菩薩の)色形、相の『大小』、『優劣』や『威儀進止』、『身のこなし』を見たいと欲します。
ただ、願わくば、釈迦牟尼仏よ、神通力で、この(妙音)菩薩が来るのを、私達に見させてください。
」
その時、釈迦牟尼仏は、文殊師利菩薩に告げた。
「
この長い間、(仮の身が)死んでいる多宝仏が、まさに、あなた達の為に、その相を現してくれます。
」
その時、多宝仏は、この(妙音)菩薩に告げた。
「
善い男子(、妙音菩薩)よ、来なさい。
法王子とも呼ばれる文殊師利菩薩が、あなた(、妙音菩薩)の身を見たいと欲している。
」
その時、妙音菩薩は、この浄光荘厳という仏国土から、姿を隠して、八万四千の菩薩と共に出発して来た。
経由した諸々の仏国土は、(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動して、皆ことごとく、七種類の宝の蓮華を雨のように降らした。

幾百、幾千もの天の音楽が、打ち鳴らさなくても、自然と鳴った。
この(妙音)菩薩は、目が、広大な青蓮華の葉のようであった。
たとえ幾百、幾千、幾万もの月を和合しても、その(妙音菩薩の)顔つき、容貌の端正さは、これを超過していた。
(妙音菩薩は、)身が、純金の色で、幾百、幾千もの量り知れないほど無数の功徳で荘厳に飾られていた。
(妙音菩薩は、)威徳が、燃えるように盛んであった。
(妙音菩薩は、)光明が、照り輝いていた。
(妙音菩薩は、)諸々の相を十分に備えていて、那羅延天の堅固な身のようであった。
(妙音菩薩は、)七種類の宝の台に入って、空中に上昇して、地から七多羅樹の高さに離れ去った。
(妙音菩薩は、八万四千の)諸々の菩薩達に恭しく敬われて囲まれて、「この娑婆世界」、「この世」の「耆闍崛山」、「霊鷲山」に来て、到着すると、七種類の宝の台を下りて、幾百、幾千もの価値の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」を持って、釈迦牟尼仏の所に至ると、頭を釈迦牟尼仏の足につけて敬礼して、「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」を捧げて、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
浄華宿王智仏が、釈迦牟尼仏の安否を尋ねていました。
『
病が少なく、悩みが少なく、日常生活が軽やかで素早く、安楽として行(おこな)っていますか？　否か？
四大(元素)は調和していますか？　否か？
俗世の事を忍耐できますか？　否か？
衆生、生者は仏土へ渡しやすいですか？　否か？
貪欲、怒り、愚かさ、嫉妬、物惜しみ、思い上がりは多くないですか？　否か？
親不孝、出家修行僧への不敬、邪悪な見解、善くない心、五感からの感情を正して整えないことは無いですか？　否か？
釈迦牟尼仏よ、
衆生、生者は諸々の魔、怨みを降伏させることができていますか？　否か？
長い間、(仮の身が)死んでいる多宝仏は、七種類の宝の塔の中にいて、来て、仏法を聴いていますか？　否か？
』と。
」

また、(妙音菩薩は、)多宝仏に低頭し合掌し安否を尋ねた。
「
安穏としていて、悩みが少なく、忍耐して、長い間、いますか？　否か？
多宝仏よ、
私(、妙音菩薩)は、今、多宝仏の身を見たいと欲しています。
ただ、願わくば、多宝仏よ、私(、妙音菩薩)に示して、見させてください。
」
その時、釈迦牟尼仏は、多宝仏に語った。
「
この妙音菩薩は、見たいと欲しています。
」
その時、多宝仏は、妙音菩薩に告げて言った。
「
善いかな。
善いかな。
あなた(、妙音菩薩)は、能(よ)く、釈迦牟尼仏に捧げ物を捧げ、法華経を聴き、文殊師利菩薩などにまみえるために、ここに来ました。
」
その時、華徳菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
この妙音菩薩は、どんな善の種となる善行を植えて、どんな『功徳』、『善行』を修行して、このような神通力が有るのですか？
」
釈迦牟尼仏は、華徳菩薩に告げた。

過去に、雲雷音王仏と言う名前の仏がいた。
(雲雷音王仏の)仏国土の名前は、現一切世間であった。
(雲雷音王仏の)劫の名前は、喜見であった。
妙音菩薩は、一万二千年間、十万種類の「伎楽」、「音楽」を雲雷音王仏に捧げた。
また、(妙音菩薩は、)八万四千個の、七種類の宝の鉢を(雲雷音王仏に)捧げた。
(妙音菩薩は、)この因縁の果報で、今、浄華宿王智仏の仏国土に生まれて、このような神通力が有るのである。
華徳菩薩よ、どう思うであろうか？

その時の雲雷音王仏の所で「伎楽」、「音楽」を捧げ、宝の器を捧げた妙音菩薩が、今の、この妙音菩薩なのである。
華徳菩薩よ、
この妙音菩薩は、既に、かつて、量り知れないほど無数の諸仏に捧げものを捧げて、親しみ近づいて、長い間、功徳、善行という本(もと)、種を植えて、「恒河沙」、「ガンジス川の砂のように無数」に等しい数の、幾百、幾千、幾万、幾億、幾那由他もの無数の諸仏に会ってきているのである。
華徳菩薩よ、あなたは、ただ、妙音菩薩の身が、ここに存在することしか見えていない。
しかし、この妙音菩薩は、あちこちの別々の場所で、種々の身を現して、
諸々の「衆生」、「生者」の為に、この法華経を説いているのである。
(妙音菩薩は、)ある場合は、梵天の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、帝釈天の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、自在天の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、大自在天の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、天大将軍の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、毘沙門天の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、転輪聖王の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、諸々の小王の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、長者の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、「居士」、「未出家の修行者」の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、役人の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、バラモンの身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、出家者の男性や女性や在家信者の男性や女性の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、長者や「居士」、「未出家の修行者」の妻の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、役人の妻の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、バラモンの妻の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、男児や女児の身を現す。
(妙音菩薩は、)ある場合は、天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達の身を現す。
そして、この法華経を説いて、地獄、餓鬼界、畜生界、多数の危険な場所から、皆を救済することが可能なのである。
また、王の後宮で、変身して女の身に成って、この法華経を説く。
華徳菩薩よ、

この妙音菩薩は、「娑婆世界」、「この世」の諸々の「衆生」、「生者」を救って護ることが可能なのである。
この妙音菩薩は、このように、種々に変化させて身を現して、「この娑婆国土」、「この世」に存在して、諸々の「衆生」、「生者」の為に、この法華経を説くのである。
(妙音菩薩は、)神通力、身を変化させる力、智慧の力が、減ることが無い。
この妙音菩薩は、いくつもの智慧で、「娑婆世界」、「この世」を明るく照らして、一切の「衆生」、「生者」の各々に、「所知」、「知ることが可能であるもの」を得させる。
(妙音菩薩は、この世だけではなく、)十方の「恒河沙の」、「ガンジス川の砂のように無数な」世界の中でも、また、同様なのである。
(妙音菩薩は、)もし、まさに、声聞の姿形で、仏土へ渡すべき者には、声聞の姿形を現して、その者の為に、仏法を説く。
(妙音菩薩は、)まさに、「辟支仏」、「独覚」の姿形で、仏土へ渡すべき者には、「辟支仏」、「独覚」の姿形を現して、その者の為に、仏法を説く。
(妙音菩薩は、)まさに、菩薩の姿形で、仏土へ渡すべき者には、菩薩の姿形を現して、その者の為に、仏法を説く。
(妙音菩薩は、)まさに、仏の姿形で、仏土へ渡すべき者には、仏の姿形を現して、その者の為に、仏法を説く。
(妙音菩薩は、)このように、まさに、仏土へ渡すべき者の為に、種々に、随所で、姿形を現す。
また、(妙音菩薩は、)まさに、死ぬ姿で、仏土へ渡すべき者には、死ぬ姿を示して現す。
華徳菩薩よ、
妙音菩薩は、このように、大いなる神通力、智慧の力を成就しているのである。

その時、華徳菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
この妙音菩薩は、善の種となる善行を深く植えています。
釈迦牟尼仏よ、
この妙音菩薩は、どんな三昧にいて、このように、至る所で、変身して現れて、『衆生』、『生者』を仏土へ渡して解脱させているのですか？
」
釈迦牟尼仏は、華徳菩薩に告げた。

「
善い男子よ、
その三昧の名前は、現一切色身三昧である。
妙音菩薩は、この現一切色身三昧にいて、このように、量り知れないほど無数の『衆生』、『生者』に利益をもたらしているのである。
」
(釈迦牟尼仏が、)この法華経の妙音菩薩品を説いた時、
妙音菩薩と共に来ていた者達、八万四千人の菩薩は皆、現一切色身三昧を得た。
「この娑婆世界」、「この世」の量り知れないほど無数の菩薩も、また、この現一切色身三昧と「陀羅尼」、「真理の保持」を得た。
その時、妙音菩薩は、釈迦牟尼仏と、多宝仏の塔に捧げ物を捧げ終わると、本(もと)の仏国土に帰還した。
経由した諸々の仏国土は、(東西南北と上下の)六種類(の方向)に震動して、宝の蓮華を雨のように降らした。
幾百、幾千、幾万、幾億もの、種々の「伎楽」、「音楽」が鳴った。
(妙音菩薩は、)本(もと)の仏国土に到着して、八万四千の菩薩に囲まれて、浄華宿王智仏の所に至ると、浄華宿王智仏に言った。
「
浄華宿王智仏よ、
私、妙音菩薩は、『娑婆世界』、『この世』に行って、『衆生』、『生者』に利益をもたらして、釈迦牟尼仏にまみえ、多宝仏の塔を見て、礼拝して、捧げ物を捧げました。
また、法王子とも呼ばれる文殊師利菩薩にまみえました。
また、薬王菩薩、得勤精進力菩薩、勇施菩薩などに、まみえました。
また、これらの八万四千の菩薩に、現一切色身三昧を得させました。
」
(釈迦牟尼仏が、)この妙音菩薩(来往)品を説いた時、
四万二千の天人は、「無生法忍」、「生滅を超越した真理の認識」を得た。
華徳菩薩は、法華三昧を得た。

観世音菩薩普門品

その時、無尽意菩薩は、座から起立して、「偏祖右肩」して、合掌して、仏に向かって、このように言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
観世音菩薩は、どんな理由で、『観世音』という名前なのですか？
」
釈迦牟尼仏は、無尽意菩薩に告げた。

善い男子よ、
もし幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の「衆生」、「生者」が、諸々の苦悩を受けていて、この観世音菩薩について聞いて、一心に(観世音菩薩の)名前を唱えれば、観世音菩薩は、その時、その音声を観察すると、皆に(苦悩からの)解脱を得させる。
もし、この観世音菩薩の名前を保持していれば、たとえ大きな火に入っても、火に焼かれることが無い。
この観世音菩薩の威力がある神通力による物なのである。
もし大水で流されて漂流しても、その観世音菩薩の名前、称号を唱えれば、浅い場所を得ることができる。
もし幾百、幾千、幾万、幾億もの「衆生」、「生者」が金、銀、瑠璃(るり)、硨磲(しゃこ)、碼碯(めのう)、珊瑚(さんご)、琥珀(こはく)、真珠などの宝を求めて大海に入って、たとえ「黒風」、「砂を巻き上げ空を暗くする暴風」が吹いて、その「船舫」、「停泊させていた船」を漂流させて、(悪い)羅刹鬼の国に陥らせても、その中に一人でも観世音菩薩の名前を唱える者がいれば、これらの諸々の人達は皆、羅刹による災難から解脱することができ得る。
(観世音菩薩は、)このような理由で、「観世音」という名前なのである。
また、もし人が、まさに被害にあいそうなときに臨んで観世音菩薩の名前を唱えれば、この加害者が手に取った刀や杖は、すぐにバラバラに壊れて、(被害から)解脱することができ得る。
もし「三千大千国土」の中に(悪い)夜叉や(悪い)羅刹が満ちて、やって来て人を悩ましたいと欲しても、(悪い夜叉や羅刹が、)その人が観世音菩薩の名前を唱えるのを聞いたら、これらの諸々の悪い鬼は「悪眼」、「憎しみの眼」で、この人を視ることができなくなる。
また、まして、諸々の悪い鬼は、害を加えることができなくなる。

また、たとえ人が、有罪でも無罪でも、「手かせ」、「足かせ」といった「かせ」や鎖で、その身が拘束、束縛されても、観世音菩薩の名前を唱えれば、(「かせ」や鎖は)皆ことごとく切断して壊れて、(「かせ」や鎖から)解脱することができ得る。
もし「三千大千国土」の中に「怨賊」、「憎むべき賊」が満ちて、商人の主人が諸々の商人を引き連れて貴重な宝を「齎持して」、「持参して」、険しい道を通り過ぎるときに、その中の一人が、このように言ったとする。
「
諸々の善い男子よ、
恐怖するなかれ。
あなた達は、まさに、一心に、観世音菩薩の名前、称号を唱えるべきである。
この観世音菩薩は、恐れないことを『衆生』、『生者』に施すことができる。
あなた達が、もし観世音菩薩の名前を唱えれば、この憎むべき賊から、まさに、解脱することができ得る。
」
商人達は、聞くと、共に声を出して、「南無、観世音菩薩(観世音菩薩を敬礼します)」と言った。
この観世音菩薩の名前を唱えたので、(憎むべき賊から)解脱することができ得た。
無尽意菩薩よ、
観世音菩薩の威力がある神通力は、このように、「巍巍である」、「高徳で尊い」のである。
もし「衆生」、「生者」が、性欲が多くても、常に観世音菩薩について思って、観世音菩薩を恭しく敬えば、性欲を離れることができ得る。
もし怒ることが多くても、常に観世音菩薩について思って、観世音菩薩を恭しく敬えば、怒りを離れることができ得る。
もし愚かさが多くても、常に観世音菩薩について思って、観世音菩薩を恭しく敬えば、愚かさを離れることができ得る。
無尽意菩薩よ、
観世音菩薩には、これらのような、大いなる威力の神通力が有って、多くの利益をもたらすのである。
このため、「衆生」、「生者」は、常に、まさに、心で、観世音菩薩について思うべきである。
もし女の人が男の子を産みたいと欲して求めて、観世音菩薩を礼拝して捧げものを捧げれば、幸福をもたらす功徳と智慧がある男の子を産むことができる。

もし女の子を産みたいと欲して求めて、(観世音菩薩を礼拝して捧げものを捧げれば、)前世で功徳、善行という本(もと)、種を植えてきていて、多数の人に愛されて敬われる、端正な姿形の女の子を産むことができる。
無尽意菩薩よ、
観世音菩薩には、このような力が有る。
もし「衆生」、「生者」が観世音菩薩を恭しく敬って礼拝すれば、その幸福をもたらす功徳、善行は虚しくないのである。
このため、「衆生」、「生者」は皆、まさに、観世音菩薩の名前、称号を受け入れて保持するべきである。
無尽意菩薩よ、
もし人が六十二億恒河沙の菩薩の名前を受け入れて保持して、姿形を尽くして、飲食物、衣服、寝具、医薬品を捧げたら、無尽意菩薩よ、どう思うであろうか？　この善い男子や善い女の人の功徳は多いであろうか？　否か？

無尽意菩薩は、(釈迦牟尼仏に)言った。
「
とても多いです。
釈迦牟尼仏よ。
」
釈迦牟尼仏は、(無尽意菩薩に)言った。
「
もし人が観世音菩薩の名前、称号を受け入れて保持して一時でも礼拝して捧げものを捧げれば、(六十二億恒河沙の菩薩の名前を受け入れて保持して捧げものを捧げた人と、観世音菩薩の名前を受け入れて保持して捧げものを捧げた人の、)これらの二人の幸福をもたらす功徳、善行は、正に等しく、異ならず、幾百、幾千、幾万、幾億劫がたっても尽きることが無いのである。
無尽意菩薩よ、
観世音菩薩の名前、称号を受け入れて保持すると、このような、無量、無限の幸福をもたらす功徳の利益を得ることができるのである。
」
無尽意菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
観世音菩薩は、どのように、『この娑婆世界』、『この世』を巡るのですか？
どのように、『衆生』、『生者』の為に、仏法を説くのですか？

方便の力は、どのようなのですか？
」
釈迦牟尼仏は、無尽意菩薩に告げた。

善い男子よ、
もし、この仏国土、この世に「衆生」、「生者」がいて、まさに、仏の身によって、仏土へ渡すべき者には、観世音菩薩は、仏の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、「辟支仏」、「独覚」の身によって、仏土へ渡すべき者には、「辟支仏」、「独覚」の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、声聞の身によって、仏土へ渡すべき者には、声聞の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、梵天の身によって、仏土へ渡すべき者には、梵天の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、帝釈天の身によって、仏土へ渡すべき者には、帝釈天の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、自在天の身によって、仏土へ渡すべき者には、自在天の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、大自在天の身によって、仏土へ渡すべき者には、大自在天の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、天大将軍の身によって、仏土へ渡すべき者には、天大将軍の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、毘沙門天の身によって、仏土へ渡すべき者には、毘沙門天の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、小王の身によって、仏土へ渡すべき者には、小王の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、長者の身によって、仏土へ渡すべき者には、長者の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、「居士」、「未出家の修行者」の身によって、仏土へ渡すべき者には、「居士」、「未出家の修行者」の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、役人の身によって、仏土へ渡すべき者には、役人の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、バラモンの身によって、仏土へ渡すべき者には、バラモンの身を現して、その者の為に、仏法を説く。

まさに、出家者の男性や女性や在家信者の男性や女性の身によって、仏土へ渡すべき者には、出家者の男性や女性や在家信者の男性や女性の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、長者や「居士」、「未出家の修行者」や役人やバラモンの妻の身によって、仏土へ渡すべき者には、妻の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、男児や女児の身によって、仏土へ渡すべき者には、男児や女児の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達の身によって、仏土へ渡すべき者には、皆、これらを現して、その者の為に、仏法を説く。
まさに、執金剛神の身によって、仏土へ渡すべき者には、執金剛神の身を現して、その者の為に、仏法を説く。
無尽意菩薩よ、
この観世音菩薩は、このような功徳を成就していて、種々の姿形で、諸々の仏国土を巡って、「衆生」、「生者」を仏土へ渡して解脱させているのである。
このため、あなた達は、まさに、一心に、観世音菩薩に捧げものを捧げるべきである。
この観世音菩薩は、恐ろしい緊急の災難の中で、恐れることが無いことを施すことができるのである。
このため、「この娑婆世界」、「この世」の皆は、この観世音菩薩を「施無畏者」という称号で呼ぶのである。

無尽意菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
私、無尽意菩薩は、今、まさに、観世音菩薩に捧げものを捧げます。
」
すると、首の、幾百両、幾千両もの黄金の価値がある、多数の宝玉の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」を解くと、これを(観世音菩薩に)与えて、このように言った。
「
あなた、観世音菩薩よ、この『法施して』、『仏法を説くことを布施して』得た珍しい宝の『瓔珞』、『紐(ひも)状の飾り』を受け取ってください。
」

その時、観世音菩薩は、これを受け取ることを承知しなかった。
無尽意菩薩は、また、観世音菩薩に言った。
「
あなた、観世音菩薩よ、私達をあわれんで、この『瓔珞』、『紐(ひも)状の飾り』を受け取ってください。
」
その時、釈迦牟尼仏は、観世音菩薩に告げた。
「
まさに、この無尽意菩薩、『四衆』、『出家者の男女と在家信者の男女』、天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達をあわれんで、この『瓔珞』、『紐(ひも)状の飾り』を受け取りなさい。
」
その時、観世音菩薩は、諸々の「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」、天人、龍といった、人と、人ではない者達をあわれんで、その「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」を二つに分けて、一つを釈迦牟尼仏に捧げ、もう一つを多宝仏の塔に捧げた。

(釈迦牟尼仏は、無尽意菩薩に言った。)
「
無尽意菩薩よ、
観世音菩薩には、このような自由自在の神通力が有って、『娑婆世界』、『この世』を巡っているのである。
」

その時、無尽意菩薩は、(釈迦牟尼仏に)詩で質問した。
「
釈迦牟尼仏は、妙なる相を備えています。
私、無尽意菩薩は、今、くり返し、この観世音菩薩について質問します。
仏の子である観世音菩薩は、どんな理由で、『観世音』という名前なのですか？
」
妙なる相を十分に備えている尊い者である釈迦牟尼仏は、無尽意菩薩に詩で答えた。

あなた達は、観世音菩薩の行いを聴きなさい。

善く諸々の方向と場所に応じている広い誓いは、海のように深いし、「歴劫しても」、「長い時間を経過しても」思い量ることができないほどなのである。
幾千億もの多くの諸仏に、そばで仕えて、大いなる清浄な願いを起こしたのである。
私、釈迦牟尼仏は、あなた達の為に、略して説こう。
観世音菩薩の名前を聞いて、観世音菩薩の身を見て、心で観世音菩薩について思って、空虚に過ごさなければ、諸々の苦しみを滅ぼすことができる。
たとえ害意を起こされて、押されて、大きな火が燃える穴に落とされても、この観世音菩薩の力について思えば、火の穴は、変化して、池に成る。
また、巨大な海に漂流して、「龍魚」や諸々の悪い鬼による災難があっても、この観世音菩薩の力について思えば、波も沈めることができない。
また、須弥山の頂上にいて、人に押されて落とされても、この観世音菩薩の力について思えば、太陽のように、空中に浮かぶ。
また、悪人に追われて、「金剛山」から落ちても、この観世音菩薩の力について思えば、毛一本ですら損なわれない。
また、憎むべき賊に出会って、賊に囲まれて、賊の各々が刀を手に取って害を加えようとしても、この観世音菩薩の力について思えば、賊は、ことごとく慈悲の心を起こす。
また、「王難」、「王に背いたことによる刑罰」の苦しみにあって、刑に臨んで、寿命が終わりそうなとき、この観世音菩薩の力について思えば、刑に使われる刀が、すぐにバラバラに壊れる。
また、「かせ」と鎖に拘束されて、手足に「手かせ」と「足かせ」がつけられても、この観世音菩薩の力について思えば、心が晴れやかに成って、(「かせ」と鎖から)解脱することができ得る。
呪いや諸々の毒薬で身が害されようとしても、この観世音菩薩の力について思えば、呪いや毒薬の効果が加害者本人へ返る。
また、悪い羅刹、毒龍、諸々の悪い鬼などに会っても、この観世音菩薩の力について思えば、その時、毒龍や悪い鬼は、ことごとく、あえて害そうとしない。
もし、悪い獣に囲まれて、鋭利な牙や爪が恐るべきでも、この観世音菩薩の力について思えば、無限に、あらぬ方向へ走り去る。
イモリ、蛇、マムシ、サソリの毒気が火や煙のようでも、この観世音菩薩の力について思えば、すぐに、観世音菩薩の名前を唱える声を聞いて、蛇たちは自ら頭をめぐらして去る。

雲から雷鳴が鳴って、雷光がはしって、雹(ひょう)が降って、大雨が降り注いでも、この観世音菩薩の力について思えば、まさに、その時、雲散霧消する。
「衆生」、「生者」が、困難、災厄をこうむって、量り知れないほど無数の苦しみが身に迫っても、観世音菩薩の妙なる知力は、世間の苦しみから救うことが可能なのである。
(観世音菩薩は、)神通力を十分に備えていて、広く智慧の「方便」、「便宜的な方法」を修習していて、十方の諸々の仏国土で(観世音菩薩が)身を現さない「刹(土)」、「仏国土」は無いのである。
(観世音菩薩は、)地獄、餓鬼界、畜生界といった種々の諸々の「悪趣」、「悪道」と、生老病死の苦しみを、徐々に、ことごとく、滅ぼす。
(観世音菩薩には、)真観、清浄観、広大智慧観、悲観、慈観がある。
(観世音菩薩を)常に願い、常に仰ぎ見なさい。
(観世音菩薩の、)汚れが無い、清浄な光の智慧の太陽は、諸々の闇を破り、災難の風と火を降伏させ、世間をあまねく明るく照らす。
(観世音菩薩の)「悲体」の戒は、「雷震」、「落雷」のようなのである。
(観世音菩薩の)思いやる心の絶妙さは、大いなる雲のようなのである。
(観世音菩薩は、)甘露のような仏法という雨を注いで、煩悩の炎を滅ぼして除去する。
訴訟されて争って役所の中にいても、戦争している軍の陣の中で恐れていても、この観世音菩薩の力について思えば、多数の怨みを、ことごとく、退散させる。
妙なる音声がある観世音菩薩には、「梵音」、「仏の音声」、海の潮のような音声、この世より優れている音声がある。
このため、常に、(観世音菩薩について)思うべきである。
思いから思いへ、疑いを生じるなかれ。
観世音菩薩は、清浄で、神聖で、苦悩や死や災厄において生者の為に頼るべき者と成ることが可能である。
(観世音菩薩は、)一切の功徳を備えている。
(観世音菩薩は、)思いやりの眼で、「衆生」、「生者」を視ている。
「福聚」、「幸福をもたらす多数の功徳、善行」は海のように無量である。
このため、まさに、(観世音菩薩を)頂戴して礼拝するべきである。

その時、持地菩薩は、座から起立して、前に出て、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、

もし『衆生』、『生者』が、この法華経の観世音菩薩(普門)品の自由自在な業、『普門示現』、『あまねく門を示して現す』神通力を聞けば、まさに、知るべきです、この人の功徳は少なくないのです。
」
釈迦牟尼仏が、この法華経の(観世音菩薩)普門品を説いた時、大衆の中の、八万四千の「衆生」、「生者」は皆、無双の、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を起こした。

陀羅尼品

その時、薬王菩薩は、座から起立して、「偏袒右肩」して、合掌して、釈迦牟尼仏に向かって、このように言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
もし善い男子や善い女の人が法華経を受け入れて保持することができて、読んで通じて利益を得たり、法華経を書き写したりしたら、どれほどの幸福を得るのですか？
」
釈迦牟尼仏は、薬王菩薩に告げた。
「
もし善い男子や善い女の人が、八百万億那由他恒河沙に等しい数の諸仏に捧げものを捧げたら、あなた、薬王菩薩は、どう思うであろうか？
その人が得る幸福は多いであろうか？　否か？
」
(薬王菩薩は、釈迦牟尼仏に答えた。)
「
とても多いです。
釈迦牟尼仏よ。
」
釈迦牟尼仏は、(薬王菩薩に)言った。
「
もし善い男子や善い女の人が、四句の詩の一つでも、この法華経を受け入れて保持して、読んで、意義を理解して、教えの通りに修行したら、幸福をもたらす功徳は、とても多いのである。
」
その時、薬王菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
私は、今、まさに、法華経の仏法を説いている者に、『陀羅尼の』、『真理の保持である』、『呪』、『仏の言葉』を与えて、この者を守護します。
」
すると、(薬王菩薩は、)「呪」、「仏の言葉」を(サンスクリット語で)説いて言った。

「
安爾(アンニ)、曼爾(マンニ)、摩禰(マネイ)、摩摩禰(ママネイ)、旨隷(シレイ)、遮梨第(シャリテイ)、賖咩(シャニャ)、賖履多瑋(シャビタイ)、羶帝(センテイ)、目帝(モクテイ)、目多履(モクタビ)、娑履(シャビ)、阿瑋娑履(アイシャビ)、桑履(ソウビ)、娑履(シャビ)、叉裔(シャエイ)、阿叉裔(アシャエイ)、阿耆膩(アキニ)、羶帝(センテイ)、賖履(シャビ)、陀羅尼(ダラニ)、阿盧伽婆娑簸蔗毘叉膩(アロキャバシャバシャビシャニ)、禰毘剃(ネイビテイ)、阿便哆邏禰履剃(アベンタラネイビテイ)、阿亶哆波隷輸地(アタンタハレイシュタイ)、欧究隷(ウクレイ)、牟究隷(ムクレイ)、阿羅隷(アラレイ)、波羅隷(ハラレイ)、首迦差(シュキャシ)、阿三磨三履(アサンマサンビ)、仏駄毘吉利袠帝(ボッダビキリチテイ)、達磨波利差帝(ダルマハリシテイ)、僧伽涅瞿沙禰(ソウギャネックシャネイ)、婆舎婆舎輸地(バシャバシャシュタイ)、曼哆邏(マンタラ)、曼哆邏叉夜多(マンタラシャヤタ)、郵楼哆(ウロタ)、郵楼哆憍舎略(ウロタキョウシャリャ)、悪叉邏(アシャラ)、悪叉冶多冶(アシャヤタヤ)、阿婆盧(アバロ)、阿摩若那多夜(アマニャナタヤ)。
」
(薬王菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。)
「
釈迦牟尼仏よ、
この『陀羅尼の』、『真理の保持である』、『神呪』、『仏の言葉』は、六十二億恒河沙に等しい数の諸仏の所説なのです。
もし、この法華経の『法師』、『仏法の教師』をおかして傷つければ、これらの諸仏をおかして傷つけたことに成るのです。
」
その時、釈迦牟尼仏は、薬王菩薩をほめたたえて言った。
「
善いかな。
善いかな。
薬王菩薩よ、あなたは、この法華経の『法師』、『仏法の教師』を思いやって、擁護して、この『陀羅尼』、『仏の言葉』を説いた。
諸々の『衆生』、『生者』に多くの利益をもたらす。
」
その時、勇施菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、

私、勇施菩薩も、また、法華経を擁護して、読ませて、受け入れさせて保持させる為に、『陀羅尼』、『仏の言葉』を説きます。
もし、この法華経の『法師』、『仏法の教師』が、この『陀羅尼』、『仏の言葉』を得れば、夜叉、羅刹、富単那(ブータ)、吉蔗、鳩槃荼(クンバンダ)、餓鬼などが、その『法師』、『仏法の教師』の短所をうかがい求めても、手がかりを得ることはできないのです。
」
すると、(勇施菩薩は、)釈迦牟尼仏の前で、「呪」、「仏の言葉」を(サンスクリット語で)説いて言った。
「
痤隷(ザレイ)、摩訶痤隷(マカザレイ)、郁枳(ウキ)、目枳(モッキ)、阿隷(アレイ)、阿羅婆第(アラバテイ)、涅隷第(ネッレイテイ)、涅隷多婆第(ネッレイタバテイ)、伊緻柅(イテニ)、韋緻柅(イテニ)、旨緻柅(シテニ)、涅隷墀柅(ネッレイチニ)、涅犁墀婆底(ネッレイチバチ)。
」
(勇施菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。)
「
釈迦牟尼仏よ、
この『陀羅尼の』、『真理の保持である』、『神呪』、『仏の言葉』は、『恒河沙』、『ガンジス川の砂のように無数』に等しい数の諸仏の所説ですし、また、皆、喜びます。
もし、この法華経の『法師』、『仏法の教師』をおかして傷つければ、これらの諸仏をおかして傷つけたことに成るのです。
」
その時、世を守護する者である、毘沙門天は、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
私、毘沙門天も、また、『衆生』、『生者』を思いやって、この法華経の『法師』、『仏法の教師』を擁護して、この『陀羅尼』、『仏の言葉』を説きます。
」
すると、(毘沙門天は、)「呪」、「仏の言葉」を(サンスクリット語で)説いて言った。
「
阿梨(アリ)、那梨(ナリ)、㝹那梨(トナリ)、阿那盧(アナロ)、那履(ナビ)、拘那履(クナビ)。

」
(毘沙門天は、釈迦牟尼仏に言った。)
「
釈迦牟尼仏よ、
この『神呪』、『仏の言葉』で、法華経の『法師』、『仏法の教師』を擁護します。
私、毘沙門天も、また、自ら、まさに、この法華経を保持している者を擁護して、百由旬内に、諸々の、おとろえや、わずらいを無くします。
」
その時、持国天が、この会の中にいて、千万億那由他の乾闥婆たちに恭しく敬われて囲まれて、前に出て、釈迦牟尼仏の所に行って、合掌して、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
私、持国天も、また、『陀羅尼の』、『真理の保持である』、『神呪』、『仏の言葉』で、法華経を保持している者を擁護します。
」
すると、(持国天は、)「呪」、「仏の言葉」を(サンスクリット語で)説いて言った。
「
阿伽禰(アキャネイ)、伽禰(キャネイ)、瞿利(クリ)、乾陀利(ケンダリ)、旃陀利(センダリ)、摩蹬耆(マトギ)、常求利(ジョウグリ)、浮楼莎柅(ブロシャニ)、頞底(アンチ)。
」
(持国天は、釈迦牟尼仏に言った。)
「
釈迦牟尼仏よ、
この『陀羅尼の』、『真理の保持である』、『神呪』、『仏の言葉』は、四十二億の諸仏の所説なのです。
もし、この法華経の『法師』、『仏法の教師』をおかして傷つければ、これらの諸仏をおかして傷つけたことに成るのです。
」
その時、羅刹女たちがいた。
一人目の名前は、藍婆であった。
二人目の名前は、毘藍婆であった。
三人目の名前は、曲歯であった。

四人目の名前は、華歯であった。
五人目の名前は、黒歯であった。
六人目の名前は、多髪であった。
七人目の名前は、無厭足であった。
八人目の名前は、持瓔珞であった。
九人目の名前は、皐諦であった。
十人目の名前は、奪一切衆生精気であった。
これら十人の羅刹女と、鬼子母神と、その子と、眷属は、共に、釈迦牟尼仏の所に行って、同じく声を出して、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
私達、十人の羅刹女と、鬼子母神と、その子と、眷属も、また、法華経を読んで受け入れて保持している者を擁護して、その者のおとろえや、わずらいを除去したいと欲します。
もし法華経の『法師』、『仏法の教師』の短所をうかがい求めても、手がかりを得ることができないようにさせます。
」
すると、(十人の羅刹女と、鬼子母神と、その子と、眷属は、)釈迦牟尼仏の前で、「呪」、「仏の言葉」を(サンスクリット語で)説いて言った。
「
伊提履(イテイビ)、伊提泯(イテイミン)、伊提履(イテイビ)、阿提履(アテイビ)、伊提履(イテイビ)、泥履(デイビ)、泥履(デイビ)、泥履(デイビ)、泥履(デイビ)、泥履(デイビ)、楼醯(ロケイ)、楼醯(ロケイ)、楼醯(ロケイ)、楼醯(ロケイ)、多醯(タケイ)、多醯(タケイ)、多醯(タケイ)、兜醯(トケイ)、㝹醯(トケイ)。
」
(十人の羅刹女と、鬼子母神と、その子と、眷属は、言った。)
「
私達の頭上に上っても、法華経の『法師』、『仏法の教師』を悩ますことなかれ。
夜叉、羅刹、餓鬼、富単那(ブータ)、吉蔗、毘陀羅、犍駄、烏摩勒伽、阿跋摩羅、夜叉吉蔗、人吉蔗によって、もしくは、一日間、二日間、三日間、四日間から七日間の熱病によって、もしくは、常時、熱病によって、天罰を与える。
男の姿形、女の姿形、男児の姿形、女児の姿形で、(現実でも、)夢の中でも、また、(法華経の『法師』、『仏法の教師』を)悩ますことなかれ。

」
すると、(羅刹女たちは、)釈迦牟尼仏の前で、詩で説いて言った。
「
もし私の『呪』、『言葉』に従わず、法華経の仏法を説いている者を悩まして心を乱したら、『阿梨樹枝』のように、頭が七つに破裂する。
父や母を殺す罪を犯したかのように。
また、油を手元に押さえて置く罪、升(ます)と秤(はかり)で人をだます罪、『調達』、『提婆達多』が僧団を破壊した罪を犯したかのように。
この法華経の『法師』、『仏法の教師』に罪を犯した者は、まさに、このような災いを得る。
」
諸々の羅刹女たちは、この詩を説き終わると、釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
私達、羅刹女たちも、また、まさに、この身で、自ら、この法華経を受け入れて保持して読んで修行している者を擁護して、安穏を得させて、諸々の、おとろえや、わずらいから離れさせて、多数の毒薬の効果を消します。
」
釈迦牟尼仏は、諸々の羅刹女たちに告げた。
「
善いかな。
善いかな。
あなた達、羅刹女たちが、ただ、法華経の名前を受け入れて保持している者を擁護だけして、得る幸福は、量ることができないほどなのである。
まして、功徳、善行を十分に備えて、法華経を受け入れて保持して、華、香、『瓔珞』、『紐(ひも)状の飾り』、抹香、塗香、焼香、『幢旛』と『天蓋』、『伎楽』、『音楽』、蘇の蝋燭(ロウソク)、油の蝋燭(ロウソク)、蘇摩那の華の香油の蝋燭(ロウソク)、瞻蔔の華の香油の蝋燭(ロウソク)、婆師迦の華の香油の蝋燭(ロウソク)、優鉢羅華の香油の蝋燭(ロウソク)といった諸々の香油の蝋燭(ロウソク)などの諸々の蝋燭(ロウソク)を燃やすことといった、これら幾百種類、幾千種類もの捧げものを法華経に捧げる者を擁護して得る幸福は、量ることができないほどなのである。
皐諦たちよ、あなた達、羅刹女たちと、眷属は、まさに、このような法華経の『法師』、『仏法の教師』を擁護しなさい。
」

釈迦牟尼仏が、この法華経の陀羅尼品を説いた時、六万八千人が、「無生法忍」、「生滅を超越した真理の認識」を得た。

妙荘厳王本事品

その時、釈迦牟尼仏は、諸々の大衆に告げた。

昔、古の世、幾不可思議阿僧祇もの、無限なほど、量り知れないほど無数の劫を過ぎて、雲雷音宿王華智仏と言う名前の仏がいた。
(雲雷音宿王華智仏の)仏国土の名前は、光明荘厳であった。
(雲雷音宿王華智仏の)劫の名前は、喜見であった。
この雲雷音宿王華智仏の仏法の(仏国土と時代の)中に、妙荘厳と言う名前の王がいた。
その妙荘厳王の夫人の名前は、浄徳と言った。
(妙荘厳王には、)二人の子がいた。
一人目の名前は、浄蔵であった。
二人目の名前は、浄眼であった。
これらの二人の子には、大いなる神通力、幸福をもたらす功徳、智慧が有って、長い間、菩薩の所行の道を修行していた。
(菩薩の所行の道とは、)いわゆる、「檀(那)波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禅(那)波羅蜜、般若波羅蜜」、「布施、持戒、忍辱、精進、静慮、知」、「六波羅蜜」と、「方便波羅蜜」、「方便」と、「慈悲喜捨」と、「三十七品助道法」、「三十七品菩提分法」である。
(妙荘厳王の二人の子は、これらを)皆ことごとく、明らかに了解して、通達していた。
また、(妙荘厳王の二人の子は、)菩薩の浄三昧、日星宿三昧、浄光三昧、浄色三昧、浄照明三昧、長荘厳三昧、大威徳蔵三昧を得ていて、これらの三昧に、また、ことごとく通達していた。
その時、この雲雷音宿王華智仏は、妙荘厳王を導いて仏道に引き入れようと欲して、また、「衆生」、「生者」をあわれんで、この法華経を説いていた。
その時、浄蔵と、浄眼と言う(妙荘厳王の)二人の子は、その母の所に行くと、両手の十本の指の爪を合わせて合掌して、母に言った。
「
願わくば、母よ、雲雷音宿王華智仏の所へ行ってください。
私達も、また、まさに、(母に)付き従って、(雲雷音宿王華智仏に)親しみ近づいて、捧げものを捧げて、礼拝します。
理由は何か？　(と言うと、)

この雲雷音宿王華智仏は、一切の天人と人の大衆の中で、法華経を説いています。
(法華経を)まさに、聴いて受け入れるべきです。
」
母は、子達に告げて言った。
「
あなた達の父(である妙荘厳王)は、外道を信じて受け入れて、バラモンの教えに深く執着しています。
あなた達は、まさに、(父である妙荘厳王の所へ)行って、父(である妙荘厳王)に言って、父(である妙荘厳王)と共に行きなさい。
」
浄蔵と、浄眼は、両手の十本の指の爪を合わせて合掌して、母に言った。
「
私達は、『法王子』、『菩薩』なのです。
そのため、(あえて、)この邪悪な見解を持つ(父である妙荘厳王の)家に生まれたのです。
」
母は、子達に告げて言った。
「
あなた達は、まさに、あなた達の父(である妙荘厳王)を憂慮して、『神変』、『神通力による不思議な変化』を現しなさい。
もし、(あなた達の神通力を)見れば、(父である妙荘厳王の)心は必ず清浄になって、私達が、雲雷音宿王華智仏の所へ行くのを許すでしょう。
」
この時、(妙荘厳王の)二人の子は、その父(である妙荘厳王)を思いやって、飛んで、七多羅樹の高さ、空中に浮かんで、空中で「行住坐臥」、「歩いたり、立ち止まったり、坐ったり、横に成ったり」したり、体の上に水を出現させたり、体の下に火を出現させたり、体の下に水を出現させたり、体の上に火を出現させたり、大きな体を出現させて空中に満ちたり、また(元の)小さな体を出現させたり、小さな体から、また、大きな体を出現させたり、空中で消えて、忽然と地上に出現したり、地が水であるかのように地中に入ったり、水が地であるかのように水を踏んで歩いたりする種々の「神変」、「神通力による不思議な変化」を現して、その父である(妙荘厳)王の心を清浄にして、信じさせて理解させた。

その時、父(である妙荘厳王)は、子の神通力が、このようであるのを見て、心が大いに喜んで未曾有になることを得て、合掌して、子に向かって、言った。
「
あなた達の師は誰なのですか？
誰の弟子なのですか？
」
(妙荘厳王の)二人の子は、(父である)大いなる(妙荘厳)王に言った。
「
あの雲雷音宿王華智仏は、今、七種類の宝の菩提樹の下にいて、法座の上で坐禅して、一切の世間の天人と人の大衆の中で、広く、法華経を説いています。
(あの雲雷音宿王華智仏が、)私達の師なのです。
私達は、(あの雲雷音宿王華智仏の)弟子なのです。
」
父(である妙荘厳王)は、子達に言った。
「
私、妙荘厳王も、今、また、あなた達の師(である雲雷音宿王華智仏)にまみえたいと欲します。
共に、行きましょう。
」
この時、(妙荘厳王の)二人の子は、空中から下りて、その母の所に行って、合掌して、母に言った。
「
父(である妙荘厳)王は、今、既に、信じて理解して、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を求める心を起こすことに耐えることができて任せることができるようになりました。
私達は、父(である妙荘厳王)の為に、既に、『仏事』、『仏の働き』をなしました。
願わくば、母よ、あの雲雷音宿王華智仏の所で出家して仏道修行することを許してください。
」
その時、(妙荘厳王の)二人の子は、くり返し、その思いを話したいと欲して、詩で母に言った。
「

願わくば、母よ、私達を(家から)解放して、出家させて、『沙門』、『出家者』にならせてください。
諸仏には会うのは、とても難しいのです。
私達は、仏に従って学びます。
(三千年に一度だけ咲く)優曇波羅華の(開花に出会うのは難しい)ような物なのです。
仏に会うのは、この優曇波羅華に出会うよりも、難しいのです。
また、諸々の災難から解脱するのは、難しいのです。
願わくば、私達の出家を許してください。
」
母は、(妙荘厳王の子たちに)言った。
「
あなた達の出家を許します。
理由は何か？　(と言うと、)
仏に会うのは難しいからです。
」
この時、(妙荘厳王の)二人の子は、父(である妙荘厳王)と母に言った。
「
善いかな。
父(である妙荘厳王)と母よ、願わくば、これから、雲雷音宿王華智仏の所に行って、親しくまみえて、捧げものを捧げてください。
理由は何か？　(と言うと、)
仏に会うのは難しいのです。
(三千年に一度咲く)優曇波羅華のように。
また、眼が一つしかない亀が浮木に巡り合って穴に入るのが難しい(という仏教の例え話の)ように。
私達は、前世の、幸福をもたらす善行が深く厚かったので、仏法(の時と場所)に生まれて、仏法に出会えました。
このため、父(である妙荘厳王)と母よ、まさに、私達を許して、出家させてください。
理由は何か？　(と言うと、)
諸仏に会うのは難しいのです。
(仏がいる)時に巡り会うのも、また、難しいのです。
」
この時、妙荘厳王の後宮にいた八万四千人は皆ことごとく、この法華経を受け入れて保持するのに耐えることができて任せることができるようになった。

浄眼菩薩は、法華三昧に、長い間、既に、通達していた。
浄蔵菩薩は、既に、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の劫の間、「離諸悪趣三昧」に通達していた。
(浄蔵菩薩は、)一切の「衆生」、「生者」を諸々の「悪趣」、「悪道」、「地獄など」から離れさせたいと欲していたからである。
その(妙荘厳)王の夫人は、「諸仏集三昧」を得て、諸仏の秘密の(智慧の)蔵を知ることができた。
(妙荘厳王の)二人の子は、このように、「方便」、「便宜的な方法」の力で、善く、その父(である妙荘厳王)を教化して、(妙荘厳王の)心を信じさせて理解させて、仏法を好ませて願わせた。
この時、妙荘厳王は群臣と眷属と共に、浄徳夫人は後宮の女官と眷属と共に、その(妙荘厳)王の二人の子は四万二千人と共に、同時に、共に、雲雷音宿王華智仏の所に行って、到着すると、頭を雲雷音宿王華智仏の足につけて敬礼して、雲雷音宿王華智仏の周りを三周回って敬礼して、退くと、一面に留まった。
その時、この雲雷音宿王華智仏は、妙荘厳王の為に、仏法を説いて、「示教利喜した」、「教示して鼓舞して喜ばせた」。
妙荘厳王は、大いに喜んだ。
その時、妙荘厳王と、その夫人は、幾百、幾千もの価値の、真珠の「瓔珞」、「紐(ひも)状の飾り」を首から解いて、雲雷音宿王華智仏の上に、まき散らすと、空中で変化して四本の柱がある宝の台に成った。
宝の台の中には、大いなる宝の床が有って、幾百、幾千、幾万もの天の衣が敷かれていた。
その上に、仏がいて、結跏趺坐していて、大いなる光明を放った。
その時、妙荘厳王は、このように思った。
「
仏の身体は、希有で、端正で、荘厳で、特殊で、第一の微細な絶妙な色形を成就されている。
」
その時、雲雷音宿王華智仏は、「四衆」、「出家者の男女と在家信者の男女」に言った。
「
あなた達、この妙荘厳王が、私、雲雷音宿王華智仏の前で、合掌して立っているのが見えるか？　否か？

この妙荘厳王は、私、雲雷音宿王華智仏の仏法の中で、出家者と成って、『助仏道法』、『三十七品助道法』、『三十七品菩提分法』を精勤に修習して、まさに、娑羅樹王仏と言う称号の仏に成ることができ得る。
(娑羅樹王仏の)仏国土の名前は、大光である。
(娑羅樹王仏の)劫の名前は、大高王である。
その娑羅樹王仏には、量り知れないほど無数の菩薩達と、量り知れないほど無数の声聞がいる。
その(娑羅樹王仏の)仏国土は、平らで正しい。
(娑羅樹王仏の)功徳は、このようになる。
」
その時、この妙荘厳王は、国を弟に付属させて譲って、妙荘厳王と夫人と二人の子と諸々の眷属は仏法の中で出家して仏道修行した。
妙荘厳王は、出家すると、八万四千年間、常に、精進に勤めて、妙法華経を修行した。
(妙荘厳王は、)この八万四千年が過ぎた後、一切浄功徳荘厳三昧を得た。
すると、(妙荘厳王は、)七多羅樹の高さまで空中に上昇して、雲雷音宿王華智仏に言った。
「
雲雷音宿王華智仏よ、
これら私の二人の子は、既に『仏事』、『仏の働き』をなして、神通力による変化によって、私の邪悪な心を転じて、仏法の中に安住させて、雲雷音宿王華智仏にまみえさせました。
これら二人の子は、私、妙荘厳王の『善知識』、『善友』で、前世の、善の種となる善行を発揮して、私、妙荘厳王に利益をもたらしたいと欲したため、今世で、私、妙荘厳王の家に生まれたのです。
」
その時、雲雷音宿王華智仏は、妙荘厳王に言った。
「
その通り、その通り、あなたの言う通りである。
もし善い男子や善い女の人が善の種となる善行を植えれば、生から生へ、『善知識』、『善友』を得る。
その『善知識』、『善友』は、能(よ)く『仏事』、『仏の働き』をなして、『示教利喜して』、『教示して鼓舞して喜ばせて』、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』に入らせる。
大いなる(妙荘厳)王よ、まさに、知るべきである。
『善知識』、『善友』は、大いなる因縁なのである。

いわゆる、(『善知識』、『善友』は、)教化して導いて、仏にまみえさせて、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を求める心を起こさせる。
大いなる(妙荘厳)王よ、あなたは、これらの二人の子が見えるか？　否か？
これらの二人の子は、既に、かつて、六十五百千万億那由他恒河沙の諸仏に、捧げものを捧げていて、親しみ近づいていて、恭しく敬っていて、諸仏の所で、法華経を受け入れて保持していて、邪悪な見解を持ってしまっている『衆生』、『生者』をあわれんで、正しい見解に住まわせる。
」
妙荘厳王は、空中から下りて、雲雷音宿王華智仏に言った。
「
雲雷音宿王華智仏よ、
仏は、とても希有なのです。
(仏は、)功徳と智慧によって、頭頂の『肉髻』から光明を現して照らします。
その(仏の)眼は、長く、広く、紺青色です。
(仏の)眉間の『白毫相』の白さは、明るい月のようです。
(仏の)歯は白く、整っていて密で、常に光明が有ります。
(仏の)唇の色は、好い赤色で、『頻婆果』のようです。
」
その時、妙荘厳王は、雲雷音宿王華智仏の、これらのような幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れない無数の功徳をほめたたえると、雲雷音宿王華智仏の前で、一心に、合掌して、また、雲雷音宿王華智仏に言った。
「
雲雷音宿王華智仏よ、
未曾有なことです。
仏法は、不可思議な微細で絶妙な功徳を十分に備えていて、成就しています。
(仏が)教え戒めている所行は、安穏としていて、快く、善いです。
私、妙荘厳王は、今日から、心の動きに自ら従わず、邪悪な見解、思い上がり、怒りといった諸々の悪い心を生じないようにします。
」
(妙荘厳王は、)このような言葉を言うと、雲雷音宿王華智仏に敬礼して、退出した。

釈迦牟尼仏は、大衆に告げた。
「
どう思うであろうか？
妙荘厳王は、今の華徳菩薩なのである。

その浄徳夫人は、今、仏の前で、光によって照らされている荘厳相菩薩なのである。
妙荘厳王と諸々の眷属をあわれんで、この妙荘厳王の家の中にうまれた、その二人の子は、今の薬王菩薩と薬上菩薩なのである。
この薬王菩薩と薬上菩薩は、このような諸々の大いなる功徳を成就すると、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の諸仏の所で、多数の功徳の本(もと)となる善行を種のように植えて、不可思議な諸々の善い功徳を成就しているのである。
もし人が、(薬王菩薩と薬上菩薩という、)これら二人の菩薩の名前を知っていれば、一切の世間の諸々の天人と人は、まさに、礼拝するべきである。
」
釈迦牟尼仏が、この法華経の妙荘厳王本事品を説いた時、八万四千人が、「遠塵離垢して」、「汚れ、煩悩から離れて」、「諸法」、「全てのもの」の中で、「法眼浄」、「法眼」を得た。

普賢菩薩勧発品

その時、普賢菩薩は、自由自在な神通力と、威徳と、名声をもって、数えることが不可能なほど、無限なほど、量り知れないほど無数の大いなる菩薩と、東方より、やって来た。
(普賢菩薩達が、)経由した諸国は、あまねく皆、震動して、宝の蓮華を雨のように降らした。
また、幾百、幾千、幾万、幾億もの量り知れないほど無数の種々の「伎楽」、「音楽」が鳴った。
また、(普賢菩薩達は、)無数の諸々の天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽といった、人と、人ではない者達の大衆に囲まれていた。
(普賢菩薩達は、)各々、威徳と神通力を現して、「娑婆世界」、「この世」の「耆闍崛山」、「霊鷲山」の中に到着すると、頭を釈迦牟尼仏の足につけて敬礼して、釈迦牟尼仏の周りを七周、右に回って敬礼して、(普賢菩薩は、)釈迦牟尼仏に言った。
「
釈迦牟尼仏よ、
私、普賢菩薩は、宝威徳上王仏の仏国土で、『この娑婆世界』、『この世』で、法華経が説かれているのを、遥か遠くから聞いて、幾百、幾千、幾万、幾億もの、無限なほど、量り知れないほど無数の諸々の菩薩達と共に、やって来て、聴いて受け入れます。
ただ、願わくば、釈迦牟尼仏よ、まさに、私達、生者の為に、この法華経を説いてください。
(ところで、)善い男子や善い女の人は、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、どうしたら、この法華経を得ることができますか？
」
釈迦牟尼仏は、普賢菩薩に告げた。
「
善い男子や善い女の人は、四つのものを成就すれば、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、まさに、この法華経を得る。
一つ目は、諸仏に念頭に置かれて護られることである。
二つ目は、諸々の功徳、善行の本(もと)を種のように植えることである。
三つ目は、『正定聚』、『仏に成ることが決定している不退転の境地の菩薩達』に入ることである。

四つ目は、一切の『衆生』、『生者』を救う心を起こすことである。
善い男子や善い女の人は、これらの四つのものを成就すれば、私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、必ず、この法華経を得る。
」
その時、普賢菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。

釈迦牟尼仏よ、
「後五百歳」、「末法」で、濁って汚れた悪い世の中で、この法華経を受け入れて保持している者がいれば、私、普賢菩薩は、まさに、守護して、その者のおとろえと、わずらいを除去して、安穏とさせます。
また、(悪い鬼などが、)うかがい求めても、その者の手がかりを得られないようにさせます。
(そのため、)魔、魔の子、魔女、魔民、魔にとりつかれた者、悪い夜叉、悪い羅刹、鳩槃荼(クンバンダ)、毘舎闍(ピシャーチャ)、吉蔗、富単那(ブータ)、韋陀羅などの諸々の人を悩ます者は皆、手がかりを得ることができません。
この人が、歩いたり、立ったりして、この法華経を読めば、その時、私、普賢菩薩は、六つの牙をもった白い象(ゾウ)の王に乗って、大いなる菩薩達と共に、その場所に行って、自ら身を現して、捧げものを捧げて、守護して、その者の心を慰安します。
法華経に捧げものを捧げるためでもあります。
この人が、坐って、この法華経について思考すれば、その時、私、普賢菩薩は、白い象(ゾウ)の王に乗って、その人の前に現れて、もし、その人が法華経で一句や一つの詩を忘れている所が有れば、私、普賢菩薩は、まさに、それを教えて、共に読んで、通じさせて利益を得させます。
その時、法華経を受け入れて保持して読んでいる者は、私、普賢菩薩の身を見て、とても大いに喜んで、ますます、また精進して、私、普賢菩薩を見たため、三昧と、陀羅尼を得ます。
これらの陀羅尼を旋陀羅尼、百千万億旋陀羅尼、法音方便陀羅尼と名づけます。
これらの陀羅尼を得ます。
釈迦牟尼仏よ、
もし後世に、「後五百歳」、「末法」で、濁って汚れた悪い世の中で、出家者の男女や在家信者の男女のうち、法華経を探求している者、受け入れて保持している者、読んでいる者、書き写している者が、この法華経を修習したいと欲したならば、まさに、二十一日の間中、一心に、精進すれば、満二十一日後、私、普賢菩薩は、まさに、六つの牙をもった白い象(ゾウ)の王に

乗って、量り知れないほど無数の菩薩に囲まれて、一切の「衆生」、「生者」が喜んで見る身をその人の前に現して、その人の為に仏法を説いて、「示教利喜して」、「教示して鼓舞して喜ばせて」、また、この「陀羅尼の」、「真理の保持である」、「呪」、「仏の言葉」をその人に与えます。
この「陀羅尼」、「仏の言葉」を得れば、人ではない者が破壊することはできなくなりますし、女の人に惑わされて心が乱されることがなくなります。
私、普賢菩薩、自身も、また、自ら、常に、この人を護ります。
ただ、願わくば、釈迦牟尼仏よ、私、普賢菩薩が、この「陀羅尼」、「仏の言葉」を説くことを許してください。

すると、(普賢菩薩は、)釈迦牟尼仏の前で、「呪」、「仏の言葉」を(サンスクリット語で)説いて言った。
「
阿檀地(アタンダイ)、檀陀婆地(タンダハダイ)、檀陀婆帝(タンダハテイ)、檀陀鳩賒隷(タンダクシャレイ)、檀陀修陀隷(タンダシュダレイ)、修陀隷(シュダレイ)、修陀羅婆底(シュダラハチ)、仏駄波羶禰(ボッダハセンネイ)、薩婆陀羅尼阿婆多尼(サルバダラニアバタニ)、薩婆婆沙阿婆多尼(サルババシャアバタニ)、修阿婆多尼(シュアバタニ)、僧伽婆履叉尼(ソウギャハビシャニ)、僧伽涅伽陀尼(ソウギャネッギャダニ)、阿僧祇(アソウギ)、僧伽婆伽地(ソウギャハギャダイ)、帝隷阿惰僧伽兜略阿羅帝波羅帝(テイレイアダソウギャトリャアラテイハラテイ)、薩婆僧伽三摩地伽蘭地(サルバソウギャサンマジキャランダイ)、薩婆達磨修波利刹帝(サルバダルマシュハリセッテイ)、薩婆薩埵楼駄憍舎略阿㝹伽地(サルバサッタロダキョウシャリャアトギャダイ)、辛阿毘吉利地帝(シンアビキリダイテイ)。
」
(普賢菩薩は、釈迦牟尼仏に言った。)

釈迦牟尼仏よ、もし菩薩が、この「陀羅尼」、「仏の言葉」を聞くことができ得たら、まさに、知るべきです、普賢菩薩の神通力による物なのです。
もし法華経が「閻浮提」、「この世」で行われて、法華経を受け入れて保持している者がいれば、まさに、このように思うべきです。「皆、普賢菩薩の威力がある神通力による物なのである」と。
もし法華経を受け入れて保持して、読んで、正しく記憶して、その意義を理解して、教えの通りに修行すれば、まさに、知るべきです、この人は、普賢菩薩の行いを行(おこな)っていて、無限なほど、量り知れないほど無数の諸

仏の所で、善の種となる善行を深く植えていて、諸仏に手で、その頭を撫でてもらえます。
もし、ただ法華経を書き写しただけでも、この人は、命が終わると、まさに、忉利天の上に生まれて、この生まれた時、八万四千の天女が、多数の「伎楽」、「音楽」を鳴らして、やって来て、この人を迎えます。
この人は、七種類の宝の冠(かんむり)をつけて、天女の女官の中で、娯楽の快楽をあじわいます。
まして、法華経を受け入れて保持して、読んで、正しく記憶して、その意義を理解して、教えの通りに修行すれば、この人は、なおさら良くむかえられます。
もし人が法華経を受け入れて保持して、読んで、その意義を理解すれば、この人は、命が終わると、幾千もの諸仏が手を差し伸べてくれて、恐れなくさせてもらえて、「悪趣」、「悪道」に堕ちなくさせてもらえて、兜率天の上の弥勒菩薩の所へ行きます。
弥勒菩薩は、仏の「三十二相」が有って、大いなる菩薩達に囲まれていて、幾百、幾千、幾万、幾億もの天女の眷属がいて、その中に生まれます。
(法華経には、)これらの功徳による利益が有ります。
このため、知者は、まさに、一心に、法華経を、自ら書いたり、他人に書かせたりして、受け入れて保持して、読んで、正しく記憶して、教えの通りに修行するべきです。
釈迦牟尼仏よ、
私、普賢菩薩は、今、神通力によって、この法華経を守護して、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、「閻浮提」、「この世」の内に、法華経を、広く流布させて、断絶させません。

その時、釈迦牟尼仏は、(普賢菩薩を)ほめたたえて言った。

善いかな。
善いかな。
普賢菩薩よ、あなたは、この法華経を護って助けて、多くの場所の「衆生」、「生者」を安楽にさせて、利益をもたらすことができる。
あなた、普賢菩薩は、既に、不可思議な功徳と、深い大いなる思いやりを成就していて、遠い昔から、「阿耨多羅三藐三菩提」、「無上普遍正覚」を求める心を起こしていて、この神通力による願いをして、この法華経を守護することができる。

私、釈迦牟尼仏は、まさに、神通力で、普賢菩薩の名前を受け入れて保持している者を守護します。
普賢菩薩よ、
もし、この法華経を受け入れて保持して、読んで、正しく記憶して、修習して、書き写せば、
まさに、知るべきである、この人は、釈迦牟尼仏を見ているのである。
釈迦牟尼仏の口(くち)から、この法華経を聞いているような物なのである。
まさに、知るべきである、この人は、釈迦牟尼仏に捧げものを捧げているのである。
まさに、知るべきである、この人は、釈迦牟尼仏に「善いかな」とほめられているのである。
まさに、知るべきである、この人は、釈迦牟尼仏に手で、その頭を撫でられているのである。
まさに、知るべきである、この人は、釈迦牟尼仏の衣で覆われているのである。
この人は、俗世の快楽に貪欲に執着しないし、外道の書物を好まないし、外道、諸々の悪い者、屠殺人、猪(イノシシ)、羊、鶏、犬を屠殺する家畜とする者、猟師、遊女に喜んで親しみ近づかない。
この人の心は、正直で、正しい記憶が有って、幸福をもたらす功徳の力が有る。
この人は、「三毒」に悩まされないし、また、嫉妬、思い上がりに悩まされない。
この人は、「少欲知足で」、「欲を最少に抑えて、最少のもので満足することを知っていて」、普賢菩薩の行いを修行できる。
普賢菩薩よ、
もし私、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、「後五百歳」、「末法」で、人が、法華経を受け入れて保持して読んでいる者を見たら、まさに、このように思うべきである。
「
この人は、遠からず、まさに、道場へ行って、諸々の魔達を破って、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を得て、法輪を転じて、法の太鼓を打ち鳴らして、法螺貝を吹き鳴らして、仏法という雨を降らして、まさに、天人と人の大衆の中で、『獅子の法座』、『仏の法座』の上に坐禅する。
」と。
普賢菩薩よ、

もし後世で、この法華経を受け入れて保持して、読めば、この人は、衣服、寝具、飲食物、生活の道具に貪欲に執着しないし、願う物は虚しくないし、現世で、その幸福な報いを得る。
もし人が、この人を見下して傷つけて、「お前は狂人でしかない。空しく、このような行いをして、終に、得る物は無い」と言ったならば、この罪の報いとして、まさに、生から生へ、眼が無い。
もし、この人に捧げものを捧げて、ほめたたえれば、まさに、今世で、果報を現して得る。
もし法華経を受け入れて保持している者を見て、その過ち、悪い所を暴き出せば、真実でも、真実でなくても、この人は、現世で、皮膚が白くなる皮膚病に成る。
もし、この法華経を受け入れて保持している者を見下して笑いものにすれば、まさに、生から生へ、歯が抜けたり欠けたりするし、唇が醜くなるし、鼻が平らに潰れるし、手脚が曲がって伸びなくなるし、斜視になるし、体が臭くて汚くなるし、皮膚病になって膿と血がでるし、腹部に水がたまるし、短気になるし、諸々の悪い重病になる。
このため、普賢菩薩よ、もし、この法華経を受け入れて保持している者を見れば、まさに、仏を敬うように、起立して、遠くから、迎えるべきである。

釈迦牟尼仏が、この法華経の普賢(菩薩)勧発品を説いた時、
「恒河沙」、「ガンジス川の砂のように無数」に等しい数の、無限なほど、量り知れないほど無数の菩薩は、百千万億旋陀羅尼を得た。
「三千大千世界」の微細な塵(ちり)に等しい数の諸々の菩薩は、普賢菩薩の道を備えた。

釈迦牟尼仏が、この法華経を説いた時、普賢菩薩などの諸々の菩薩と、舎利弗などの諸々の声聞と、諸々の天人、龍といった、人と、人ではない者達の一切の会の大衆は皆、大いに喜んで、釈迦牟尼仏の言葉を受け入れて保持して、敬礼して、去った。